

常磐自動車道遺跡調査報告52

広谷地遺跡

石神遺跡

2008年

福島県教育委員会
福島県文化振興事業団
東日本高速道路株式会社

常磐自動車道遺跡調査報告52

ひろやち
広谷地遺跡
いし がみ
石 神 遺 跡

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成18年度から19年度に行った南相馬市の広谷地遺跡と平成19年度に行なった南相馬市の石神遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、南相馬市教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成20年11月

福島県教育委員会

教育長 野 地 陽 一

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は、平成6年から実施しています。南相馬市に所在する埋蔵文化財については、平成9・10年度に分布調査を、平成15年度から試掘調査を実施し、平成16年度からは発掘調査を開始しました。

本報告書は、平成18年度に実施した広谷地遺跡（一次調査）と、平成19年度に発掘調査を実施した広谷地遺跡（二次調査）、石神遺跡の調査成果をまとめたものです。

広谷地遺跡からは、縄文時代早期～晩期の土器・石器、平安時代の土器、縄文時代と平安時代の竪穴住居跡や土坑などが発見されています。石神遺跡からは縄文時代と平安時代の竪穴住居跡や中世の竪穴造構などが発見され、縄文土器や平安時代の製鉄関連遺物などが出土しました。

今後、これらの調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として、さらに地域社会を理解することや生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この調査に御協力いただきました南相馬市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当事業団の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年11月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 富田 孝志

緒 言

- 1 本書は、平成18・19年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）の遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。
広谷地遺跡 福島県南相馬市小高区川房字広谷地 埋蔵文化財番号：563000148
石神遺跡 福島県南相馬市原町区石神字石神 埋蔵文化財番号：206000037
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査グループの下記の職員を配して調査にあたった。

平成18年度

副 主 幹 安田 稔	文化財副主査 青山 博樹
嘱 託 小河 厚子	嘱 託 管野 和博

平成19年度

副 主 幹 吉田 功	文化財主査 宮田 安志	文化財主査 國井 秀紀
文化財副主査 三浦 武司	嘱 託 今野沙貴子	嘱 託 鈴木裕一郎

- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が分担して行った。
- 7 本書に掲載した自然科学分析については、下記の機関に委託した。結果と考察は「第1編 広谷地遺跡 第3章」に掲載している。
放射性炭素年代測定 株式会社 パレオ・ラボ
- 8 石神遺跡から出土した石器（一部）の実測図作成は、株式会社ラングに委託した。
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関からご協力いただいた。

南相馬市教育委員会

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に真北方向を指す方位を示した。
- (2) 標 高 水準点を基にした海拔標高で示した。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺を示した。
- (4) 土 層 基本土層はアルファベット大文字とローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字と算用数字を組み合わせて表記した。
(例) 基本層位-L I・L II…、遺構内堆積土-ℓ 1・ℓ 2…
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)に基づく。
- (5) ケ パ 遺構内の傾斜面は「III」で表現したが、相対的に緩傾斜の部分には「下下」で表している。また、「下下」は後世の攪乱が明らかである場合に使用した。
- (6) 線 の 表 現 破線は推定範囲、一点鎖線は貼床範囲、二点鎖線は踏み詰まりを示す。
- (7) 綱 か け 挿図中の網かけの用例は、同図中に表示した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土 器 断 面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一転鎖線で表記し、胎土中に纖維が混和されたものには▲を付した。
- (2) 遺 物 計 測 値 () 内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺を示した。
- (4) 綱 か け 挿図中の網かけの用例は黒色処理を示し、それ以外は同図中に表示した。

3 本書における本文中の遺物の番号は、挿図番号と対照できるようにして、以下のとおり記した。

(例) 図1の1番 → 図1-1

また、写真図版の遺物に付けた挿図番号は以下のとおり記した。

(例) 図1の1番 → 1図1

4 本書で使用した略号は、次のとおりである。

南相馬市 MSC	広谷地遺跡 HYT	石神遺跡 IG
遺構外堆積土 L	遺構内堆積土 ℓ	豎穴住居跡 SI 土坑 SK
焼土遺構 SG	道 跡 SF	特殊遺構・豎穴遺構 SX
柱列跡 SA	小穴・ビット P	グリッド G

5 参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し、各編の末にまとめて収めた。

目 次

序 章

第1節 調査の経過.....	1
平成18年度までの調査経過(1) 平成19年度の調査経過(3)	
第2節 地理的環境.....	6
位 置(6) 地 質(6) 気 候(8)	
第3節 歴史的環境.....	9
小高区(9) 原町区(9)	

第1編 広谷地遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形.....	15
第2節 調査経過.....	15
第3節 調査方法.....	17

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層.....	19
遺構の分布(19) 基本土層(19)	
第2節 積穴住居跡.....	21
1号住居跡(21) 2号住居跡(24) 3号住居跡(25)	
第3節 土坑.....	38
1号土坑(38) 2号土坑(39) 3号土坑(39) 4号土坑(39)	
5号土坑(41) 6号土坑(41) 7号土坑(41) 8号土坑(43)	
9号土坑(43) 10号土坑(43) 11号土坑(44) 12号土坑(44)	
13号土坑(44) 14号土坑(44) 15号土坑(45) 16号土坑(45)	
17号土坑(47) 18号土坑(47) 19号土坑(47) 20号土坑(48)	
21号土坑(48) 22号土坑(48) 23号土坑(48) 24号土坑(50)	
25号土坑(50) 26号土坑(51) 27号土坑(51) 28号土坑(51)	
29号土坑(53) 30号土坑(53) 31号土坑(55) 32号土坑(55)	
33号土坑(55) 34号土坑(55) 35号土坑(56) 36号土坑(56)	
37号土坑(56) 38号土坑(58) 39号土坑(58) 40号土坑(58)	
41号土坑(59) 42号土坑(59) 43号土坑(60) 44号土坑(62)	
45号土坑(63)	

第4節 焼土遺構	63
1号焼土遺構 (63) 2号焼土遺構 (64) 3号焼土遺構 (64)	
第5節 道跡	64
1号道跡 (64) 2号道跡 (66)	
第6節 特殊遺構	70
1号特殊遺構 (70) 2号特殊遺構 (72)	
第7節 遺構外出土遺物	75
旧石器時代の石器 (75) 土器 (76) 石器 (82) 銅貨 (82)	
第3章 自然科学分析	
福島県広谷地遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定 (パレオ・ラボAMS年代測定グループ)	83
第4章 まとめ	87

第2編 石神遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過	
第1節 位置と地形	91
第2節 調査経過	91
第3節 調査方法	94
第2章 遺構と遺物	
第1節 遺構の分布と基本土層	95
遺構の分布 (95) 基本土層 (95)	
第2節 積穴性居跡	98
1号住居跡 (100) 2号住居跡 (101) 3号住居跡 (103)	
4号住居跡 (105) 5号住居跡 (106) 6号住居跡 (112)	
第3節 土坑	
1号土坑 (114) 2号土坑 (115) 3号土坑 (115) 4号土坑 (115)	
5号土坑 (117) 6号土坑 (117) 7号土坑 (117) 8号土坑 (118)	
9号土坑 (118) 10号土坑 (118) 11号土坑 (120) 12号土坑 (120)	
13号土坑 (120) 14号土坑 (122) 15号土坑 (122) 16号土坑 (122)	
17号土坑 (123) 18号土坑 (123) 19号土坑 (123) 20号土坑 (125)	
21号土坑 (125) 22号土坑 (125) 23号土坑 (126) 24号土坑 (126)	
25号土坑 (126) 26号土坑 (126) 27号土坑 (126) 28号土坑 (126)	
29号土坑 (129) 30号土坑 (129) 31号土坑 (131) 32号土坑 (131)	

33号土坑 (132)	34号土坑 (132)	35号土坑 (132)	36号土坑 (134)
37号土坑 (134)	38号土坑 (134)	39号土坑 (135)	40号土坑 (135)
41号土坑 (135)	42号土坑 (135)	43号土坑 (137)	44号土坑 (137)
45号土坑 (137)	46号土坑 (138)	47号土坑 (139)	48号土坑 (142)
第4節 焼土遺構 142			
1号焼土遺構 (143)	2号焼土遺構 (143)	3号焼土遺構 (143)	
4号焼土遺構 (143)	5号焼土遺構 (143)	6号焼土遺構 (144)	
7号焼土遺構 (144)	8号焼土遺構 (144)	9号焼土遺構 (144)	
10号焼土遺構 (144)	11号焼土遺構 (146)	12号焼土遺構 (146)	
13号焼土遺構 (146)			
第5節 壺穴遺構 146			
1号壺穴遺構 (146)	2号壺穴遺構 (146)	3号壺穴遺構 (146)	
第6節 その他の遺構 151			
1号柱列跡 (151)	北側グリッドピット (176)	南側グリッドピット (153)	
第7節 遺構外出土遺物 155			
土器 (155)	石器 (171)	錢貨 (176)	椀形津 (176)
第3章 まとめ 177			

挿図・表 目次

序 章

(挿 図)

図1 常磐自動車道位置図	1	図4 南相馬市原町区の地形と地質	8
図2 南相馬市小高区・原町区の常磐自動車道 関連遺跡	2	図5 広谷地遺跡周辺の遺跡	10
図3 南相馬市小高区の地形と地質	7	図6 石神遺跡周辺の遺跡	11

第1編 広谷地遺跡

(挿 図)

図1 遺跡位置図	16	図5 1号住居跡出土遺物	23
図2 遺構配置図	20	図6 2号住居跡	25
図3 基本土層図	21	図7 2号住居跡カマド・出土遺物	26
図4 1号住居跡	22	図8 2号住居跡出土遺物	28

図9	3号住居跡	30	図25	1~3号焼土遺構	63
図10	3号住居跡縫形	32	図26	1号道跡	65
図11	3号住居跡カマド	34	図27	2号道跡	67
図12	3号住居跡出土遺物(1)	35	図28	1・2号道路	68
図13	3号住居跡出土遺物(2)	36	図29	1・2号道路出土遺物	69
図14	3号住居跡出土遺物(3)	37	図30	1号特殊遺構・出土遺物	71
図15	1~6号土坑	40	図31	2号特殊遺構	73
図16	7~12号土坑	42	図32	2号特殊遺構出土遺物	74
図17	13~18号土坑	46	図33	旧石器調査地点と出土地点	76
図18	19~25号土坑	49	図34	遺構外出土器・石器分布図	77
図19	26~30号土坑	52	図35	遺構外出土遺物(1)	78
図20	31~36号土坑	54	図36	遺構外出土遺物(2)	79
図21	37~42・45号土坑	57	図37	遺構外出土遺物(3)	80
図22	43・44号土坑	60	図38	遺構外出土遺物(4)	81
図23	土坑出土遺物(1)	61	図39	曆年校正結果	86
図24	土坑出土遺物(2)	62			

[表]

表1	測定試料及び処理	85	表2	放射性炭素年代測定及び 曆年校正の結果	85
----	----------	----	----	------------------------	----

第2編 石神遺跡

[挿図]

図1	遺跡位置図	92	図16	1~5号土坑	116
図2	遺構配置図(1)	96	図17	6~11号土坑	119
図3	遺構配置図(2)	97	図18	12~16号土坑	121
図4	基本土層図	98	図19	17~21号土坑	124
図5	1号住居跡・出土遺物	100	図20	22~25・27号土坑	127
図6	2号住居跡・出土遺物	102	図21	26~28・31号土坑	130
図7	3号住居跡・10号焼土遺構	104	図22	32~36・38号土坑	133
図8	3号住居跡出土遺物	105	図23	37~39~44号土坑	136
図9	4号住居跡	106	図24	45~47号土坑	138
図10	4号住居跡出土遺物	107	図25	土坑出土遺物(1)	139
図11	5a号住居跡	109	図26	土坑出土遺物(2)	140
図12	5a号住居跡出土遺物	110	図27	土坑出土遺物(3)	141
図13	5b号住居跡	111	図28	焼土遺構	145
図14	6号住居跡	113	図29	1号堅穴遺構	147
図15	6号住居跡出土遺物	114	図30	1号堅穴遺構出土遺物	148

図31	2号堅穴遺構・出土遺物	149	図42	遺構外出土遺物(6)	163
図32	3号堅穴遺構・出土遺物	150	図43	遺構外出土遺物(7)	164
図33	1号柱列跡・出土遺物	152	図44	遺構外出土遺物(8)	165
図34	グリッドピット	153	図45	遺構外出土遺物(9)	166
図35	グリッドピット出土遺物	154	図46	遺構外出土遺物(10)	168
図36	遺構外出土土器分布図	156	図47	遺構外出土遺物(11)	169
図37	遺構外出土遺物(1)	158	図48	遺構外出土遺物(12)	170
図38	遺構外出土遺物(2)	159	図49	遺構外出土遺物(13)	172
図39	遺構外出土遺物(3)	160	図50	遺構外出土遺物(14)	173
図40	遺構外出土遺物(4)	161	図51	遺構外出土遺物(15)	174
図41	遺構外出土遺物(5)	162	図52	遺構外出土遺物(16)	175

写真目次

第1編 広谷地遺跡

1	遺跡遠景	181	19	1～3号焼土遺構	193
2	調査区北側全景	181	20	1・2号道路北側全景	194
3	調査区全景	182	21	1・2号道路	194
4	調査区中央部全景	183	22	1・2号道路細部	195
5	基本土層	183	23	1・2号特殊遺構	196
6	1号住居跡全景	184	24	旧石器出土地点全景	196
7	1号住居跡細部	184	25	1号住居跡出土遺物	197
8	2号住居跡全景	185	26	2号住居跡出土遺物	197
9	2号住居跡細部	185	27	3号住居跡出土遺物(1)	198
10	3号住居跡全景	186	28	3号住居跡出土遺物(2)	198
11	3号住居跡細部	186	29	土坑出土罐★土器	199
12	1～8号土坑	187	30	土坑・道路・特殊遺構出土遺物	200
13	9～16号土坑	188	31	2号特殊遺構出土遺物	201
14	17～24号土坑	189	32	遺構外出土遺物(1)	201
15	25～30号土坑	190	33	遺構外出土遺物(2)	201
16	31～38号土坑	191	34	遺構外出土遺物(3)	202
17	39～43号土坑	192	35	道路・遺構外出土旧石器	202
18	44～45号土坑	193			

第2編 石神遺跡

1 遺跡遠景	205	23 1～8号焼土遺構	219
2 遺跡近景	205	24 9～13号焼土遺構	220
3 調査区南側全景	206	25 1号窪穴遺構全景	221
4 調査区北側全景	206	26 1号窪穴遺構細部	221
5 調査区全景、作業風景	207	27 2号窪穴遺構全景	222
6 基本土層	207	28 3号窪穴遺構全景	222
7 1号住居跡全景	208	29 1号柱列跡全景	223
8 1号住居跡細部	208	30 グリッドピット、遺物出土状況	223
9 2号住居跡全景	209	31 1～6号住居跡出土遺物	224
10 3号住居跡全景	209	32 土坑出土遺物	225
11 4号住居跡全景	210	33 土坑・窪穴遺構・柱列跡・ グリッドピット出土遺物	226
12 4号住居跡細部	210	34 遺構内出土石器	226
13 5a号住居跡全景	211	35 土坑出土石製品	227
14 5号住居跡細部	211	36 遺構外出土遺物(1)	227
15 6号住居跡全景	212	37 遺構外出土遺物(2)	228
16 1～4号土坑	212	38 遺構外出土遺物(3)	228
17 5～12号土坑	213	39 遺構外出土遺物(4)	230
18 13～20号土坑	214	40 遺構外出土遺物(5)	231
19 21～28号土坑	215	41 遺構外出土石器(1)	231
20 29～34号土坑	216	42 遺構外出土石器(2)	232
21 35～42号土坑	217	43 遺構外出土石器・施形溝	232
22 43～48号土坑	218		

序 章

第1節 調査の経過

平成18年度までの調査経過

常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫して宮城県に至る、太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この経過の内、三郷インター（以下 IC と略す）～いわき市のいわき中央 IC までは、昭和63年に供用が開始され、更に、いわき中央 IC ～いわき四倉 IC までは平成11年3月に供用を開始している。

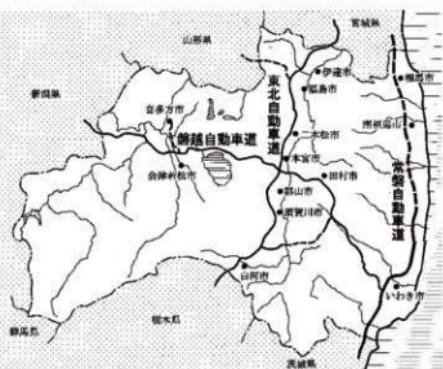
これらの供用が開始された区間の内、茨城県境からいわき中央 IC までの間に所在する埋蔵文化財に関しては、昭和59・60年にいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して、4遺跡について発掘調査を実施した。いわき中央 IC ～いわき四倉 IC 間の埋蔵文化財に関しては、平成6年から平成9年まで好間～平赤井・平塙地内の10遺跡の発掘調査を、いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施し、四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査を、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（現、財団法人福島県文化振興事業団）に委託して実施した。

いわき四倉 IC 以北の路線については、平成3年にいわき四倉 IC ～富岡 IC 間が整備計画路線に格上げされ、平成5年には施工命令が下されている。更に、富岡 IC 以北についても、平成8年に相馬 IC までの区間が整備計画路線となり、平成10年に施工命令がだされている。

福島県教育委員会では、いわき四倉 IC 以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに宮城県境まで終了している。この成果を受けて、平成



図1 常磐自動車道位置図



序 章



7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施し、平成9年度からは同区间に所在する遺跡の発掘調査が開始された。平成9年度はいわき市の5遺跡と広野町の1遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市の4遺跡、広野町の3遺跡、楓葉町の3遺跡、富岡町の2遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、いわき市内の遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は、広野町の4遺跡、楓葉町の5遺跡について調査を実施した。平成12年度は、広野町の1遺跡、楓葉町の7遺跡、富岡町の5遺跡について調査を実施した。この12年度の調査により、路線内に所在する遺跡のうち、広野町内の遺跡の発掘調査を全て終了した。平成13年度の調査では、楓葉町の1遺跡、富岡町の5遺跡について発掘調査を実施し、楓葉パークイングエリアに関わる大谷上ノ原遺跡20,400m²の保存範囲を残して楓葉町内の発掘調査を終了した。平成14年度は、富岡町の1遺跡、大熊町の2遺跡について発掘調査を実施した。なお、平成14年度には、当初富岡ICまでについては日本道路公団東北支社（現、東日本高速道路株式会社東北支社）いわき工事事務所、富岡IC以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、7月より富岡IC～浪江町までの区間にについてもいわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は、相馬工事事務所が管轄する区域でも発掘調査が実施されるようになり、いわき工区で浪江町の2遺跡、相馬工区で相馬市の2遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は、いわき工区で大熊町の3遺跡、相馬工区で相馬市の1遺跡、鹿島町（現、南相馬市鹿島区）の2遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度は、いわき工区で大熊町の3遺跡、双葉町の2遺跡、浪江町の2遺跡、相馬工区で相馬市の1遺跡、南相馬市の5遺跡について発掘調査を実施した。平成18年度は、いわき工区で大熊町の1遺跡、浪江町の6遺跡、相馬工区で相馬市の2遺跡、南相馬市の9遺跡について発掘調査を実施した。

平成19年度の調査経過

平成19年度の常磐自動車道（浪江～相馬）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき遺跡調査部の職員17名を配置して実施した。計画段階では南相馬市原町区の中山C遺跡を含め13遺跡、計51,040m²の調査が予定されたが、工事計画の変更等もあり関係機関で協議した結果、調査対象遺跡および調査範囲の調整を行い、南相馬市原町区に所在する小池田遺跡（2次調査）・西内遺跡・石神遺跡・戸鳥土遺跡・赤柴遺跡（2次調査）・切付遺跡・片倉遺跡の7遺跡と同市小高区に所在する茨原遺跡（4次調査）。君ヶ沢B遺跡・大田切遺跡（2次調査）・横大道遺跡・大田和広畑遺跡（2次調査）・広谷地遺跡（2次調査）の6遺跡、計13遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は総計で51,100m²である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所（以下、相馬工事事務所と略す）との事前協議を受けて、当初、原町区内で優先度の高いとされた小池田遺跡・赤柴遺跡と小高区内で工事着手の早い大田切遺跡と広谷地遺跡、調査予定面積の広い茨原遺跡の発掘調査を優先に計画したが、茨原遺跡では春先にかけて調査予定地の南側隣接地で、環境省公表の鳥類レッドリストの準絶滅危惧種に指定されるオオタカの営巣が確認されたことから、調査開始がオオタカの雛鳥の巣立ち以降に先

序　　章

送りされることとなつたため、荻原遺跡の代わりに同じ小高区内の大田和広畑遺跡を加えた計5遺跡について4月より発掘調査を開始した。原町区内の小池田遺跡の2次調査は、工事行程との調査から前年度中に先行して表土剥ぎを実施した2,000m²の範囲について4月9日から着手した。工事隣接地での調査となつたため、発掘作業員の通勤路の確保をはじめとして条件整備の面で厳しい調査となつたが、縄文時代前期の大型住居跡等を検出、5月末で調査を終了し、6月からは同じ原町区の戸鳥土遺跡の調査へと移行した。同じ原町区内に所在する赤柴遺跡も昨年度に続く2次調査となつたが、他遺跡での試掘調査の結果次第では調査面積の調整が予定されたため、1次調査の隣接地区3,000m²について優先的に4月から調査を開始し、昨年度に続き縄文時代早期の竪穴住居跡を検出した。

小高区に所在する大田切遺跡の2次調査は、市道の付け替え工事が終了したことを受け4月13日から着手した。当初より予定された旧市道の道路下500m²の調査となつたが、近世以降の所産とされる道跡等を検出した。農繁期でもあり隣接する農地への作業用道路の確保を行いつつの調査となつたが、5月15日には調査を終了し同じ小高区内の横大道遺跡の調査へと移行した。大田和広畑遺跡も、昨年度に続く2次調査となつた。当初、2期線部分を除く3,100m²の調査を予定したが、現況の道路部分の調査が先送りされたことから2,000m²の調査となり、4月9日より調査を開始、5月には縄文時代中期の複式炉を持つ大型の竪穴住居跡を検出した。広谷地遺跡の2次調査は、原町区の小池田遺跡と同様に工事工程との調査から前年度中に一部の表土剥ぎを実施した。2期線部分を除く4,400m²について4月9日から調査に着手し、平安時代の竪穴住居跡のほか1次調査に統き遺跡の中央部を南北に縦断する遺跡を検出した。5月から調査を開始した横大道遺跡は、廐滓場や木炭窯跡の調査にあたって作業の安全上の問題等から2期線部分を含めて調査することで相馬工事事務所の了承を得た。なお、原町区の赤柴遺跡同様、他遺跡の試掘調査の結果次第では調査面積の調整が予定されたため、製鉄炉廐滓場跡を含む4,000m²から調査に着手した。

6月にはいり原町区では戸鳥土遺跡と赤柴遺跡の調査を進めた。戸鳥土遺跡では竪穴住居跡のほか、消滅したと思われた戸鳥土塚群の痕跡と思われる遺構を検出した。なお、同時に進められた試掘調査の結果では新たな調査対象遺跡の追加がないことから、赤柴遺跡の調査区を遺跡南端部の斜面まで拡張し調査を進めることとなつた。小高区では大田和広畑遺跡の調査終了を受けて荻原遺跡の調査を開始することとなり、オオタカの営巣による規制から遠い北側9,100m²から調査に着手した。また、調査も終盤となってきた広谷地遺跡では、道跡が当初の調査区からさらに南側へ続くことが確認されたため、協議の結果、新たに200m²調査区を拡張することとなつた。

7月には原町区で戸鳥土遺跡の調査員と作業員を二手に分け、併行して切付遺跡の調査に着手した。小高区の横大道遺跡では、廐滓場の調査に伴い大量の鉄滓・羽口等が出土したことから、現地での乾淨と分類・計量とに多大な労力を要することとなつた。8月になると連日の猛暑のなか調査の進捗も滞りがちとなつたが、原町区では戸鳥土遺跡の調査終了後に片倉遺跡800m²の調査を開始し、平安時代の竪穴住居跡等を検出した。小高区では荻原遺跡の隣接地でオオタカの幼鳥の巣立ち

が確認されたことから、これまで作業を見合させていた南側5,700m²の調査に着手することとなり、広谷地遺跡の調査終了後、荻原遺跡の新たな調査区へ移行した。

9月になると原町区で切付遺跡と片倉遺跡の調査を順次終了したが、当初9月から予定された西内遺跡の調査は、隣接する花栽培農家への配慮から11月以降に延期された。代わりに石神遺跡の調査計画をたて、早々に実施することとなった。石神遺跡の調査面積は試掘調査の段階では3,100m²とされたが、路線の一郎設計変更があり実際は3,300m²である。赤柴遺跡の調査では、試掘調査で縄文時代の遺物包含層とした遺跡南側の斜面部分で、調査の進行とともに平安時代の遺構と縄文時代早・前期の集落跡が重複して確認されたことから、相馬工事事務所と協議の結果、斜面部1,200m²については平安時代と縄文時代の2面の調査と積算し調査面積に追加することとなった。小高区では横大道遺跡の北部地区での実施調査の結果から、さらに3,400m²の調査区を追加し今年度の調査面積は計7,400m²となった。荻原遺跡でも新たな試掘調査の結果から、1,500m²の調査区を追加し今年度に調査を実施することとなった。調査面積は合計で16,300m²である。

10月にはいり原町区の石神遺跡の調査では、深い谷地形のために排土処理に苦心しつつも縄文時代から近世にかけての遺構が検出された。また、赤柴遺跡では事業全体の調整から600m²の調査区を追加し、今年度の調査面積は合計で7,400m²となった。小高区では横大道遺跡で奈良時代から平安時代にかけての製鉄炉群が検出され、高速道路建設予定地を含めた一帯が大規模な製鉄遺跡であることが明らかとなった。また、荻原遺跡の南部地区でも、試掘調査で検出されていた魔滓場とともに製鉄炉跡が検出され焼造の模型も出土した。11月からは原町区の西内遺跡で、当初の計画から調査面積を縮じて900m²を対象に調査を実施した。小高区では、試掘調査の結果から新たに遺跡登録となった君ヶ沢B遺跡（●B-B9）の400m²について、工事用道路建設の工程上、今年度中の調査終了が必要とされたため、急速調査を実施することとなった。また、荻原遺跡の調査区の一郎1,500m²について、用水路のボックス工事のため11月16日に先行して引き渡しを行った。なお、12月8日には奈良・平安時代の製鉄遺跡として新たな知見の得られた横大道遺跡の現地説明会を実施した。

9月以降は、度重なる雨の影響で発掘作業の中止を余儀なくされたが、11月には天候も安定し調査工程の遅れを取り戻すため作業の進捗を図った。その結果、12月14日には原町区の石神遺跡と赤柴遺跡の調査を終了し、12月21日には小高区の荻原遺跡の調査も終了にこぎ着けたこととなった。なお、赤柴遺跡の町道に接した部分は、70トンを超える鉄滓の処理に加えて製鉄炉の度重なる造り替えが確認されたため、当初予定した調査期間を大幅に延長することとなったが、工事工程との調査の結果、12月21日で年内の作業を終了し、1月以降に製鉄炉跡の補足調査を実施することにした。なお、その後の協議の結果、製鉄炉跡の補足調査が次年度に持ち越したことから、翌年度の調査工程を考慮し、調査予定地区の一郎1,800m²について2月に先行して表土剥ぎを実施した。

（吉田）

第2節 地理的環境

位置

福島県は、本州の北東部、東北地方の南端に位置する。面積の約8割を山地が占め、南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に囲まれた「浜通り地方」「中通り地方」「会津地方」の3区域に区分される。本書に掲載した2遺跡は、浜通り地方北部の南相馬市に所在する。

南相馬市は、平成18年1月に原町市と相馬郡小高町・鹿島町が合併して誕生した。北は相馬市、南は双葉郡浪江町、東は太平洋に面し、西は阿武隈高地に位置する相馬郡飯館村に接する。面積は388.5km²である。

広谷地遺跡は南相馬市小高区川房字広谷地地区に所在し、北緯37°32'22"、東経140°56'26"に位置する。石神遺跡は南相馬市原町区石神字石神地区に所在し、北緯37°38'14"、東経140°55'10"に位置する。

地質

南相馬市の地質構造は、ほぼ南北に走る双葉断層を挟んだ西方の阿武隈高地と東方の低地帯で大きく異なる。断層西側の阿武隈高地は南北約200km、東西約50kmの隆起準平原である。新生代第三紀中新世に形成された火山性堆積物により、標高500～600m程の緩やかな地形が連続する。古生層、変成岩類、花崗岩類などの古い岩層が分布する。

断層東側は、阿武隈高地から派生する100m以下の相双丘陵と丘陵間に開析した沖積地で構成されている。相双丘陵基盤は新生代第三紀に形成された凝灰岩質砂岩で構成されている。丘陵には河川浸食・堆積を成因とする段丘面が認められる。丘陵間は樹枝状に開析し、標高20m前後の沖積地を形成している。

河川は阿武隈高地に源を発する。いずれも東流し、太平洋に注ぐ。川幅は狭く、水量が少ない。山間部において急峻な樹枝状の渓谷が形成されている。

小高区 小高区の地形は500m級の山々が連なる山地と山地から派生する低丘陵及び段丘面、小高川や宮田川とその支流によって形成された冲積地となる。山地は小高区最高峰である標高522mの懸の森山や八丈石山などが南北に連なる。丘陵部には標高100m前後に羽倉・大富・金谷・川房集落が位置し、丘陵東端には北鳩原・南鳩原・小谷・飯崎・小屋木集落がある。小高区を流れる主な河川は北から小高川、宮田川がある。広谷地遺跡は小高川支流の川房川の南岸に立地する。広谷地遺跡が立地する段丘面は低位段丘にあたり、標高60m前後である。

低丘陵は砂岩・泥岩を主体とした太田川層と整合に重なる凝灰岩質砂岩を主体とした竜ノ口層がある。太田川層は花崗岩を基盤とする新第三紀上に不整合に堆積して、羽倉地区から川房地区に広がっている。竜ノ口層は太田川層の東に重なり、小高区の南半部に堆積する。竜ノ口層の上部に第四紀の各段丘面が発達し、河川流域には完新世の冲積地が広がる。

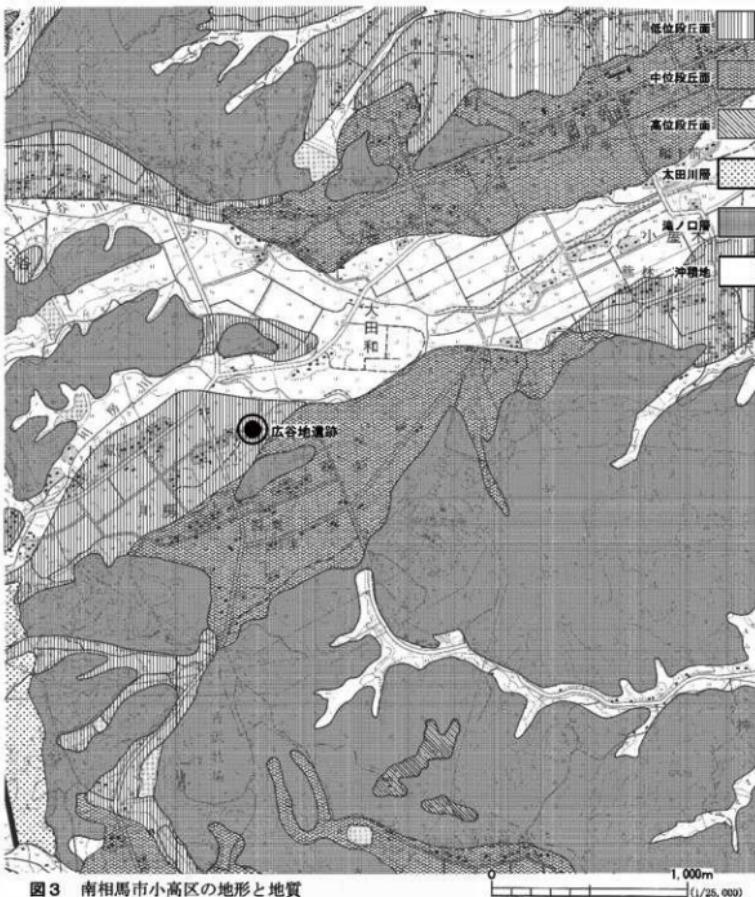


図3 南相馬市小高区の地形と地質

原町区 原町区の地形は400~600mの山々が連なる山地が分布し、山地から東に低丘陵及び段丘面、新田川や太田川によって形成された沖積地がある。山地では標高656.1m地点が最も高く、563.7mの国見山などがある。主に50m以下の段丘面には石神・押釜・馬場の集落が位置する。新田川下流域は新田川により形成された沖積地が広がる。石神遺跡は新田川支流の水無川の北に位置する。石神遺跡は丘陵上に立地し、標高約69~79mである。

低丘陵は中生代を起源とする相馬中村層群が相馬市坪田付近から南相馬市高倉・石神付近まで広がる。太田川層と竜ノ口層は石神・牛越・馬場地区の一部に認められるものの、長野・石神・牛越・

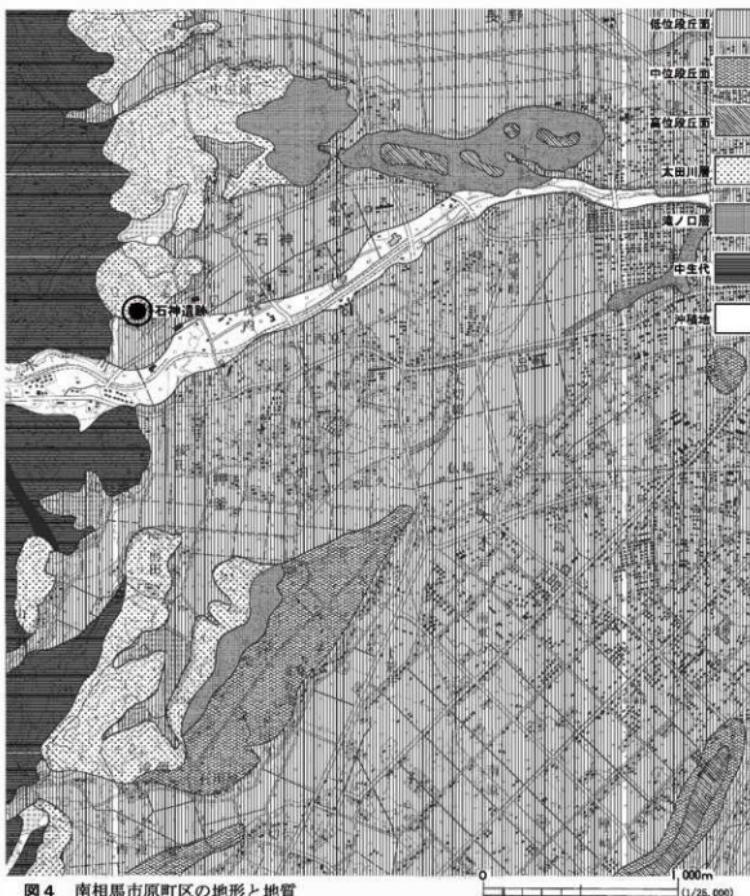


図4 南相馬市原町区の地形と地質

押釜・大木戸集落は第四紀の低位段丘面に立地する。

氣 候

南相馬市の気候は夏涼しく冬暖かい、太平洋岸気候である。気象的には海の影響を受けやすい。梅雨期には「やませ」と呼ばれる北東風が吹き込むと日照時間が減り、低温気候が長く続くことが多い。夏は一日の気温差が少なく、海からの東風を受けて過ごしやすい。冬の積雪は少なく、陽光に恵まれる。四季を通じて晴天の日が多く、降雨量の少ない年には時折水不足になる。（三 浦）

第3節 歴史的環境

小高区

小高区の遺跡は、東流して太平洋に注ぐ小高川水系と宮田川水系の両段丘面に多く分布する傾向が見られる。

旧石器時代は小高川の支流である鳩原川と大穴川によって挟まれた丘陵上に立地する荻原遺跡が有名である。後期旧石器時代後半のナイフ形石器などが出土している。縄文時代には、宮田川流域に関山式土器併行の縄文前期初頭の宮田第Ⅲ群土器の標識遺跡である宮田貝塚がある。上根沢地区の栗成沢遺跡(図5-12)では縄文時代前期初頭の包含層の調査を行っている。大田和地区の大田和広畑遺跡(図5-3)では、大木10式期の複式炉を有した堅穴住居跡が調査されている。古墳時代では、飯崎南原塚群や小泉横穴墓群等の円墳や横穴墓が多い。

律令体制下、小高区の多くは行方郡に属し、吉名郷・大井郷が小高区に存在していたと推定されている。平成2・17年度に調査された川房地区の四ツ要遺跡(図5-4)ではロクロビットをもつ9世紀前半の住居跡が調査されている。平安後期の仏教文化を伝える石造物として、国指定史跡の大悲山の磨崖仏がある。大同2(807)年徳一作との伝承があるが、平安後期の様式を備えている。

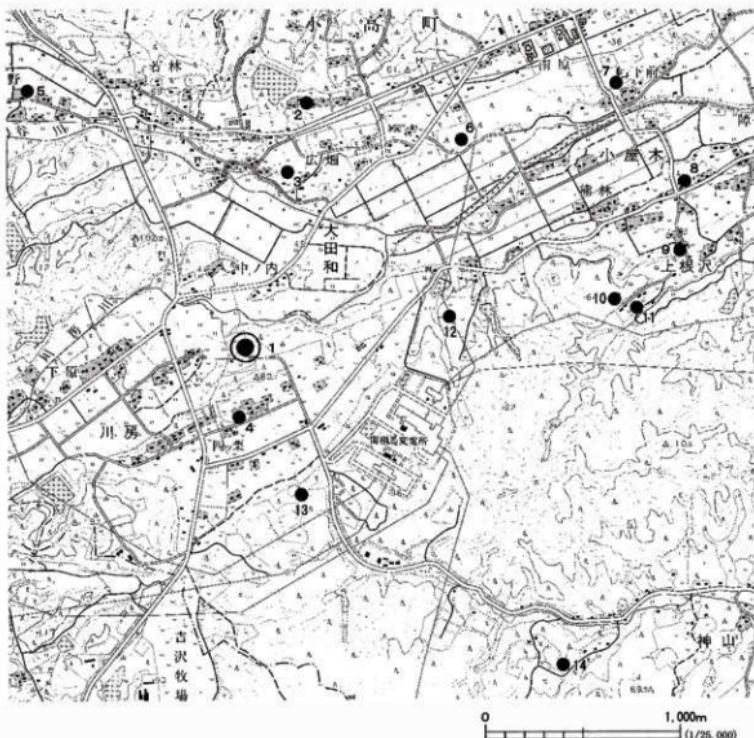
中世の南相馬市は、文治5(1189)年に千葉常胤に所領が与えられ、それが子息たちに分与されている。次男師常が行方郡を領し、相馬氏が土着した。南北朝時代の小高区は小高城を居城とし、北朝方に組みした相馬氏の本拠となった。城館の多くは、小高川中流域と宮田川中・下流域に建築されている。建武3(1336)年南朝方北畠顕家により、小高城は落城し一族の多くが討ち死にした。生存した一族は金谷地区の釣野山麓に身を隠し、翌年小高城を奪回している。

天正18(1590)年の豊臣秀吉の奥州仕置以降は、宇多・行方・標萬3郡の4万8千7百石の本領が安堵された。小高区は相馬藩領の小高郷としての支配を受けることになる。川房地区は近隣の金谷地区と同様、阿武隈山地を抜ける横断道の峠道の入口として栄えた歴史をもつ。享保8(1723)年から明治中期にかけての記録が馬頭観音や峠路の路傍の石などに散見される。門馬氏や志賀氏などの検断職が置かれ、藩としても重要な交通路であったことが分かる。現在の浪江町津島地区を抜け、福島・二本松・三春へと海産物などを流通する要路であったようである。

原町区

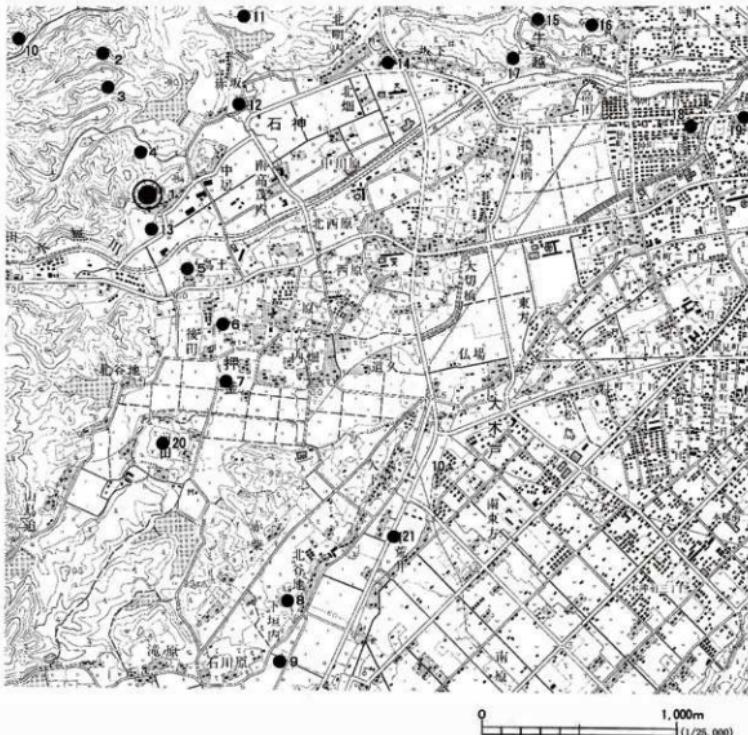
旧石器時代の遺跡は、畦原段丘や雲雀ヶ原台地上に立地する。縄文時代早期から前期の遺跡は阿武隈山地の東縁に多く見られる。縄文時代中期以降は低位丘陵に見られるようになる。大木9~10式土器が出土する押釜地区の前田遺跡(図6-20)や平成19年から発掘調査が行われ、縄文時代後期の集落跡が発掘されている馬場地区的赤柴遺跡(図6-8)などがある。

弥生時代の遺跡では桜井式土器の標識遺跡である桜井遺跡が知られる。金沢遺跡群・割田遺跡群の発掘調査からは、石窓丁などが出土している。古墳時代には浜通り最古であると考えられている



No.	遺跡名	遺跡番号	所 在 地	遺跡の概要	備 考
1	広谷地遺跡	56300148	川房子広谷地	縄文時代・平安時代の集落跡	平成18・19年 一・二次調査
2	飯越遺跡	56300149	大田和字飯越	平安時代の製鉄関連遺跡	
3	大田和広畠遺跡	56300024	大田和字広畠	縄文・平安時代の集落跡	平成18・19年 一・二次調査
4	四ツ栗遺跡	56300096	川房子四ツ栗	平安時代の集落跡	平成17年 一次調査
5	北町野遺跡	56300123	金谷子北町野	縄文時代の散布地	
6	飯崎南原遺跡	56300084	飯崎字南原	縄文・奈良・平安時代の散布地	
7	飯崎南原塚群	56300083	飯崎字南原	中・近世の塚群	
8	市阿赤遺跡	56300025	小尾木子市阿赤	奈良・平安時代の散布地	
9	原畠遺跡	56300092	上根沢字堂北・水瀬・原下・田嶺	弥生～平安時代の散布地	
10	上根沢古墳群	56300027	上根沢字大久保	古墳時代の古墳群	
11	堀込遺跡	56300126	上根沢字堀込	奈良・平安時代の製鉄関連遺跡及び散布地	
12	栗成沢遺跡	56300125	上根沢字栗成沢	縄文時代の散布地	平成6年 調査
13	鶴沢遺跡	56800097	神山字鶴沢	時期不詳の製鉄関連遺跡	
14	静右衛門屋敷遺跡	56800029	神山字静右衛門屋敷	縄文時代の散布地	

図5 広谷地遺跡周辺の遺跡



%	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要	備考
1	石神遺跡	2060037	石神字石神	縄文時代・平安時代の集落跡	平成19年 調査
2	中山山遺跡	2060292	石神字中山	古世の製鉄関連遺跡	
3	中山山遺跡	2060291	石神字中山	近世の製鉄関連遺跡	
4	中山山C遺跡	2060313	石神字中山	平安時代の製鉄関連遺跡	
5	戸島C遺跡	2060282	押釜字戸島	平安時代の集落跡	平成19年 調査
6	押釜所遺跡	2060290	押釜字原	近世の墓場	
7	内畠遺跡	2060289	押釜字内畠	縄文時代の散布地	
8	赤坂遺跡	2060063	馬場字赤坂	縄文時代中期後半・後期、平安時代の集落跡	平成18・19年 一次・二次調査
9	荒井遺跡	21250060	馬場字荒井	縄文時代初期の集落	
10	内城田B遺跡	2060228	信田字内城沢	奈良・平安時代の散布地	
11	赤坂D遺跡	2060230	石神字赤坂	奈良・平安時代の散布地、製鉄関連遺跡	
12	赤坂遺跡	2060143	石神字赤坂	奈良・平安時代の散布地	
13	石神D遺跡	2060145	石神字西田	縄文時代の散布地	
14	北畠遺跡	2060144	石神字北畠	奈良・平安時代の散布地	
15	城下横穴墓群	2060217	牛越字城下	古墳時代の古墳群	
16	牛越遺跡	2060036	牛越字原	中世城館跡	
17	左衛門遺跡	2060183	牛越	中世城館跡	
18	東町墓遺跡	2060038	牛越字東町湯	弥生時代の散布地	
19	三島町遺跡	2060242	三島町	平安時代の散布地	
20	前田遺跡	2060051	押釜字前田	縄文時代の散布地	
21	下荒井遺跡	2060059	馬場字下荒井	縄文時代の散布地	

図6 石神遺跡周辺の遺跡

序　章

国指定史跡桜井古墳がある。4世紀～5世紀の前方後方墳と円墳である。また、装飾壁画がある国指定史跡羽山装飾横穴墓に代表される横穴墓が、7世紀には造られるようになる。

律令体制下、原町区は行方郡の中心地であった。行方郡街跡と想定される県指定史跡泉鹿寺跡や軍団跡とされる植松魔寺などが丘陵上に立地する。金沢製鉄遺跡群・割田製鉄遺跡群では7世紀末から9世紀後半の製鉄炉や木炭窯・住居跡などが発見され調査が行われた。集落は河岸段丘や河川の沖積地の微高地などにも形成されるようになる。原町区内には高座・日祭・冠嶺・御刀・多珂・押雄神社の5つの延喜式内社が存在する。蝦夷征伐との関係で勧進されたものと考えられている。今年度発掘調査が行われた押釜地区の戸鳥土遺跡(図6-5)や赤柴遺跡においても当該期の集落跡が調査されている。

中世の遺跡として城館跡が多く位置している。牛越地区にある牛越城(16)は当時の調張りが遺存する山城である。15世紀中頃は豪族であった牛越定綱の居城とされる。牛越定綱は、相馬氏により滅ぼされている。『奥相誌』によれば、中ノ郷の有力武士が城番をしていたようである。第16代当主相馬義胤は慶長2(1597)年に小高城から牛越城に移っている。しかし6年後には小高城に戻り、慶長16(1611)年の廃城まで居城している。左衛門館跡(図6-17)は牛越城の南に位置し、天正年間の大越左衛門の城館と指定される。戸鳥土遺跡(図6-5)は3基の中世塚として周知されていたが、塚が消滅してしまったため戸鳥土遺跡として発掘調査を行った。北宋銭が出土し、中世塚の痕跡が看取できる。また、石神遺跡からもわずかではあるが中世陶器が出土している。

近世の遺構として野馬土手がある。寛文6(1666)年以降に野生馬が放牧しないように築かれている。昭和42(1967)年、平成5(1993)年には部分的ではあるが、範囲確認調査が行われている。

近世後半から近代にかけては著営の馬場鉄山がある。同じく馬場地区の五台山B遺跡や石神地区の中山A・Bがある。阿武隈高地内には野たたらによる製鉄関連遺跡が、未発見のまま残っている可能性がある。

明治維新後、明治4(1871)年7月中村県、同11月平県に合併し、明治9(1876)年に福島県の所属となった。昭和29(1954)年3月に原町市が誕生した。平成18(2006)年1月、小高町、原町市が合併して南相馬市が誕生した。

(三) 沿

参考文献

- | | | |
|---------------|------|---------------------------------|
| 原町市 | 1968 | 『原町市史』 |
| 『日本城郭体系 第3巻』 | 1981 | 佛新人物往来社 |
| 福島県農林水産部農地計画課 | 1988 | 『土地分類基本調査：原町・大甕』 |
| 動福島県文化センター編 | 1994 | 『荻原遺跡』『猪戸川地区遺跡発掘調査報告II』 |
| 動福島県文化センター編 | 1995 | 『荻原遺跡』『東成沢遺跡』『猪戸川地区遺跡発掘調査報告III』 |
| 福島県教育委員会 | 1996 | 『福島県遺跡地図 派通り地方』 |
| 動福島県文化センター編 | 1996 | 『東成沢遺跡』『猪戸川地区遺跡発掘調査報告IV』 |
| 西徹雄他 | 2000 | 『図説 相馬・双葉の歴史』 佛郷土出版社 |
| 動福島県文化振興事業団編 | 2006 | 『四ッ更遺跡』『常磐自動車道遺跡調査報告43』 |

第1編 広谷地遺跡

遺跡記号	M S C - H Y T
所 在 地	南相馬市小高区川房字広谷地
時代・種類	旧石器時代 散布地、縄文時代 集落跡 古墳時代 散布地、平安時代 集落跡
調査期間	第一次調査 平成18年8月7日～11月15日 第二次調査 平成19年4月9日～7月30日
調査員	第一次調査 青山博樹・小河厚子・菅野和博 第二次調査 宮田安志・國井秀紀・三浦武司

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形

広谷地遺跡は、太平洋に面した福島県浜通り地方の北部の南相馬市に位置する。行政区分では南相馬市小高区川房字広谷地に所在し、北緯 $37^{\circ} 32' 22''$ 、東經 $140^{\circ} 56' 26''$ に位置する。小高区の西にあたるJR常磐線小高駅から南西約4km、海岸線から約7.3kmである。本遺跡の調査開始前は畑や自然林、杉の人工林であった。川房地区においても畑や杉林、牧草地が見られ宅地が点在している。

小高区の西側は阿武隈高地が連なる。阿武隈高地の東麓から派生する丘陵や太平洋に向かって東流する諸河川が形成した段丘及び沖積地が広がっている。本遺跡は小高川の支流である川房川が樹枝状に開析した南段丘の縁辺部に位置する。地質分類学上、低位段丘上に立地する。

遺跡はおむね平坦であるが、わずかに北に位置する川房川に向かって緩やかに下っている。本遺跡の立地する標高は、川房川に面した段丘崖の縁で55m、南側の丘陵の裾で61mを測る。

周辺の遺跡の多くが丘陵上に立地している。広谷地遺跡の同段丘面には、繩文時代の散布地である栗成沢遺跡、平安時代の集落跡である四ツ堀遺跡がある。川房川の対岸には低位段丘面に繩文・平安時代の集落跡である大田和広畠遺跡が立地する。

(青山・三浦)

第2節 調査経過

広谷地遺跡は、平成9年度に実施した表面調査(『福島県内遺跡分布調査報告4』)によって遺跡推定地とされた遺跡である。平成16年度の試掘調査(『福島県内遺跡分布調査報告11』)と18年度の試掘調査(『福島県内遺跡分布調査報告13』)の結果、合わせて7,300m²が要保存面積となった。試掘調査において平安時代の堅穴住居跡や木炭焼成土坑などを確認している。

発掘調査は、平成18・19年度の2カ年にかけて行った。1次調査は遺跡中央部の2,700m²、2次調査は4,600m²の発掘調査を行った。2期線範囲については、約600m²が残る。以下に、年度ごとの調査経過を述べる。

平成18年度

平成18年度の調査は、福島県教育委員会による8月1日付の指示を受け、財団法人福島県文化振興事業団が調査員3名を配置し実施した。8月7日からブレハブの設置、表土剥ぎ、機材搬入などの発掘調査の準備を行った。同21日から調査を終了した大田切遺跡から作業員40名を雇用し、遺構の検出作業を開始した。遺跡内は杉林で、切り株の除去に多くの時間を割かれた。

9月1日には基準杭の打設が完了し、遺構の掘り込みと記録を開始した。調査区を縦走する道路

第1編 広谷地遺跡

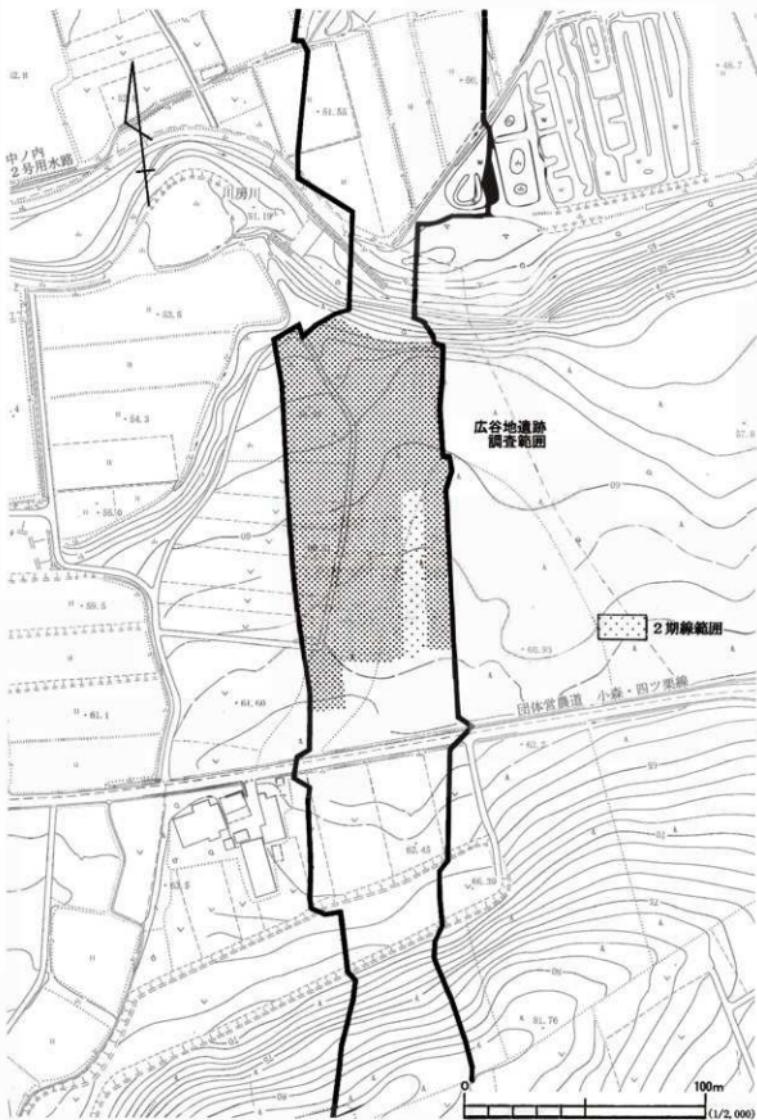


図1 遺跡位置図

の検出と精査に時間を要した。

10月上旬には、発達した低気圧の通過によってプレハブの損傷、調査区内の冠水などの被害が生じ、復旧作業に追われた。同14日には遺跡の案内人ボランティアによる現地公開を行い、約70名の見学者があり好評を得た。同31日には原町史談会約10名の見学があり、遺跡の案内人ボランティアが遺跡の案内等を行った。同26日にはラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行った。

11月15日には、東日本高速道路株式会社への引渡しを行い、1次調査を完了した。 (青山)

平成19年度

福島県教育委員会による4月6日の指示を受け、財団法人福島県文化振興事業団が調査員3名を配置し実施した。4月9日から現地入りし、プレハブ・トイレの設置、重機による表土剥ぎ、器材搬入を行った。同17日からは31名の作業員を雇用し、発掘調査を実施した。遺跡周辺及び遺跡内の環境整備と調査区北側から遺構の検出作業を開始した。5月中旬以降、調査区北側の検出作業も進展し、土坑や1次調査において確認した道跡が認められた。道跡は両側に側溝を有する2条の道跡を確認した。新しい道跡を1号道跡、古い道跡を2号道跡と呼称し、1号道跡より調査を開始した。5月下旬には調査区北側の遺構精査は本格化し、木炭焼成土坑などを確認した。

6月上旬には遺構検出作業は調査区南側へ移行した。試掘調査時に確認された堅穴住居跡の検出作業を行い、全体の平面形を確認した。それぞれ2・3号住居跡と呼称し、遺存状況の良い3号住居跡より調査を開始した。6月中旬には、1・2号道跡が南側の調査区外に広がることから、この範囲についての調査面積が600m²追加された。6月下旬には2号住居跡、2号道跡の調査に着手した。23日には遺跡の案内人による現地公開を行い、天候にも恵まれ75名の見学者が来訪した。

7月上旬には検出作業中に旧石器が出土したため、トレンチを適宜設定して旧石器時代の調査を開始した。同6日にはラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。同20日頃にはほぼ全ての調査を終了し、発掘器材の搬出を行った。同30日に東日本高速道路株式会社に遺跡用地の引渡しを行い、広谷地遺跡の7,300m²の調査を終了した。 (三浦)

第3節 調査方法

本遺跡では調査区の位置を国土座標の中で正確に記録するために、世界測地系を基本とした測量用基準点を調査区内に3ヶ所打設した。基準杭の座標値を用いて、10m方眼のグリッドを調査区全域に設定した。グリッドの原点はX=171,540 Y=37,860の交点とした。グリッドの表記方法はアルファベットと算用数字を組み合わせたもので、西から東にアルファベット順、北から南へ算用数字順に進行する。2次調査において調査区の拡張により、調査開始に設定したグリッドでは調査区全体を囲むことが困難になったため、新たに西へ10m追加してAZグリッドと呼称した。これらのグリッドは遺構位置表示や遺物の取り上げに使用し、必要に応じてグリッド内に1m方眼を設定して遺構の平面図を作成した。調査区の標高は、東日本高速道路株式会社が設置した標高基準点を原

第1編 広谷地遺跡

点として標高移動を行い、測量用基準杭上に水準点（Z = 59.764）を設定した。

各種遺構の掘り込みは、表土を重機で除去し、それ以下の土層については人力により堆積層ごとに掘り下げた。遺構の調査では、土層観察用の帯を設け、堆積の状態や遺物に留意しながら精査・記録を行った。堅穴住居跡等の大型の遺構については原則として4分割法により調査を実施し、土坑については、原則として2分割法を用いた。

調査区内の土層については、基本土層はアルファベット大文字「L」とローマ数字を用いた。遺構内堆積土については、アルファベット小文字「l」と算用数字を用いて表記した。遺構内から出土した遺物については、土層観察用帶で観察した遺構内堆積土を基準に取り上げた。遺構外出土遺物については、出土位置であるグリッドと出土層位を基準に取り上げた。土色については、日本色研事業株式会社の新版標準土色帖に準拠した。

遺構の記録は縮尺1/10及び1/20を基本とし、遺跡は1/40で作図した。地形図は縮尺1/2000。遺物の実測は等倍で作図した。写真は35mm判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムを使用して撮影した。また、メモ写真として、デジタルカメラを使用した。遺跡全体の広範囲に及ぶ撮影には、平成18・19年度ともにラジコンヘリコプターを用い航空写真撮影を実施している。

1次調査においては2種類の実測方法を採用した。遺構の平面図の実測は、従来の手作業による作図とデジタルによる作図を併用している。デジタルによる作図は、実測図作成ソフトをインストールしたパソコンと光波測距儀を用いた。光波測距儀で計測した値を自動入力し、パソコンの画面上で結線した。土層断面図は従来の手作業による作図を用いた。作成した平面図は、デジタルスキャナーで読み込みデジタルデータ化した。さらにパソコンによるトレイスソフトを用いて印刷原稿化を試みている。2次調査においては手作業による実測方法を採用している。

出土したすべての遺物は水洗いし、出土地点・出土層位の注記を行っている。出土遺物と調査記録は、福島県文化財センター白河館にて保管する。

（青山・三浦）

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布(図2,写真1~4)

広谷地遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑45基、焼土遺構3基、道跡2条、特殊遺構2基である。出土遺物は、縄文土器片3,500点、土師器片700点、須恵器片22点、石器66点である。遺物の年代は、旧石器・縄文・古墳・平安時代からなり、そのうち縄文時代早期末葉と平安時代(9世紀)が主体となる。

遺跡は、川房川の南側に形成された低位段丘面に立地するため、調査区内はおおむね平坦な地形である。しかしながら、北西側には川房川に注ぐ小谷が入るため、この方向に向かって若干傾斜している。遺構の分布を見ると、縄文時代の遺構は、早期末葉の住居跡や土坑等が調査区北側の標高57.50m~59.50mの範囲で帶状に確認され、特に西側に遺構が集中している。古墳時代の遺構は、調査区北東側のF6グリッドで古墳時代前期の土坑が1基確認されただけである。平安時代では、住居跡や特殊遺構が平坦な調査区中央からやや南側にかけて、土坑が調査区北西側で確認されている。この他に、縄文時代以降と考えられる時期不明の木炭焼成土坑が、希薄であるが調査区全体に認められる。木炭焼成土坑の中には平安時代(9世紀)と考えられるものも見られる。また、調査区を縱走する、造り替えが行われた道跡が確認されている。道跡は、遺構の重複関係から平安時代の2号住居跡より新しく、明治17年に作成された地籍図では確認されなかった。

これらの遺構分布から、縄文時代早期末葉の遺構はA6~8グリッドより西側の調査区外に延びており、また、平安時代の遺構は調査区中央の東側と西側の調査区外に広がるものと推測される。さらに、道跡は調査区南西端の調査区外に広がっている。

なお、遺物の分布から、縄文時代中~後期の土器が調査区北側から北東側にかけてと、調査区南西側から出土する。また、古墳時代前期の遺物が調査区北東部から出土している。これらの当該期の遺構は、調査区北東側の調査区外から検出されることが予想されるため、今後の調査では注意を要するものと考えられる。

基本土層(図3,写真5)

調査区は、段丘面の北側縁辺部に立地する。現況は、AZ16~18グリッドを除く調査区西側境が畠地として使用され、それ以外は山林である。基本土層は、調査区の東側(図3●~●)と北側(図3●~●)で堆積状態を観察し、5層に大別した。

L Iは、黒褐色の表土である。層厚は15~20cmを測り、調査区北西端では盛土を含み厚く堆積する。調査区西側境の一部では、耕作による削平を受けていたため、本層直下がL IVとなる。

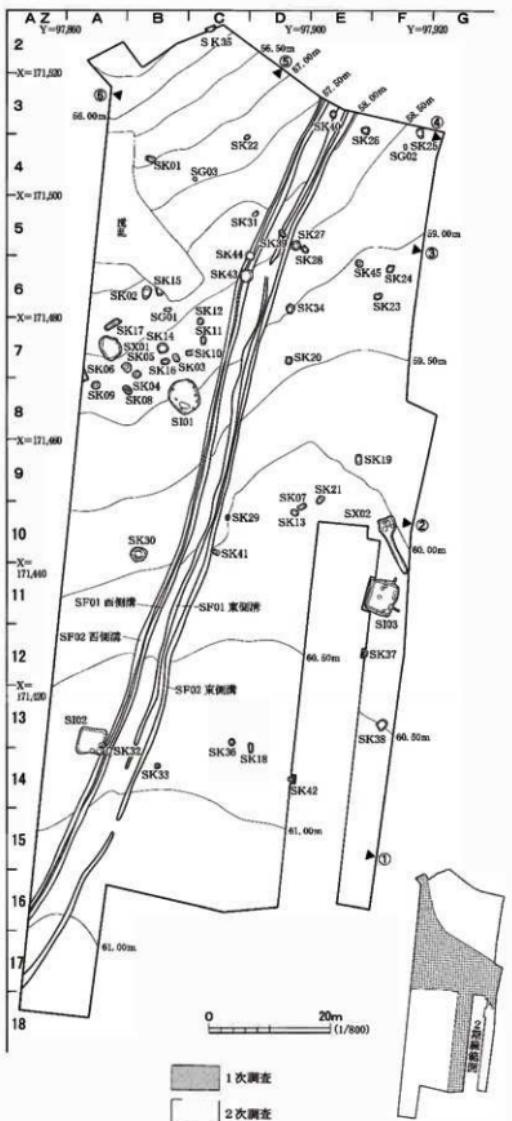


図2 遺構配置図

L IIは暗褐色土である。耕作を受けているため調査区西境の一部を除いて確認され、層厚は約20cmを測る。北側に向かって厚くなる本層からは、少量ながら土器が出土している。本層では、図28のA A'断面より1・2号道跡の掘り込みが認められる。

L IIIは黒褐色土である。調査区西境の一部を除く調査区全域で安定した堆積が確認されているが、北側では厚く堆積する。最も厚く堆積する調査区北西端の層厚は50cmを測る。特に、1号住居跡より北側からは本層が黒味を増している。本層上面からは、縄文時代以降と考えられる35・37・42号土坑の掘り込みが認められる。また、本層の下部からは、明確な掘り込みが確認されていない木炭焼成土坑と考えられる22・27・31号土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期末葉～同後期の土器が出土しており、その中でも縄文時代早期末葉の土器は本層下部より多く出土している。

L IVは褐色土である。いわゆるローム質の土質で、調査区全体で確認されている。本層の上面では、主に縄文時代

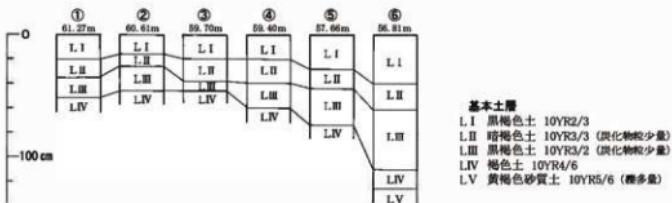


図3 基本土層図

の遺構が検出されている。また、本層の最上部からは旧石器時代の石器2点が確認されただけである。このことから、旧石器出土地点以下が無遺物層のため、本調査区の遺跡基底面となる。

L Vは黄褐色砂礫で、段丘疊層の一部と考えられる。調査区北西端付近では、円礫を多く含む状態で確認された。その他、旧石器確認調査を行ったE 4 グリッド内のトレンチ底面と、縄文時代早期末葉の44・43号土坑の底面からも本層が確認されている。

(國井)

第2節 墓穴住居跡

本調査区において墓穴住居跡は、3軒確認できた。1号住居跡は縄文時代に属する。縄文時代の土坑や遺物が確認された調査区北半に位置する。2・3号住居跡は平安時代に属する。調査区南半の平坦面に造られ、小規模な集落を形成していたと推測される。

1号住居跡 S I 01

遺構(図4、写真6・7)

本遺構は、調査区中央部のB・C 8グリッドに位置する。標高59mの平坦部に構築されている。検出時に灰黄褐色土が楕円形に観察されたことから、遺構の検出は容易であった。遺構検出面はL IVである。

遺構内堆積土は4層からなる。 ℓ 1～3は流入土で、遺構の中央に認められた。 ℓ 1は黒褐色土を含み、遺物の多くは本層から出土した。 ℓ 4は壁際にのみ認められ、壁面崩落土及び流入土である。各層とも堆積土の特徴や土質などから自然堆積と判断した。

平面形はゆがんだ楕円形である。規模は長軸5.1m、短軸5.0mを測る。検出面から床面までの深さは17cmである。各壁とも急に立ち上がり、遺存高は北壁で11cm、南壁で16cm、西壁で13cm、東壁で17cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、北側はわずかに低くなる。床面からは9基の小穴を検出した。炉は確認されず、明確な踏み締りの痕跡も認められなかった。

小穴9基はいずれも壁際から検出された。P 1～P 6・P 8・P 9は柱穴状の小穴となり、南北方向の長軸線を基準にすると東側にP 1～P 3・P 8、西側にP 5・P 6・P 9が、長軸上にP 4

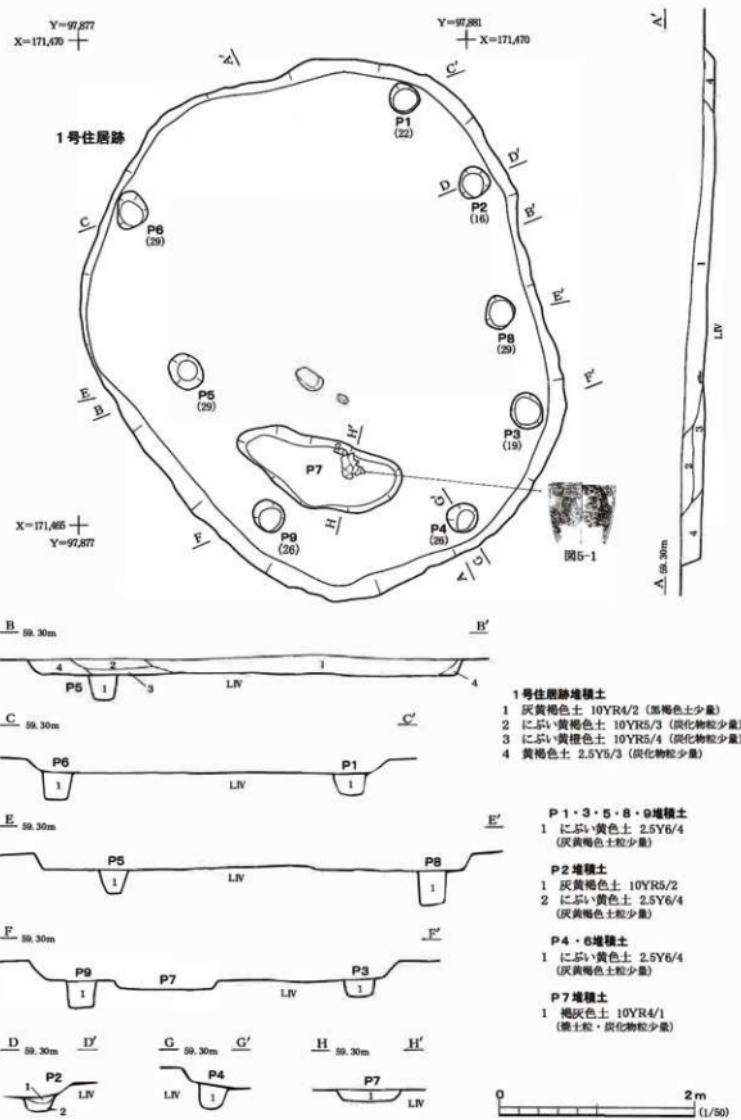


図4 1号住居跡

がそれぞれ位置する。また、P 1 と P 6, P 3 と P 9 がそれぞれ住居の短軸方向とはほぼ平行する。各穴とも平面形は楕円形または円形を呈する。規模は長軸30cm前後、床面からの深さ16~35cmを測る。堆積土は P 2 を除く各穴がにぶい黄色または黄褐色土の単層である。P 2 のみ上層に褐灰色土が堆積していた。

P 7 は住居の南に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸174cm、短軸65cmである。床面からの深さは11cmを測る。形や深さから柱穴ではないと考えられる。

遺物(図5, 写真25)

遺物は ℓ 1を中心にして縄文土器片188点、石器類31点が出土し、このうち縄文土器片7点、石器3点を図示した。 ℓ 1出土の大型土器片の多くは、住居の南西側から出土した。

図5-1~7は縄文土器片で、すべての胎土に纖維混和痕が認められる。

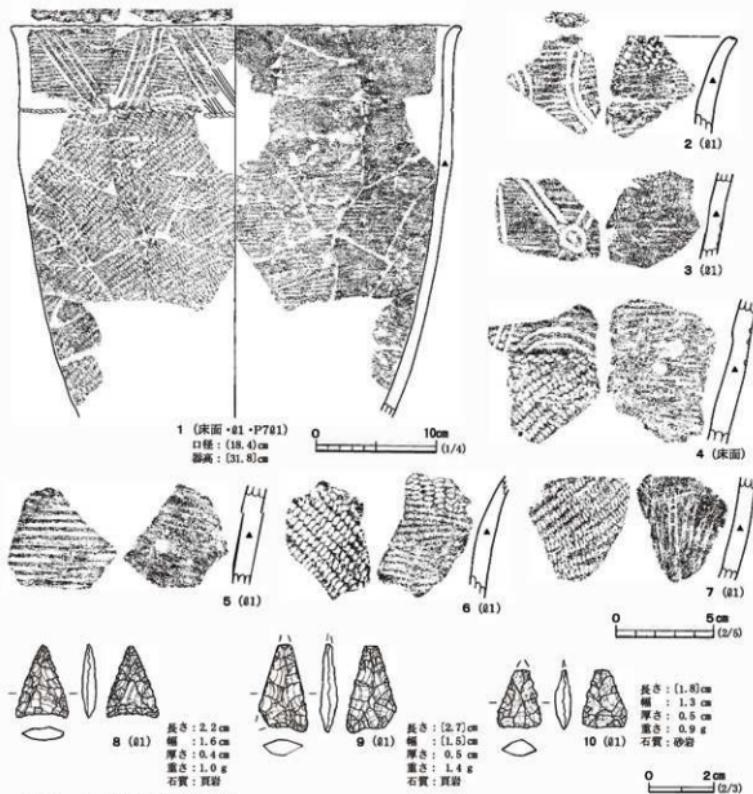


図5 1号住居跡出土遺物

1は底部を欠損する深鉢である。胴部下半から直立気味に開く器形と考えられ、口端部は弱く外反する。外面は口縁部文様帯と胴部文様帯の2段構成である。口縁部文様帯は条痕文、胴部文様帯には単節の斜行縞文が認められる。文様帯は横位の押圧痕により区画されている。口縁部文様帯は、条痕地文上に半截竹管による平行沈線で山形状と弧状モチーフが描かれる。口唇部は指頭圧痕を加え、小波状に作り上げている。内面には横位の条痕文が認められる。

2～6は口縁部または口縁部付近の資料である。2～5は外面に横位の条痕文が施文される。6は単節の斜縞文が施文される。2・4は条痕地文上に半截竹管の平行沈線による弧状文が描かれる。3は条痕地文上に半截竹管の平行沈線による直線と円形刺突が施文される。2・3・6は内面の口唇部付近に単節の斜縞文が施文される。縞文施文以下胴部にかけては、条痕施文である。7は胴部資料である。外面に単節の斜縞文、内面に条痕文が施されている。

石器は3点図示した。形状は基本的に側縁が二等辺三角形になる。8は凹基無茎鍬である。基部の抉りはわずかである。側縁部に細かい調整剥離を連続的に加え、先端部を鍛ぐ作り出している。9は先端部と基部の一部を欠損する凹基無茎鍬である。基部と先端部にのみ細かい調整剥離を施している。10は平基無茎鍬である。先端部が欠損している。断面は菱形になる。

まとめ

本住居跡は長軸が約5mを測る梢円形の堅穴住居跡である。床面まで浅く、遺存状態は悪い。壁際に柱穴と考えられる小穴が、不規則に配置される。炉や踏み綺まりは確認できなかった。時期は出土する土器片から、縞文時代早期末葉と考えられる。

(菅野)

2号住居跡 S I 02

遺構(図6・7、写真8・9)

本遺構はA13・14グリッドに位置する住居跡である。調査区南よりの西端に立地する。地形は平坦である。カマドの煙道中程から煙出し部にかけて1・2号道跡の西側溝と重複し壊されていることから、本住居跡が古いことがわかる。煙出部は遺存していない。本住居跡は試掘調査時におけるトレンチ調査により、黒褐色土の落ち込みと土師器片が確認されていた。平面形を明確に認識するために、LIVまで掘り下げて検出を行った。ぼんやりした暗褐色土をした方形の輪郭中央に黒褐色土が広がる状況を確認した。

住居堆積土は5層に分類した。①～④は三角堆積やレンズ状堆積が認められることから自然堆積である。①～③はLII・IIIに起因する土を主体とする周囲からの流入土である。④は壁面崩落土及び周囲からの流入土である。⑤は黄褐色土を2cm程度敷いた貼床土で、人為堆積である。

平面形は1辺約4.1mの隅丸方形である。各壁面はほぼ東西南北を向いている。カマドは東壁中央から、やや南よりに構築されている。壁面は床面からほぼ垂直で立ち上がり、壁高は最大で36cmを測る。貼床は北西隅と南隅の一部を除き敷設され、床面は平坦に造られている。住居跡の付属施設はカマドと小穴2基を確認した。

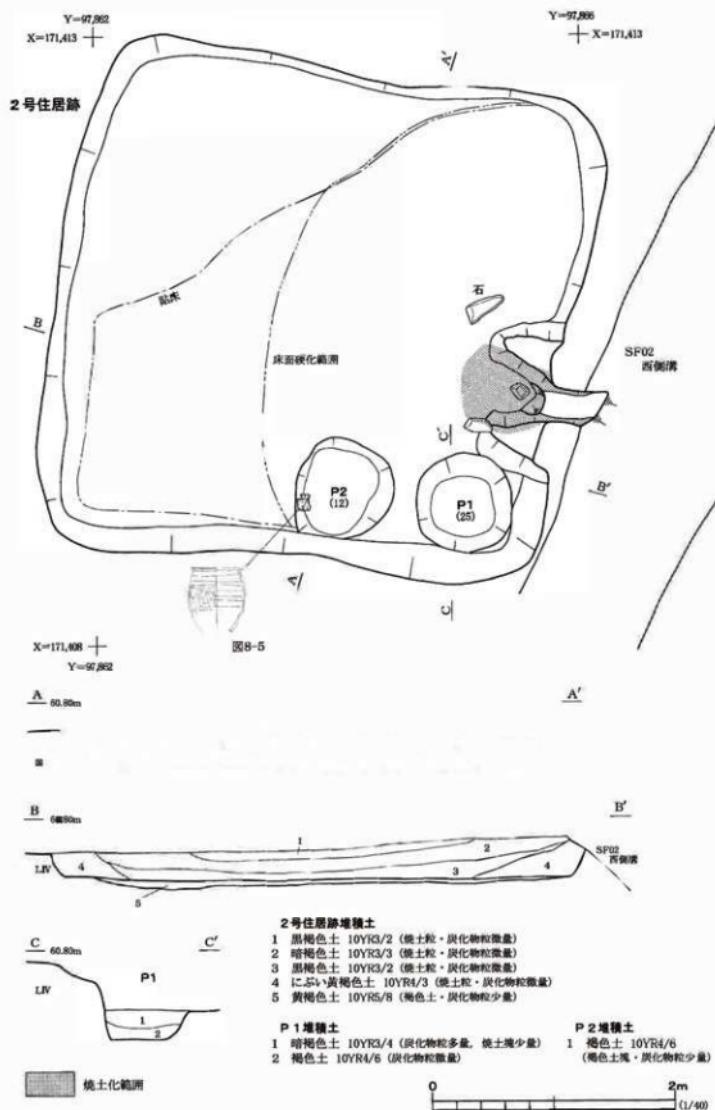


図6 2号住居跡

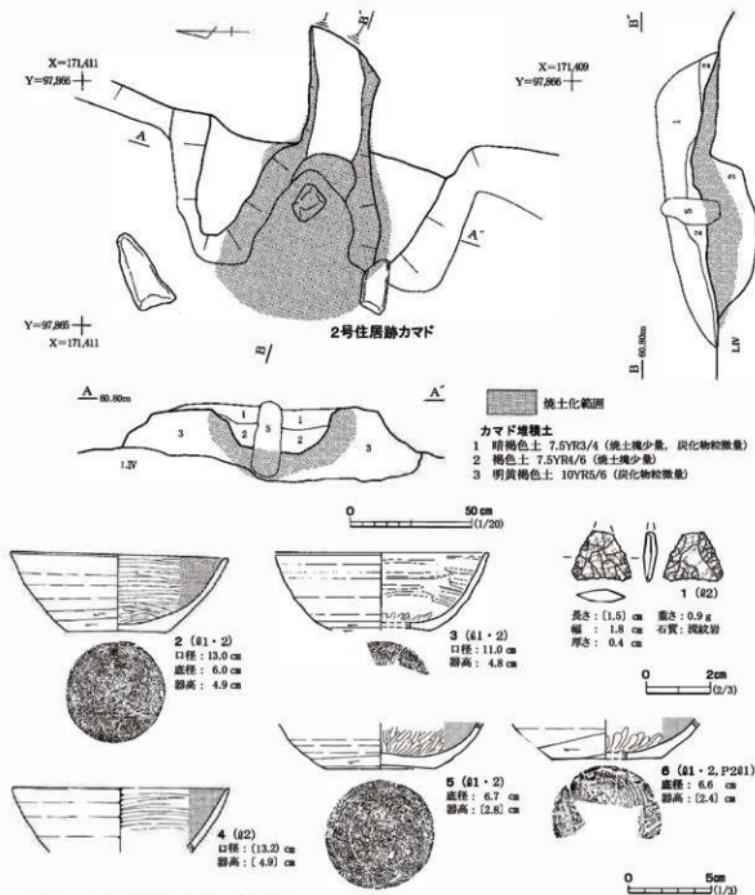


図7 2号住居跡カマド・出土遺物

カマドは東壁に付設され、カマド燃焼面と両袖部の遺存状況は良好であった。カマド内の堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1・2は住居跡廃棄後に堆積した流入土である。焼土塊は少なく、明確な天井崩落土は認められなかった。 ℓ 3はカマド袖構築土とカマド掘形埋土である。袖の内部には礫や粘土などの芯材は認められなかった。カマド右袖の先端には20cm大の角礫を立て、袖先端の補強材としている。同様にカマド左袖にあったと想定できる角礫が、カマド左袖から20cm程離れた床面において検出されている。

カマドの規模は袖幅124cm、袖の先端から遺存する煙道までは97cmを測る。燃焼面の規模は焚口

幅43cm、奥行き61cmである。燃焼部の中央奥壁よりには、礫が支脚として据えられていた。支脚は長さ約30cm、幅12cmで、燃焼部底面から10cm程度埋め込まれていた。燃焼部の底面は奥壁に向かって緩く傾斜する。支脚前面の燃焼部中央付近がわずかに窪むようである。

小穴は住居跡の南壁に沿って2基確認した。カマド右袖と接して掘り込まれている小穴をP1、その西に位置する小穴をP2と呼称した。

P1の平面形は径約60cmの円形である。床面から底面までの深さは25cmを測る。堆積土は2層に分層した。P1は遺構内堆積土のP3と同層であることから、住居跡が廃棄する直前まで開口していたことが想定できる。P2は褐色土で、位置や規模から貯蔵用の小穴であると推測できる。

P2の平面形は径約90cmの不整円形である。床面から底面までの深さは12cmと浅い。堆積土は褐色土の1層のみである。P2も位置や規模から貯蔵用の小穴として機能していたと推測できる。

遺物(図7・8、写真26)

2号住居跡からは、土師器36点、石器1点が出土した。遺存状況が比較的良好で、器形が復元及び推定可能な資料を図示した。

図7-1は縄文時代の無茎凹基の石鑿である。流れ込みと考えられる。先端は欠損しているが、形状は基本的に側縁が二等辺三角形になると推定できる。基部の抉りはわずかである。

同図7-2～6は土師器杯を示した。すべてロクロ成形で、内面には黒色処理が施されている。2は底部から内湾しながら立ち上がる器形である。体部下端には回転ヘラケズリ、内面にはミガキ調整が認められる。3は底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部下端は回転ヘラケズリ、内面にはミガキ調整が認められる。内面の黒色処理は施されていない。4は内湾しながら立ち上がる器形で、底部が欠損している。5は底部から内湾しながら立ち上がる器形である。口縁部が欠損している。内面には細かいミガキ調整が認められる。6は内湾しながら立ち上がる器形で、底部の大半が欠損している。底部には回転糸切り痕を回転ヘラケズリにより再調整を行った痕跡が認められる。2・5は底部中心がヘソ状に粘土がよじれた痕跡が認められ、回転ヘラ切りと考えられる。

図8-1～7はロクロ成形の土師器甕及び鉢を示した。1は口縁の端部が外側に垂れるのが特徴である。内面のヘラナデ調整は口縁部まで及ぶ。2は胴部上半に粘土が塗布されている小型甕である。3は口径や器形から鉢と考えられる。器壁は薄く整えられ、精緻な印象を受ける。4～7は長胴の甕である。4は頸部をやや絞り気味にロクロで調整した器形である。内面には縦位のヘラナデ調整が施されている。5はP2に落ち込むようにして出土した。外面の胴部下半には縦位の手持ちヘラケズリ調整が施されている。内面は横方向のナデ調整が認められる。器表面には内外面とも下半がすすけ、タール状の付着物が目立つ。また、焼け弾けも目立つ。6は胴部中ほどで大きく膨らんで屈曲する器形である。外面のケズリの痕跡が明瞭に残る。7の外面胴部下半には縦位の手持ちヘラケズリが認められる。内面は横方向のナデ調整が施される。内外面の器表面には煤の痕跡がわずかに認められる。

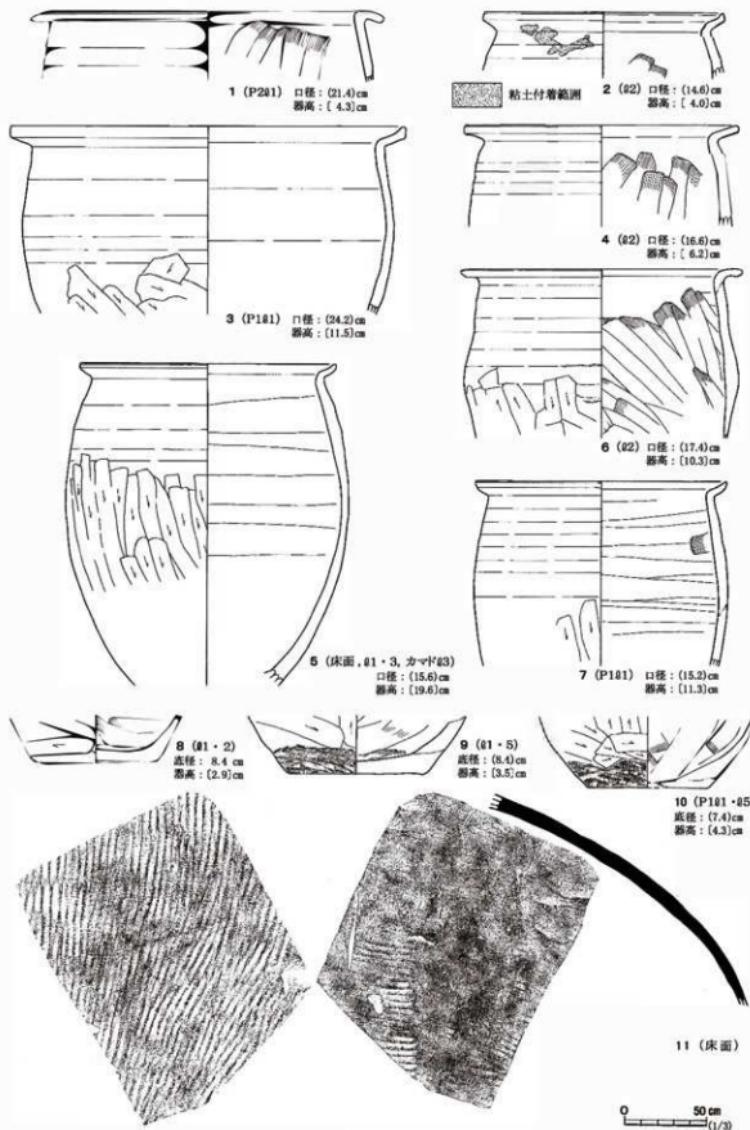


図8 2号住居跡出土遺物

8～10は蓋及び鉢の底部資料である。8は外面下端から底部全面にかけてケズリにより調整している。内面底部中央はわずかに盛り上がる。9・10は外面底部下端にタタキ目痕が認められる。タタキ板により成形した後に、手持ちヘラケズリにより器壁の厚さを調整している。内面はナデ調整により、器面は平滑に仕上げられている。11は須恵器蓋の肩部に近い胴部上半の資料である。内外面にタタキ目痕が認められる。板目が外面は縦方向、内面は横方向に残る。

まとめ

本住居跡は一辺約4mの壁穴住居跡である。カマドと2基の小穴を有する。カマドは袖口に蹠を配し、補強しているのが特徴である。2基の小穴は大きさや形から貯蔵穴と判断した。床面には貼床及び硬化範囲が確認できた。柱穴は認められなかった。

本住居跡の時期は、出土遺物から9世紀前半と考えられる。

(三 浦)

3号住居跡 S 103

遺構 (図9～11、写真10・11)

本遺構はF11グリッドに位置する住居跡である。調査区南よりの車端に立地する。1m北には2号特殊遺構が位置する。本住居跡は試掘調査時におけるトレンチ調査により、黒褐色土の落ち込みと土器片が確認されていた。平面形を明確に認識するために、LIVの真上まで掘り下げて検出を行った。ぼんやりした暗褐色土をした長方形の輪郭中央に黒褐色土が広がる状況で確認した。検出後、本住居跡の西壁が未調査部分に広がることから調査区を一部拡張して調査を進めた。

住居内堆積土は8層に分類したが、大きく2つに分けられる。住居廃絶後に堆積した土と、住居構築時から使用時に堆積していた土である。

ℓ1～ℓ5は住居廃絶後に堆積した層である。三角堆積やレンズ状堆積が認められることから自然堆積である。ℓ1～3はLII・IIIに起因する土を主体とする周囲からの流入土である。ℓ4・5は壁面崩落土及び周囲からの流入土である。ℓ5は壁際や周溝に堆積している。

ℓ6～8は貼床土である。ℓ6は白色粘土と褐色土の混土である。住居南西隅とP7周囲に認められた白色粘土は、5～10cmの厚さに貼られていた。ℓ7は黄褐色粘土層で、床面全体に貼られ、最大18cmを測る。床面の中央から南側では厚く、北側ほど薄い。ℓ8は褐色土で掘形直上に認められる埋土である。

平面形は南北に長い5.3m×4.5mの長方形である。長軸方向はN10°Eを示す。周壁は遺存が良く、壁高は床面まで53cmを測る。各壁面はほぼ垂直に立ち上がる。南北壁の上端では一部崩落した状況が認められる。床面は北側の一部を除いて貼床が施され、平坦に整えられている。南北西壁際には周溝が巡る。周溝幅は上端で10～14cm、下端4～7cmを測る。床面から底面まで4cm程度である。付属施設として床面からは新旧のカマド3基と7基の小穴を検出した。

カマドは東壁と北壁に認められる。カマド袖や燃焼面が遺存する状況から東壁に位置するカマドを新カマド、北壁に位置するカマドを旧カマドと呼称する。

第1編 広谷地遺跡

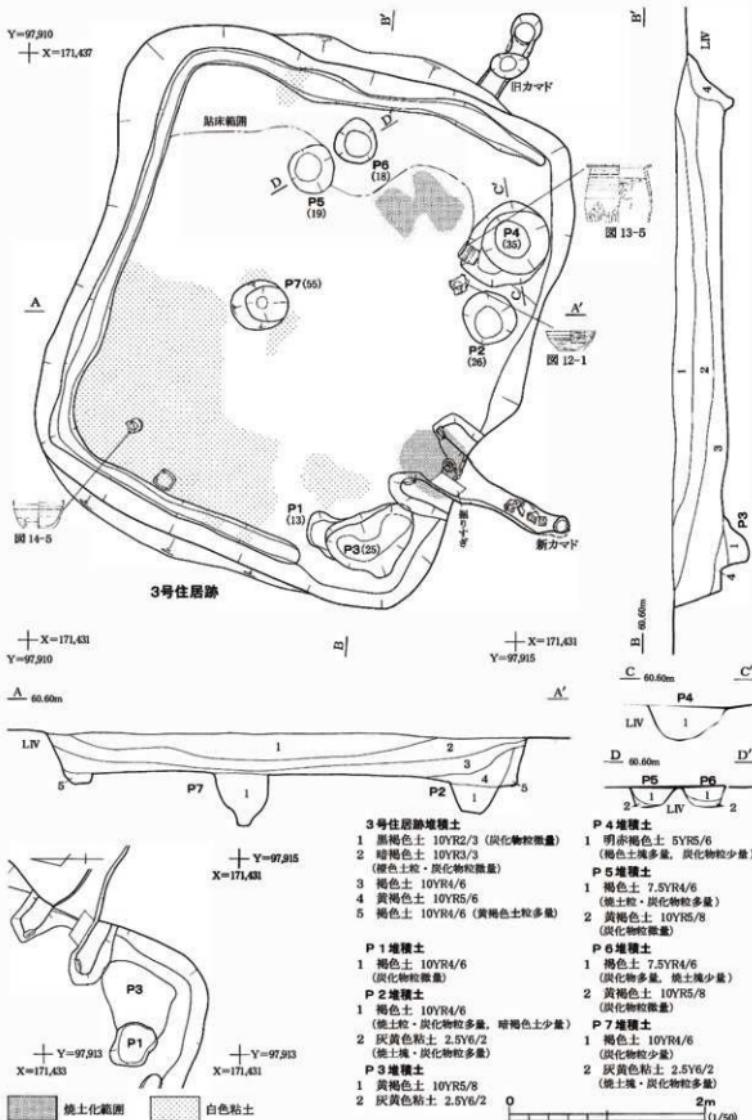


図9 3号住居跡

新カマド 新カマドは東壁中央から、やや南よりに構築されている。カマド燃焼面と両袖部の遺存状況は良好であった。カマド内の堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1～3は住居跡廃絶後に堆積した流入土である。焼土塊は少なく、明確な天井崩落土は認められなかった。 ℓ 4の上層は被熱により赤化していることから、煙道の掘形埋土であると判断した。煙道は表土掘削作業時と検出の際にLIV直上まで下げて確認したため、煙道に配していた土師器甕が一部露出してしまった。煙道は掘り下げたLIVを煙道掘形埋土の ℓ 4で埋めながら、図13-6の底部を穿孔した土師器の長胴甕を煙突として設置している。新カマドの煙道は半地下式であったことがわかる。 ℓ 5はカマド袖構築土である。 ℓ 5の袖内部には礫や粘土などの芯材は認められなかった。カマド袖の先端には15cmの大の小砾を設置し、袖先端の補強材としている。

カマドの規模は袖幅110cm、袖の先端から煙道までは192cmを測る。燃焼面の規模は焚口幅46cm、奥行63cmである。燃焼部の中央奥壁からは、倒立した図13-4の土師器甕が出土した。燃焼部の底面は奥壁に向かって緩く傾斜する。燃焼部はよく焼けており、奥壁の燃焼面は硬化が認められず土層断面の観察時に半分を掘りすぎてしまった。

旧カマド 旧カマドは北壁中央からやや東よりに構築されている。遺存するのは煙出部と燃焼面の痕跡と推察できる焼土化範囲のみである。旧カマドにおいても焼土化範囲と煙出部がそれぞれ2基ずつ確認できたことから、造り替えを行っていることがわかる。煙出部は南北に2基重複して位置する。煙出部の土層断面の観察において、焼土化範囲の切り合い関係により南の煙出部が新しいことがわかる。

煙出部の土層は5つに分層した。2つに大別可能である。 ℓ 1～3は新しい煙出部の堆積土、 ℓ 4・5は古い煙出部の堆積土である。 ℓ 1は旧カマド廃絶後に堆積した土で、新しい煙出部に堆積する褐色土である。 ℓ 2は焼土塊を含んだ暗赤褐色土である。煙道天井部の崩落土で自然堆積と判断した。 ℓ 3は新しい煙出穴の底面上に堆積する黒色土層である。使用時に堆積した層で自然堆積である。 ℓ 4は暗赤褐色土主体で褐色土塊が軽らに混入する層である。古い煙道の天井崩落土を含んだ土と人為的に埋めた褐色土の混土と判断した。 ℓ 5は古い煙出部の使用時に堆積した黒色土で、自然堆積と判断した。床面に認められた2基の焼土化範囲は南北に10cm程度ずれて認められる。焼土化範囲の新旧関係は不明である。

小穴 小穴は床面で7基、掘形底面で7基、計14基を確認した。図9に図示した \blacktriangle 1～7は床面から検出できた。新カマド使用時に認められた小穴と判断した。明確に柱穴と判断できる小穴は確認できなかったが、 \blacktriangle 2・7が住居床面に配列することや、床面から底面までの深さが深いことなどから柱穴である可能性を推測して調査を進めた。しかし、 \blacktriangle 7は、住居跡の床面中央に位置することや断面形が底面に向かってそばまる形であること、壁際で白色粘土が認められることなどからロクロビットである可能性を考えている。 \blacktriangle 7は径55cmの円形で、検出面から底面までの深さは53cmを測る。底面は径10cm程度になる。底面には硬化するような状況は確認できなかった。堆積土は2層である。 ℓ 1は褐色土で住居内堆積土 ℓ 3と同層である。 ℓ 2は灰黄色粘土層で、壁面に

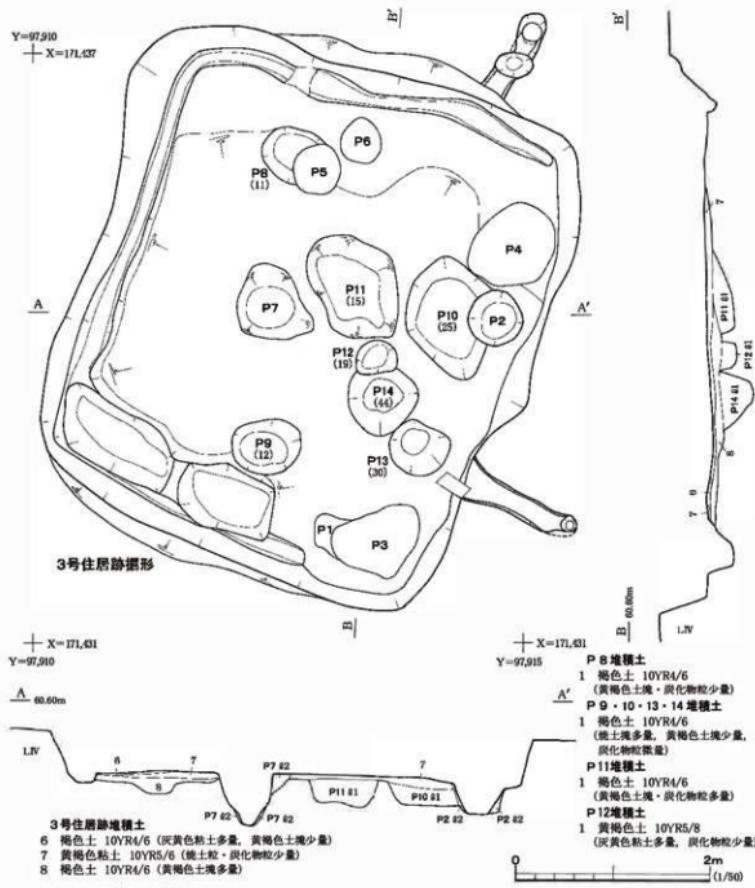


図10 3号住居跡掘形

沿って貼付されているような状況であった。

P 2 は径約55cmの円形を基調とする。床面から底面まで26cmを測る。堆積土は2層確認した。 ℓ 1は褐色土で、住居内堆積土 ℓ 3と同層である。 ℓ 2は白色粘土で壁面に貼付されているような状況で確認した。P 3 は新カマドの右袖に接して掘り込まれている。長軸90cm程度の不整椭円形で、検出面から底面までの深さは25cmを測る。位置や規模から貯蔵穴の可能性を考えている。P 4 は明赤褐色土が充填された椭円形状の小穴である。規模は90×78cmで、検出面から底面まで35cmを測る。位置や規模から旧カマドの貯蔵穴の可能性がある。新カマドを構築する際に、旧カマドを廃棄

したときの焼土などを一括して埋めた堆積土であると判断した。

小型の小穴P1・5・6は、径50cm前後の円形を基調とする。検出面から底面まで20cm未満と浅い。P1はP3に壊されている。P5・6は規模と堆積土が類似する。P1・5・6の性格は不明である。

図10に図示したP8～14は貼床土を除去後、確認できた小穴である。P8・9・12は平面形が径50cm前後の円形を基調とする小穴である。検出面から底面まで10cm程度である。P10・11は平面が方形を基調とする。検出面から底面まで深さ15～25cmである。P13・14は斯カマドの位置を意識して構築された小穴である。P13は径約50cmの円形で、検出面から底面まで30cmを測る。P14は径約70cmの円形で、検出面から底面まで33cmを測る。

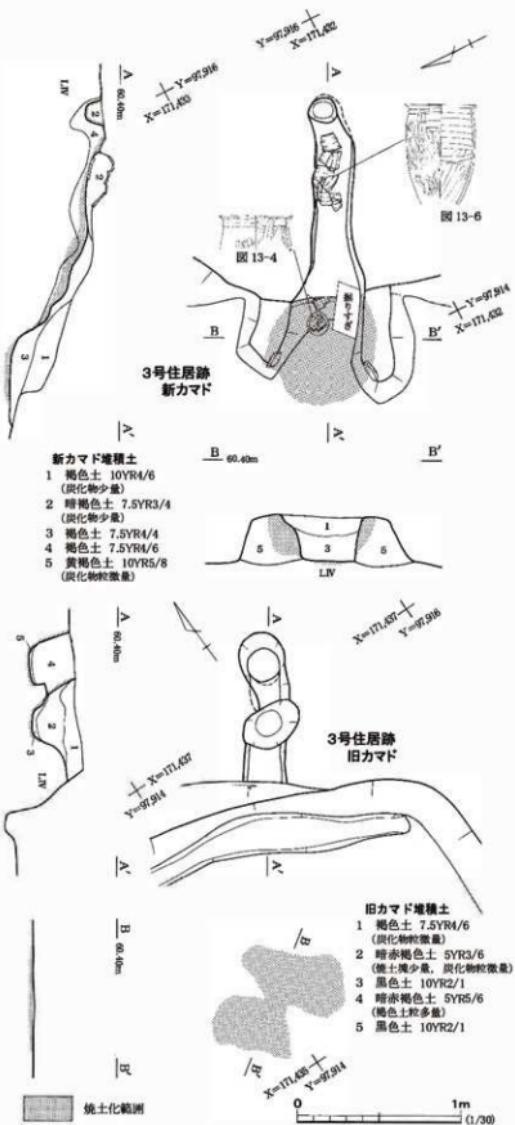
遺物(図12～14、写真27・28)

3号住居跡からの出土遺物は、土師器片2,296点、須恵器片10点、剥片1点である。住居跡内堆積土の遺存状況が比較的良好であり、土師器片の出土が多い印象を受ける。器形が復元及び推定可能な資料を図示した。

図12は土師器杯及び鉢を図示した。1～16はロクロ成形の土師器杯である。1・2・4・7・9・11は体部が内湾しながら立ち上がり、外傾する器形である。3・5・6・8・10は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する器形である。2は外面体部に墨書が認められる。破片資料のため文字や図案などはわからない。1～6・13～15は、回転糸切り痕を回転ヘラケズリによって再調整をしている痕跡が確認できた。これらの再調整は、底部周縁部に認められる。12・16には回転糸切り痕の痕跡が認められず、回転ヘラケズリのみ確認できる。回転ヘラ切りの可能性も残る資料である。15は内面の黒色処理が施されていない。

17・18は内面黒色処理を施したロクロ成形の鉢である。17の体部は直立し、口縁部はわずかに外反する器形である。内面には細かいミガキ調整が認められる。口径の推定計測値が25cmの大型の鉢である。18の胴部は丸く球胴に近い器形になる。頸部はやや絞り気味にロクロで成形している。口縁部は外傾して立ち上げている。口径が14.2cmの小型の鉢である。

図13～1～6、図14～1～5は土師器皿を示した。図13～1はロクロ成形で、底部に回転糸切り痕が認められる壺である。ほぼ完形品に近い資料である。器の外面は荒れ、明瞭に調整は観察できない。内面の口縁部にはわずかに煤が確認できる。同図2も完成品に近い壺である。胴部外面には入念なケズリ調整が見られる。胴部下端の外面にはタタキ目痕が確認できる。タタキ板による調整の後にケズリを行っている。ロクロは使用されていないと考えている。同図3は胴部が膨らむ器形をした小型の壺である。胴部下半の外面にはケズリ調整が確認できる。口縁部内面にはわずかに煤が付着している。同図4は口径の大きさから長胴形の壺になると想定できる。外面はケズリ、内面は口縁部にまで達するナデ調整が認められる。カマドの燃焼面底面に倒立して置かれていた資料である。出土状況から住居跡廃絶後にカマド伏せの祭祀に利用され、遺棄されたと推定できる。同図5はP4が位置する床面から出土した。口径や胴部の大きさから長胴形の器形になると推測でき



る。胴部下半には明瞭にケズリ調整痕が残る。同図6は新カマドの煙道に設置されていた甕である。煮炊具として使用後に、煙道として再利用された土器である。底部は煙道に使用するために打ち欠いている。内面には煤が付着し、火を受けたための剥落が確認できる。

図14-1は胴部中央に最大径を有する器形である。胎土は緻密で、焼成も良く硬質な印象を受ける。同図2は口縁部資料である。同図3は長胴形の甕である。外面下半はケズリ調整、内面は横方向のナデ調整を行っている。同図4は丸い口唇部が特徴的な資料である。同図5は甕の底部に近い資料である。ロクロ成形である。外面に粘土を塗布した範囲が認められる。

同図6は無底式の瓶と判断した。下半部のみの資料である。底径24cmを越える資料である。ロクロは使用されていない。外面は下方向へのケズリ後、指オサエで仕上げている。内面は横方向のナデをしている。胎土も粗く、外のケズリ調整もやや粗雑な印象を受ける。同図7は瓶の把手である。非常に薄手である。

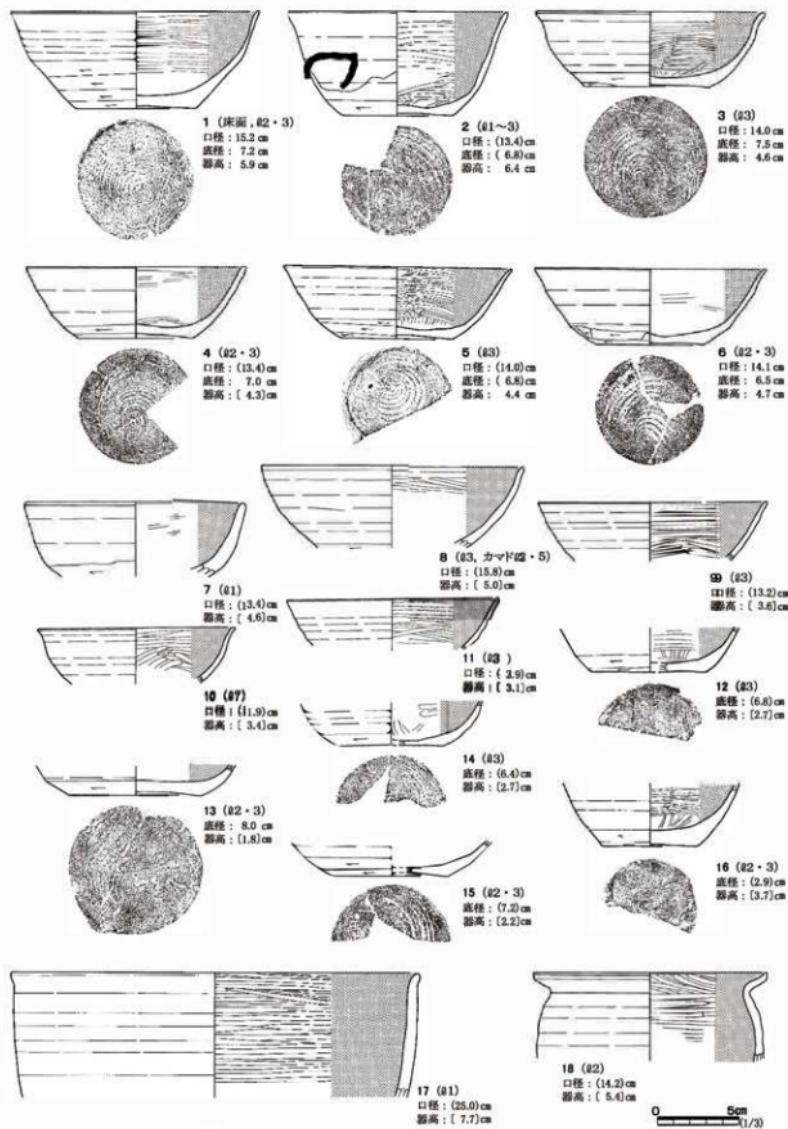


図12 3号住居跡出土遺物(1)

第1編 広谷地遺跡

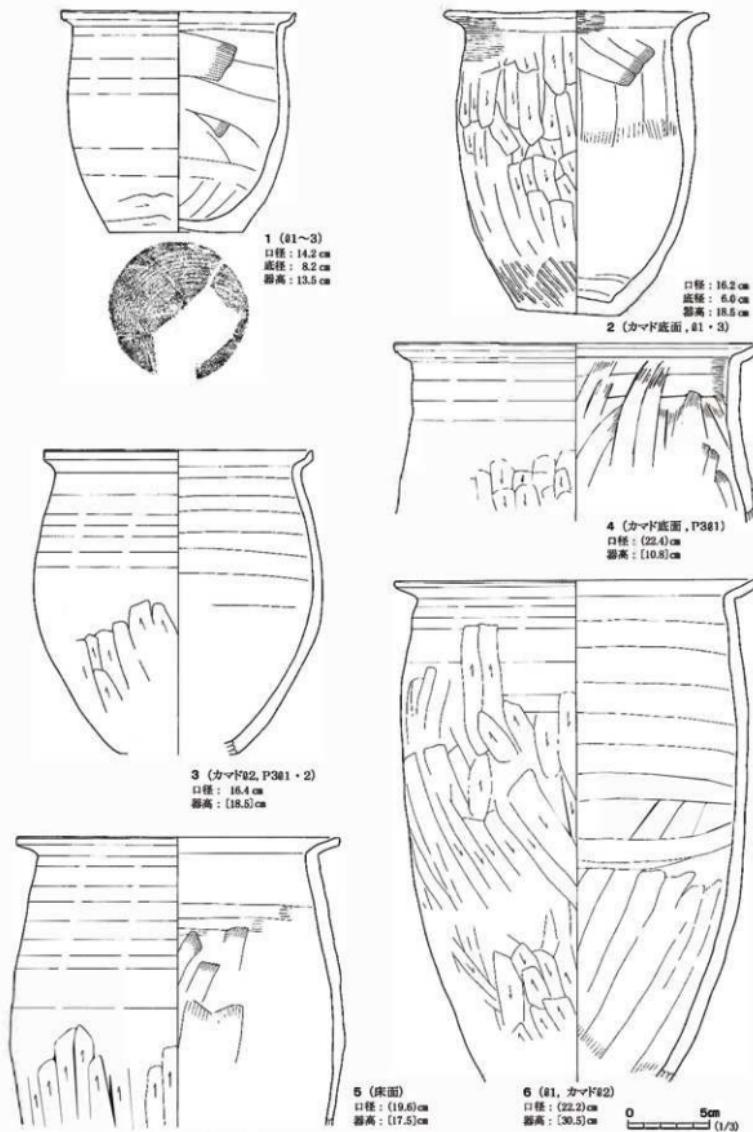


図13 3号住居跡出土遺物(2)

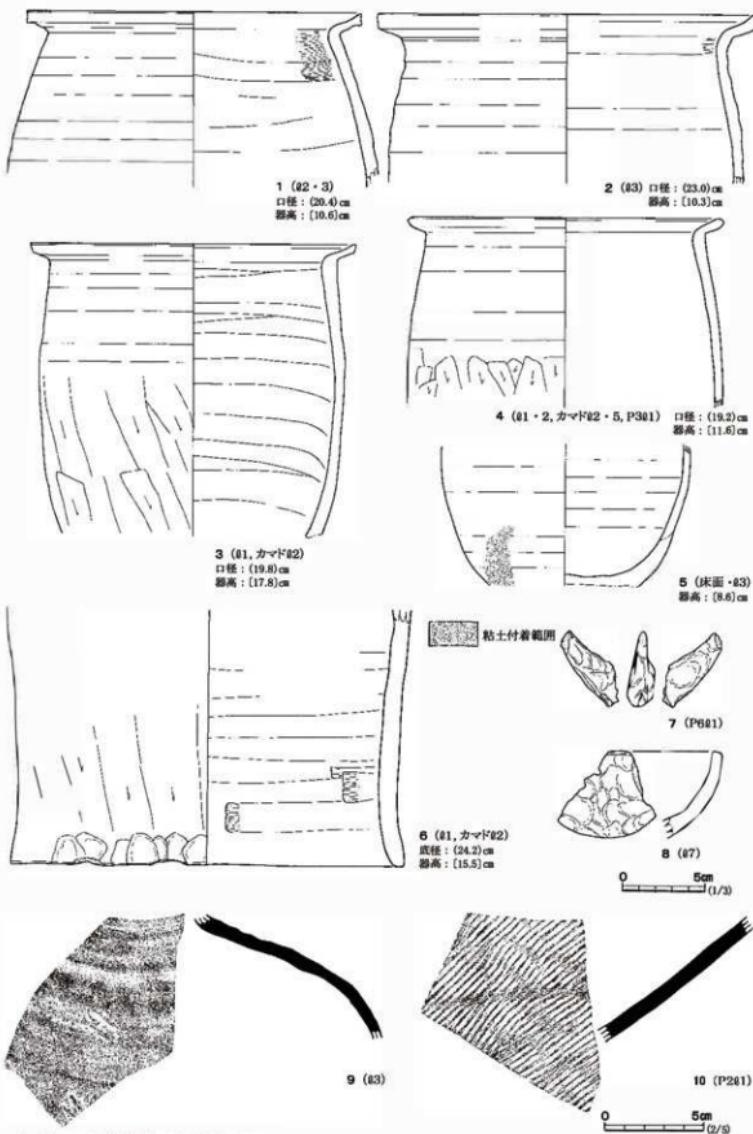


図14 3号住居跡出土遺物(3)

第1編 広谷地遺跡

指で掘んだ凸凹を残したものである。同図8は手捏土器である。指によるナデとオサエによって小さな器を形作っている。用途は不明である。同図9・10は須恵器甕である。9は甕の肩部から胴部の資料である。10は胴部下半の資料である。外面にはタタキ目が認められる。内面はいずれも平滑に仕上げられている。

まとめ

本住居跡は南北方向に長軸をもつ竪穴住居跡である。3回のカマドの造り替えが確認できた。最も新しいカマドは東壁に構築され、その他のカマドは北側に認められた。新カマドの煙道には土師器甕を煙突代わりに配置している状況が確認できた。

カマドの位置や壁際の掘形の状況から、本住居跡新カマドを構築時に南側に拡張したと考えられる。複数のカマドと拡張した床面などから類推すると、最期間機能していたことが考えられる。時期は土師器甕の底部調整の特徴から9世紀後半と考えられる。

(三 潟)

第3節 土 坑

1・2次の調査において45基の土坑を検出した。縄文時代の土坑は、貯蔵を目的として造られた土坑が多い。縄文時代の土坑の分布は、調査区北半に集中して構築されている傾向がある。検出した木炭焼成土坑の多くは出土遺物が認められないが、平安時代頃に機能した遺構であると推測している。木炭焼成土坑は、調査区内にまばらに分布する。

1号土坑 SK01(図15・23、写真12・29)

本遺構は、B4グリッドに位置する。調査区北西の北側緩斜面に立地する。黒褐色土の不整な楕円形として認識した。検出面はLIV上面である。

平面形は、北西-南東方向に長い楕円形である。主軸方向はN56°Wである。規模は167×130cmである。検出面から底面までの深さは18cmである。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。断面形は浅い皿状である。

堆積土は2層からなる。1は黒褐色土で、2は暗褐色土である。土質や土色の状況から自然堆積と判断した。

本土坑からは、縄文土器片が35点出土した。このうち3点を図示した。図23-1~3は、いずれも胎土に纖維混和痕が認められる資料である。遺物はすべて1より出土した。器形は深鉢になると推定できる。1は口縁部資料で、外縁及び口唇部に単節の縄文が施されている。焼成以後に穿たれた径1cmほどの孔が1カ所確認できる。2は外縁に縄文、内面に条痕が施された胴部資料である。3は内外面に条痕が施されている。

本土坑は楕円形状の土坑である。遺構の性格は不明である。時期は出土土器の特徴から、縄文時代早期末葉以降と考えられる。

(青山)

2号土坑 SK02 (図15・24, 写真12)

本遺構はB 6グリッドに位置する。調査区中央西よりの平坦面に位置する。東側1mには15号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形である。長軸方位はN 15° Eである。規模は175×130cmで、検出面から底面までの深さは16cmである。壁面は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色土の単層である。自然堆積の可能性がある。

本土坑からは土師器片16点と鉄製品が1点出土している。土師器片1点を図示した。図24-2はロクロ成形の壺の底鉢資料である。底面には回転糸切り痕が確認できる。その他の土師器片は小破片で図示し得なかったが、ロクロ成形の黒色処理を施した杯が出土している。

本土坑の時期は、出土遺物の特徴から平安時代と考えられる。性格は不明である。 (小河)

3号土坑 SK03 (図15・23, 写真12・29)

本遺構はB 7グリッドに位置する。調査区中央部やや西よりの遺構が集中する地域に立地する。周囲には1号住居跡、10・14・16号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は南北に長軸をもつ楕円形である。長軸方位はN 25° Wである。規模は124×91cm、検出面から底面までの深さは最大で66cmである。周壁は底面から30cm程まで垂直に立ち上がり、検出面に向かってやや緩やかになる。底面はわずかに凹凸が認められる。

堆積土は4層に分けられる。①～3は流入土、④は壁面崩落土である。三角堆積やレンズ状堆積が認められることから、自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片5点が②より出土した。図23-4～6に3点図示した。いずれの土器も胎土に纖維混和痕が認められる。4・5の外面は燃りが弱い単節縄文が施されている。6は外面に単節縄文、内面に条痕が施されている。

本土坑は、規模や形状から貯蔵穴と考えられる。所属時期は、出土遺物の特徴から縄文時代早期末以降であると考えられる。 (小河)

4号土坑 SK04 (図15, 写真12)

本遺構はB 7グリッドに位置する。調査区中央部やや西よりの平坦面に立地する。5・8号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は132×107cmで、検出面から底面までの深さは最大で32cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。底面には若干の凹凸が認められる。

堆積土は2層に分けられる。①は炭化物を多量に含んだ黒褐色土、②は褐色土と黒褐色土との混土である。①は自然堆積、②は人為堆積と判断した。

出土遺物はなく、本遺構の性格・時期は不明である。

(小河)

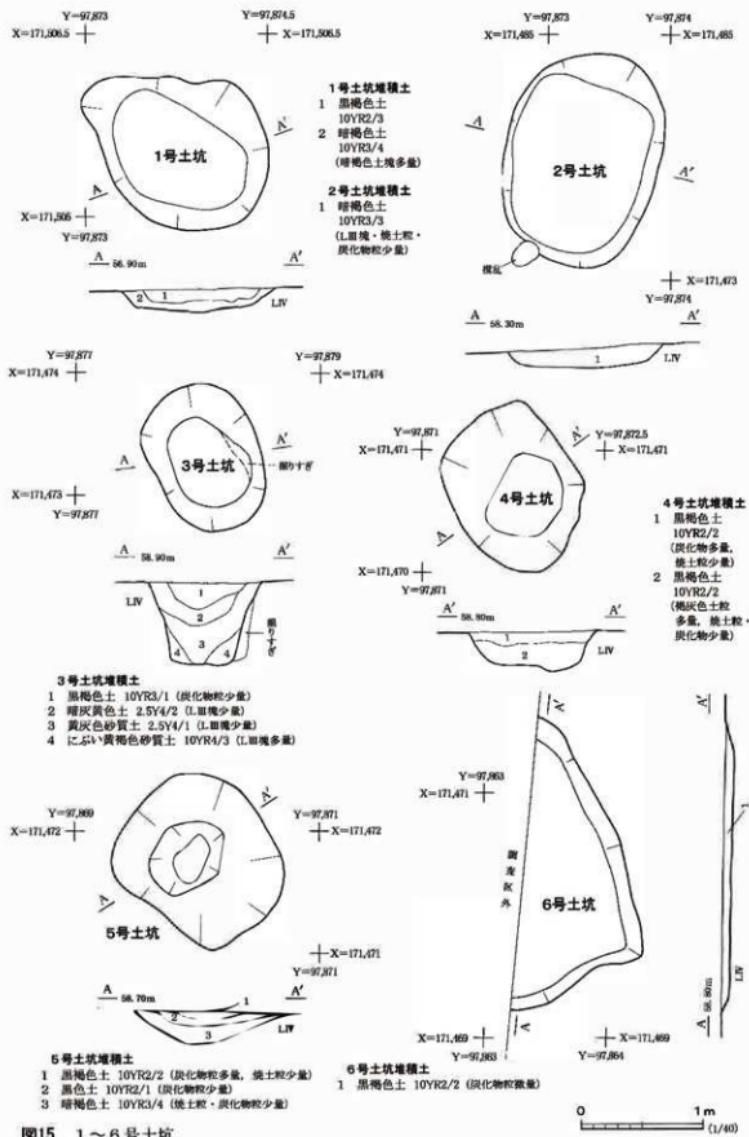


図15 1～6号土坑

5号土坑 SK05 (図15、写真12)

本遺構は、A・B 7グリッドに位置する。調査区中央部の西よりの平坦面に立地する。周囲には1号特殊遺構及び4・8号土坑が位置する。検出面はLIV上面である。

平面形は、不整円形である。規模は、直径約1.5mである。検出面から底面までの深さは28cmである。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がり、中ほどに段が認められる。底面はほぼ平坦である。

3層の堆積土を確認した。いずれの層も炭化物粒と焼土粒を含んでいる。レンズ状堆積であることから、自然堆積と判断した。

本土坑から遺物は出土せず、年代及び機能は不明である。

(青山)

6号土坑 SK06 (図15・24、写真12)

本遺構は、調査区の西部Aの7・8グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。遺構の西半は調査区外に伸び、全体の形は不明である。底面が比較的平坦であることから住居跡の可能性も検討したが、住居跡と認定するには根拠が弱く本報告においては土坑として報告することにした。南東60cmには9号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

検出できたのは、東辺2.2m、南辺1.2mの南東隅である。東辺はやや外側に湾曲するもののほぼ直線的で、北から10~25°西に振れている。壁は緩やかに立ち上がる。壁高は、床面から7cmである。床面は凹凸が激しく、施設等は認められなかった。遺構内堆積土は黒褐色の単層である。全体的に薄く堆積しているが、層中に含有物が見られないことから自然堆積と考えられる。

本遺構からは、土師器片10点が出土した。このうち1点を図示した。図24-3は、ロクロ成形の鉢である。口縁部から体部上半的一部分が遺存している。体部上半は内湾し、外傾する口縁部がつく。内面はミガキ後に黒色処理が施されている。

本遺構は、全形を確認できなかったが、一辺2m以上の遺構であると考えられる。住居跡である可能性も残る。時期は出土した土器の特徴から、9世紀頃と思われる。

(青山)

7号土坑 SK07 (図16、写真12)

本遺構はD10グリッドに位置する。調査区中央部の平坦面に立地する。13・21号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は不整な梢円形である。規模は134×106cmである。検出面から底面までの深さは最大で24cmである。周壁はわずかに丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

堆積土は4層に分けられる。①~③は流入土、④は壁面崩落土及び流入土である。いずれの層も自然堆積であると考えられる。

本土坑の各層中には炭化物や焼土が混入することや、平面形や規模から木炭を焼成した遺構である可能性も考えられる。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

(小河)

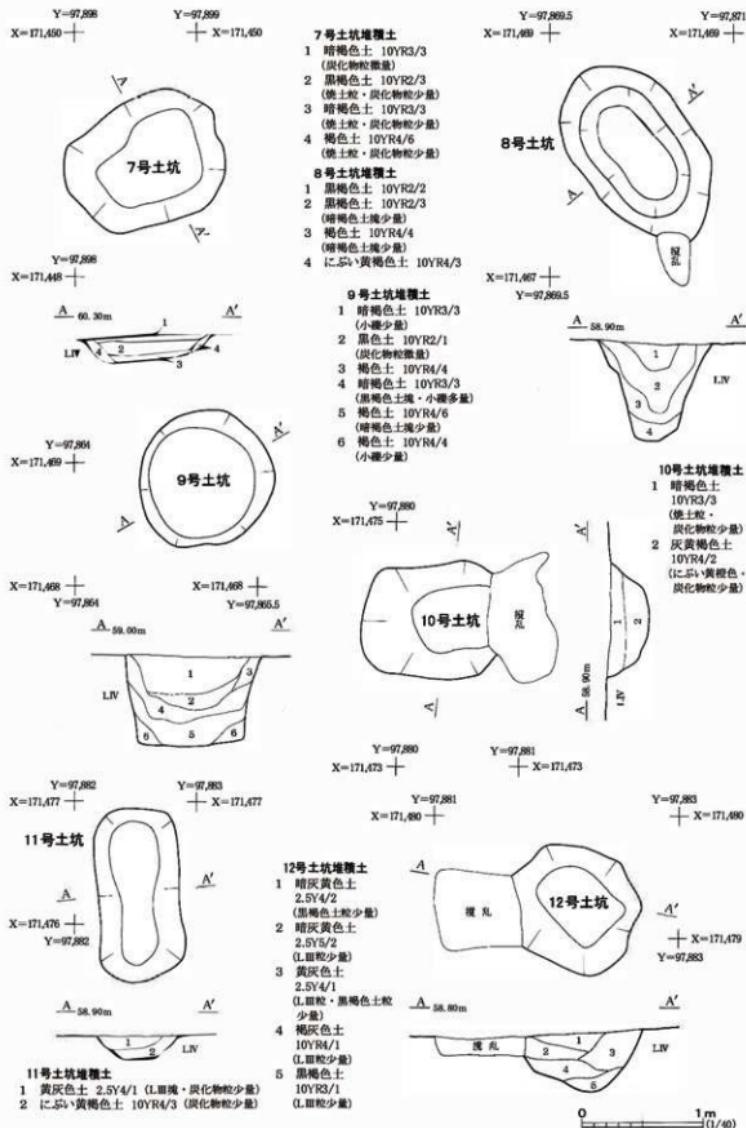


図16 7～12号土坑

8号土坑 SK08 (図16・23, 写真12)

本遺構は、調査区西部のA・B 8グリッドに位置する。調査区中央やや西よりの平坦部に立地する。北側2mに4・5号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は、N38°Wに主軸方位をもつ梢円形である。規模は162×100cmである。検出面から底面までの深さは60cmである。壁は急な角度で立ち上がる。底面はLVである標層まで掘り下げている。底面には逆茂木の痕跡は認められなかった。

堆積土は4層からなる。①・②は黒褐色土で、③は褐色土、④はにぶい黄褐色土が堆積していた。レンズ状に堆積していることから、いずれも自然堆積である。

遺物は縄文土器片が2点出土した。このうち1点を図示した。図23-7は胸部資料で、器形は深鉢になると推定できる。胎土に纖維混和痕が確認できる。外面に縄文、内面に条痕が施されている。

本土坑は、形状から落し穴状土坑と考えられる。年代は、出土土器から縄文時代早中期以降と考えられる。

(青山)

9号土坑 SK09 (図16・23, 写真13・20)

本遺構は、調査区西部の平坦部であるA 8グリッドに位置する。北西に近接して、6号土坑が位置する。検出面はLIV上面である。

平面形は円形である。規模は直径約1.1mである。検出面から底面までの深さは72cmである。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦に造られ、LVの標層まで掘り下げている。堆積土は6層に分けられた。三角堆積やレンズ状堆積が認められることから、自然堆積と判断した。

本土坑からは、縄文土器が6点出土し、このうち3点を図示した。図23-8～10は、いずれも胎土に纖維混和痕が認められる深鉢である。8は口縁部資料である。口唇部は角頭状になる。外面に単節の縄文、内面に条痕が施されている。9・10は外面に縄文が施される胸部資料である。

本土坑は、規模や形から貯蔵穴の可能性を考えられる。時期は出土土器の特徴から、縄文時代早期末葉ころと考えられる。

(青山)

10号土坑 SK10 (図16, 写真13)

本遺構はB・C 7グリッドに位置する。調査区中央部平坦面の遺構が集中する地域に立地する。周囲には1号住居跡、3・11号土坑が近接する。遺構検出面はLIV上面である。

平面形は東西方向に長軸をもつ不整梢円形である。東壁は大きく擾乱を受け、遺存していない。長軸は遺存部分で110×100cmである。検出面から底面までの深さは最大で32cmを測る。周壁は底面から丸みを帯びて、緩やかに立ち上がる。底面には若干の凹凸がある。堆積土は2層に分けられる。土質や土色の状況から、いずれの層も自然堆積と判断した。

出土遺物はなく、本遺構の性格及び時期は不明である。

(小河)

11号土坑 S K11 (図16、写真18)

本遺構はC 7 グリッドに位置する。調査区中央部の遺構が集中する平坦面に立地する。周囲には10・12号土坑、東側約4mには1・2号道跡が隣接する。検出面はL IV上面である。

平面形は南北に長軸をもつ長方形である。規模は144×72cmである。検出面から底面までの深さは最大で20cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸が認められる。堆積土は2層に分けられた。いずれも流入土であると考えられ、自然堆積と判断した。

出土遺物はなく、本遺構の性格及び時期は不明である。

(小 河)

12号土坑 S K12 (図16・24、写真18・30)

本遺構は調査区中央部のC 7 グリッドに位置する。近接して11号土坑、東側に1・2号道跡が位置する。遺構検出面はL IV上面である。

平面形は西側が後世の搅乱で壁が一部壊されているが、不整円形であると思われる。規模は径約1mである。検出面から底面までの深さ54cmを測る。底面は緩やかな窪みが認められ、周壁は東西北壁ともほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は若干緩やかに立ち上がる。

遺構内堆積土は5層からなり、①～③は灰黄色土、④・⑤は褐色土に大別される。④・⑤はレンズ状に堆積することから自然堆積と判断した。①～③は人為堆積の可能性も考えられる。

遺物は繩文土器片2点、石器1点が①より出土した。繩文土器片は小破片のため、図示し得なかった。繩文土器片は縦縫混和痕が確認できる資料である。図24-8に石器を示した。縦長の石匙で上端部に抉りを入れ、つまみ部を形成している。周縁部に調整剥離を施し、刃部を作り出している。

本遺構の時期は、出土遺物の特徴から繩文時代早期以降と考えられる。形状から貯蔵穴の可能性が高いと推測される。

(管 野)

13号土坑 S K13 (図17、写真19)

本遺構はD 10 グリッドに位置する。調査区中央の平坦面に立地する。7号土坑が近接する。検出面はL IV上面である。

平面形は不整な楕円形を呈する。主軸方位はN53° Wである。規模は128×90cmを測り、検出面から底面までの深さは最大で16cmを測る。周壁はやや急傾に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分けられる。壁際からの流入状況が認められることから、いずれも自然流入土と考えられる。

本遺構からの出土遺物はなく、所属時期や性格は不明である。

(小 河)

14号土坑 S K14 (図17・23、写真20)

本遺構はB 7 グリッドに位置する。調査区中央部やや西よりの平坦面に立地する。3・16号土坑

が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は円形である。径約1.4mである。検出面から底面までの深さは最大で12cmを測る。周壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、断面形は皿状になる。堆積土は単層で、土質の状況から自然堆積と考えられる。

堆積土内から縄文土器片2点が出土している。図23に示した。いずれの土器も胎土に纖維の混和痕が認められる。11は深鉢の口縁部資料である。外反する器形である。口縁上部から端部にかけて縄文が施され、胸部文様帶と内面には条痕が施される。12は胴部資料である。外面に単節斜縄文、内面に条痕文が施されている。

本遺構の時期は、出土した遺物の特徴から縄文時代早期末葉以降であると考えられる。性格は不明である。

(小河)

15号土坑 SK15(図17、写真13)

本遺構は調査区西部のB 6グリッドに位置する土坑である。周囲には2号土坑、1号焼土遺構が近接する。黄褐色土と黒褐色土が斑らに含んだ長方形として認識した。検出面はLIV上面である。

本土坑の北壁と東壁の一帯が搅乱により壊されている。遺存する平面形から、隅丸長方形と推定される。規模は遺存部で164×112cmを測る。検出面から底面までの深さは最大で24cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

堆積土は1層のみ確認された。にぶい黄褐色土と黒褐色土との混土であることから、人為堆積であると考えられる。堆積土内から、縄文土器片1点、土師器片9点が出土している。図示しなかったが、土師器はロクロ使用の黒色処理された杯である。

本遺構の時期は、出土遺物の特徴から9世紀代と考えられる。性格は不明である。

(小河)

16号土坑 SK16(図17、写真13)

本遺構はB 7グリッドに位置する。調査区中央部のやや西よりの平坦面に立地する。1号住居跡、3・14号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は東西がわずかに長い楕円形である。規模は118×91cmを測る。検出面から底部までの深さは最大で16cmである。壁面は丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。底面は若干の凹凸が認められるが、平坦である。堆積土は2層に分けられ、レンズ状堆積が認められることから自然流入土と考えられる。

縄文土器片1点が1から出土しているが、表面が摩耗しているため時期の判別はできない。胎土に纖維混和痕が認められる。

本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代早期後半以降と考えられる。本遺構の性格や詳細な時期は不明である。

(小河)



図17 13~18号土坑

17号土坑 S K17 (図17・23, 写真14)

本土坑は、調査区西側のA 7 グリッドに位置する。調査区西部の平坦面に立地している。近接して、1号特殊遺構がある。検出面はLIV上面である。

平面形は長楕円形である。主軸方位はN 58° Eを示す。北東隅には突出する部分が認められる。規模は227×93cmを測る。検出面から底面までの深さは12cmと浅い。底面はほぼ平坦で、断面形はⅢ状となる。壁面は各壁とも底面から50度前後で立ち上がる。

堆積土は黄褐色土を主体とした2層が認められた。三角堆積が認められることから、いずれも自然堆積と判断した。

堆積土中から繩文土器片1点が出土した。図23-13はℓ1から出土した銅部資料である。外面に繩文、内面に条痕が施文されている。胎土には纖維混和痕が確認できる。

長楕円形をした土坑である。検出面から底面まで浅く、遺存状況は良くない。時期は出土遺物の特徴より、繩文時代早期末葉以降と推測できる。性格は不明である。 (菅野)

18号土坑 S K18 (図17, 写真14)

本遺構はC・D-13・14グリッドに位置する。調査区南よりの平坦面に立地する。近接して2.5m南に36号土坑がある。検出面はLIV上面である。

平面形は不整楕円形を呈する。主軸方位はN 9° Wである。規模は140×75cmで、検出面から底面までの深さは最大で24cmである。周壁はやや急傾である。底面はほぼ平坦である。

遺構内堆積土は2層に分けられる。ℓ1は炭化物粒や焼土粒を多量に含む層であり、流入土と判断した。ℓ2は炭化物層である。出土遺物はℓ1より、石器の剥片が2点出土している。

本土坑は、壁面には明確な熱変化は認められないが、炭化物層が認められることから木炭焼成土坑と判断した。時期を特定できる資料はなく、詳細な時期は不明である。 (小河)

19号土坑 S K19 (図18, 写真14)

本遺構はE 9 グリッドに位置する。調査区中央東よりの平坦面に立地する。南東10mに2号特殊遺構が位置する。黒褐色土の長方形として認識した。検出面はLIV上面である。

平面形は南北に主軸方位をもつ長方形である。規模は136×83cmである。検出面から底面までの深さは最大で20cmである。周壁は、西壁においてはやや急傾に立ち上がり、東壁はほぼ直角に立ち上がる。北東隅を除いた壁面には焼土化範囲が認められ、焼土壁は約1cmの厚さで焼けていた。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分けられる。ℓ1は自然流入土、ℓ2は遺構底面に堆積する炭化物層である。

本土坑は炭化物層や焼土化範囲が認められることから、木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。 (小河)

20号土坑 S K20 (図18, 写真14)

本遺構は■7グリッドに位置し、調査区中央部の平坦面に立地する。6m東に1・2号道跡が位置する。検出面はLIV上面である。

平面形は直径約1mの不整な円形である。検出面から底面までの深さは、遺存の良い東壁で最大16cmを測る。東壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁は緩く、わずかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西壁に向かって傾斜する。

遺構内堆積土は3層である。壁際からの流入状況が認められることから、いずれも自然堆積であると考えられる。ℓ1からは黒色処理を施したロクロ土師器片1点が出土している。

本土坑からはロクロ土師器が出土しているが、流入土によるため明確な時期決定資料とは言えない。また検出面から底面までの深さが浅く、遺存状況が悪いことから、性格は不明である。(小河)

21号土坑 S K21 (図18, 写真14)

本遺構はE9・10グリッドに位置する。調査区中央の平坦面に立地する。南西に7・13号土坑が近接する。検出面はLIV上面である。

平面形は長方形を呈し、規模は105×87cmを測る。検出面から底面までの深さは25cmである。周壁はやや急傾に立ち上がる。壁面すべてに焼土化範囲が認められる。焼土の厚さは1cmを測る。底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分けられる。ℓ1～ℓ3は壁際からの流入状況が認められることから、自然堆積土と考えられる。ℓ4は炭化物層である。

本土坑は、炭化物層並びに焼土化範囲が認められることから、木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。(小河)

22号土坑 S K22 (図18, 写真14)

本遺構は調査区北側のC4グリッドに位置し、LIIIで検出した。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN52°Eを示す。規模は91×61cmを測り、検出面からの深さは最大10cmである。

周壁は底面から全体的に急角度で傾斜する。南西側の壁上端には焼土化範囲が認められ、その厚さは1cmを測る。底面はおおむね水平である。堆積土は単層で、底面直上には炭化物が、壁際には焼土粒や黄褐色土塊が認められた。遺物は出土していない。

本遺構は、焼土化した壁面や底面上に炭化物を多く含むことから木炭焼成土坑と判断した。所属時期は不明である。(國井)

23号土坑 S K23 (図18, 写真14)

本土坑はF6グリッドに位置する。調査区北東の平坦な地形に立地する。試掘調査時において、確認された遺構である。本遺構に重複する遺構ではなく、北5m程に24・25号土坑が位置する。黒褐

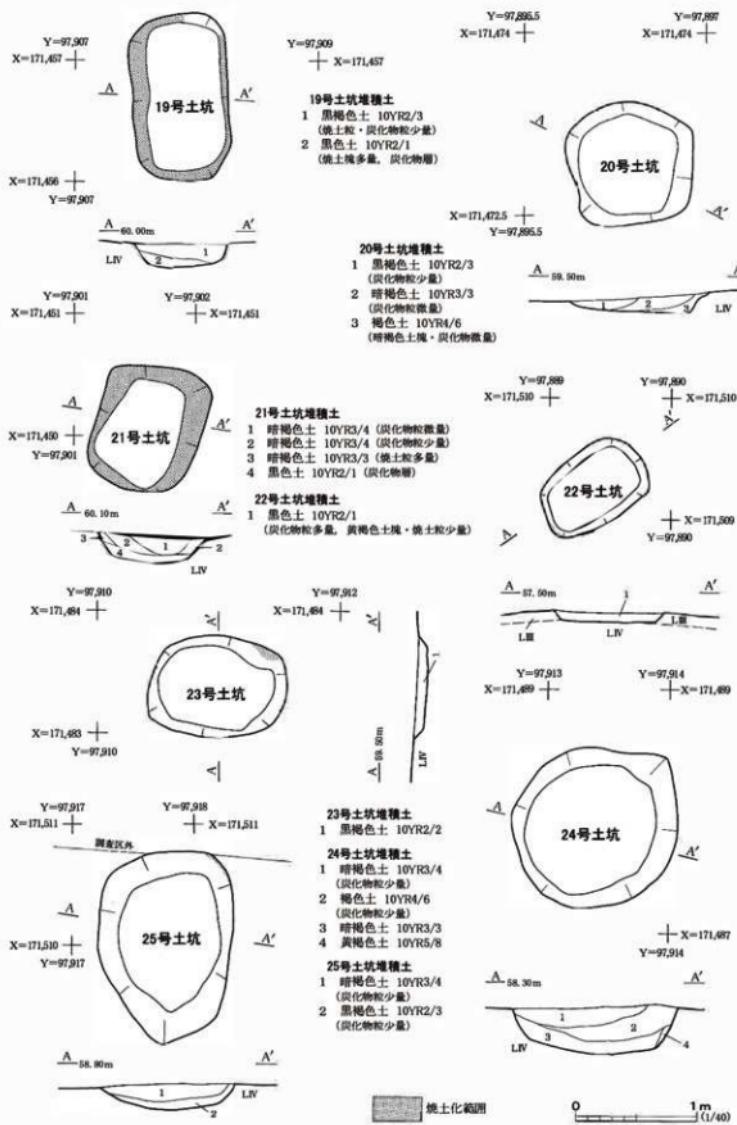


图18 19~25号土坑

色土の楕円形として認められた。検出面は、L IV上面である。

平面形は主軸方位を東西方向にもつ楕円形である。規模は115×84cmである。検出面から底面までの深さは7cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。北・南壁の一部に焼土化範囲が認められる。焼土の厚さは2mm程度である。底面はほぼ平坦に造られている。堆積土は黒褐色土の1層のみで、自然堆積と考えられる。

本土坑は焼土化した壁面が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(三 溝)

24号土坑 SK24 (図18・24、写真14・29)

本遺構はF 6グリッドに位置する。調査区北東の平坦な地形に立地する。重複する遺構はない。近接して西5mに45号土坑、南5mに32号土坑が位置する。検出面はL IV上面で、ぼんやりした暗褐色の円形として確認した。

平面形は円形を基調としているが、北壁の一部がわずかに張り出した形である。規模は136×132cmである。検出面から底面までの深さは40cmである。壁面は垂直に近い角度で立ち上がる。底面は中央から壁面にかけて丸みを帯びる。底面に硬化状況は認められなかった。

堆積土は4層に分層した。①～③は炭化物を含んだ暗褐色土・褐色土で、いずれの層も流入土である。④は壁面崩落土と判断した。②中には粒径や色・質などの特徴から、降下火山灰と考えられる白色砂粒が流入していた。

出土遺物は①中から土師器片が14点出土している。小破片が多いが、1点図示した。図24-1は壺または甕の胴部資料と考えられる。器壁は薄く、堅い。外面は細かいハケ目で調整されている。内面はナデにより仕上げられている。出土した遺物は胎土や調整の特徴から古墳時代前期の土師器片であると考えられる。

本土坑は円筒状の土坑である。堆積土中には降下火山灰と考えられる白色砂粒が認められた。均一ではないため、流入して堆積したと判断している。出土遺物の特徴から、古墳時代前期の土坑と推測している。底面に硬化面は認められない。形体から貯蔵穴の可能性も考えられる。なお、出土炭化物の放射性炭素年代測定では、2世紀前半～4世紀中頃の結果が得られた。

(三 溝)

25号土坑 SK25 (図18、写真15)

本遺構は、調査区北東端のF 3・4グリッドに位置する土坑である。川房川へ向かって下る傾斜の変換地点に立地する。重複する遺構はない。26号土坑と2号焼土遺構が近接する。検出面はL IV上面で、ぼんやりした暗褐色の楕円形として確認した。

平面形は主軸を東西方向にもつ楕円形である。規模は150×112cmである。検出面から底面までの深さは12cmを測る。底面から壁面にかけて、皿状に緩やかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。

堆積土は2層に分けた。土質からいずれも自然堆積と判断した。土層断面図には図示できなかっ

たが、壁面近くの堆積土中には弱い被熱した土が見受けられる。おそらく、弱く被熱した壁面が崩落し、流入土とともに堆積した土ではないかと推測している。出土遺物は縄文土器片3点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

本土坑は壁面や底面に焼土化範囲が認められなかつたものの、規模や堆積土の状況より木炭焼成土坑であると想定される。出土遺物はなく、詳細な時期は特定できない。
(三 浦)

26号土坑 SK26 (図19, 写真15)

本遺構は、調査区北東端のE3・4グリッドに位置する。川房川へ下る傾斜変換点に立地する。重複する遺構はないが、25号土坑、1・2号道跡が近接する。検出面はLIV上面で、ぼんやりした暗褐色の円形として確認した。

平面形は直径約1.3mの円形を基調としている。検出面から底面までの深さは、23cmを測る。底面から壁面にかけて、丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。壁面の一部に焼土化範囲が認められる。焼土の厚さは、最も厚い部分で2mm程度である。堆積土は2層に分層した。いずれも炭化物を含んだ層で、自然堆積と判断している。出土遺物はなかった。

本土坑は焼土化した壁面が認められることから、木炭焼成土坑であると考えられる。出土遺物はなく、詳細な時期の特定はできない。
(三 浦)

27号土坑 SK27 (図19, 写真15)

本遺構は、調査区北側のB5グリッドに位置する。重複する遺構はないが、SK28・30、1・2号道跡が近接する。遺構検出面はLIIIである。

平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN15°Wを示す。規模は142×138cmを測り、検出面からの深さは最大27cmである。周壁は、底面から全体的に急角度で立ち上がるが、東壁と南壁の上部では緩やかに傾斜する。底面はおおむね平坦である。堆積土は4層に分けられ、①～④がレンズ状の堆積を示すが、④は炭化物を多量に含み水平に堆積する。

遺物は土師器片45点が出土したが、細片のため図示していない。器種は杯・甌で、いずれもロクロ成形のものである。土師器杯の特徴は、内面黒色処理を施すものと施さないものが見られ、底部は回転糸切り後に回転ヘラケズリ再調整が施されている。

本遺構は、底面上に炭化物を多く含むことから木炭焼成土坑と判断した。時期は、出土遺物から9世紀代と考えられる。
(國 井)

28号土坑 SK28 (図19・23・24, 写真15・25)

本遺構は調査区北側のB5グリッドに位置する。重複する遺構はないが、SK27・30、1・2号道跡が近接する。遺構検出面はLIV上面である。遺構の北西側は、木根により一部壊されている。

平面形は長楕円形で、規模は122×88cmを測る。検出面からの深さは最大19cmである。周壁は底

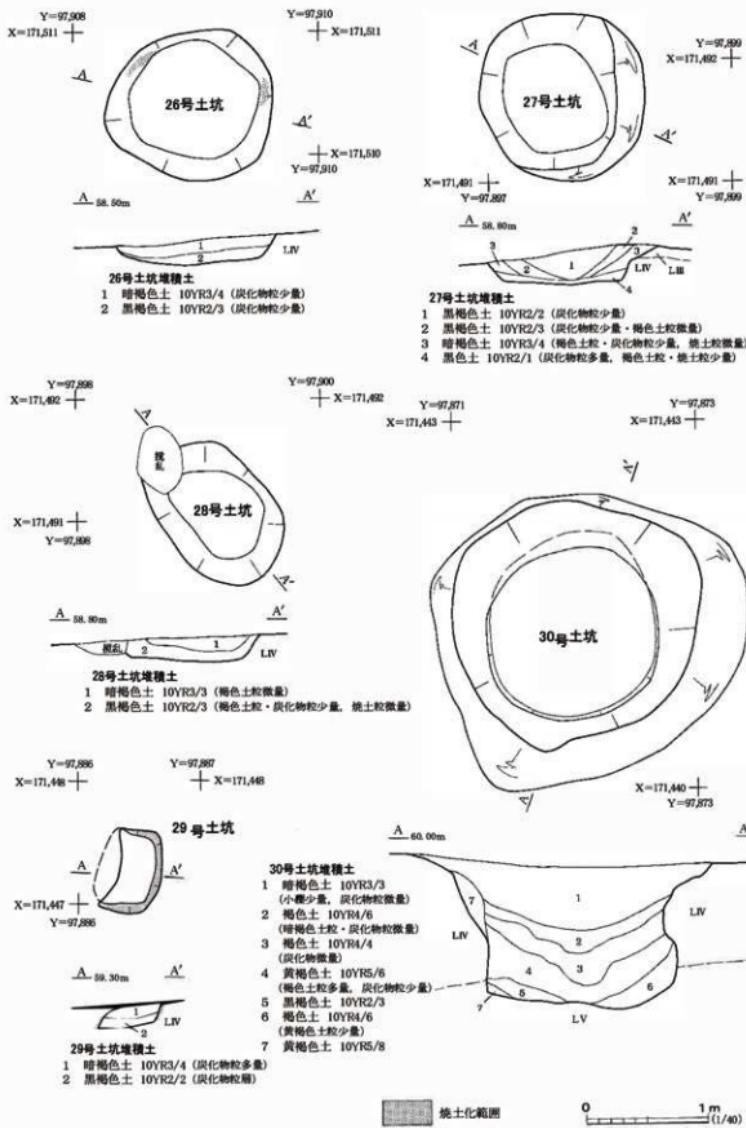


図19 26~30号土坑

面から急な角度で立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片4点、石器1点が出土し、そのうち縄文土器と石器を各1点ずつ図示した。図23-14は口縁部破片で、外面は条痕地文上に半截竹管の凹面で2本同時施文により文様が描かれている。内面には条痕が施され、口縁部上端にのみ縄文が施されている。図24-9は搔器である。縦長剥片の先端部と側面部に刃部を形成し、側縁部刃部の作り出しを両面から行っている。

本遺構の性格は不明である。時期は、出土遺物から縄文時代早中期とを考えられる。(國井)

29号土坑 S K29 (図19, 写真15)

本遺構はC10グリッドに位置する土坑である。調査区中央部の平坦面に立地する。重複する遺構はないが、西側に1・2号道跡が近接する。検出面はLIV上面で、焼土化範囲内の暗褐色土の長方形として確認した。

平面形は主軸が南北方向を示す長方形である。規模は70×57cmである。検出面から底面までの深さは、22cmを測る。東南北壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁は底面から検出面にかけて大きくオーバーハングして立ち上がる。西壁は近接する後世の倒木痕より、地山が持ち上げられて大きく抉れた現在の状態になったと想定している。壁面は全周壁において、よく焼けている。焼土化範囲の厚さは1cmである。底面はおおむね平坦に造られているが、中央部がわずかに窪む。

堆積土は2層に分層した。①は炭化物を多量に含んだ暗褐色土で流入土である。②は炭化物層である。出土遺物は認められなかった。

本土坑は焼土化範囲と炭化物層が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。(三浦)

30号土坑 S K30 (図19, 写真15)

本遺構はB10グリッドに位置する。調査区中央部西側の平坦面に立地する。本遺構に重複する遺構ではなく、東側4mに1・2号道跡が位置する。検出面はLIV上面で、ばんやりした暗褐色土の円形として確認した。

平面形は直径2mの円形である。検出面から底面までの深さは、約1.1mを測る。東西南壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北壁は底面から壁面中程までオーバーハングしながら立ち上がり、垂直に立ち上がりながら検出面に至る。底面は丸みを帯びながら壁面に至る。LVの礫層まで掘り込んで、底面としている。

堆積土は7層に区分した。土層観察により、レンズ状や三角堆積が認められることからすべて自然堆積であると判断した。①は暗褐色土を主体とした最上層に認められる流入土である。②・③は褐色土を主体とした流入土である。④はLIVを基調とする黄褐色土であり、壁面崩落土及び流入土である。⑤は当時の表土であるLIII由来の流入土である。⑥・⑦は壁面崩落土及び流入

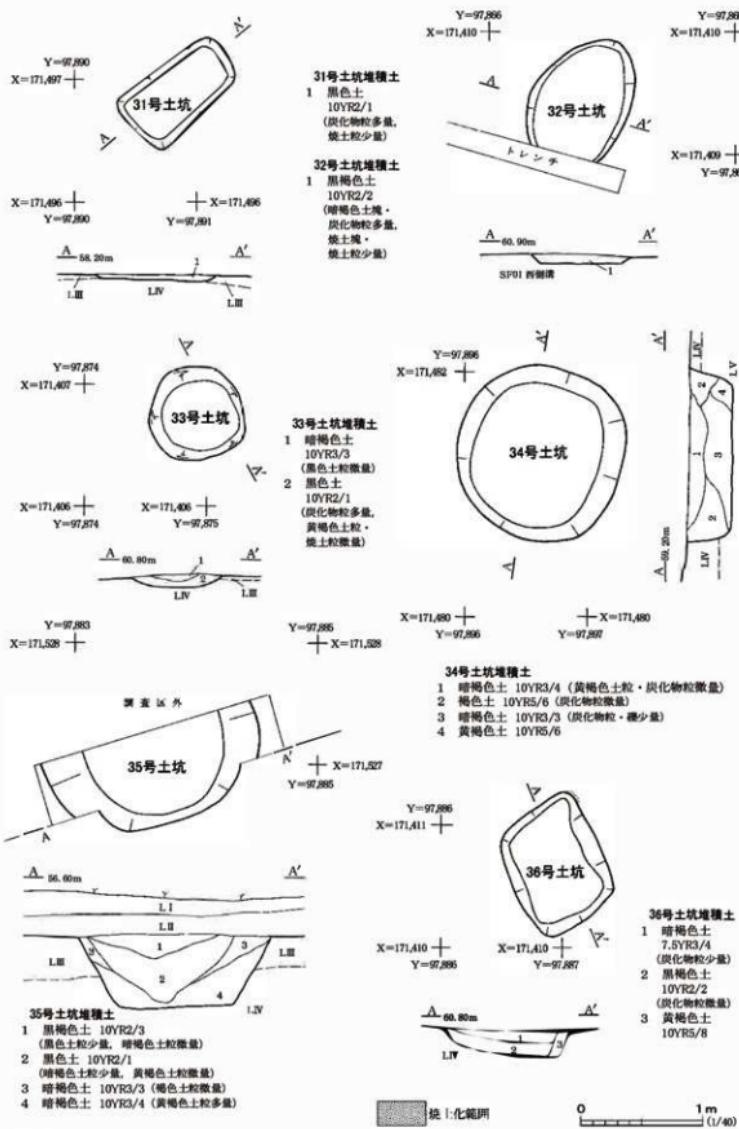


図20 31～36号土坑

土である。堆積土中から出土遺物はなかった。

本土坑は平面形が円形で、断面形がフラスコ状に底面が抉れた形状の土坑である。出土遺物はなかったが、形態より讃文時代の貯蔵穴と判断している。

(三) 池

31号土坑 S K31 (図20, 写真16)

本遺構は、調査区北側のB5グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIである。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN48°Eを示す。規模は95×54cmを測り、検出面からの深さは最大5cmである。周壁は底面から全体的に緩やかに立ち上がり、底面は水平である。堆積土は単層で、底面直上には炭化物が、壁際には焼土粒が認められた。遺物は出土していない。

本遺構は、底面上に炭化物を多く含むことから木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

(國 井)

32号土坑 S K32 (図20, 写真16)

本遺構は、調査区南側のA14グリッドに位置する。遺構検出面は1号道路西側溝上面である。そのため、本遺構は1号道路と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は梢円形と推測され、主軸方位はN25°Eを示す。規模は100×80cmを測り、検出面からの深さは最大7cmである。周壁は底面から比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は単層で、底面直上には炭化物粒が、壁際には焼土粒が認められた。遺物は出土していない。

本遺構は、底面上に炭化物粒を多く含むことから木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明であるが、重複する1号道路西側溝の埋没以降に構築されている。

(國 井)

33号土坑 S K33 (図20, 写真16)

本遺構は、調査区南側のB14グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIである。平面形は円形を呈し、規模は直径77cmを測る。検出面からの深さは最大9cmである。周壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。底面直上には炭化物粒が認められた。遺物は出土していない。

本遺構は、底面上に炭化物粒を多く含むことから木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明である。なお、出土炭化物の放射性炭素年代測定では7世紀後半～8世紀後半の結果が得られた。

(國 井)

34号土坑 S K34 (図20, 写真16)

本遺構は、調査区北側のB6グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は4層に細分し、堆積状況から流入や壁崩落の様相が認められることから自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径140cmを測る。検出面からの深さは最大37cmである。周壁は底面か

第1編 広谷地遺跡

ら直立気味に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

遺物は縄文土器片5点、石器1点が出土しているが、図示していない。縄文土器は、いずれも外面に条痕文が施されている。

本土坑は、その形状から貯蔵穴と考えている。所属時期は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

35号土坑 S K35 (図20、写真16)

本遺構は、調査区北側のC2グリッドに位置する。調査区境で検出され、LIII上面から掘り込まれていることが確認された。平面形は円形もしくは楕円形と推測され、規模は180×70cmを測る。検出面からの深さは最大56cmである。周壁は底面から急な角度で立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は4層に細分し、レンズ状堆積を示すことから自然堆積と判断した。

本遺構は、調査区外に延びるため半分ほどが確認されている。詳細な時期は不明であるが、掘込面から判断して縄文時代のものと考えている。

(國 井)

36号土坑 S K36 (図20、写真16)

本遺構は、調査区南よりのC13グリッドに位置する。周辺の地形は平坦である。遺構検出面はLIV上面で、暗褐色土の広がりとして検出した。約1m東に18号土坑が近接して存在する。

平面形は長方形で、主軸方向はN25°Wである。規模は107×80cmで、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。底面は不整な長方形で、規模は約1×約2cmを測る。南底面が深く、北へ向かって緩やかに浅くなる。底面はやや丸みを帯びる。壁面は急角度で立ち上がる。北東隅の壁面に焼土化範囲がわずかに確認できる。焼土化した壁の厚さは、2cm程度である。遺構内堆積土は3層確認した。①・②は炭化物を含む流入土、③は壁面崩落土であろう。

本土坑は焼土化範囲が認められることから、木炭焼成土坑と判断した。堆積土中から遺物の出土はなく、年代は不明である。

(宮 田)

37号土坑 S K37 (図21、写真16)

本土坑はE12グリッドに位置し、調査区中央部の東端に立地する。調査区内の未調査地区壁に、炭化物粒を含んだ褐色土の落ち込みとして確認した。調査区壁において断面図を作成した後、調査区外を一部拡張し平面形を確認した。掘り込み面はLIII上面である。重複する遺構はないが、北7mに3号住居跡が位置する。

平面形は主軸方位を南北方向に示す隅丸長方形である。規模は約1×65cmである。壁面において確認した掘込面から底面までの深さは、40cmである。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は1層のみ確認した。土質から自然堆積と判断した。

出土遺物はなく、本土坑の時期や機能は特定できなかった。

(三 湖)

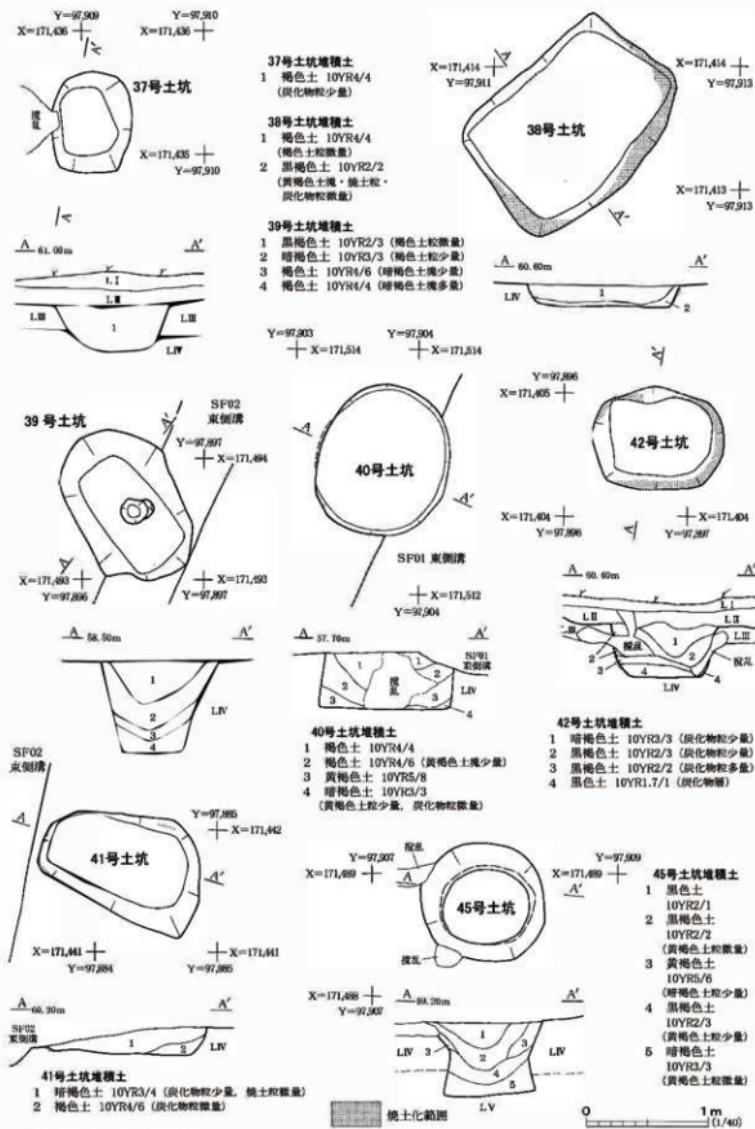


图21 37~42·45号土坑

38号土坑 S K38 (図21・24, 写真16)

本土坑はF13グリッドに位置する。調査区南よりの東端に立地し、北側10mに37号土坑が位置する。検出面はLIV上面で、「コ」の字形に検出された焼土化範囲と褐色土の広がりとして認めた。

平面形は長方形である。主軸方位はN46° Eである。規模は175×127cmである。検出面から底面までの深さは、16cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。南北東壁に焼土化範囲が認められる。焼土化した壁の厚さは1cm程度である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は2層に区分した。①は土質や土色の様子から自然堆積と判断した。②は黄褐色土塊や焼土粒を微量含む炭化物層である。

出土遺物は土師器片40点が、散在して出土した。残りの良い資料3点を図示した。図24-4～6はロクロ成形の杯である。4は底部が欠損しているが、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。内面は黒色処理を施している。5・6は底部資料である。5は回転糸切り後、回転ヘラケズリにより再調整を行っている。底部中央にわずかに回転糸切り痕が観察できる。6の底部には再調整後の回転ヘラケズリ痕のみが観察できる。

本土坑は、今回、調査を行った広谷地遺跡内において最も大型の木炭焼成土坑である。時期は出土遺物の特徴から、9世紀前半以降と推測している。

(三 湖)

39号土坑 S K39 (図21, 写真17)

調査区北側のD5グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構の東側の上部が2号道路東側溝に埋されているため、本遺構の方が古い。

平面形は不整な長楕円形を呈し、主軸方向はN35° Wである。規模は133×90cmを測り、検出面からの深さは最大76cmである。底面の平面形は長方形を呈し、規模は97×53cmを測る。周壁は底面から垂直気味に立ち上がり、上半部では下半部に比べて立ち上がりが緩くなる。底面は平坦で、中央部には直径20cm、深さ22cmのピットが認められる。堆積土は4層に細分し、レンズ状の堆積を示す自然堆積と判断した。③・④は壁の崩落土と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構は、底面にピットをもつ落し穴状土坑である。時期は堆積土の特徴から縄文時代と考えられる。

(国 井)

40号土坑 S K40 (図21・23, 写真17・29)

本遺構は、調査区北側のE3グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構の東側の上部が1号道路東側溝に埋されているため、本遺構の方が古い。遺構内堆積土は4層に細分し、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は楕円形を呈し、規模は122×100cmを測る。検出面からの深さは最大46cmである。周壁は、西壁でわずかにオーバーハングするが、それ以外は直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は、縄文土器片5点、石器1点が出土している。そのうち縄文土器1点を図示した。図23-15は縄文時代早期末葉の破片で、外面の上部に条痕地文、地文に縄文が施され、上部には半截竹管の凹面で文様が描かれた後に、地文境に円形状の刺突が施されている。また、内面には条痕が施されている。

本遺構は、形状から貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

41号土坑 SK41 (図21、写真17)

本土坑は、C10グリッドに位置する。調査区ほぼ中央の平坦面に立地する。重複する遺構はないが、西に近接して1・2号道跡が南北に延びている。炭化物を含んだ暗褐色土の不整橢円形として認識した。検出面はLⅣである。

平面形は東側が膨らむ橢円形である。主軸方位はN73°Wである。規模は136×89cmである。検出面から底面までの深さは26cmを測る。壁面の遺存状況が悪いが、壁面はほぼ垂直に立ち上がるようである。西壁と北壁の一部に焼土化範囲が認められる。焼土化した壁の厚さは1cm程度である。底面は平坦に造られている。

堆積土は2層確認した。土質や三角堆積が認められることから、自然堆積と判断した。出土遺物はなかった。

本土坑は焼土化範囲が認められることから、木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

(三浦)

42号土坑 SK42 (図21、写真17)

本土坑はD14グリッドに位置する。調査区中央南端の平坦面に立地する。調査区境の断面に、焼土化した壁と炭化物粒を含んだ黒褐色土の落ち込みを確認した。調査区壁において断面図を作成した後、未調査地区の一部を拡張し平面形を確認した。遺構の掘込面はLⅢ上面である。重複する遺構はないが、北西7mに18号土坑が位置する。

平面形は東西方向に主軸をもつ隅丸長方形である。規模は118×60cmである。遺構掘り込み面から底面までの深さは、40cmを測る。搅乱が認められ壁面の状況は悪いが、底面から丸みを帯びながら立ち上がるようである。南北東壁に焼土化範囲が認められる。焼土化した壁の厚さは2cm程度である。底面は平坦に造られている。

堆積土は4層に区分した。L1～3は、炭化物を含んだ暗褐色土及び黒褐色土を主体とした層で、レンズ状堆積であることから自然堆積と判断した。L4は炭化物層である。出土遺物はなかった。

本土坑は焼土化した壁面が認められ、底面上に炭化物層が堆積していることから、木炭焼成土坑である。出土遺物はなく、詳細な時期は特定できない。なお、出土炭化物の放射性炭素年代測定では、7世紀中頃～8世紀後半の結果が得られた。

(三浦)

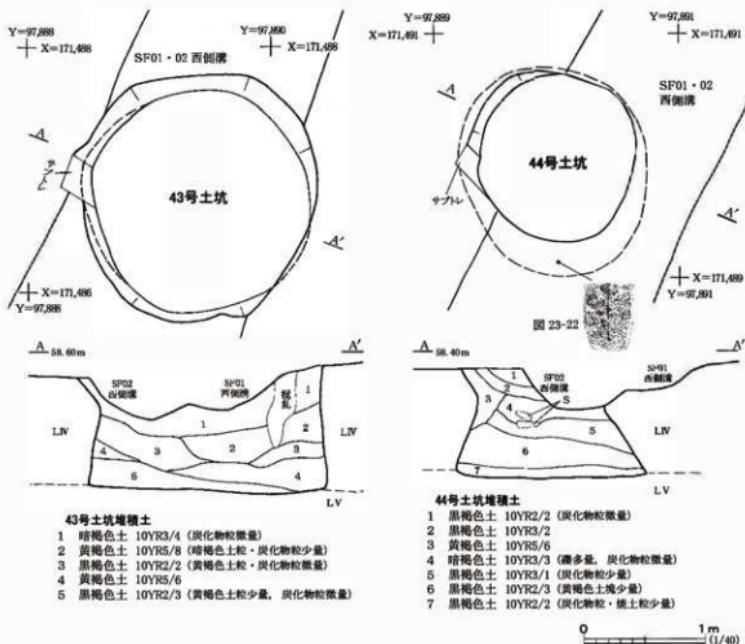


図22 43・44号土坑

43号土坑 S K43 (図22・23, 写真17・29)

本遺構は、調査区北側のC・D 6 グリッドに位置する。遺構検出面はLV上面である。遺構の上部が1・2号道跡の西側溝に壊されているため、本遺構の方が古い。遺構内堆積土は5層に細分し、レンズ状の堆積を示すことからおおむね自然堆積と判断した。

開口部の平面形は円形を呈し、規模は直径210cmを測る。検出面から底面までの深さは、最大102cmである。周壁は、西壁と東壁で僅かにオーバーハンプグしているが、それ以外は底面から直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。遺構の掘り込みは、LVの礫層上面で止めている。

遺物は繩文土器片2点が出土している。いずれも胎土に植物纖維が混和されている。そのうち、1点を示した。図23-16は繩文時代早期末葉の破片で、外側には条痕と繩文が、内側には条痕が施されている。

本遺構は、大型の土坑で形状から貯藏穴と考えている。年代は、出土遺物から繩文時代早期末葉と推定される。

(國井)

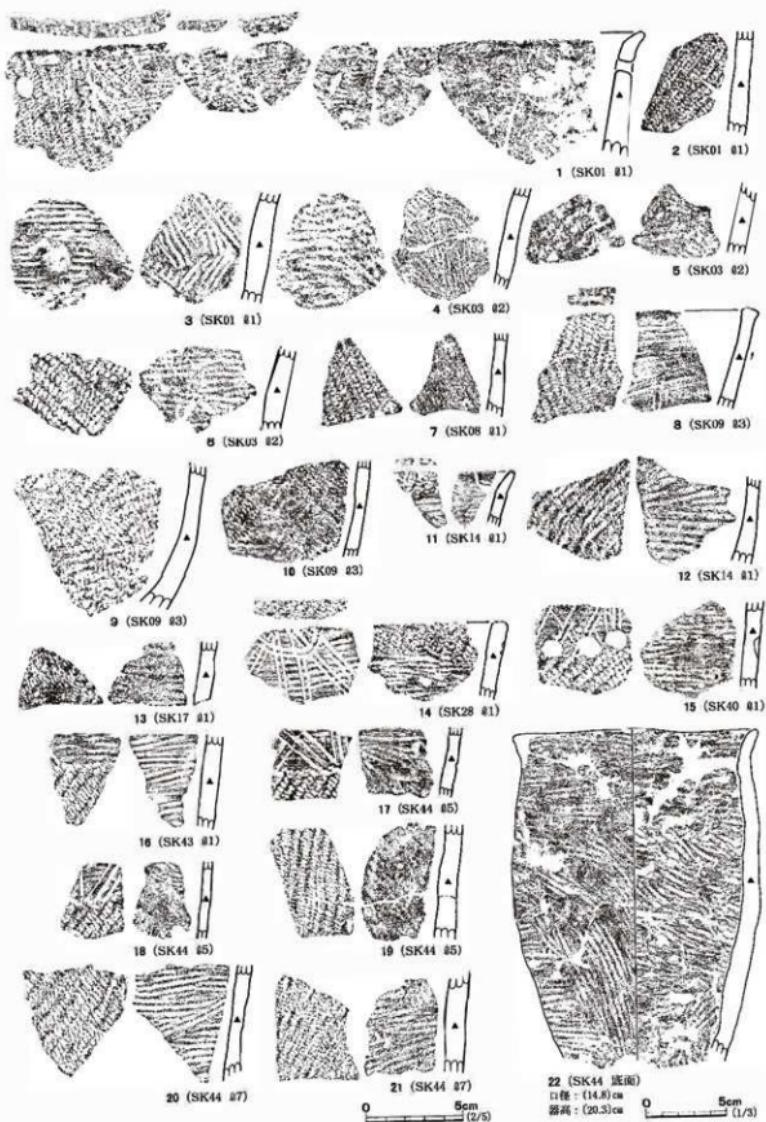


図23 土坑出土遺物(1)

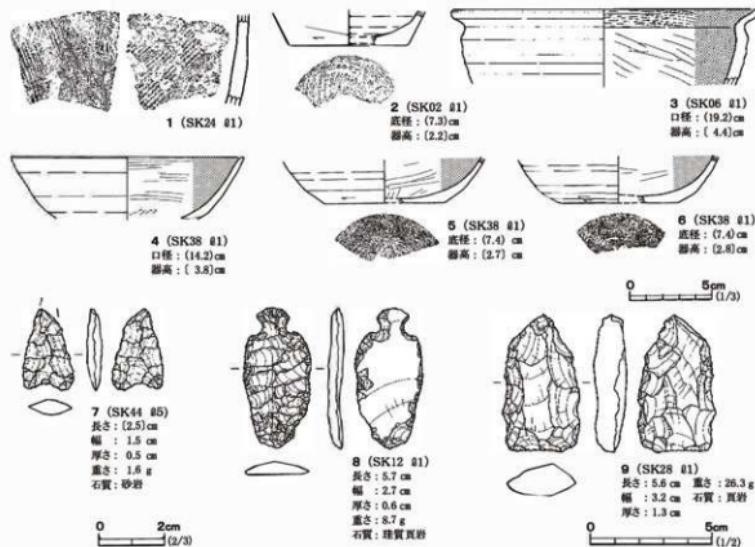


図24 土坑出土遺物(2)

44号土坑 SK44 (図22~24, 写真18・29・30)

本遺構は、調査区北側のC・Dグリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。本遺構の上部が1・2号道跡の西側溝に壊されているため、本遺構の方が古い。遺構内堆積土は7層に細分した。そのうち、ℓ4には手のひら大の円礫が多量に投げ込まれ、ℓ7は水平堆積を示している。ℓ4・7以外はレンズ状の堆積を示す。このことからℓ4・7以外は自然堆積と判断した。

平面形は円形を呈し、規模は直径210cmを測る。検出面からの深さは、最大95cmである。底面の平面形は楕円形を呈し、規模は175×150cmを測る。そのため、周壁は底面から壁上部にかけてオーバーハングし、上端部にかけて外傾気味に立ち上がる。底面は平坦で、LV上面まで掘り込んでいる。南壁際からは図23-22に示した縄文土器が底面上に伏せられた状態で出土した。

遺物は縄文土器片35点、石器1点が出土している。このうち、縄文土器6点と石器を図示した。図23-22のみが本遺構に伴うものと考えられる。

図23-17・18は薄手の土器で、条痕地文と縄文地文の境には2段の縄圧痕が施され、条痕地文上に半截竹管の凹面で2本同時施文により文様が描かれている。同一個体と考えられる。19~21は、外面に縄文、内面に条痕文が施されている。22は、底部と口縁部の一部を欠いたもので、胸部がやや膨らみ口縁部が外反する器形を呈する。内外面ともに条痕文が施されている。

図24-7は先端部が欠損する石鏽で、基部が凹基となる。器体を整えるために、側縁部と基部に

両面から比較的細かい調整剥離を加えている。

本遺構は形状から大型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。
(國井)

45号土坑 S K45 (図21, 写真18)

本遺構は、調査区北側のE 6 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の北西側の一部が木根により壊されている。遺構内堆積土は5層に細分し、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は長径100cmを測る。検出面から底面までの深さは最大60cmである。周壁は、底面から中位までオーバーハングしているが、壁上半は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は、胎土に植物繊維を混和した縄文土器片1点が出土している。

本遺構は形状から小型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。
(國井)

第4節 焼土遺構

本節は、小穴など住居内に付随した関連遺構が認められない、屋外炉と判断できる焼土化範囲を焼土遺構としてまとめた。3基の焼土遺構が該当する。主に調査区北半に認められ、縄文土器片の分布域に重なる。遺物が出土しないため焼土遺構の時期は不明であるが、縄文時代に機能した遺構であると推測している。

1号焼土遺構 S G01 (図25, 写真19)

本遺構は調査区西側のB 6 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構は標高58.4mの地点に構築されていた。北西側に2・15号土坑が位置する。

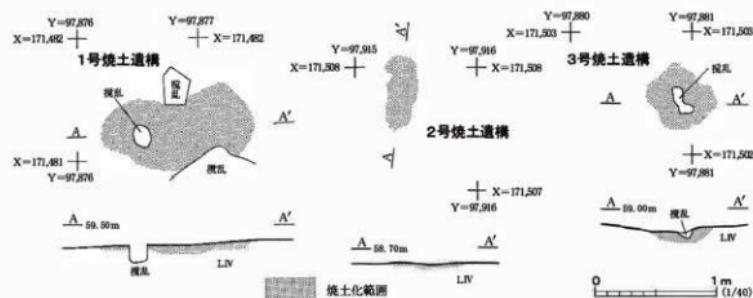


図25 1～3号焼土遺構

第1編 広谷地遺跡

平面形は東西方向に長い楕円形である。一部は搅乱により壊されている。規模は125×56cmを測る。焼土化範囲は、最も厚い部分で8cmを測る。焼土化が及んだ内部には石など認められなかった。遺物は出土していない。

本遺構は、最軸が1.2mを超える焼土遺構である。焼土が厚いことから、長期間にわたり強い火力を用いていたと想定できる。出土遺物がなく時期については不明である。縄文時代早期後半の堅穴住居跡が近接することや周囲から縄文土器が出土することなどから、縄文時代に属する屋外炉の可能性も考えられる。

(菅野)

2号焼土遺構 SG02(図25, 写真15)

本遺構は調査区北側のF4グリッドに位置する。ほぼ平坦な地形に立地する。遺構検出面はLIV上面である。試掘調査時において、確認された遺構である。重複する遺構ではなく、北東2.5mに25号土坑が位置する。

平面形は南北に長い不整な楕円形である。規模は61×27cmを測る。焼土の厚さは4cmである。周囲の精査を行い関連する小穴の検出を試みたが、小穴は認められなかった。

遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

(三浦)

3号焼土遺構 SG03(図25, 写真15)

本遺構は、調査区北側のC4グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。焼土化範囲は不整円形を呈し、直径50cmにわたって暗赤褐色に焼けている。その厚さは最大20cmまで達する。表面はかなり硬く焼き綺まっている。その周囲には、若干であるが炭化物粒が認められる。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國井)

第5節 道跡

1号道跡 SF01

遺構(図26・28, 写真20~22)

本遺構は、調査区を直線状に縱走するため広範囲にわたって確認された。道跡の全容については、北側が川房川による崩落のため失われている。南側は調査区外に延びている。32・39・40・43・44号土坑、2号道跡と重複しており、39・40・43・44号土坑、2号道跡より新しく、時期不明の32号土坑より古い。特に、本遺構は2号道跡の上に重なるように確認された。道跡は、調査区北側の断面より、LII上面から掘り込まれている。道跡の現況は、C・D6グリッドから北側が溝状の窪地として確認され、北端部では切り通し状の地形として捉えられていた。

遺構は、幅の異なる溝跡2本が並行する状態で確認され、溝と溝の間の一部に踏み綺まりが認められることから道跡と判断した。遺構の名称については、西側の溝跡を西側溝、東側の溝跡を東側

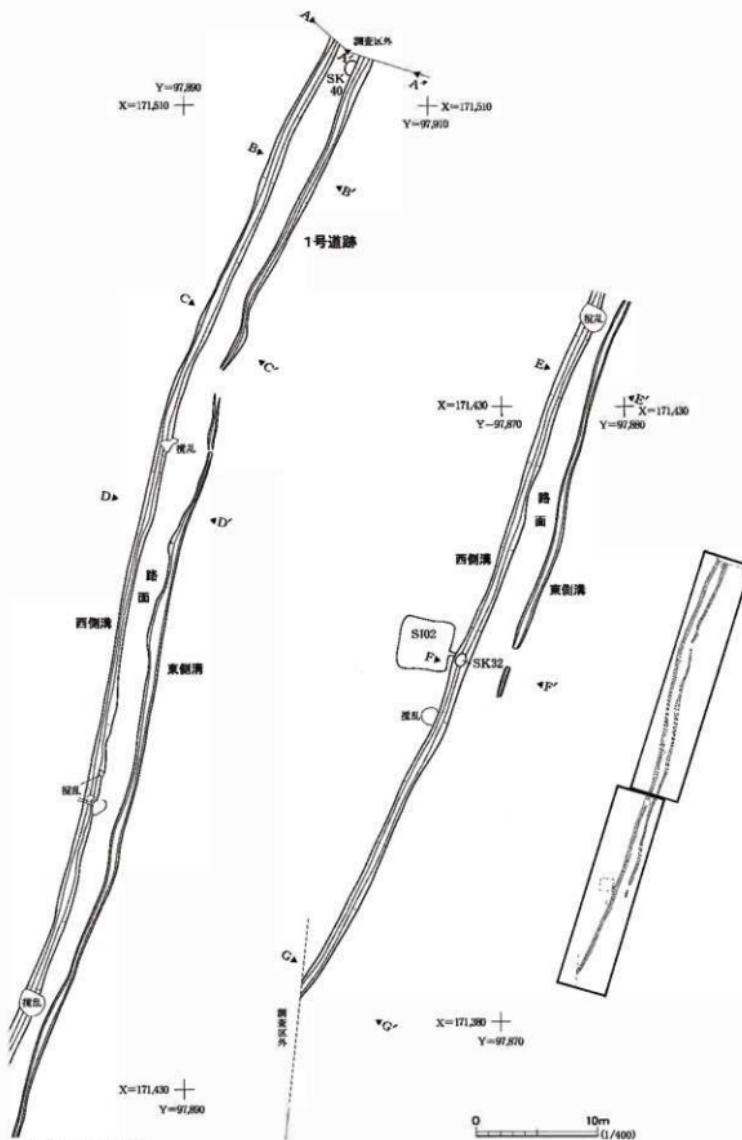


図26 1号道路

第1編 広谷地遺跡

溝、溝と溝の間を路面として記述する。また、路面と側溝底面の硬化範囲は、網点で示した。

道跡はおむね直線的に伸びているが、C・D 6, B・C 10, B 12グリッドの3地点でわずかなずれが認められる。このため、道跡の主軸方向はN 11°~24° Eの範囲で傾く。路面は、調査区北端と南西端の断面のみで路面上の硬化範囲として確認されている。このため、路面のほとんどは、検出の際に壊したものと考えられ、本来の状態ではない。

道跡の規模は、最長153.6mを測る。路面幅は、両側溝の内側上端で1.2~3.4mを測り、幅にばらつきが見られる。側溝は、西側溝が幅40~66cm、深さ6~35cm、東側溝が幅20~58cm、深さ2~29cmを測る。西側溝は、全体的に幅50cm、深さ30cmとほぼ一定しているが、南側に向かって側溝は浅くなる。東側溝は幅がおむね30cmで、深さは北端部のみが深く、それ以外は10cm以下と非常に浅くなる。そのため、東側溝はB 14・D 6グリッドで途切れてしまい、B 14グリッド以南では側溝が確認されない。西側溝は東側溝に比べ幅が広く、深く掘り込まれている。この他、西側溝の底面では部分的に踏み締まりが確認された。

側溝の堆積土は、両側溝とともに4層に細分され、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。堆積土の上部には、L IIに近似する土層が認められる。この他、調査区北側の西側溝底面上には、小礫と砂が堆積した部分（写真図版20・22）が認められた。

遺物（図25、写真30）

遺物は縄文土器片4点、土師器片35点、鉄製品1点が出土している。そのうち、縄文土器2点と土師器3点を図示した。いずれも、本遺構に伴うものではない。

図25-1・2は胎土に植物纖維を混和する縄文土器で、条痕地文と縄文地文に分けられ、条痕地文上に半截竹管の凹面で文様を描いた後、地文境に円形状の刺突が施されている。これらは同一個体と考えられ、また40号土坑から出土した図23-15の縄文土器も同一個体と考えている。

同図3~5はロクロ成形による土師器の底部片で、器種は3が甕、4・5が杯である。4・5の内面にはヘラミガキ後に黒色処理を施している。底部の切り離しは、5が回転糸切りであるが、4は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。

まとめ

本遺構は、両側に側溝を伴う直線的な道跡である。2号道跡の両側溝が埋め戻されてから、本遺構が構築されるまでに時間差は認められなかった。また、本遺構が2号道跡とほぼ一致するように重なることから、本遺構は2号道跡が新しく造り替えられたものと考えている。出土遺物では、9世紀代の土師器が最も新しい。この他、明治17年に作成した地籍図には、本遺構に一致する道跡が記されていない。遺構の時期は、9世紀後半から明治17年以前の範囲で考えたい。（国井）

2号道跡 S F#2

遺構（図27・28、写真20~22）

本遺構は、調査区を直線状に横走するため広範囲に渡って確認されている。2号住居跡、43・44

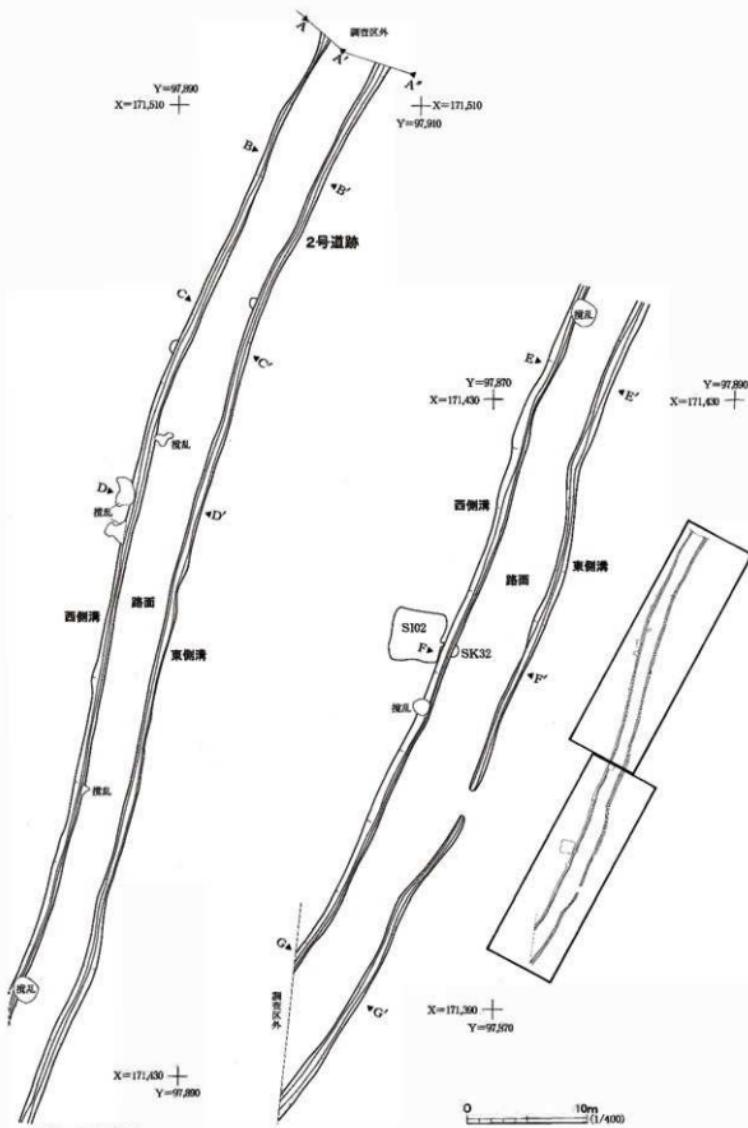
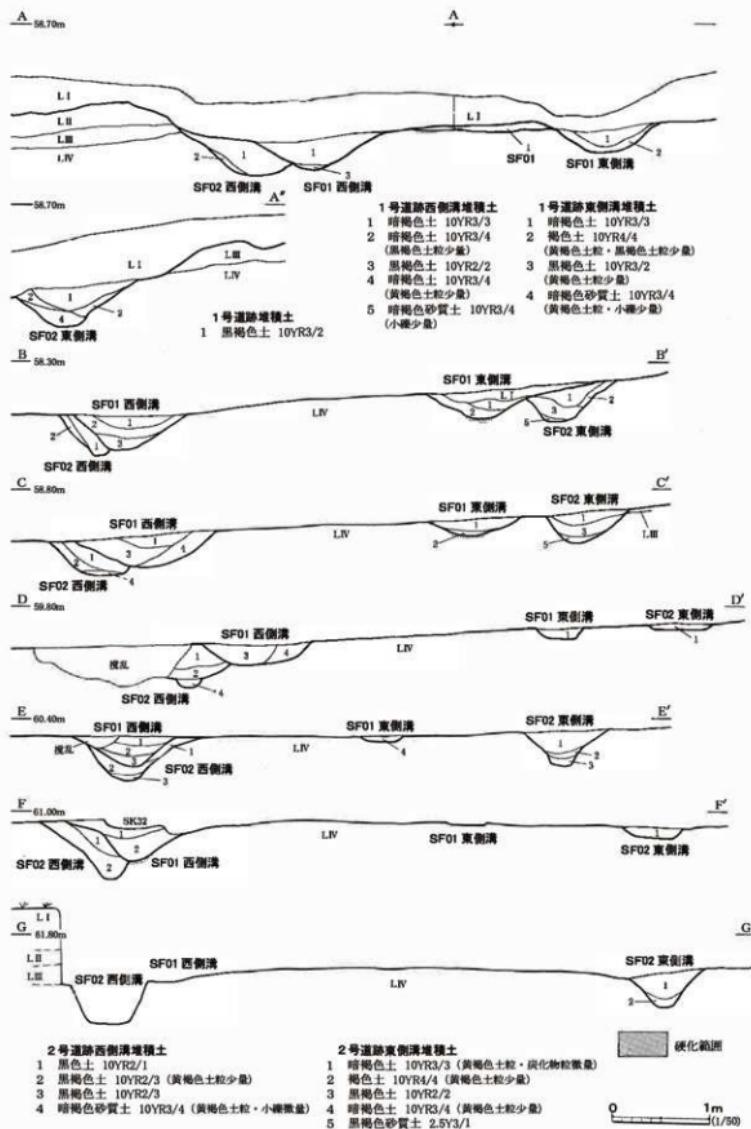


図27 2号道路



号土坑、1号道跡と重複しており、43・44号土坑より新しく、1号道跡より古い。本遺構は、1号道跡と重なるように確認される。

本遺構を判断した理由や各部の呼称については、1号道跡に記載したとおりである。路面は、調査区北端と南西端の断面で確認されている。

道跡の規模は、1号道跡と同様に最長153.6mを測る。道跡の主軸方向はN 11°~24° Eの範囲で傾いている。道幅は、両側溝の内側上端で3.4~5.7mを測る。側溝は西側溝が幅35~65cm、深さ39~64cm、東側溝が幅20~67cm、深さ6~46cmを測る。西側溝は、東壁上半部が1号道跡に壊されているため遺存幅で示したが、深さは45~50cmと安定している。これに対し、東側溝は調査区北端と南端を除けば10cm前後と浅くなり、A14グリッドでは側溝が途切れる。

側溝の堆積土は、西側溝で4層、東側溝で5層に細分された。おおむねレンズ状の堆積を示すものの、両側溝とも部分的にLIV塊が含まれることから、人為的に堆積したものと考えられる。

遺 物 (図29, 写真30)

遺物は縄文土器片9点、土師器片82点、石器2点、鉄製品1点が出土している。土師器の多くは、C 6・7、D 5グリッドの西側溝から出土しており、中には底面から出土したものもある。これらの土師器の時期は9世紀代である。出土遺物の中で最も新しいものである。

図29-6・7は縄文土器である。縄文時代後期のものと考えられる。同図8は須恵器壺の胴部破

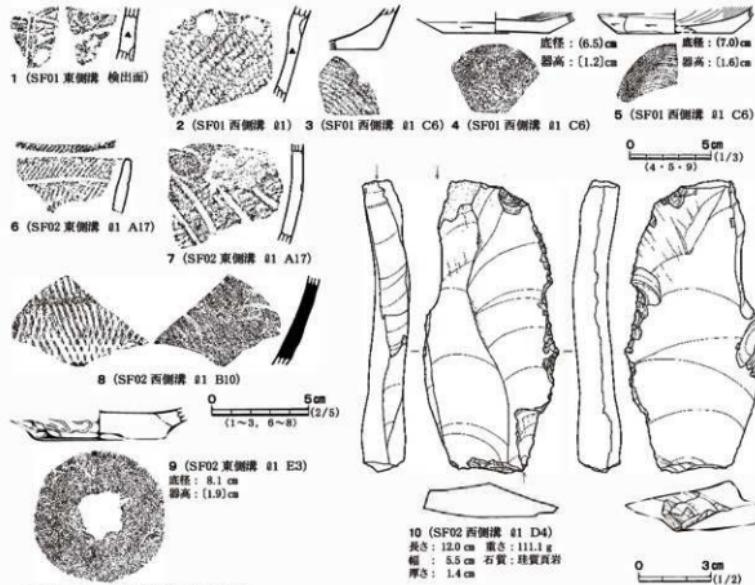


図29 1・2号道跡出土遺物

片と考えられ、外面にタタキ目が認められる。同図9は非クロロ成形の土師器壺の底部である。底部外面の中央には円形状の窪みが認められ、器面の特徴から古墳時代のものと考えられる。同図10は旧石器の彫刻刀形石器である。この出土地点については、図33に示した。この周辺では、遺構外から旧石器が2点出土している。石刀の左側縁上端部と右側縁下端部に壘状の剥離が認められ、左側縁上部の彫刻刃部には打面調整が認められない。

まとめ

本遺構は、両側に側溝を伴う直線的な道跡である。両側溝が埋め戻され、本遺構廃絶後から1号道跡が構築されるまでに時間差は認められない。このため、本遺構は1号道跡に造り替えられる以前の道跡と考えている。遺構の構築年代は、重複する2号住居跡や地籍図等から判断して9世紀後半から明治17年以前の範囲で考えたい。

(國井)

第6節 特殊遺構

住居跡や土坑など既存の遺構の範囲に含むことが困難な遺構を特殊遺構と称して、以下に報告する。本調査からは2基の特殊遺構を検出した。いずれも地面を掘り窪める豊穴状の遺構である。1号特殊遺構は住居内施設が認められないことや底面の起伏が激しいことなど、住居跡とは認定し得なかった遺構である。2号特殊遺構は、小型の豊穴状の遺構から7mを超える溝が伸びている遺構である。

1号特殊遺構 S X 01 (図30、写真23・30)

本遺構は調査区の西部、A 7グリッドに位置する。検出面はL IV上面である。本遺構の堆積土は黒味が強く、検出面のL IV層との識別は比較的容易であった。検出された場所は平坦であるが、南から北に向かって緩やかに下る。本遺構の周辺は遺構が多く分布している。南東方約1.5mには5号土坑、南西方4mには6号土坑、北方約1mには17号土坑がある。

遺構内堆積土は2層認められた。L 1は黒色土で、L 2は暗褐色土であった。いずれの層にも微量の炭化物粒が含まれていた。層境は不自然であり、人為堆積の可能性も考えられる。

平面形は不整形で、円形もしくは北西-南東方向に長い楕円形を基調とする。規模は4.0m×3.2mである。底面は凹凸が多く、L Vに含まれる礫が部分的に露出している。底面に小穴や炉は認められなかった。壁は比較的急な角度で立ち上がるものの、西壁の一部は緩やかに立ち上がる。壁の高さは、最も残りの良い部分で床面から17cmである。

本遺構からは縄文土器片258点が出土した。L 1・2から多く出土し、主に遺構の中央からやや北よりで集中して出土した。すべての土器片の胎土には、織維混和痕が認められた。このうち図30に4点を図示した。

図30-1は、口縁部から胴部上半にかけての深鉢である。外面は、口縁部文様帯と胴部文様帯の

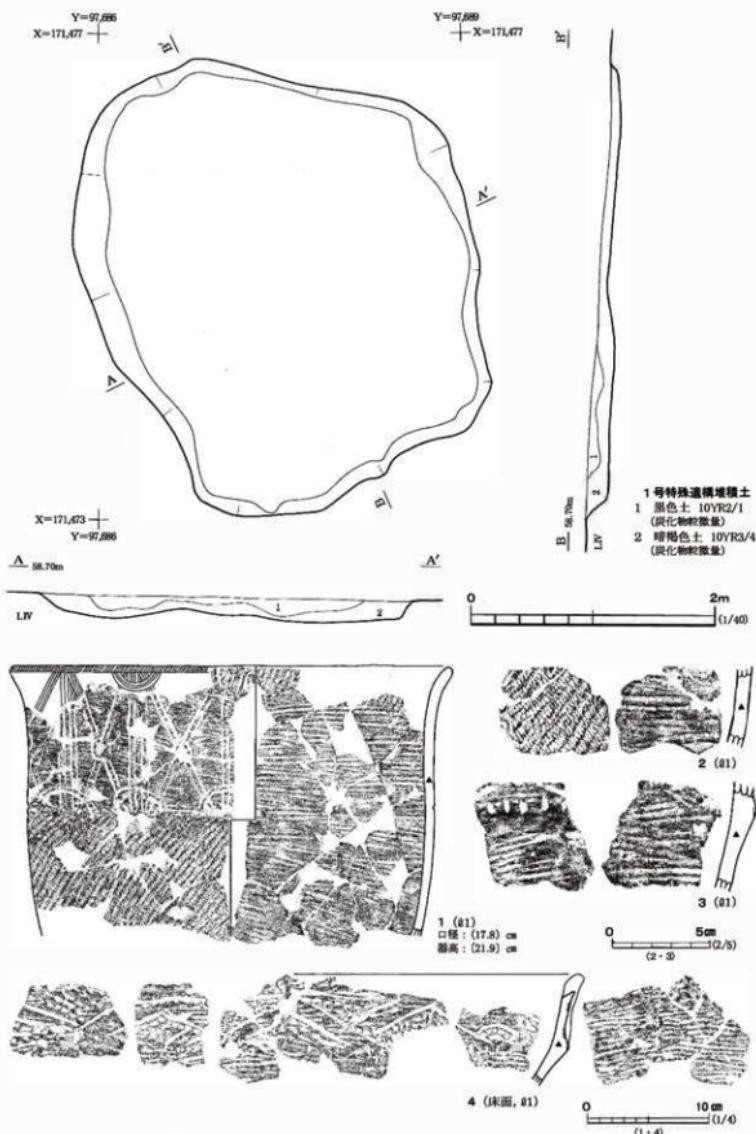


圖30 1號特殊遺構・出土遺物

2段構成となっている。口縁部文様帶は、横位の条痕地文上に半截竹管による平行沈線で半円状や「X」字状の文様を描いている。「X」字状の沈線の交点には、平行沈線による円文が施されている。胴部文様帶は斜纏文が施される。口唇部から内面の口端部にかけて、幅3cmほどの横走纏文が施されている。その下の内面は横位の条痕が施されている。2は胴部資料である。色調や胎土の特徴から1と同一個体と考えられる。

3・4は表裏条痕文土器である。胎土や色調などの特徴がよく似ているため、同一個体と思われる。口縁部から胴部上半にかけての資料である。器形は深鉢と推定できる。胴部下半から屈曲部にかけて外反して立ち上がり、胴部に認められる屈曲ではほぼ直立し口縁部に達する。胴部に有する屈曲で、口縁部から屈曲までの口縁部文様帶と屈曲以下の胴部文様帶に分かれる。口唇部に突起をもち、突起が付く口縁部から胴部の屈曲に垂下する隆帯も確認できる。口唇部は面取りされ、内面側に傾斜している。口縁部文様帶内には沈線により三角形や菱型のモチーフを描いている。モチーフ内を棒状の工具による斜位刻突により、充填している。屈曲部には棒状の工具による縦位の刻みが施されている。内面には横位の条痕が施されている。

本遺構は平面形が不整であり底面の凹凸が激しいこと、柱穴や炉などが認められないことから住居跡ではなく特殊遺構とした。また住居を構築しようとして、途中で掘削を放棄した可能性も考えられる。遺物は1・2の縄文時代早期末葉と3・4の同前期後葉の二時期の土器片がまとまって出土しているのが特徴的である。本遺構の時期は新しい土器の年代観から、縄文時代早期末葉と考えられる。

(青山)

2号特殊遺構 S X02 (図31・32、写真23・31)

本遺構は、調査区東部のF10・11グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。検出された場所は平坦である。近接して南に3号住居跡が位置する。当初は住居跡として掘り込みを開始したが、遺構の南側に溝が取り付くことが確認された。これらについては、重複関係が認められないことから、同一の遺構と判断した。

堅穴部分の遺構内堆積土は3層認められた。壁際の三角堆積とレンズ状堆積が確認できることから、自然堆積と考えられる。①は黒褐色土、②は暗褐色土である。③はやや明度の高い暗褐色土で、壁際に三角形に堆積していたことから、壁の崩落土を多く含んでいるものと思われる。各層には炭化物粒と焼土粒を少量含み、②・③には塊状の炭化物と焼土が部分的に含まれていた。溝内には褐色土の小塊を少量含んだ暗褐色土が堆積していた。

平面形は、方形の堅穴状の部分と南側に取り付く長い溝の部分に大別できる。堅穴部分の平面形は方形である。規模は南北2.3m、東西2.6mで、東西方向がやや長い。検出面から底面までの高さは20cmである。壁は急な角度で立ち上がる。底面は平坦に造られている。

溝は先端が丸く納まり、両側縁を平行させながら直線的に延び、堅穴部分と接続する部分で「ハ」の字状に急激に幅を広げる。溝は北から約30°西に振れ、堅穴部分の向きとは若干のズレがある。

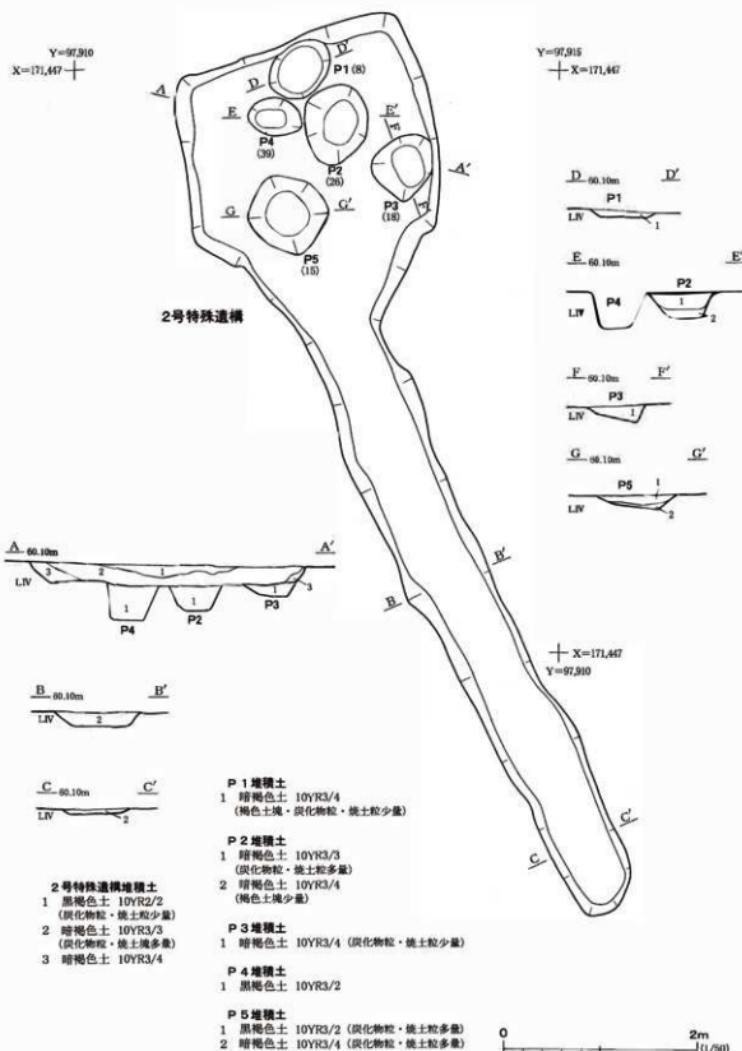


図31 2号特殊造構

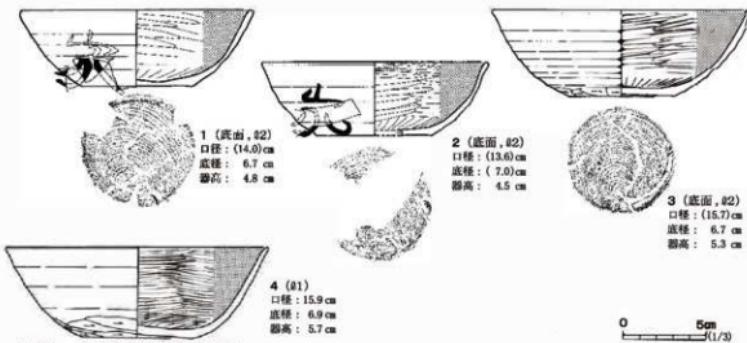


図32 2号特殊遺構出土遺物

長さは豊穴の壁から測って7.5m、幅は最も広い部分で0.9mである。豊穴部分との接続部の幅は1.9mである。断面は逆台形で、底面の深さは先端に向かうに従い浅くなる。豊穴部分の底面との段差は認められない。検出面から底面までの溝の深さは、豊穴部分との接続部分で17cm、溝の中ほどのB B' で14cm、先端に近いC C' で5cmである。

豊穴部分の底面からは、5基の小穴が検出された。北壁際の中央やや東よりで検出された小穴をP 1、P 1の南側に近接して検出された2基の小穴を東からP 2・P 4、東壁際の南寄りの位置で検出された小穴をP 3、溝との接続部分の西寄りの位置で検出された小穴をP 5とした。

P 1は平面形が東西方向に長い楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は70×52cmである。底面からの深さは8cmである。暗褐色土が堆積していた。P 2の平面形は不整楕円形である。西側の壁がやや緩やかに立ち上がる。南北東壁は急激な角度で立ち上がる。規模は84×68cmである。底面からの深さは26cmである。堆積土は暗褐色土の2層がレンズ状に堆積していた。P 1は炭化物粒と焼土粒をやや多く含む。P 3の平面形は不整円形である。西側の壁が緩やかに立ち上がる。南北東壁は急な角度で立ち上がる。規模は最大で径66cm、底面からの深さは18cmである。堆積土は、炭化物粒と焼土粒を少量含んだ暗褐色土の1層である。P 4の平面形は東西方向に長い楕円形である。壁はいずれも急な角度で立ち上がる。規模は56×39cmである。底面からの深さは39cmで、本遺構の底面で検出された小穴の中では最も深い。P 5の平面形は不整な円形である。壁は緩やかに立ち上がる。規模は最大で85cmである。堆積土は、黒褐色土と暗褐色土の2層がレンズ状に堆積していた。いずれの層にも、炭化物と焼土粒をやや多く含んでいた。底面の北部からは長さ15cmほどの炭化材が出土した。5基の小穴の位置には規則性がなく、深さも異なることから各小穴が具体的にどのような機能を有していたのか調査の所見からは明らかにできなかった。

本遺構からは、土師器片180点が出土している。P 3とP 4の中間付近の底面と堆積土中に集中して、破片の状態で大量に出土した。遺物の集中地点付近の堆積土には、炭化物と焼土粒が他地点に比べ多く含まれていた。溝内からは遺物は出土しなかった。このうち土師器杯4点を図示した。

図32-1は、平底の底部とやや湾曲しながら外傾する体部をもつ。ロクロ成形で、内面は幅の広いミガキの後黒色処理が施されている。底面には回転糸切り痕が明瞭に残る。2は底部平底で、湾曲しながら立ち上がり口縁部に至る。口端部はわずかに外反する。内面はミガキの後黒色処理が施されている。底面には回転糸切り痕が観察できる。1・2の体部外面には墨書きが認められる。墨が薄く判読しにくいが、「家」と読むことができる。

3は平底の底部からやや湾曲し外傾しながら立ち上がる体部をもつ。ロクロ成形後、体部下半に手持ちヘラケズリによる調整が認められる。内面には幅の狭いミガキの後、黒色処理が施される。底面には回転糸切り痕が観察できる。4は平底の底部と外傾する体部をもつ。口端部はやや外反する。外面はロクロ成形の後、体部下半と底部に手持ちヘラケズリによる再調整が見受けられる。内面には幅の狭いミガキの後、黒色処理が施される。

本遺構は方形の堅穴状の遺構に長さ7.5mの溝が取り付いている。一般の堅穴住居跡に認められる施設がないことなど、住居とは異なる性格が想定される。底面と堆積土中からは狭い範囲に集中して土器の破片が出土した。遺物が集中して出土した堆積土中には、炭化物粒と焼土粒が多く含まれていたものの、本遺構内で火を焚いた明確な痕跡は確認できなかった。これらの所見からも、本遺構の具体的な性格を特定することはできない。本遺構の年代は、出土した土器からおよそ9世紀代と思われる。

(青山)

第7節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文土器844点、石器23点が出土している。旧石器時代から近世までと幅広い年代にわたっている。旧石器の調査・出土地点は図33に、遺物の出土頻度については図34に示した。これらの分布をみると、縄文土器と石器が調査区北側から、土師器・須恵器が調査区中央から北側にかけて多く出土している。

旧石器時代の石器 (図33・38-1~3, 写真24・25)

旧石器は出土した3点を図示した。このうちの2点は、遺構検出をしている際にLIV上面で出土したものである。この他、参考のため2号道跡から出土した旧石器の出土地点を図33に加えた。調査方法については、図33に示した位置にトレンチを設定して掘り下げを行った。トレンチ調査は、はじめに旧石器が出土したD・E 4グリッド地点から開始し、その周辺の順に範囲を広げてブロック範囲の絞込みができるように進めた。掘り下げは、草削りでLIVを薄く削り、石が出土した場合には石を原位置に残した。一辺が5mのトレンチではLV上面まで、一辺2mのトレンチでは、LIV上面から約20cmを掘り下げた。しかし、旧石器はまったく確認されなかった。このため、本資料については遺構外出土遺物として報告する。

図38-1・2については、LIV上部から出土した。1と2の遺物はLIV上部から上下差約4cmを

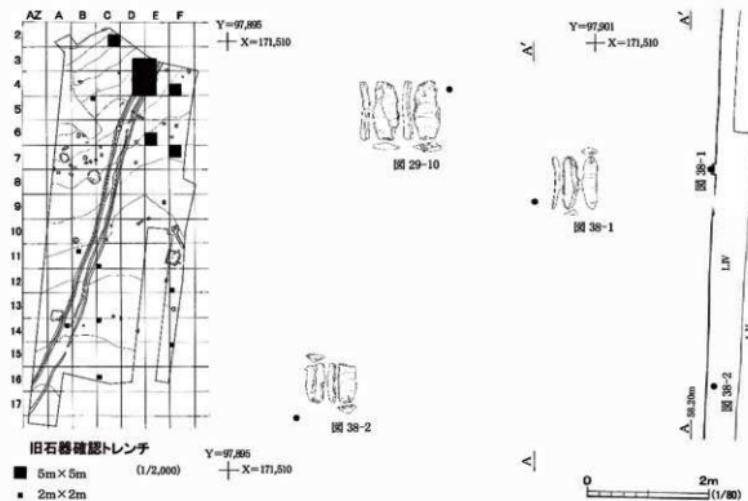


図33 旧石器調査地点と出土地点

もって出土している。図33に示した垂直分布では、1の地点から2の地点に向かって標高が低くなるため2の方が低くなるが、実際にはいずれもLⅣ上部から出土している。

1は中央に稜をもつ先細りの石刃である。打面調整は何度か行われ、左側縁には微細剥離が認められる。背面には自然面が残る。2は小坂型彫刻刀である。石刃の端部を断ち切るように調整を施し、右側線上端部には槽状の剥離が認められる。また、背面左上端の切断面には微細な調整剥離が認められる。3は基部を欠損する尖頭器である。黒曜石製の両面加工のもので、器体全体に平坦な剥離を加え、凸レンズ状の断面を呈する。

土 器 (図34~37, 写真32~34)

出土した土器は、縄文時代早期後葉から平安時代までのものである。これらの土器は、縄文土器がしⅢから、古墳・平安時代の土器がしI・IIから多く出土している。土器については時期ごとに群別している。この中で主体となる土器は、縄文時代早期末葉と平安時代のもので、縄文土器は遺構外出土土器全体の約2/3を占める。

I群土器 (図35-1~23・25・27, 写真33) 本群は縄文時代早期後葉～末葉の土器である。本群土器の早期後葉の土器は1号特殊遺構から出土しているが、遺構外からは明確なものは出土していない。この時期に伴う条痕地文の土器と早期末葉の地文を区別することは難しい。図35-1~25・27は早期末葉の土器で、胎土に多量の植物纖維を混和している。図35-1~9は口縁部で、口縁端部には1~3が刻み、5が縄文施文される。2・5の口縁端部は水平に削がれ、4・6・8・9の

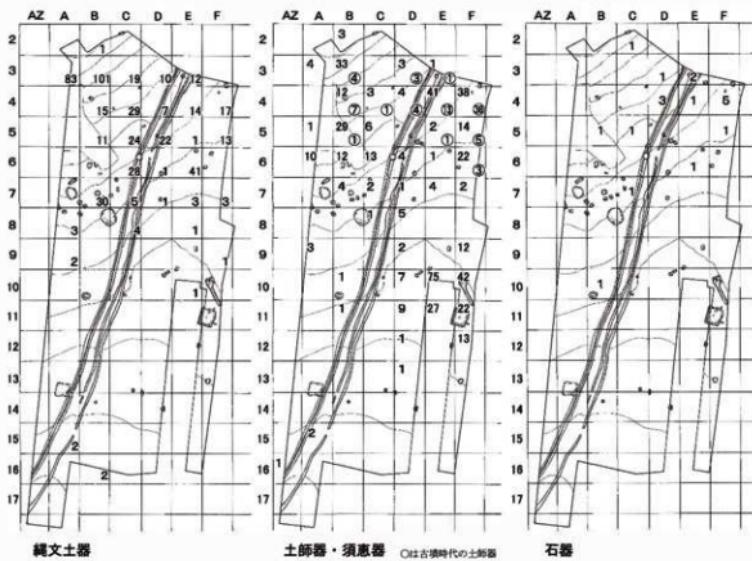


図34 遺構外出土土器・石器分布図

口縁部は先端先細りで外反する。外面の地文は、1～6が条痕文、7～9が縄文である。このうち、2・4の外面には半截竹管の凹側による平行沈線で文様が描かれている。4・7・9の内面上端には、縄文が施されている。このうち4・7の縄文には、0段多条の原体が使用されている。同図10・11は、器体に弱い屈曲を持つもので、11の屈曲部上には刺突が施されている。同図12・13の外面地文は条痕と縄文からなり、12の地文境には2段の縄圧痕が施されている。このうち、12の縄文には0段多条の原体が使用されている。同図14～16は条痕、同図17～23・25・27は縄文が施される。このうち、18・21～23の縄文には0段多条の原体が使用されている。25には半截竹管の凸側による沈線が施されている。

II群土器（図35～24・26） 本群は縄文時代前期前葉のもので、出土量は少ない。図35～24・26は羽状縄文が施され、中でも26は深めに施されている。いずれも胎土に含まれる植物繊維の量は、I群土器に比べて少ない。

III群土器（図36～1～6・26、写真34） 本群は縄文時代中期のもので、II群と同様に出土量は少ない。図36～1・2は口縁部文様帶に梯子状の沈線で渦巻文が描かれている。同図3・26は、縱方向から斜縄文が浅めに施された後に結節回転が施されている。これらの土器は、その特徴から中期前葉のものと考えられる。同図4～6は、凹線により2重の楕円文が描かれ、その内側に縄文が充填されている。いずれも出土位置が同じで、器壁の厚さや縄文の特徴から同一個体と考えられる。中

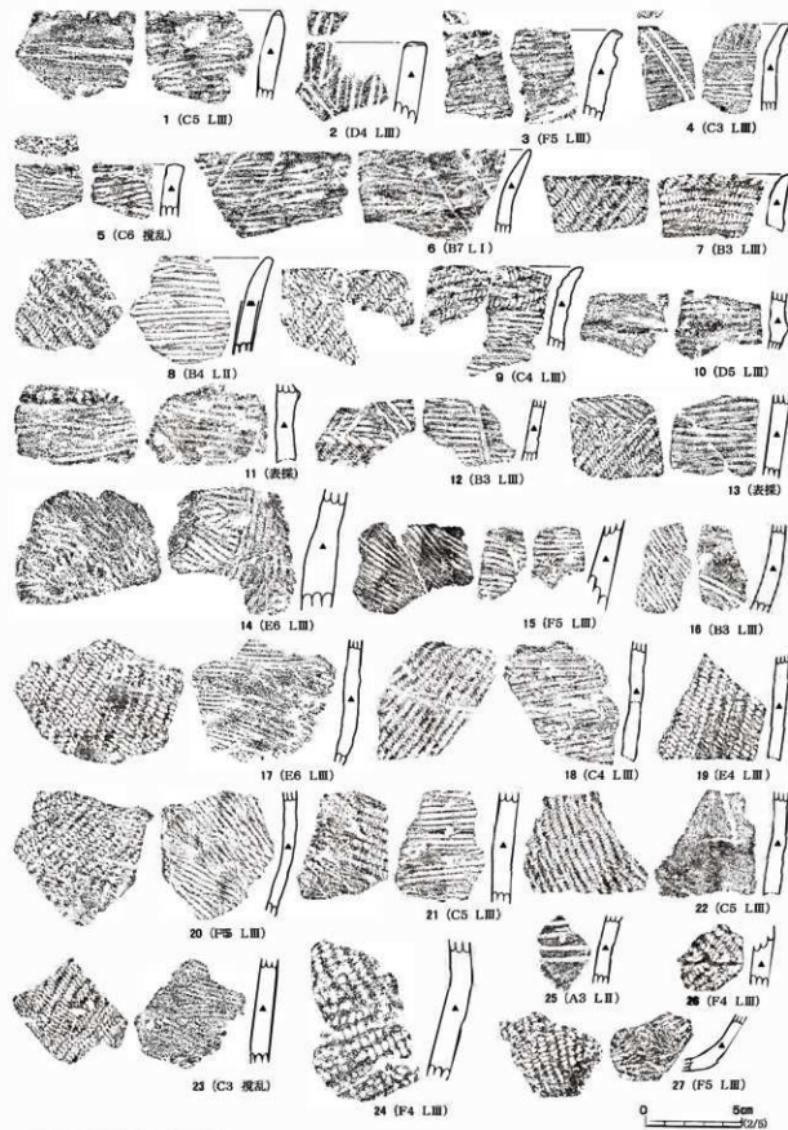
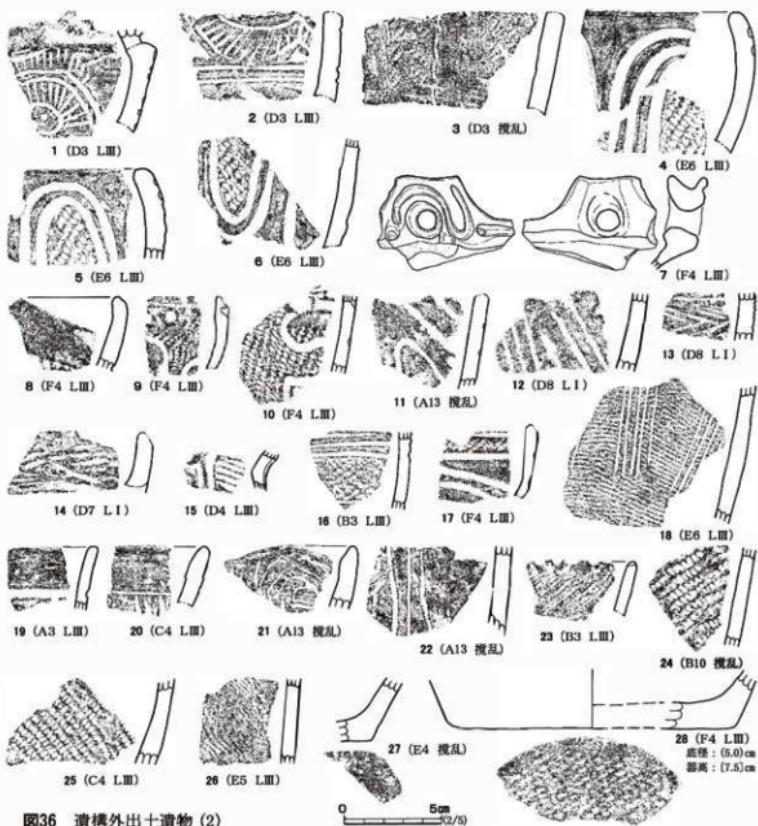


図35 遺構外出土遺物(1)



期末葉のものと考えられる。

IV群土器(図36-7~25・27~28、写真34) 本群は縄文後期・晩期の土器と考えられる。図36-7は口縁部の波頂部下が穿孔され、その周囲に逆「S」字状の沈線が横方向に施されている。その内側には、刺突が施され、それを起点に横方向の沈線が伸びている。同図8~22は沈線が施されるもので、10には垂下する蛇行沈線、9・11には梢円文、12・18には数本単位の集合沈線、13には矢羽状沈線が施される。16・17は器壁が薄く焼成が良好なもので、17には磨消縄文が認められる。19・20は口縁部が無文で、沈線により口縁部と胴部が区画されるものである。21・22は無文上に単沈線が数本単位で施され、21では波頂部下に円を描くように施されている。このうち、土器の特徴から7~12・18は縄文後期前葉のものと考えられる。同図23~25は縄文地文の土器で、23の口縁端部

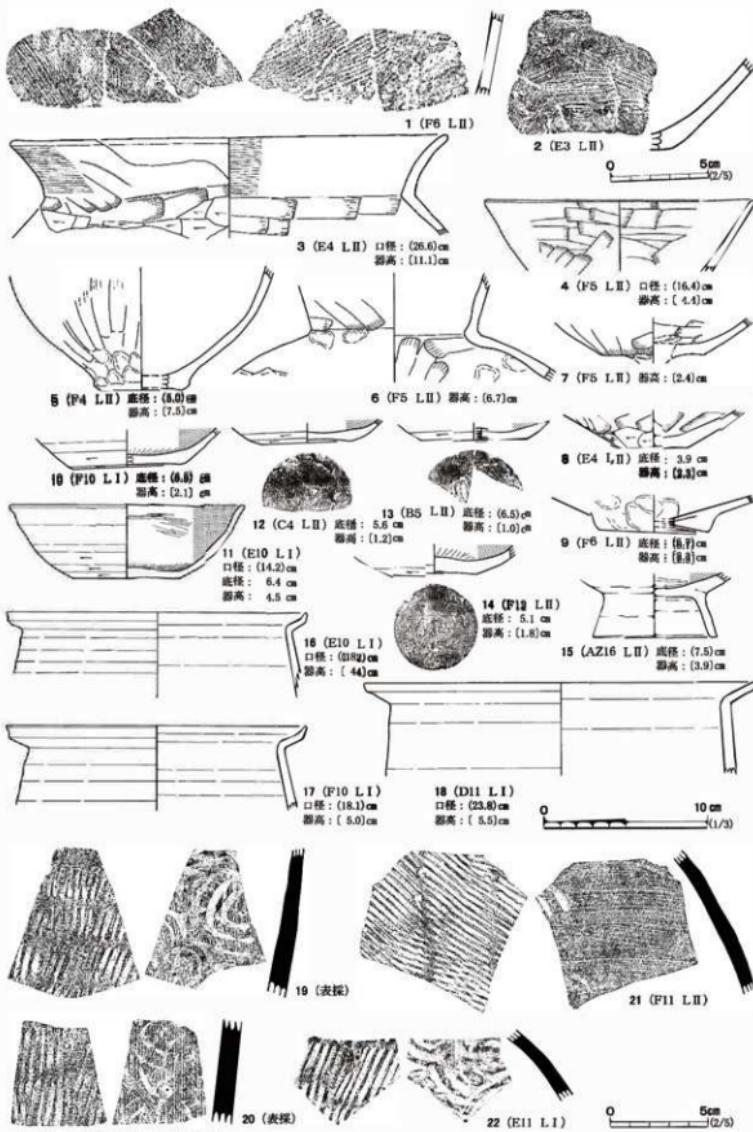


図37 遺構外出土遺物(3)

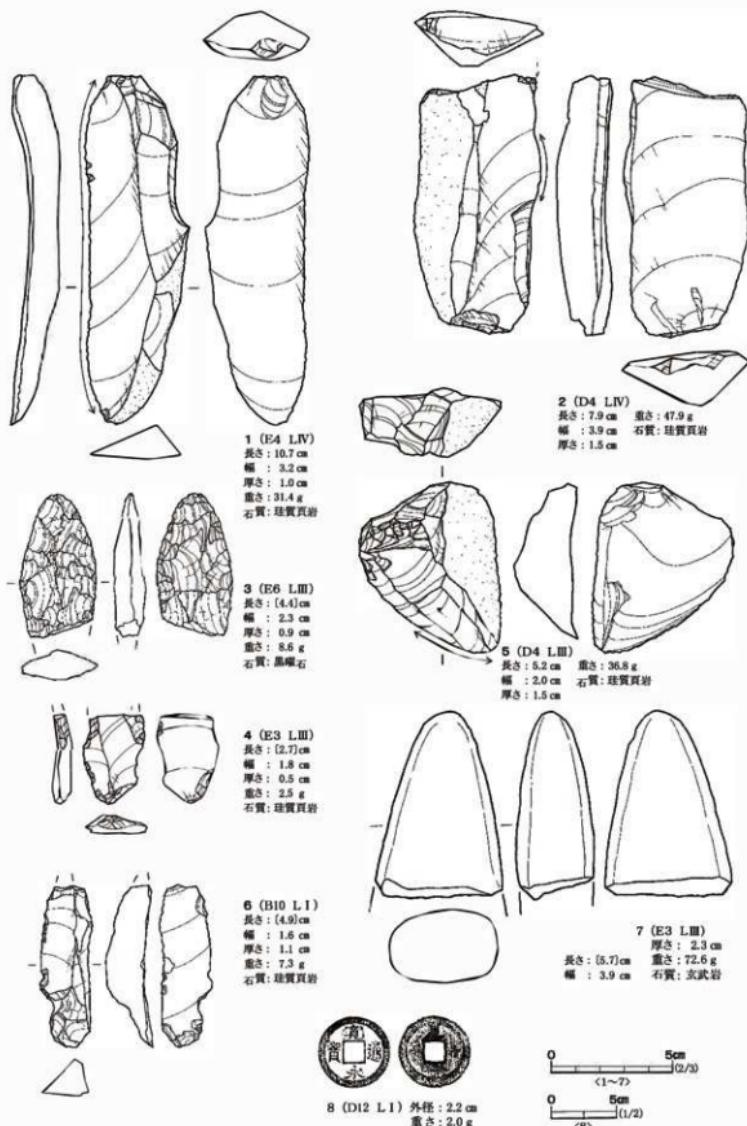


圖38 造構外出土遺物 (4)

には刻み状の刺突が加えられている。同図27・28は底部片で、28の底部には網代痕がみられる。

V群土器（図37-1～9、写真32） 本群は古墳時代の土師器である。調査区北東側から少量ながら出土している。図37-1～9に図示した。1・2は壺の破片で、器面に細かいハケメ調整が認められる。4・7は高杯と考えられる。4は杯部、7は杯部下端から脚部装着部分までの破片で、いずれも内外面に丁寧なナデ調整が施されている。3・5・6・8・9は壺と考えられる。3は口縁部が「く」字状を呈する。器面調整は口縁内外面にヨコナデ、頸部外面にナデ調整後ケズリが施されている。6は球状の胴部から頸部にかけて強く捺まり、口縁が外傾する器形を呈する。外面には赤彩塗布されている。5・8・9は壺の底部片で、胴部の遺存状態から球状に近い胴部を呈するものと推測される。また、8の底部外面には円形状の窪みが観察される。

VI群土器（図37-10～22、写真32） 本群は平安時代の土師器・須恵器である。調査区北側から調査区中央の東側にかけて出土している。図37に13点を図示した。

10～18はロクロ成形の土師器を図示した。10～14は内面黒色処理を施した杯である。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。糸切り痕をまったく残さない点で、回転ヘラ切りの可能性も残る。11は内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する器形である。15はロクロ成形の高台杯である。内面黒色処理を施している。16～18は壺である。ほぼ垂直または内傾して立ち上がり、口縁部が外側に外傾し口唇部が直立する器形である。

同図19～22は須恵器壺の胴部資料である。外面にはタタキ目痕が明瞭に残る。19・20・22は内面にアテ具痕が認められる。

(国井・三浦)

石 器 (図38-4～7、写真35)

旧石器を除いた石器は、19点出土している。その内訳は、磨製石斧1点、剥片18点である。このうち4点を図示した。

図38-4は上部が欠損する二次加工のある剥片である。打面調整が顕著であり、側縁に調整痕が認められることから、旧石器時代のナイフ形石器の可能性もある。5・6は剥片である。いずれも、側縁の一部に微細剥離が認められる。5はサイコロ状石核を打面調整により打ち欠いた剥片と考えられる。7は刃部を欠損する磨製石斧である。

錢 貨 (図38-8)

2点の「寛永通寶」が出土したが、1点のみを図示した。

図38-8は「寶」の字の下端が「ハ」字状になる新寛永で、背文字をもつものであるが文字の摩滅により判読不明である。

(国井)

第3章 自然化学分析

福島県広谷地遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林絃一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薰

Zaur Lomtatiadze・Ineza Jorjeliani・佐々木由香

1. はじめに

福島県南相馬市小高区広谷地遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の調整は廣田、瀬谷、Lomtatiadze、Jorjeliani、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、佐々木が作成した。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は炭化材8点である。材は実体顕微鏡下で観察し、最外年輪（=伐採年代あるいは枯死年代を示す）が遺存しているものは最外年輪を含めて採取し、不明なものについてはなるべく外側の年輪から測定に必要な量を切り出した。また実体顕微鏡下で判断可能な樹種については同定を行った。

試料番号№1はE 4グリッドのLIVから出土した炭化材で、周辺から旧石器が出土している。試料番号№2及び3は2号遺跡の側溝から出土した炭化材で、遺構の時期は平安時代から近世と考えられている。試料番号№4は古墳時代の24号土坑から出土した炭化材、試料番号№5～8は平安時代以降の木炭焼成土坑である29・33・36・42号土坑から出土した炭化材である。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

3. 結 果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代範囲を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はA.D.1950年を起点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、

^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、曆年校正の詳細は以下の通りである。

曆年校正 曆年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期5,730±40年) を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年校正には●xCal3.10 (校正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、●xCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年校正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確立が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考 察

試料について、同位体分別効果の補正及び曆年校正を行った。得られた曆年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

2σ 曆年代範囲に注目して年代を整理する。 2σ 曆年代範囲は、95.4%の確率で年代がこの範囲に収まるこを意味する。

試料番号No.1は1800–1940calAD (61.9%)、1670–1780calAD (33.5%) であり、近世→近代の年代範囲を示した。平安時代から近世の可能性がある2号道跡から出土した炭化材である試料番号No.2・3は、660–780calAD (95.4%)と670–780calAD (95.4%)で、7世紀後半から8世紀後半の年代範囲を示した。古墳時代と推定されている24号土坑から出土した炭化材である試料番号No.4は130–340calAD (95.4%)で、2世紀前半から4世紀中頃の年代範囲を示した。

平安時代以降と推定されている木炭焼成土坑29・33・35・42号土坑から出土した炭化材である試料番号No.5～8は、No.5が575–655calAD (95.4%)で6世紀後半から7世紀中頃、No.6～8は高い確率で650～780calADと7世紀中頃から8世紀後半の年代範囲内であった。

なお、木材の ^{14}C 年代が示すのは、その部分の年輪が形成された年代である。最外年輪を試料とした場合、その年代が示すのは枯死あるいは伐採の年代であり、木材が利用された年代に試料とした場合、その年代が示すのは枯死あるいは伐採の年代よりも古い年代である。これは古木効果と呼ばれる。今回測定した炭化材は、1点を除き最外年輪以外の部位不明であったため、測定した年輪部分と最外年輪の間にどのくらいの年輪数があるかによって古い年代が示されている可能性を考慮する必要がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 3-29.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmelt, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.

表1 測定試料および処理

測定番号	過跡データ	試料データ	前処理
PLD-5557	過跡: E 4 試料番号: 1 層位: L1V	試料の種類: 肉化材 (2年輪: 広葉樹) 試料の性状: 最外年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5558	過跡: 2号道路 試料番号: 2 層位: L 4	試料の種類: 肉化材 (3年輪: 幹葉樹) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5559	過跡: 2号道路 試料番号: 3 層位: L 4	試料の種類: 肉化材 (3年輪: 広葉樹) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5560	過跡: 24号土坑 試料番号: 4 層位: L 1	試料の種類: 肉化材 (3年輪: 広葉樹) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5561	過跡: 25号土坑 試料番号: 5 層位: L 2	試料の種類: 肉化材 (5年輪: 広葉樹) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5562	過跡: 33号土坑 試料番号: 6 層位: L 2	試料の種類: 肉化材 (2年輪: クリ) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5563	過跡: 38号土坑 試料番号: 7 層位: L 2	試料の種類: 肉化材 (3年輪: 広葉樹) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-5564	過跡: 42号土坑 試料番号: 8 層位: L 4	試料の種類: 肉化材 (5年輪: 広葉樹) 試料の性状: 最外年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩濃度: 1.2N, 水酸化ナトリウム: IN, 塩酸: 1.2N) サルフィックス

表2 放射性炭素年代測定及び層年校正の結果

測定番号	¹⁴ C (%)	層年校正用年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代を層年代に較正した年代範囲	
				1σ 層年代範囲	2σ 層年代範囲
PLD-5557 試料番号: 1	-25.67 ± 0.38	138 ± 28	138 ± 28	1658 AD (10.5%) 1700 AD 1720 AD (3.2%) 1740 AD 1800 AD (7.6%) 1820 AD 1830 AD (25.5%) 1850 AD 1810 AD (11.5%) 1840 AD	1670 AD (33.6%) 1700 AD 1800 AD (61.5%) 1840 AD
PLD-5558 試料番号: 2	-26.76 ± 0.34	128 ± 23	128 ± 25	675 AD (42.5%) 715 AD 745 AD (35.7%) 770 AD	660 AD (35.4%) 730 AD
PLD-5559 試料番号: 3	-27.64 ± 0.25	128 ± 23	128 ± 25	675 AD (40.1%) 715 AD 745 AD (38.1%) 770 AD	670 AD (35.4%) 720 AD
PLD-5560 試料番号: 4	-25.34 ± 0.22	1777 ± 22	1776 ± 28	22 AD (7.8%) 24 AD 25 AD (4.8%) 325 AD	10 AD (35.4%) 340 AD
PLD-5561 試料番号: 5	-26.33 ± 0.25	1433 ± 24	1435 ± 25	475 AD (68.2%) 495 AD	575 AD (35.4%) 555 AD
PLD-5562 試料番号: 6	-25.34 ± 0.38	1284 ± 24	1285 ± 25	675 AD (58.7%) 700 AD 700 AD (38.5%) 770 AD	660 AD (35.4%) 730 AD
PLD-5563 試料番号: 7	-27.40 ± 0.21	1261 ± 21	1268 ± 28	670 AD (58.7%) 700 AD 700 AD (35.5%) 770 AD	670 AD (35.4%) 720 AD
PLD-5564 試料番号: 8	-26.34 ± 0.21	1516 ± 22	1515 ± 28	675 AD (54.2%) 700 AD 700 AD (34.0%) 770 AD	670 AD (35.4%) 730 AD

第1編 広谷地遺跡

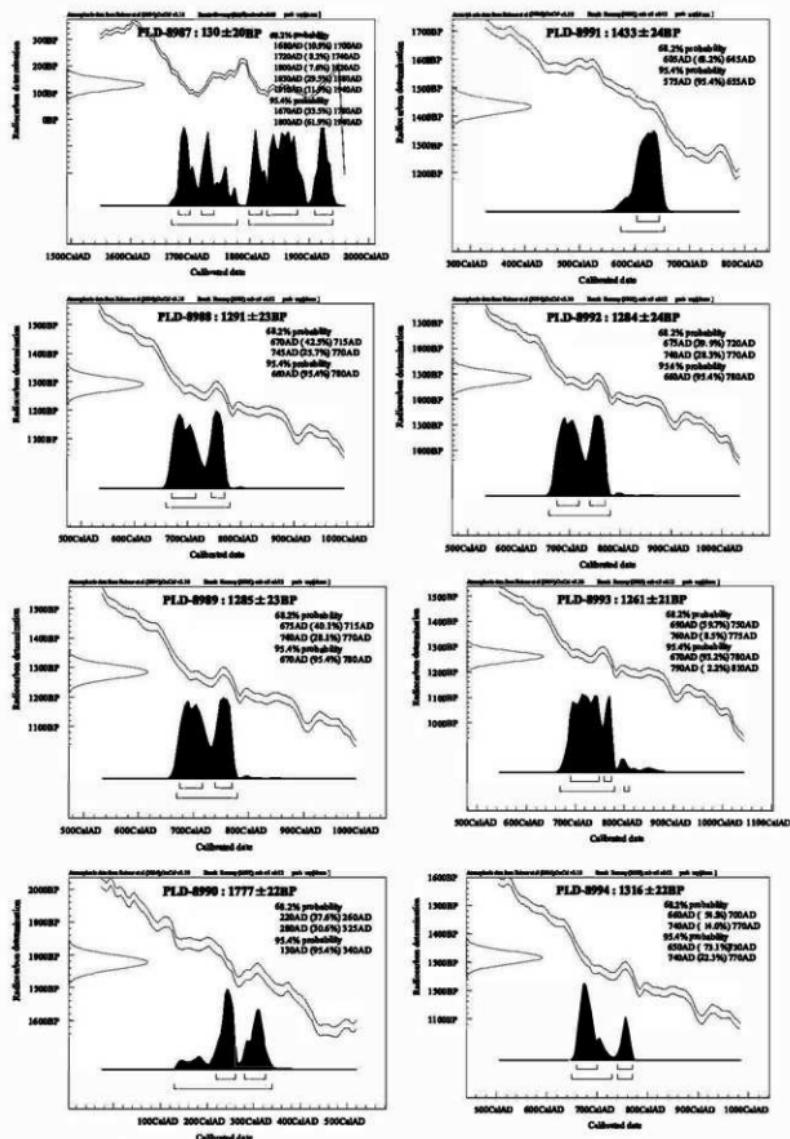


図39 历年校正結果

第4章 まとめ

今回の調査では、遺跡西側の一部にあたる7,300m²の調査を行い、旧石器・縄文・古墳・平安時代の複合遺跡であることが確認された。遺構は住居跡3軒、土坑45基、焼土遺構3基、道跡2条、特殊遺構2基が検出され、遺物は縄文土器、土師器、須恵器、石器、鉄製品、錢貨が出土した。その中で本遺跡は、縄文時代早期末葉と平安時代が主体となる。本章では、各時代の遺構・遺物や道跡についての特徴を整理し、今回の調査のまとめとする。

旧石器時代 旧石器は調査区北側から5点が出土し、このうち2点(図36-1・2)は褐色土のLIV上部で確認されている。器種は石刃・彫刻刀・ナイフ?・尖頭器からなる。尖頭器以外はE3・D4グリッドと近接して出土し、石質はいずれも珪質頁岩である。特徴的なものとして、稜調整のある石刃技法が見られるものや小坂型彫刻刀と考えられるものがあげられる。これらの特徴から尖頭器以外は、後期旧石器時代の石核調整技術を伴う石刃技法が隆盛した時期の所産と考えられる。

縄文時代 遺構は、住居跡1軒(S I 01)、土坑17基(S K 01・03・05・09・12・14・16・17・28・30・34・35・39・40・43~45)、焼土遺構3基(S G 01~03)、特殊遺構1基(S X 01)が確認された。遺構や遺物から、早期後葉～末葉、中期前葉～末葉、後・晚期の生活の痕跡が認められる。まず、早期後葉では、調査区北側から鶴ガ島式土器が出土した特殊遺構1基(S X 01)が確認されただけである。早期末葉になると、遺構数や遺物量が多くなるが、遺構の切り合いがないため変遷を追うことはできなかった。

土器は、縄文一条痕文土器で、文様に先が潰れた工具や半截竹管凹面で2本同時施文され、2段撚りの縄压痕文も見られることから、茅山上層式・北前式に比定されるものと考えられる。

この時期の遺構は、段丘の北側縁辺にあたり、川房川から入る小谷の谷頭に住居跡や土坑が帶状に確認されている。特に西側の住居跡周辺では土坑が集中する。このため、遺構はさらに西側の調査区外に延びるものと考えられる。住居跡は、平面形が楕円形で炉が無く、壁際に柱穴が巡るものである。貯蔵穴は、小型のもの(S K 09・40・45)や大型のもの(S K 43・44)があり、住居跡の周辺に認められる。このことから、早期末葉には小規模な集落が営まれていたものと考えられる。

その後、中期～晚期は遺物が調査区北側や南西側でわずかに出土している。遺構は、中期末葉と考えられる円筒状の貯蔵穴(S K 03)が調査区中央で確認されている。この他、調査区北側で確認された落し穴状土坑(S K 08・39)は、軸方向が一致することから同時期のものと考えられ、早期後葉～末葉を除くある段階ではこの地区が狩猟場として機能していたものと考えられる。(国井)

古墳時代 遺構は調査区北東側で確認された24号土坑のみである。該期の遺物は、遺構内外を含めて土師器片が72点出土した。器種には高杯・壺・壺が見られる。これらの中でも特に高杯や壺の胴部には、細かいハケ目調整が認められることから、塙釜式の中でも比較的新しい様相をもつ土器群

第1編 広谷地遺跡

と考えられる。

平安時代 遺構は住居跡2軒(S 102・03), 土坑6基(SK 02・06・15・20・27・38), 特殊遺構1基(S X02)が確認されている。集落は、段丘のやや奥まった平坦な調査区中央から南側にかけて確認されている。

2軒の住居跡は明確な柱穴を持たず、カマド袖の作り方に共通性が認められる。3号住居跡は床面に白色粘土が認められ、床面中央にはロクロビットと想定できる小穴が確認されている。本住居跡では土器製作が行なわれたものと考えられる。本住居跡と同様な白色粘土が貼られ床面中央にロクロビットが伴う住居跡は、本遺構の南側に近接する四ツ堀遺跡2次調査の1号住居跡でも確認されている。両遺跡で確認されたものは、ロクロビットの位置、白色粘土が検出された点、ロクロ回転台などの痕跡が見られない点が一致する。

土坑は、住居跡から離れて確認されており、中には27・38号土坑のように木炭焼成土坑も含まれている。時期不明としている木炭焼成土坑の中にも、平安時代に含まれるものがあると考えられる。遺物は土師器と須恵器からなり、一般的な住居跡から出土する供器具・煮炊具・貯蔵具が確認されている。土師器はロクロ成形によるものである。杯は底部全面に回転ヘラケズリ再調整が見られるもの、回転糸切り後に底部周縁部から体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施されているものが見られる。調整などの特徴から9世紀前半～後半を中心とした小規模な集落跡と考えている。集落内では最低限の土師器製作を行っていたものと考えられる。

(三) 溝

道跡について 道跡は調査区内を縱走する2条が重なるように確認されている。これらの道跡は、2号道跡が1号道跡に作り替えが行われ、路面幅は狭くなっている。道跡は南北方向で直線状に走り、調査区内で全長約140mの範囲で確認され、路面幅は古い段階が3.4～5.7m、新しい段階が1.2～3.4mを測る。道跡の北側は川房川による崩落を受けているため失われているが、南側については、調査区南西端の調査区外に広がるものと考えられる。遺構の時期については、9世紀前半より新しく、明治17年より古いとしている。ここでは、時期の絞込みを行う材料として側溝内堆積土や出土遺物、周辺の遺構についてもう一度考えてみたい。1号道跡側溝の堆積土では、上部に古代の遺物を含むLIIが確認されている。この他、2号道跡西側溝のC6・7、D5グリッドからは土師器がまとまって出土している。また、両道跡の側溝からは土師器片が117点も出土しており、この中には、側溝底面付近から出土したものも見られる。出土した土師器杯の特徴は底部に回転糸切り痕が残り、体部下端に手持ちヘラケズリが施されるものがみられる。この特徴は3号住居跡出土の土師器杯に近いものである。3号住居跡を見ると軸方向が道跡とほぼ平行するようである。

以上のことから、道跡の時期は古代の可能性が高いものと考えている。

(四) 井

参考文献

- (財)福島県文化センター編 1991「四ツ堀遺跡」『猪戸川地区遺跡発掘調査報告1』
(財)福島県文化振興事業団編 2006「四ツ堀遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告43』

第2編 石神遺跡

遺跡記号 M S C - I G
所在地 南相馬市原町区石神字石神・中山
時代・種類 繩文時代 集落跡
平安時代 集落跡
中・近世 散布地
調査期間 平成18年9月4日～12月14日
調査員 国井 秀紀 今野沙貴子 鈴木裕一郎

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形

石神遺跡は、南相馬市原町区石神字石神・中山に所在する。南相馬市原町区の中央、JR常磐線の原ノ町駅から西方向へ直線距離で4.5kmほど離れて位置し、遺跡の南側を市道原町高倉線が東西方向に、おむね北側を秋道石神中山線が南北方向に走っている。

本遺跡は、阿武隈高地東縁部にあたる高の倉ダム北側の二ツ森から東へ張り出す丘陵上に立地する。この丘陵は、二ツ森の北側と南側を開析して東方向に流れる新田川支流の北側の境堀川と、南側の水無川に挟まれた東西に長い台地となっている。遺跡は、水無川に面する丘陵中央の南端に位置する。

遺跡の南側は、急峻な断崖状を呈する。遺跡南側の宅地から本遺跡までの比高差は約15mを測る。地形的には、平坦部を中心北・東向き斜面と谷部からなり、西端部では、果樹園のために平坦に削平されている。遺跡内の標高は、遺跡の東側平坦部が標高82mと高く、北側の谷部では標高67mと低い。その比高差は約15mを測る。なお、遺跡の現況は全て山林であるが、調査区の北側では、以前斜面畠を桑畠に使用していたため、斜面の一部が段階状になっていた。

今回の調査区は、遺跡範囲の西側の一部分である。地形的には、南側の平坦面と北側の谷部・斜面部からなり、南側では水無川方面に向かって緩やかに標高を減じるが、北側は北東側から入る谷の谷頭に相当するため北向き・西向きの急斜面となる。南側平坦面の標高75~80mからは縄文時代の遺構が集中して検出され、北側では西向き斜面から平安時代の遺構が確認されている。

(國井)

第2節 調査経過

石神遺跡は、平成10年度に実施された表面調査により確認された。その後、平成17年に、(財)福島県文化振興事業団が常磐自動車道建設に伴う試掘調査を実施した結果、縄文・平安時代の集落跡と推定され、常磐自動車道の計画路線内では3,700m²が要保存範囲と確定された。その後、要保存範囲の路線が変更になった。これにより、平成19年度は、福島県教育委員会から委託を受けた(財)福島県文化振興事業団が石神遺跡の調査として、3,300m²を対象に記録保存する目的で発掘調査を実施した。2期線範囲については、約500m²が残る。以下、遺跡の調査経過の概要を記述する。

調査は9月4日から開始した。まず、現地に発掘器材の搬入を行うとともに、調査範囲を確認し、調査区の現況写真撮影を行った。5日には、重機を使用して表土除去作業を開始した。表土の除去作業については、調査区南側から北側の順序で行い、排土については、調査区内にクローラダンプ

第2編 石神遺跡

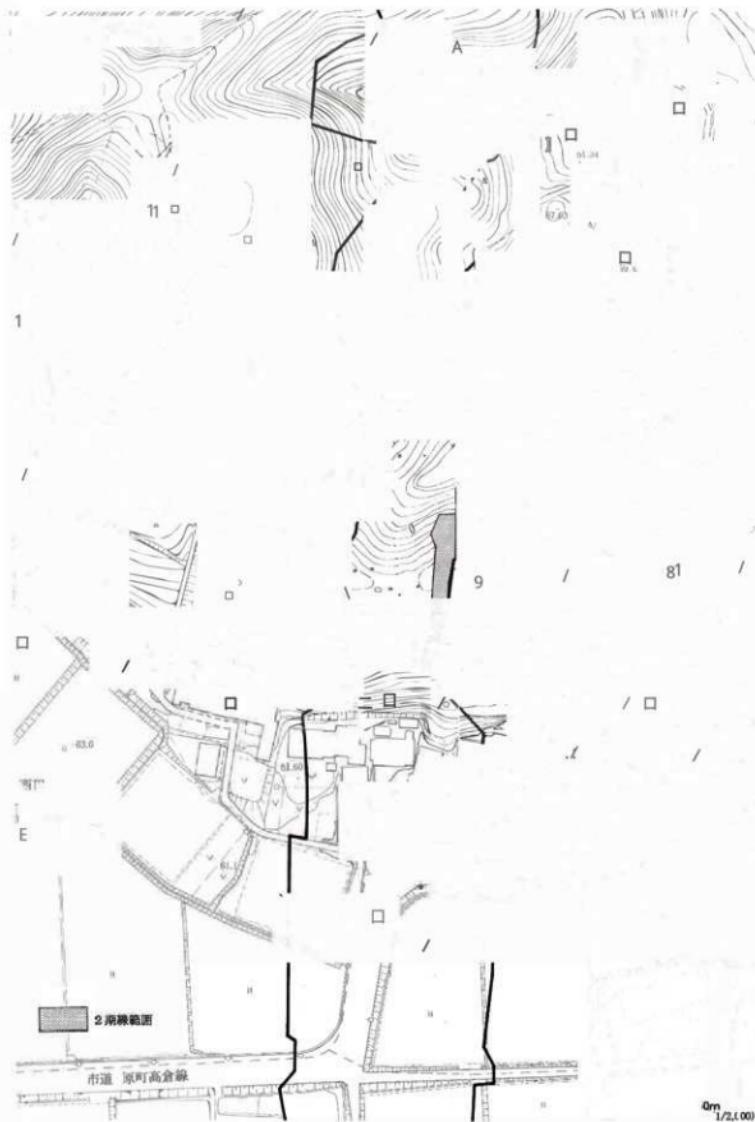


図1 遺跡位置図

が進入できないため、バックホー 0.7 を使用して調査区外北側の路線内に置くこととした。調査区の南側平坦面の排土は、調査区の北側谷部に仮置きをした。中旬には、調査区北側の排土置場が斜面であるため、排土の流出防止対策として、調査区境となる斜面下にコンバネを使用した土留めを作った。下旬には、表土除去が終了した調査区南側から作業員を導入して遺構検出を開始した。遺構検出に伴う排土については、 0.8 t と 2.5 t のクローラキャリアと一輪車で土砂運搬を行った。調査区内でクローラキャリアが稼動する際、作業員と機械との接触を防止するため、クローラキャリアの通路を設けて安全の確保に努めた。

遺構の検出作業に伴い、調査区南側から縄文時代前期～晩期の土器が出土した。縄文土器が出土するLⅢ上部からは、周壁が焼けた木炭焼成土坑を検出した。調査区内の境の壁で基本土層を確認し、その結果、調査区南側ではLⅡが部分的に確認された。LⅠ直下のLⅢから多量の縄文土器が出土することから、LⅢは縄文時代の遺物包含層であることが確認された。表土除去作業は、調査区中央の北向き斜面に移行した。

10月上旬には、調査区南側に基準測量杭を打設した。平坦部の遺構検出に並行し、遺物出土の状況を確認するため北向き斜面の遺構検出も開始した。検出された土坑の掘り込みも開始した。斜面での排土については、足場板2枚を「V」字状にあわせた燧を使用して斜面下に集めた。

谷部には、排土が集められることから、調査区外への排土流出を避けるため、谷部の低い位置に沈砂池を設置した。中旬には、遺構検出作業が本格化し、調査区北側では、LⅣ上面から縄文時代早期末葉の竪穴住居跡や土坑等の遺構を検出した。検出された遺構は、順次掘り込みを開始した。下旬には、平坦部から住居跡や土坑等の遺構が次々と検出され、調査員が遺構の掘り込みや図面作成に追われた。また、調査区北側では遺構や遺物が極端に少ないと確認した。

11月上旬には、調査区南側の地形測量を行った。調査区北側では平安時代の住居跡が確認されたため、順次遺構の掘り込みを開始した。調査区内に仮置きした排土は、バックホー2台を使用して調査区北側の路線内に移動した。中旬には、調査区中央の北向き斜面のLⅢb'より縄文時代早・前期の土器が多量に出土した。調査区北側の谷部が掘り上がり、谷部の断面観察から、当初確認した基本土層以外の層が確認されたため、新たな層を追加した。下旬に入ると、調査区北側で遺構のプランが路線内である北側に伸びることが確認されたため、調査範囲を北側に拡張した結果、平安時代の住居跡が確認された。また、調査区南側では、LⅣ上面から中・近世のピット群が確認された。このように、発掘調査の進捗に伴い、遺跡の様子が伺えるようになったことから、26日にはラジコンヘリコプターを用いて上空から遺跡の写真撮影を実施した。

12月上旬には、遺構精査と一部の発掘器材等の片付けを行ない、これに並行して調査区北側の地形測量を行った。遺跡の調査も終了に近づき、10日には福島県教育厅文化財グループ、東日本高速道路株式会社、(財)福島県文化振興事業団の各担当者により、調査経緯や成果、排土置き場の状態等の確認を行い調査区の引渡しを行なった。14日には発掘器材の片付けと撤収を行い、直接調査に関わる作業を終了した。

以上のように、石神遺跡の発掘調査は、9月4日から12月14日までの延べ70日をもって、その全日程を終了した。

第3節 調査方法

今回の調査では、遺跡の位置関係と遺構・遺物の出土位置を明示するために、調査区内に世界測地系に合わせた測量基準杭を打設した。この基準杭の座標値をそのまま用い、南北の軸線を真北に合致させ10m四方のグリッドを設定した。グリッドの原点は、X:152,310, Y:85,800の交点で、Xは緯線、Yは経線を表す。各グリッドの名称は、東西方向に西から東へA・B…とアルファベットの大文字を、南北方向には北から南へ1・2…と算用数字を付し、A 1グリッド、C 2グリッドなどと呼称した。遺構の記録に際しては、このグリッドを1mの方眼に細分し、交点を側点として用いた。また、交点の表記には座標値をそのまま使用した。

今回の調査では、表土除去作業にバックホー0.7を使用したが、それ以外は人力で遺跡基底面まで掘り下げ、層位ごとに遺構・遺物の確認につとめた。また、排土の移動には、クローラキャリア0.8tと2.5tを使用した。遺構の調査では、土層観察用の畦を設け、堆積土の状態や遺物の出土状況に留意しながら精査・記録を行った。

遺構の記録は1/10・1/20、調査区内地形図は1/200の縮尺で記録した。遺物の取り上げは、遺構ごとに、遺構外出土遺物はグリッドごとに取り上げているが、いずれにも出土層位を明記している。特に、遺物が多く含まれていたL III b・L III b'では段階的に分けて掘り下げ、出土遺物の量や時期の違い等を確認した。遺構外の遺物集中地点については、10mグリッドを5m四方に4分割し、北東隅から時計回りにa・b・c・dという枝番をつけて取り上げた。また、住居跡では、住居内の北東側からa・b・c・dと区分けして遺物を取り上げた。出土層位については、遺構外堆積土をアルファベット大文字のLとローマ数字との組み合わせによりL I・L II等とし、遺構内はアルファベット小文字のlと算用数字の組み合わせによりl 1・l 2等と表記した。また、土層の注記には新版標準土色帳を基準として使用した。

記録写真については、検出状況や土層の堆積状況等に留意し、35mm判のモノクロームとカラーリバーサルのフィルムを使用し、同一被写体を同一方向から撮影した。また、デジタルカメラでも同様に撮影した。

(國井)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布

石神遺跡で検出された遺構は、住居跡6軒、土坑48基、焼土遺構13基、竪穴遺構3基、柱列跡1列、ピット58基である。出土遺物は、縄文土器4,827点、土師器605点、須恵器8点、かわらけ8点、陶磁器29点、羽口6点、瓦2点、石器・石製品302点、鉄製品2点、鐵滓18点(745g)、銭貨5点、銃弾1点である。遺物の年代は、縄文時代早期末葉から現代まであり、縄文時代早・前期と平安時代(9世紀後半)が主体となる。

遺跡は、斯田川の支流である境堀川と水無川に挟まれた丘陵に立地する。調査区内は丘陵頂部の平坦地、北側の斜面と谷部からなる。遺構は、調査区南側の平坦部から、縄文時代～近世にかけての住居跡や土坑群、焼土遺構、ピット群等が集中して検出されている。中でも縄文時代早・前期の遺構が主体を占める。中・近世の遺構は、平坦部南側の1号竪穴遺構、柱列跡、平坦部中央の南側ピット群が確認されている。また、時期が不明である木炭焼成土坑は平坦部に散在する。遺構が集中する平坦部の地形は、調査区外の西側と東側に広がることから、これらの平坦部には、当該期の遺構が存在する可能性が高い。また、調査区北側の東向き斜面では、平安時代の住居跡や土坑等のまとまりが認められる。この他、調査区中央の北向き斜面と谷部で遺構は確認されていないが、遺物は、調査区中央の北向き斜面L III a・b'から縄文土器が多量に出土した。このように、時期的に見ると、縄文時代の遺構は調査区北側に、平安時代の遺構は調査区南側に分けることができる。

なお、平安時代の住居跡や調査区南側から精錬滓や鍛錬銀冶滓が出土しており、本遺跡の北側に近接する平安時代の銀冶遺構が確認されている中山C遺跡との関連性が高いものと考えられる。また、中世の遺構については、本遺跡の南側の戸鳥土遺跡との関連も考える必要がある。

基本土層(図2、写真6)

調査区は、丘陵南側の緩辺部に立地する。基本土層は、調査区南側の平坦部(●～●)と中央部斜面(●)、北側の谷部(●・●)で堆積状態を観察し5層に大別した。以下、各土層の特徴と遺構、遺物との関係について述べる。

L Iは、黒褐色土を呈する表土である。調査区全体に広がっており、層厚は10～55cmを測る。調査区南側の平坦部は薄く、調査区北側の谷部では厚い。調査区の北側斜面部は桑畑に使用されていたため、斜面が階段状となる。本層からは、かわらけ・陶器等の中・近世の遺物が出土している。

L IIは黒褐色土である。調査区全体に認められ、層厚は10～34cmを測る。L I同様、平坦部では層厚が約10cmと薄く、谷部では厚くなる。本層を掘り込んでいる遺構としては、木炭焼成土

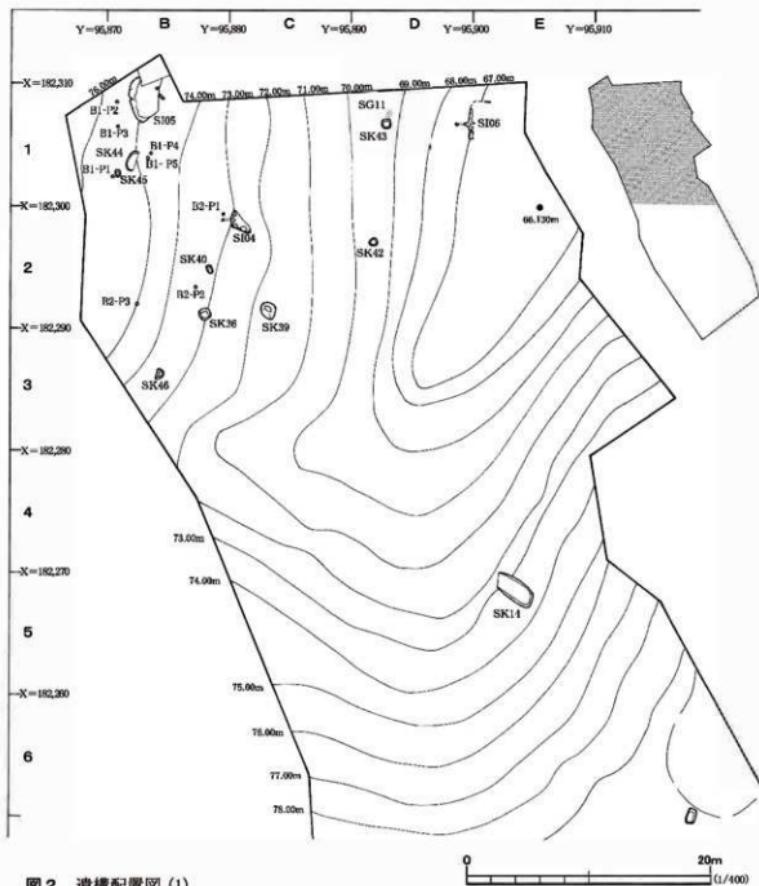


図2 遺構配置図(1)

坑と考えられる6～8・23号土坑、E 10-P 2があげられる。また、平安時代の遺構と考えられる40・42号土坑には、本層が堆積していた。本層からは少量ながら平安時代の土師器が出土している。

L IIIはa～hとb'の9層に細分した。a～hについては、平坦部と谷部調査の段階で、すでに層位が確定していたが、縄文土器が多量に出土した調査区北向き斜面部の調査で、L III cの上部に一層入ることが確認された。ただ、この層については、平坦部で確認されたL III bとの上下関係を明確にすることはできなかったが、ほぼL III bに近い、斜面部に堆積する土層と判断した。このた

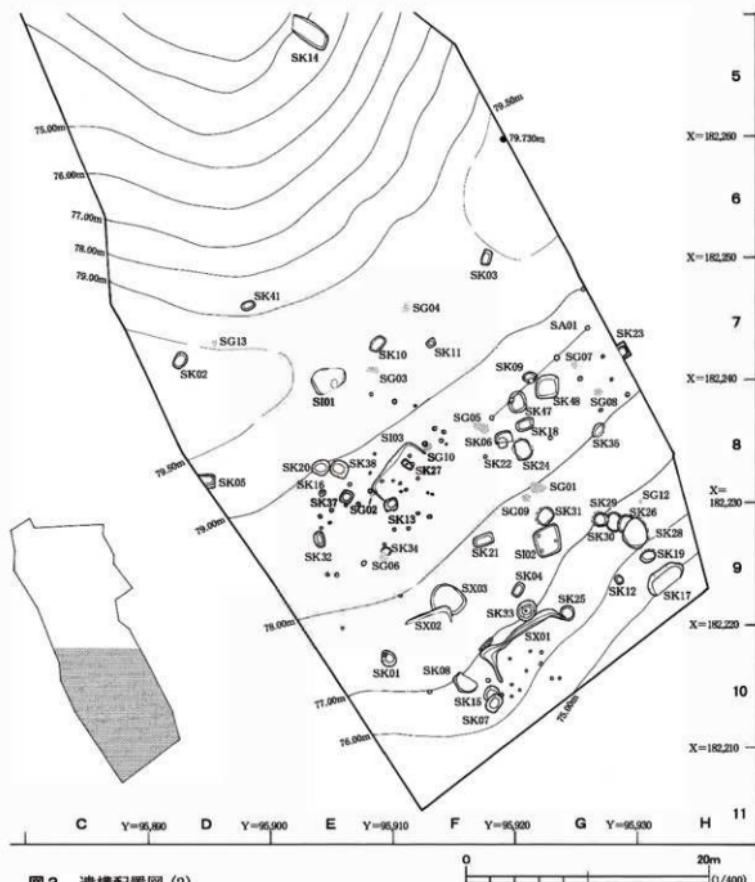


図3 遺構配置図(2)

め、この段階ではL III b以下の層位変更が困難と判断し、調査区北向き斜面部で確認したL III cの上部の層については、L III b' と命名した。

L III aは褐色砂質土で、調査区北西端部を除いた範囲で確認されている。平坦部では層厚が15cm前後と薄いのに対し、谷部上部に当たる⑥では層厚が37cmを測る。遺構は、木炭焼成土坑と考えられる1・4・18号土坑が、また平安時代と考えられる43号土坑が本層を掘り込んでいる。その他、2・6・11号焼土遺構が本層内で確認されている。遺物は、縄文時代前期から同晩期の土器が多く出土している。

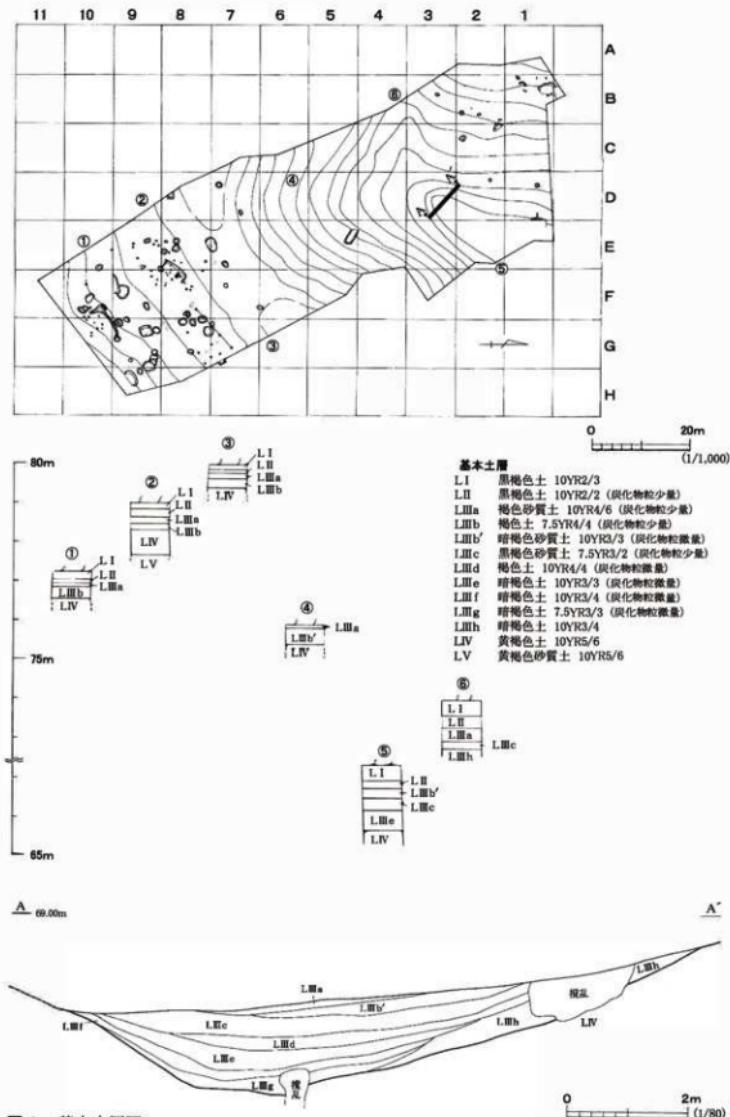


図4 基本土層図

L III b はやや赤味のある褐色土である。本層の上部ほど赤味が強い。平坦部でのみ確認され、ここでは層厚が26~45cmと安定した堆積が確認されている。本層からは焼土遺構の多くが確認されている。また、本層下部から縄文時代早期末葉と考えられる17・19・29号土坑が確認されている。遺物は、本層の上部からは縄文時代早期から同前期にかけての土器が多く出土し、下部からはわずかであるが縄文時代早期中葉の薄手の土器が確認されている。

L III b' は暗褐色砂質土である。調査区中央の北向き斜面から谷部にかけて確認された。本層は、L III b に近似しているが、本層が斜面に位置することや土質が異なることから分けている。層厚はE 5 グリッドで25cm前後を測り、斜面下に向かって厚く堆積する。L III b' 下部には縄文時代前期後葉の土器が多い。

L III c は黒褐色砂質土である。L III b' とほぼ同様な広がりが確認されている。北向き斜面の●地点では確認できなかったが、D 5 グリッドやE 5・6 グリッドでは確認されていた。遺物は、縄文時代中期前葉から同前期前葉にかけての土器が多く出土している。特に、E 5 グリッドの上部から縄文時代前期前葉の羽状縄文が多く確認されていた。

L III d は褐色土である。谷部の中央 A A' 断面とその周辺のみで確認され、北側斜面側にやや厚く堆積することから、北側からの再堆積層と考えられる。層厚は最大22cmを測る。本層からはわずかながら縄文時代早期の土器が出土している。

L III e ~ g は暗褐色土で調査区中央谷部の堆積層として確認されている。いずれの層も非常に近似しているが、土色や含有物等のわずかな違いから細分した。本層からは、縄文土器がわずかながら出土している。

L III h は主に谷部の北側で確認され、L III の最下層である。このため、調査区北側でのL IV の漸移層である。

L IV は黄褐色土である。いわゆるローム質の土質で、調査区全体で確認されている。特に、平坦部では本層の上面が主に縄文時代の遺構検出面となる。遺物は本層以下から出土していないため、本層は本調査区における遺跡基底面となる。

L V は黄褐色砂質土で、基盤層の表層部が風化したものと考えられる。調査区南側の平坦部で26~31・47・48号土坑等の底面で確認されている。

(国井)

第2節 壺穴住居跡

今回の調査で検出された壺穴住居跡は、6軒である。これらは、調査区南側の丘陵の平坦部で3軒、調査区北側の東向き斜面で3軒が認められた。時期的には、南側が縄文時代早期末葉、北側が平安時代に分けられ、時期によって住居が構築される地形が異なる。平安時代の住居跡については、本遺跡の北側に近接する平安時代の銀冶遺構が確認された中山C遺跡との関連性があるものと考えられる。

1号住居跡 S I 01

遺構(図5,写真7・8)

本遺構は調査区南側平坦面のE 7・8グリッドに位置し、LIV上面で検出した。地形的には、南側平坦面の北縁に相当する。東側1.8mの地点には、3号焼土遺構がある。

掘り過ぎにより周壁の半分以上を失っているが、本来の平面形は隅丸長方形を呈していたと考えられる。遺存する西壁の方位は、N21°Wである。規模は、遺存する長軸で283cmを測る。検出面から床面までの深さは、最大20cmを測る。周壁は底面から急傾斜で立ち上がる。床面はLIVに形成されており、平坦である。ピットは検出されなかった。

住居跡の南端では焼土化範囲を確認した。64×48cmの隅丸長方形の範囲が焼土化しており、最大14cmの厚さで赤褐色に変色している。焼土化範囲上面での焼き締まりは確認できなかった。

堆積土は1層である。ℓ1は、壁際から崩落したLIV塊を含む褐色砂質土である。炭化物粒を含んでおり、L III bに起因する自然堆積土と考えられる。

遺物(図5,写真31)

遺物は、ℓ1から縄文土器片30点が出土した。いずれも、胎土に植物纖維を混和するI・II群土器である。そのうち、3点を図5-1~3に示した。1・2は刺突や沈線が施され、内面に条痕文が施されている。3は地文にループ文を施す。

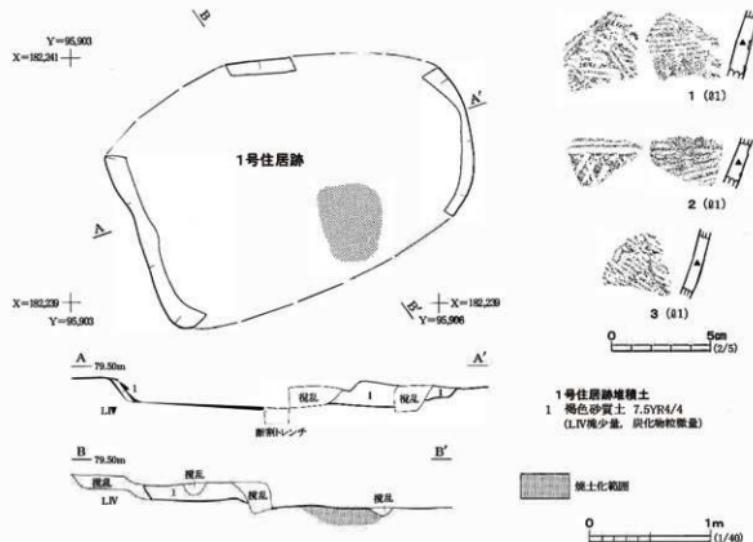


図5 1号住居跡・出土遺物

まとめ

本遺構は、隅丸長方形の壁穴住居跡である。時期については、遺物から縄文時代前期前葉と考えている。

(今野)

2号住居跡 S I 02

遺構(図6、写真9)

本遺構は、調査区南側平坦部のG 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL III b 下部である。遺構の東側の一部は搅乱により失われている。北側と東側には縄文時代と考えられる貯蔵穴や焼土遺構が隣接する。堆積土は4層に細分され、主に周囲からの流入による自然堆積と考えられる。L 4について、水平に近い堆積状況から人為堆積の可能性もある。

平面形は長方形を呈し、規模は243×207cmを測り、検出面からの深さは北壁で最大50cmである。周壁は床面からやや急角度で立ち上がる。床面はL IVにつくられ、小凹凸が認められるもののおおむね平坦である。踏み締まりは確認できなかった。

住居施設としては、床面からピット3基が確認された。ピットは東壁際と西壁際で確認され、そのうちP 2とP 3を結んだラインは西壁とおおむね並行する。平面形は梢円形を呈し、規模は13～21cmを測り、床面からの深さは15～50cmである。堆積土はいずれも暗褐色砂質土である。これらのピットについては、その形状や配列、堆積土から柱穴と考えている。

遺物(図6、写真31・34)

遺構からは、縄文土器片10点、石器8点が出土した。すべてL 1からの出土である。縄文土器は、いずれも胎土に植物纖維を混和するものである。このうち、縄文土器8点、石器1点を図示した。

図6-1～8は縄文土器である。1は口縁部資料で、口縁端部の断面形は外削状を呈する。内外面には条痕文が施され、外面の条痕文上には半截竹管による縦方向の平行沈線が描かれている。3・4・6は1と同様に条痕文が施され、3には浅めの平行沈線が、4には先がつぶれた工具による沈線が描かれている。1・3・4・6の胎土に含まれる植物纖維の量が多い。図6-2・7・8は外面に縄文が施される。2は波状口縁の破片で、波頂部は円形の刺突が施され肥厚する。8は結束羽状縄文となる。同図5は細かい刺突が横方向に施されている。図6-2・5・7・8の胎土に含まれる植物纖維の量は、1・3・4・6に比べて少ない。これらの土器の特徴から1・3・4・6は縄文時代早期前葉、それ以外は同前期前葉と考えられる。

同図9は蝶形の石匙で、表裏面の側縁部を中心に粗目の調整剝離が施されている。各側縁が直線的に整形され、形状は三角形を呈する。

まとめ

本遺構は、長方形を呈する小型の住居跡である。住居施設として壁際から3基の柱穴が確認された。堆積土からは、本遺構廃絶後自然堆積により埋没したものと考えられる。時期は、出土遺物から縄文時代前期前葉と考えている。

(國井)

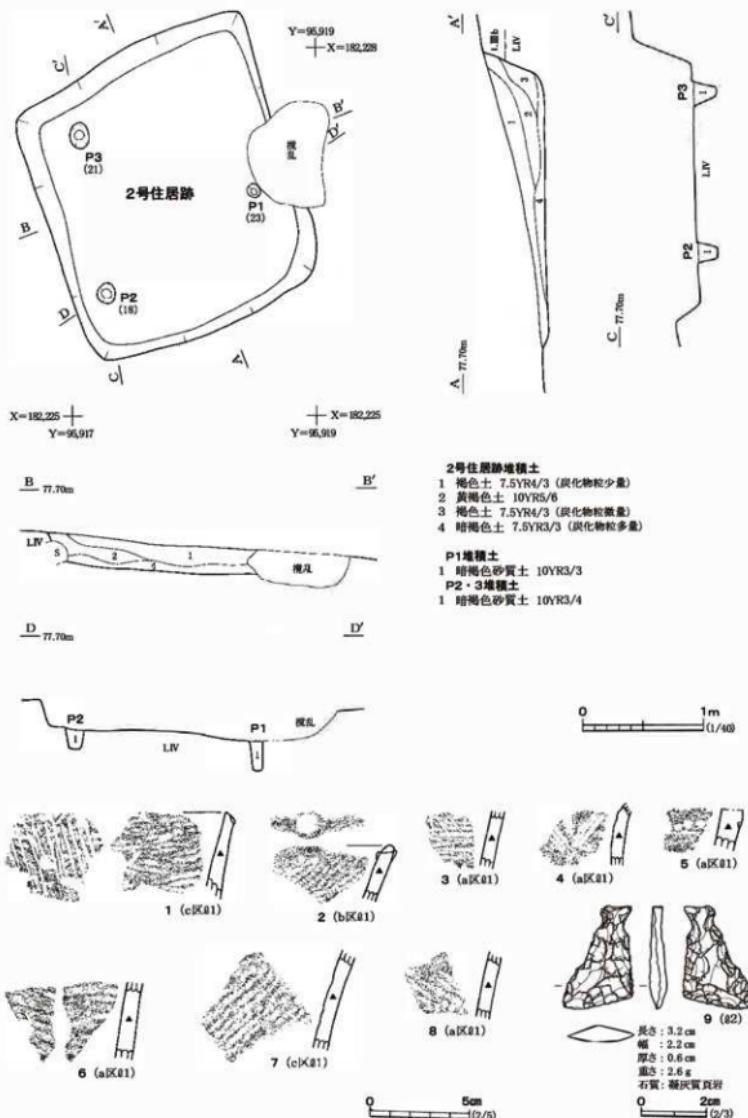


図6 2号住居跡・出土遺物

3号住居跡 S 103

遺構(図7、写真10)

本遺構は、調査区南側平坦部のE・F 8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。地形的には、南側に向かってわずかに傾斜している。そのため、本遺構は南側の壁が失われているため遺存状態が悪い。調査当初、LIII b下部で不明瞭な範囲として見られたが、遺構プランはLIV上面まで削ってようやく確認された。27号土坑、南側ピット群のE 8-P 6とF 8-P 7・8・10・11・15～17と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土はやや赤味のある褐色土の単層で、炭化物粒以外に混じりがなく均質であることから自然堆積と考えられる。また、本層はLIII bに起因する。

平面形は遺存状態から長方形と推測され、規模は510×206cmを測る。検出面からの深さは北壁で最大20cmである。

周壁は床面からやや急角度で立ち上がる。床面はLIVに形成され、小凹凸が認められるもののおむね平坦である。踏み締まりは確認できなかった。

住居施設としては、床面からピット7基が確認された。ピットはP 1・2が東壁際、P 1・6・7が北壁際で確認され、P 3～5を結んだラインはおそらく住居の南壁に相当する範囲と考えている。平面形は円形もしくは楕円形を呈し、規模は径12～16cmを測る。いずれも小型のものである。床面からの深さは10～20cmである。堆積土は暗褐色土と黒褐色土である。これらのピットについては、その形状や配列から柱穴と考えている。

遺物(図8、写真31・34)

遺物は縄文土器片32点、石器36点が出土した。縄文土器は、胎土に植物纖維を混和するもので、内外面に条痕文が施されたものが多い。石器は石礫以外は剥片である。これらのうち、縄文土器4点、石器1点を図示した。

図8-1～4は縄文土器である。1は外面に浅目の条痕が施された器壁の薄いものである。縄文時代早期中葉のものと考えられる。2は隆起線文と条痕文が施されるもので、縄文時代早期後葉のものと考えられる。3には0段多条原体による斜縄文、4には条痕と縄文がそれぞれ認められ、縄文時代早期末葉のものと考えられる。

同図5は棒状を呈する凸基有茎石鐵である。両側から細かい調整剝離を行い、両側の先端は鋭く尖っている。

まとめ

本遺構は長方形を呈する住居跡である。住居施設として壁際に柱穴が確認された。遺構内堆積土から、本遺構発掘後は自然堆積により埋没したものと考えられる。時期は、出土遺物から縄文時代早期末葉と考えている。

(國井)

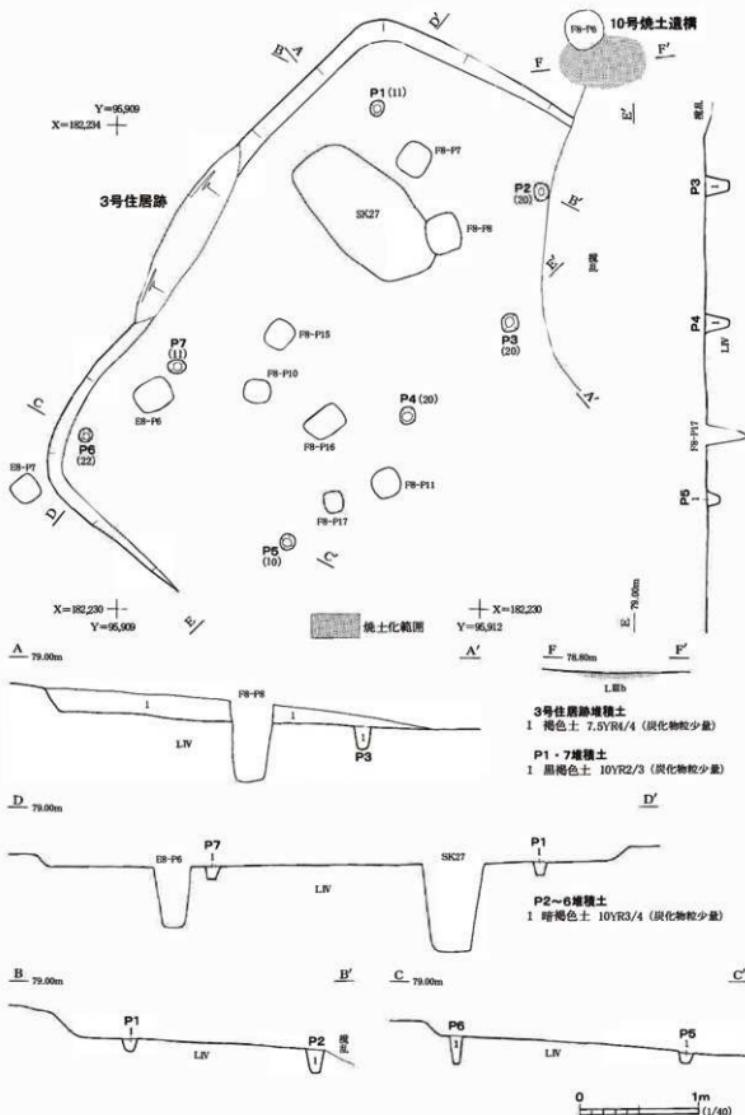


図7 3号住居跡・10号焼土遺構

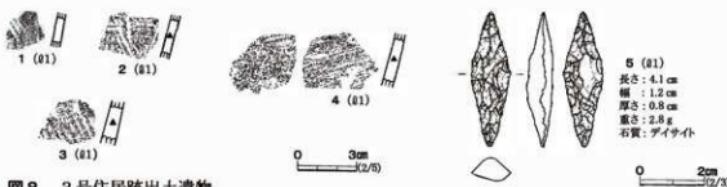


図8 3号住居跡出土遺物

4号住居跡 S I 104

遺構(第9図、写真11・12)

本遺構は、B2・C2グリッドの東向き斜面に位置する。遺構検出面はLIII a上面である。北西側には5号住居跡、44号・45号土坑、東側には42号土坑、南側には36号・40号土坑が隣接する。本遺構は、表土除去の際に遺構の北側半分を壊してしまった。検出当初、カマドが確認されたため、住居跡と判断した。

平面形は、遺存状況からは不明である。遺存規模は196×120cmを測り、深さは南西側で最大45cmを測る。周壁は南西隅付近で、床面から約60°の急斜で立ち上がる。床面は全体に貼床が施され、おおむね平坦である。

堆積土は10層に細分した。 $\ell 1 \sim 2$ は煙道に、 $\ell 3 \sim 4$ はカマド内に堆積した流入土、 $\ell 5 \sim 6$ はピット内に堆積した流入土。 $\ell 7$ は床面やカマドの底面で確認されたカマド崩落土。 $\ell 8$ はカマド袖の構築土。 $\ell 9$ はカマド袖石の掘形埋土。 $\ell 10$ は貼床と考えている。このため、 $\ell 1 \sim 7$ が自然堆積、 $\ell 8 \sim 10$ が人為堆積である。

住居施設としてはカマドとピットを確認した。カマドは西壁に敷設され、袖の一部と燃焼部、煙道が遺存している。カマドは床面上と壁面に構築され、遺存規模は西壁から北側袖の先端までの長さ47cm、両袖の外側から幅86cmを測る。袖には先端に平石を立てた袖石が認められる。袖は褐色粘質土を使用して構築されている。壁から袖の長さは、右袖で39cm、左袖で46cmを測る。袖の遺存高は、右袖で9cm、左袖で4cmを測る。両袖の先端には袖石が用いられており、左袖の袖石は焚口内部に向けて傾いている。また、カマド周辺に散乱していた石は、その多くが赤変していたことから袖石あるいは支脚等に使用されていたものと考えられる。

燃焼部は床面に形成され、周壁の上部から袖内側まで広く焼けている。燃焼部の規模は、焚口側から奥壁まで60cm、両袖の内側幅が最大65cmを測る。燃焼部の中央部では、硬く焼き締まった暗赤褐色の焼土化範囲が確認されている。この燃焼面の厚さは最大12cmを測る。また、燃焼部の中央には焼けていない範囲が確認され、本来、支脚が設置されていた部分と考えられる。

煙道は奥壁からの長さ75cm、幅8~15cmを測る。煙道の断面形は横方向に長い長方形を呈し、その高さは9cmを測る。煙道の焼土化範囲は、主に周壁の上部に認められ、その厚さは4cm程度である。煙出しピットの平面形は22×15cmの台形状を呈し、検出面からの深さは50cmである。煙出しピッ

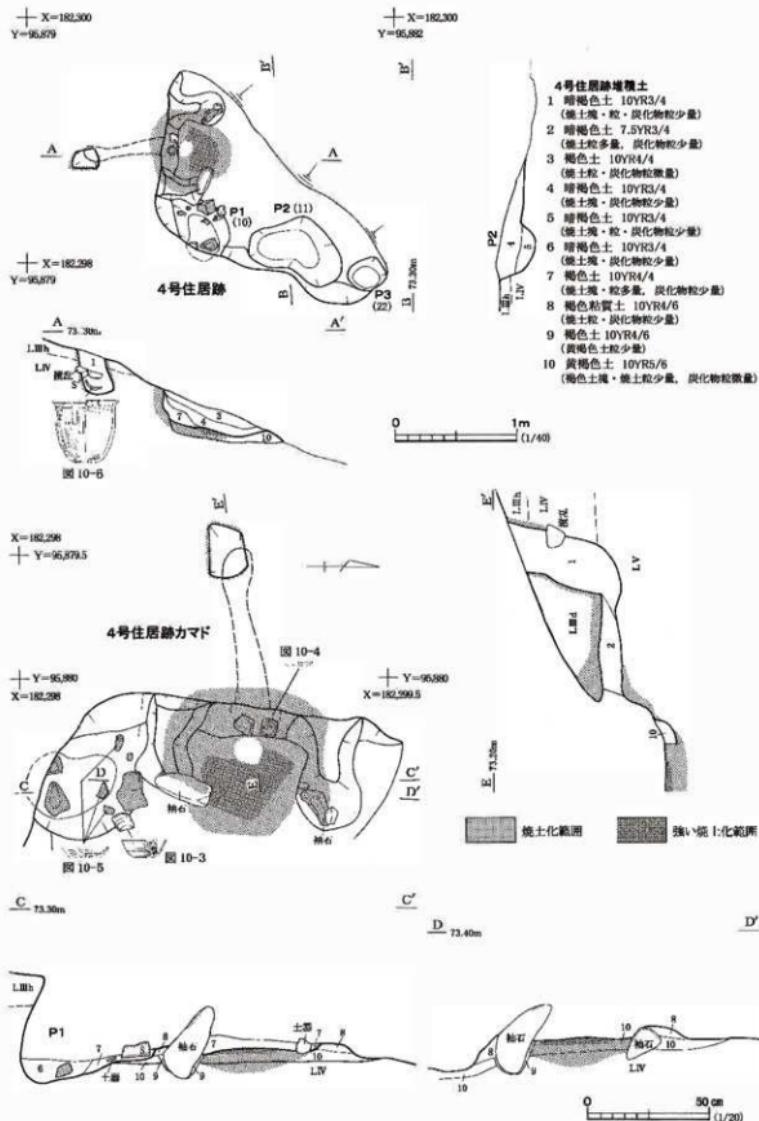


図9 4号住居跡

トの焼土化範囲は、煙道の天井からピット周縁部にかけて確認され、その厚さは1~2cmを測る。煙出しピット内からは、図10-6の土師器甕破片が割れた状態でピット底面付近から出土しており、カマド使用時に煙出しピット周辺で使用されていたものと考えられる。煙道はカマドからみると南側に傾き、煙出しピットから見て北側に傾いている。このため、煙道構築時に煙出しピット側とカマド側の両側から煙道を掘ったために、煙道が傾いたものと考えられる。

ピットは南壁際で3基を確認した。P1はカマド南側の袖に接する直径21cm、深さ10cmを測るカマドに伴う貯蔵穴と考えられる。P2は不整円形を呈するもので性格は不明である。P3は円形を呈する直径16cmのもので、その位置や形状から柱穴の可能性が高い。

遺物(図10、写真31)

出土遺物は土師器片85点である。杯・甕・筒形土器が出土しており、その多くは筒形土器の破片である。このうち土師器6点を図示した。

図10-1は土師器の筒形土器破片である。器形はほぼ直立に立ち上がり、口縁端部で内湾する。外面には指頭圧痕と輪積痕が残り、内面にはナデが施される。

同図2~4はロクロ成形の土師器杯であり、いずれも内面に黒色処理が施されている。2の黒色処理は、二次的な被熱により薄れている。底部切り離し調整は、2が静止糸切り、3・4が回転糸切りで、2・3の底部周縁から体部下端には手持ちヘラケズリが施される。

5・6は土師器甕である。5はロクロ成形で、胴部下端から底部にかけての破片である。底部は手持ちヘラケズリにより調整され、切り離し技法は不明である。6は非ロクロ成形のもので、約1/3が遺存する。器形は丸底風の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。器面調整は、外面にヘラケズリ後にナデ、内面にナデが施される。

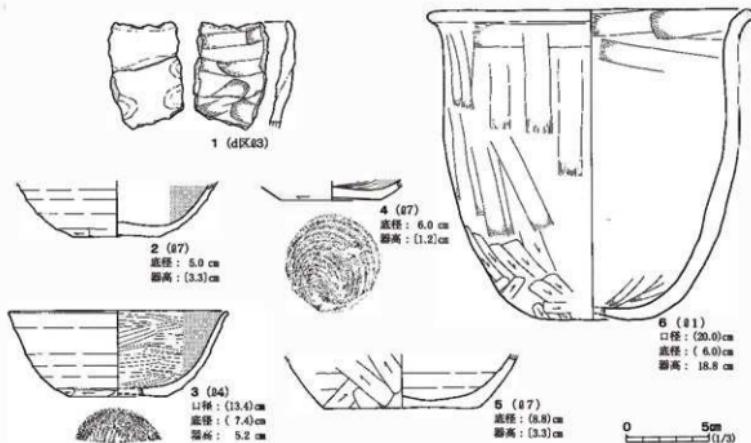


図10 4号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構はカマドとその周辺が確認された。所属時期は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

(鈴木)

5号住居跡 S I 05

遺構(図11・13、写真13・14)

本遺構は調査区北側斜面部のB1グリッドに位置し、LIV上面で検出した。住居跡の長軸は等高線に平行する。遺構の北側が試掘トレンチにより壊され、東側半分は斜面崩落のため失われている。

本住居跡では、当初カマドを確認した住居貼床下から焼土化範囲が確認され、住居の拡幅が行われたものと判断した。本住居跡では2時期確認されたことから、新しい方を5a号住居跡、古い方を5b号住居跡と命名した。

5a号住居跡 5a号住居跡は、遺存部分から推測すると、平面形は長方形であったと考えられる。規模は南北長350cm、東西遺存長260cmを測り、西壁の方位はほぼ真北を指す。検出面から掘形底面までの深さは、最大34cmを測る。貼床が設けられており、その上面は平坦に整えられている。貼床の厚さは、2~16cmである。周壁は、急角度で立ち上がるよう整形されている。

堆積土は4層に分けられる。①・②は廐室後の堆積土で、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。③は、床面南西隅の集石の下に認められた。④は貼床で、焼土塊・炭化物粒と遺物を多く含み、硬く踏みしめられていた。貼床範囲は、住居南西隅以外で確認された。貼床からは、硝酸塗と考えられる鉄滓と銀銀錠冶滓が出土している。

住居内施設として、カマド1基とピット3基を検出した。カマドは、西壁の中央よりやや南側に位置する。左右袖部の石組、石組間に収まるように広がる焼土化範囲、煙道を確認した。石組と煙道の向きから考えると、本遺構のカマドは主軸をN34°Eに向けていたと考えられる。石組の礫は右袖部に5点、左袖部に2点残存しており、長軸6~22cmほどの礫で構成されている。焼土化範囲は、最大9cmの厚さで赤褐色に変色している。煙道はわずかに残存しており、最大幅30cm、奥行き19cmを測る。

カマド内堆積土は、5層に分けられた。①・②には斜面上部から流れ込んだ堆積状況が認められるため、自然堆積と判断した。このうち①は、住居内堆積土の②に相当する。③・④は、堆積状況や含有物等からカマド崩落土と判断される。⑤は、カマド構築貼土塊を特に多く含んでいる。袖等が遺存しない状況から、カマドは壊されていた可能性が高い。

P1~3については、住居遺存部東端で確認した。P1は径24cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。堆積土は、LIV塊を少量含む黒褐色土である。P2・3は長軸23~31cmの楕円形状を呈し、深さは18~30cmである。堆積土は、焼土粒・LIV粒を少量含む黒褐色土である。

この他、集石部分では、住居掘形の掘り込みが10cmほど浅くなっている。集石は、9~44cm大の11点の礫で構成されている。カマドの近くであることから、カマドの使用に関わる施設であったこ

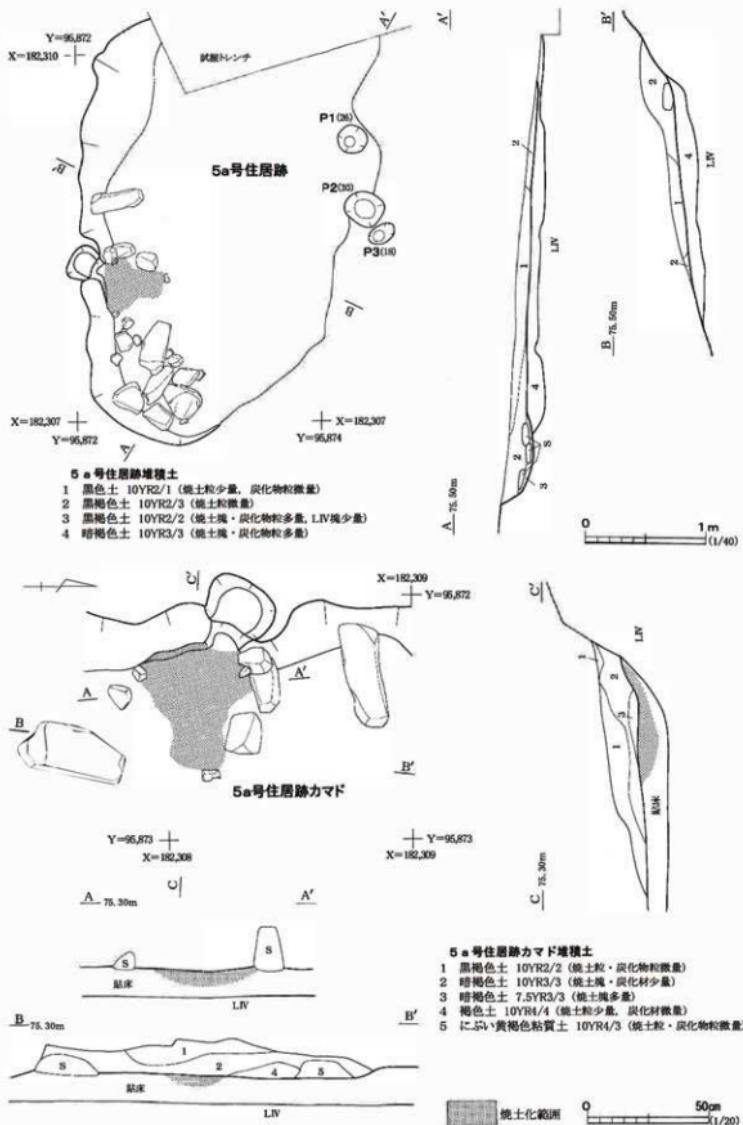


図11 5a号住居跡

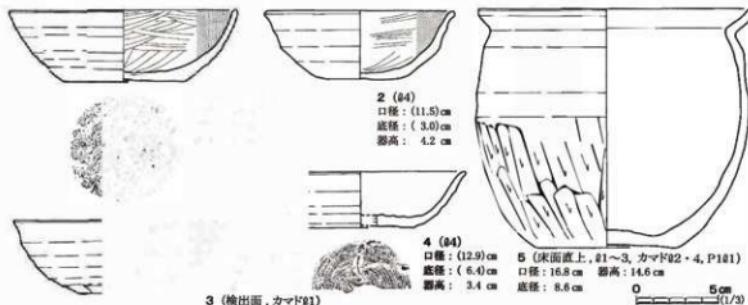


図12 5a号住居跡出土遺物

とが想定される。また、カマド北側の床面にも長軸42cm、幅15cmの四角柱状の礫を1点確認した。これもカマドに関係する可能性がある。

掘形には、北側と南側に段差が認められる。

5 b号住居跡 5 b号住居跡は、5 a号住居跡貼床下で検出した。5 a号住居跡と同様に、北側で試掘トレンチにより壊され、東側半分を斜面の崩落で失っている。遺存部分から推測すると、平面形は長方形と考えられる。規模は南北長350cm、東西遺存長240cmを測り、西壁の方位はほぼ真北を指す。周壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦に整えられている。

堆積土は1層である。 ℓ 1は貼床で、暗褐色土粒・塊を含む褐色土である。貼床は、床面全体に厚さ1~6cmで貼られており、踏み締まりは床面全体で確認された。

住居遺存部の中央に焼土化範囲を検出した。焼土化範囲は貼床面に形成されており、最大12cmの厚さで赤褐色に変色している。また、焼土化範囲から20cmほど離れた住居跡遺存部東端に、焼土塊集中域を確認した。貼床と同質の土が被熱した焼土塊の集中域で、床面の窪地部分で最大3cmの厚さに堆積している。

他に住居内施設として、ピット2基を確認した。それぞれ、住居南西隅で検出した。P1は、長軸22cmの楕円形を呈し、深さ8cmを測る。P2は、長軸66cm、幅54cmの楕円形を呈し、深さは3cmと浅いものである。5 a号住居跡で検出した集石と重複する。P1・2ともに、中には5 a号住居跡の貼床が充填していた。

遺 物 (図12, 写真31)

5 a号住居跡の遺物は、 ℓ 1~4・床面、カマド、 ℓ 1・2・4、P1・P3から縄文土器片7点、石器6点、土師器片263点、羽口3点、鉄滓6点が出土した。鉄滓は ℓ 1・2から出土した精鍊滓と考えられる鉄滓と鍛錬鍛冶滓である。5 b号住居跡の遺物は、 ℓ 1から土師器片が8点出土した。いずれも細片のため図示しなかった。そのうち、5 a号住居跡から出土した土師器甕1点、杯4点を図示した。

図12-1~4はロクロ成形の土師器杯である。器形を見ると、1~3は底部から体部が内湾気味

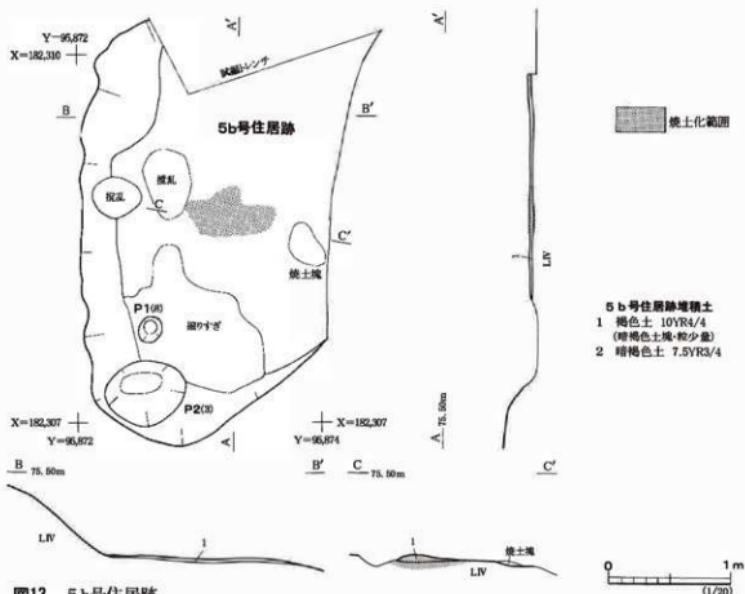


図13 5b号住居跡

に立ち上がり、このうち2・3は口縁部が外反する。4は、体部が直線的に立ち上がるものである。1～3の内面には、ヘラミガキ後黒色処理が施されているが、4には認められない。底部の切り離しは、1・2・4が回転糸切りである。3は体部下端から底部全面にかけて、手持ちヘラケズリ再調整が施されているため不明である。

同図5は、ロクロ成形の土師器甕である。小型のもので、底部から口縁部までの約7割が遺存する。器形は胴部が膨らみをもち、口縁部が「く」字状に開き、口唇部が上方につまみ出されている。底部の切り離しは、ミガキ状の再調整により不明である。器面調整は、外面の胴部下半にヘラケズリが施されている。

まとめ

本遺構は長方形を呈する堅穴住居跡であるが、試掘トレンチに壊され、また、斜面に構築されているため遺存状態が悪い。住居内で新旧が確認され、5a号住居跡が5b号住居跡の上に構築されている。

5a号住居跡の貼床からは、錫に覆われた精鍊滓と考えられる鉄滓と鍛鍊鍛冶滓が出土している。また、5b号住居跡では床面に焼土塊範囲や焼土塊の集中範囲が確認されている。このような状況から、5b号住居跡では鍛鍊鍛冶が行われていたものと考えられる。また、5a号住居跡構築時には、古い段階の5b号住居跡の鍛冶炉が壊されたものと考えられる。時期は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

(今野)

6号住居跡 S 106

遺構(図14、写真15)

本遺構は、B・E 1グリッドに位置する。東向き斜面裾部に構築され、遺構の約半分以上が失われている。このため、遺存状態は悪い。遺構検出面はしⅢh上面である。西側には43号土坑や11号焼土遺構が隣接する。本遺構は、検出段階でカマド袖石やその周辺から土師器が出土したことから住居跡と確認された。

本遺構の平面形は、遺存状態から方形状と推測される。煙道の軸方向はほぼ真西に近い。遺存規模は310×190cmで、深さはカマド付近で最大11cmを測る。周壁は西壁では急角度で立ち上がる。床面は凹凸があるものの平坦であり、踏み締まりは確認されなかった。

住居内堆積土は6層に細分された。 ℓ 1・2は流入土、 ℓ 3はカマド崩落土、 ℓ 4は支脚埋土、 ℓ 5はカマド袖の構築土、 ℓ 6は貼床である。

屋内施設としては、カマドとピットを確認した。カマドは西壁に取り付き、カマド両袖と燃焼面、煙道が確認され、燃焼面からは支脚が直立した状態で出土した。カマド両袖は、粘質土を使用して西壁と床面上に形成され、床面から最大8cmの高さまで遺存する。燃焼面は、64×62cmの範囲で確認され、中央は特に強く焼けていた。その厚さは最大6cmまで達する。

煙道は、西側に張り出し、トンネル状で煙出部に至る。規模は、奥壁から煙出部まで125cmを測り、幅は7~13cmである。煙出部は楕円形状を呈する。煙出部の底面には、煙道からの雨水等の侵入を防ぐと考えられるピット状の掘り込みが確認される。検出面からピット底面までの深さは45cmを測る。この他、支脚は燃焼面中央のやや南側で直立した状態で確認されている。支脚は、長さ19cm、幅8cmの棒状の花崗岩が使用されている。

ピットは1基を確認した。 P 1はカマド南側に接し、南側の一部が失われている。遺存規模は、54×33cmを測り、床面からの深さは4cmである。ピットの位置や規模から貯蔵穴と考えられる。

遺物(図15、写真31)

出土遺物は、繩文土器片1点、土師器片131点、須恵器片2点である。土師器片の多くはカマドから多く出土している。このうち、土師器3点、須恵器1点を図示した。

図15-1・2はロクロ成形の土師器杯である。器形は、いずれも底部から体部が内面気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。器面調整は内面にヘラミガキ後黒色処理が施されている。1の底部切り離しは回転糸切りであるが、2は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ再調整が施されている。2の外面は再び火を受けたことにより赤化し、器面の一部が剥落している。このため、内面の黒色処理が約半分以上薄れている。

図15-3は、ロクロ成形の土師器壺である。小型のもので、底部から口縁部までの約7割が遺存する。器形は、胴部が膨らみをもち、口縁部が「く」字状に開き口唇部が上方につまみ出されている。底部の切り離しは不明である。器面調整は、外面の胴部下端と内面胴部下半にヘラナデが施さ

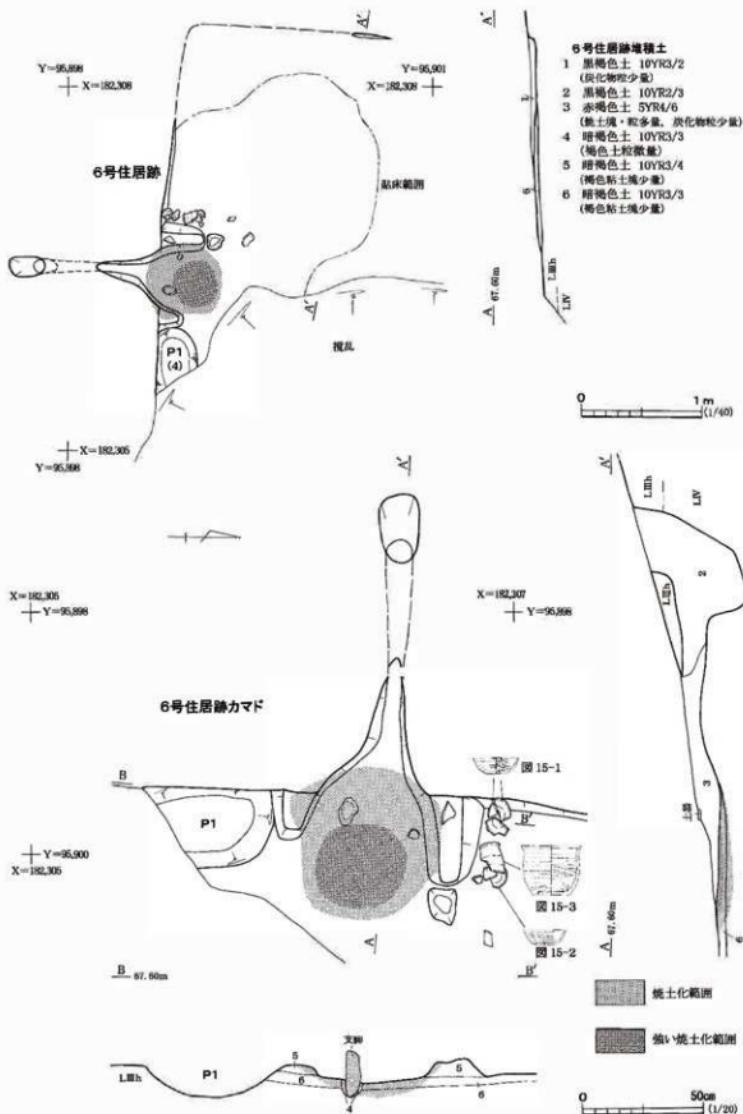


図14 6号住居跡

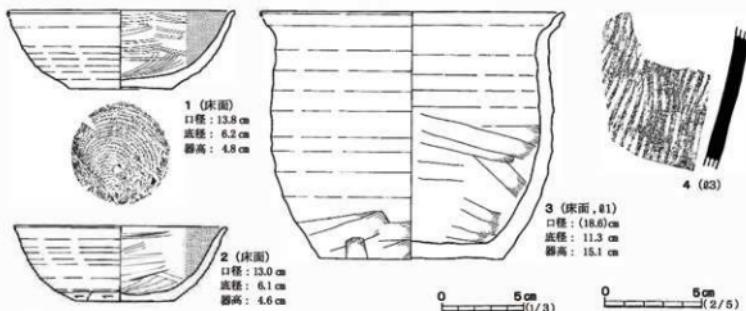


図15 6号住居跡出土遺物

れている。

図15-4は、須恵器甕の破片である。外面には明瞭なタタキ目痕が認められるが、内面にあて具痕は認められなかった。

まとめ

東向き斜面に構築された住居跡である。この斜面の上方には、本遺構と同様にカマドが取り付く4・5号住居跡が認められる。これらの住居跡は、出土遺物から本遺構に近いものと考えられる。時期は9世紀後半と考えられる。

(國井)

第3節 土 坑

土坑は48基検出された。調査区南側の平坦部では、縄文時代の貯蔵穴や平安時代の木炭焼成土坑等が確認される。また、調査区北側の東向き斜面では、近接する住居跡に関連する平安時代の土坑が確認されている。その他、調査区中央の北向き斜面では、木炭置場と考えられる時期不明の土坑が1基のみ確認されている。

1号土坑 SK01(図16、写真16)

本遺構は調査区南側のE・F10グリッドに位置し、LIIで検出した。遺構の北西端では、E10-P2と重複し、本遺構の方が古い。遺構の東には、8号土坑がみられる。平面形は隅丸方形を呈する。規模は130×111cmを測り、検出面の深さは最大24cmである。周壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。

堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積を示す。底面直上には炭化物が多量に認められた。

遺物は縄文土器片1点、鉄製品1点が出土した。鉄製品は棒状のものであるが、図示していない。本遺構は、焼土化した壁面は認められなかったが、底面に炭化物を多く含むことから木炭焼成土坑と判断した。所属時期は不明である。

(國井)

2号土坑 SK02 (図16・26, 写真16・32)

調査区南側平坦部のD7グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。平面形は椿円形であり、規模は157×114cmを測る。検出面からの深さは最大44cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は多少の凹凸があるものおむね平坦である。

遺物は、E1から縄文土器片27点が出土した。このうち2点を図示した。図26-1は口縁部で、外面に先のつぶれた工具により「X」字状の文様が描かれている。同図2は口縁部と胴部の境にわずかな稜状の高まりが認められ、この上に斜め方向の刻みが施されている。これらは、胎土や文様の特徴から同一個体と考えられる。

本遺構の時期については、判断できる遺物の出土はないが、縄文時代早期後葉と考えている。

(今野)

3号土坑 SK03 (図16, 写真16)

本遺構は調査区南側のF6・7グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN15° Eを示す。規模は116×76cmを測り、検出面の深さは最大18cmである。周壁は北壁を除いて急角度で立ち上がる。西壁上端の一部には焼土化範囲が認められ、その厚さは4cmを測る。底面はおむね平坦である。

堆積土は2層に分けられ、底面上には炭化材が、壁際には焼土粒や黄褐色土塊が認められた。遺物は出土していない。

本遺構は、焼土化した壁面や底面上に炭化物が多く認められることから木炭焼成土坑と判断した。所属時期は不明である。

(國井)

4号土坑 SK04 (図16・26, 写真16・32)

本遺構は、調査区南側のF・G9グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIaである。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN34° Eを示す。規模は111×82cmを測り、検出面の深さは最大34cmである。周壁は底面から全体的に急角度で立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの、おむね平坦である。堆積土は4層に分けられ、E1～4がレンズ状の堆積を示すが、E5は炭化物を多量に含み水平に堆積する。

遺物は縄文土器片4点、石器1点が出土した。このうち縄文土器1点を図示した。図26-3は単節の縄文地文上に平行沈線が施される。胎土には植物纖維痕が少量混和する。

本遺構は、焼土化した壁面や底面上に炭化物が多く認められることから木炭焼成土坑と判断した。時期は不明である。

(國井)

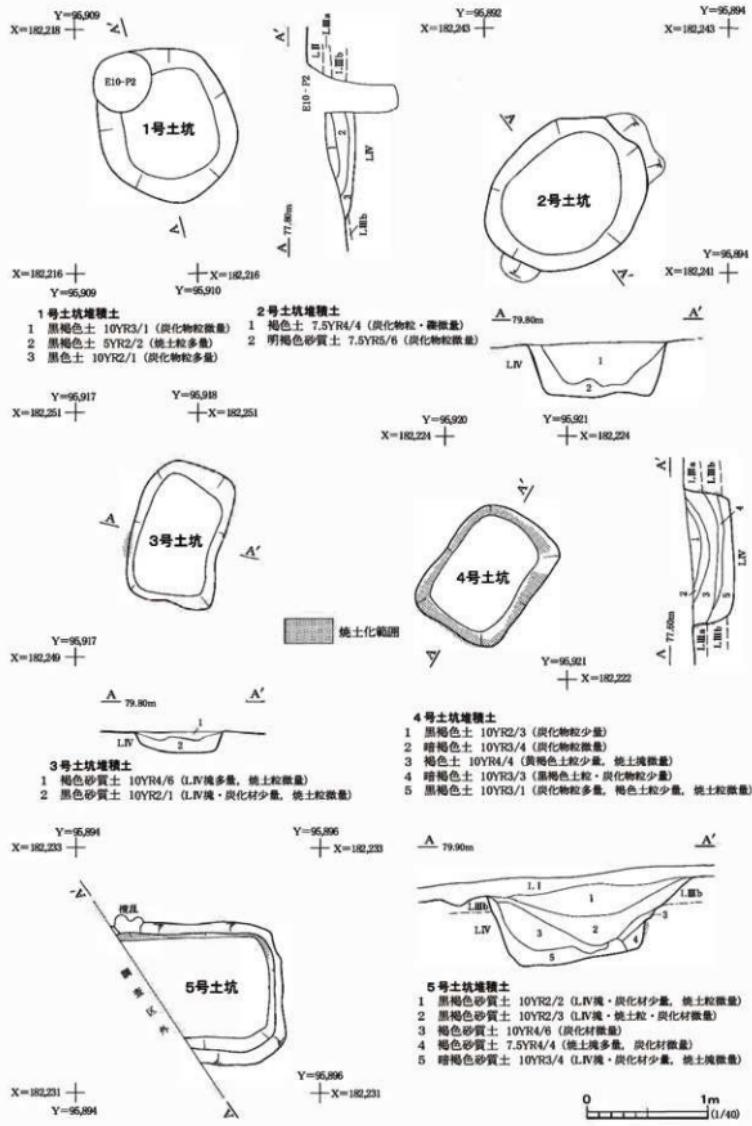


図16 1～5号土坑

5号土坑 SK05 (図16、写真17)

調査区南側平坦部のB8グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIbである。遺構の西側部分が調査区外に延びるため、全体像は不明である。遺構断面図に明らかであるが、本遺構周辺ではLIIの堆積が確認できなかった。遺構内堆積土は5層に分けられる。全体的にレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と判断した。E1・2がLIIに近似するため、本遺構は本来、LII面から掘り込まれた土坑であった可能性も考えられる。底面上には、焼土粒や炭化材が認められる。

今回調査できた範囲から推測すると、平面形は隅丸長方形であり、規模は145×118cmを測る。検出面からの深さは最大62cmである。周壁は、北壁において大きく崩落しているが、遺存部分から急角度で立ち上がっているのが分かる。北壁では焼土化範囲が認められ、最大3cmの厚さで赤褐色に変色している。底面は、若干南側に傾斜する。

遺物は、E5から土師器の細片1点が出土した。本遺構は、焼土化した壁面や底面上に炭化材を含むことから、木炭焼成土坑と考えられる。時期については、判断できる遺物の出土はないが、遺構の掘込面がLIIである可能性が高いことや、遺構の特徴から古代と考えている。(今野)

6号土坑 SK06 (図17、写真17)

本遺構は調査区北側のF8グリッドに位置し、LIIで検出した。遺構底面では、22号土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。遺構の南半分は掘りすぎにより壊している。遺構の遺存状況から平面形は隅丸長方形と推測される。遺存規模は140×82cmを測り、検出面の深さは最大30cmである。周壁は底面からやや急角度で立ち上がる。底面は凹凸が認められるが平坦である。

堆積土は4層に分けられ、レンズ状の堆積からおむね自然堆積と判断した。E1・2がLIIに近似するため、本遺構はLII面から掘り込まれたものと考えられる。底面直上には炭化物粒が多量に認められた。

遺物は縄文土器片7点、石器2点が出土した。いずれも図示していない。

本遺構は、焼土化した壁面が認められなかったが、底面上に炭化物粒を多く含むことから木炭焼成土坑と判断した。詳細な時期は不明であるが、遺構の掘込みがLIIの可能性が高いことや、遺構の特徴から古代と考えている。(國井)

7号土坑 SK07 (図17、写真17)

本遺構は調査区南側のF10グリッドに位置する。遺構検出面はLIIである。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN40°Eを示す。規模は135×120cmを測り、検出面からの深さは最大25cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は平坦である。

堆積土は3層に分けられた。E1がLIIに近似するため、本遺構はLII面から掘り込まれたものと考えられる。底面直上には炭化物粒が、壁際には焼土粒が認められた。

遺物は縄文土器片4点、石器1点が出土したが、いずれも図示していない。

本遺構は、焼土化した壁面が認められなかったが、底面上に炭化物粒や壁際に焼土粒が認められることから木炭焼成土坑と判断した。詳細な時期は不明であるが、遺構の掘り込みがL IIの可能性が高いことや、遺構の特徴から古代と考えている。

(國 井)

8号土坑 SK08 (図17・26、写真17・32)

本遺構は、調査区南側のF10グリッドに位置する。遺構検出面はL IIである。遺構の北東側が搅乱により壊されているため、遺構の全体像は不明である。遺構の遺存状態から、平面形は隅丸方形と推測される。遺存規模は50×55cmを測り、検出面の深さは最大30cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は東側に向かってやや低くなるが平坦である。

堆積土は3層に分けられる。L 1・2がレンズ状の堆積を示すが、L 3は炭化物を多量に含み水平に堆積する。L 1がL IIに近似するため、本遺構はL II面から掘り込まれたものと考えられる。

遺物は縄文土器片1点、石器1点が出土した。このうち縄文土器1点を図示した。図26-4は、外面に結束羽状縄文が施され、胎土には植物纖維が混和されている。

本遺構は、焼土化した壁面や底面上に炭化物を多く含むことから木炭焼成土坑と判断した。詳細な時期は不明であるが、遺構の掘り込みがL IIの可能性が高いことや、遺構の特徴から古代と考えている。

(國 井)

9号土坑 SK09 (図17、写真17)

調査区南側平坦面のG7・8グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。すぐ南東側に48号土坑が隣接し、1m南西には47号土坑がある。

平面形は不整長方形であり、規模は117×80cmを測る。検出面からの深さは最大19cmである。南側部分が大きく搅乱で壊されているが、遺存部分から周壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦であったと推測できる。東壁の一部が焼土化しており、最大2cmの厚さで明赤褐色に変色している。

遺構内堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の所属時期については、明確に判断できる遺物の出土はないが、遺構の形態から古代と考えている。

(今 野)

10号土坑 SK10 (図17、写真17)

本遺構は、調査区南側のE7グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。

平面形は長方形を呈し、主軸方位はN40°Eを示す。規模は126×82cmを測り、検出面の深さは最大44cmである。周壁は底面から全体的に急角度で立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの、おおむね平坦である。

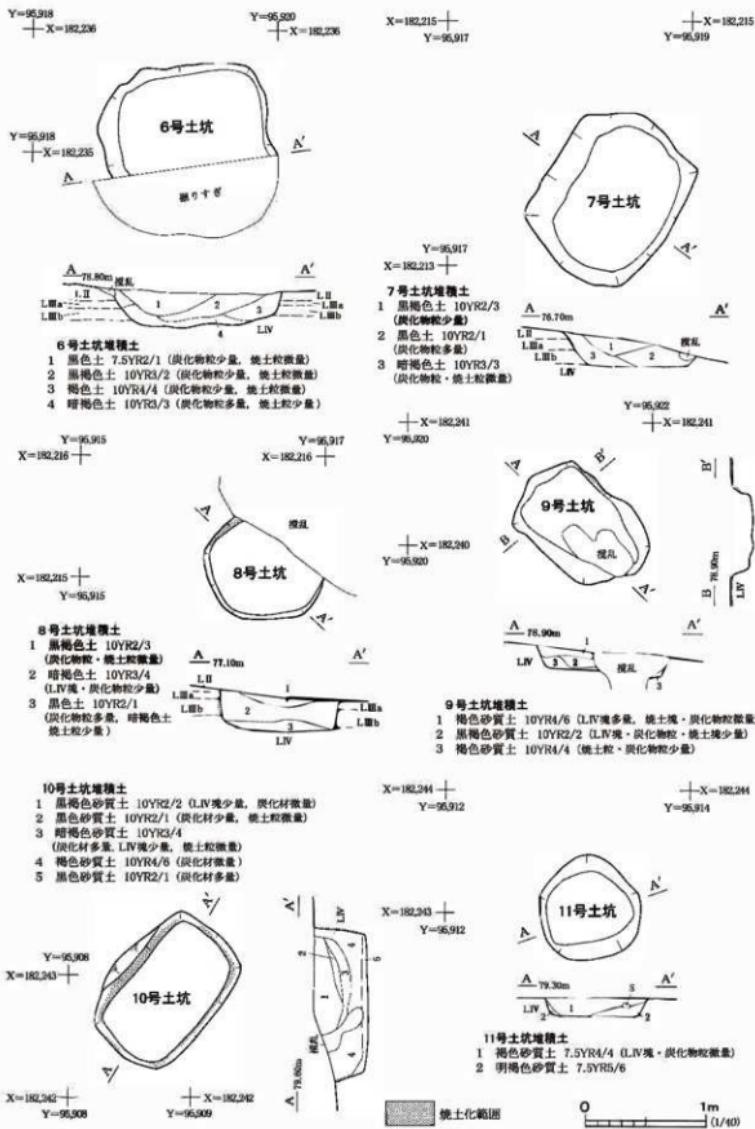


图17 6~11号土坑

堆積土は5層に分けられ、 ℓ 1～4がレンズ状の堆積を示すが、 ℓ 5は炭化材を多量に含み水平に堆積する。 ℓ 1がL IIに近似するため、本遺構はL II面から掘り込まれたものと考えられる。

遺物は縄文土器片4点が出土したが、いずれも細片のため図示していない。

本遺構は、焼成化した壁面や底面上で炭化材を多量に検出したことから木炭焼成土坑と判断した。詳細な時期は不明であるが、遺構の掘り込みがL IIの可能性が高いことや、遺構の特徴から古代と考えている。

(國 井)

11号土坑 S K11 (図17、写真17)

調査区南側平坦面のF 7グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。平面形は不整円形であり、規模は径78～86cmを測る。検出面からの深さは最大16cmである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。 ℓ 1はL III aに近似する。

遺物は、 ℓ 2から縄文土器片1点、石器1点が出土したが、いずれも図示していない。

本遺構の時期については、明確に判断できる遺物の出土がないため不明である。

(今 野)

12号土坑 S K12 (図18、写真17)

本遺構は、調査区南側のG 9グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。

平面形は楕円形を呈し、規模は54×74cmを測る。検出面からの深さは最大12cmである。周壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は南側に向かって低くなるがおおむね平坦である。遺構内堆積土は単層で、L III bに相当する土が流入したものと判断した。

遺物は縄文土器片2点が出土しているが、図示していない。縄文土器は、いずれも胎土に微量の植物纖維を含む縄文前期後葉のものである。

本遺構の時期は出土遺物や堆積土の特徴から縄文時代と考えておきたい。

(國 井)

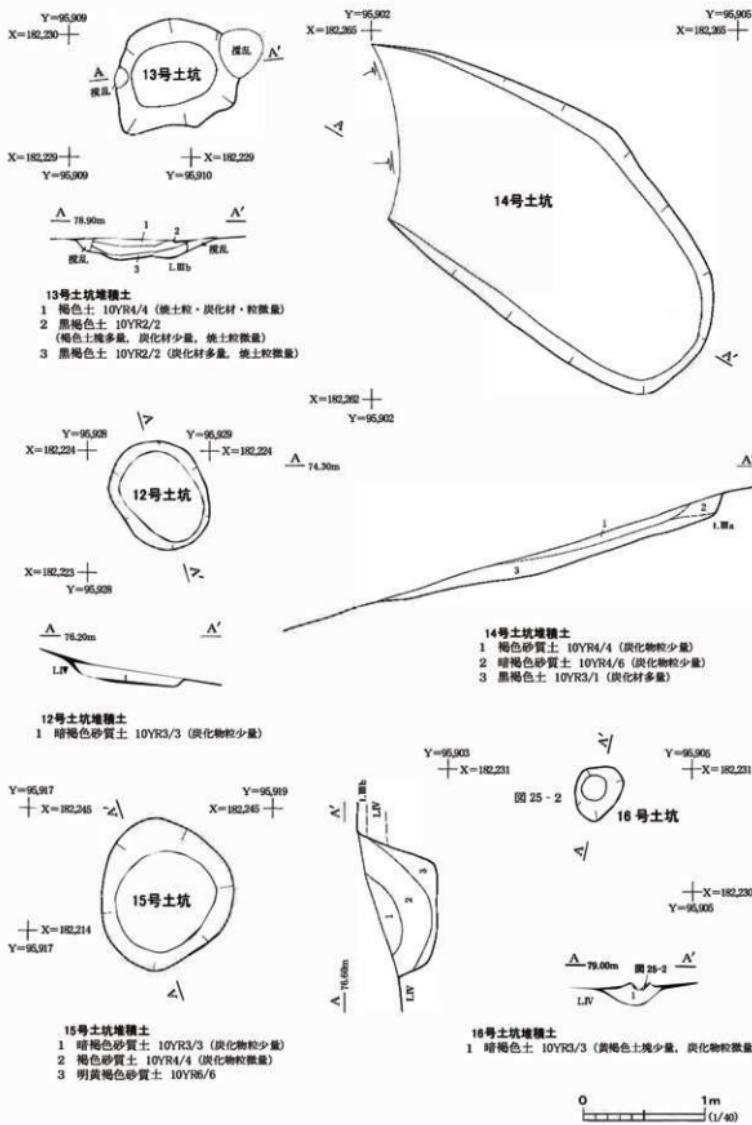
13号土坑 S K13 (図18、写真18)

本遺構は、調査区南側のE・F 8、E・F 9グリッドに位置する。遺構検出面は、L III b上面である。遺構の北には、2号住居跡が隣接する。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は103×84cmを測る。検出面からの深さは最大18cmである。周壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が認められるがおおむね平坦である。堆積土は3層に細分し、レンズ状堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺物は出土していない。

本遺構は、底面上に炭化材・炭化物粒が、壁際に焼土が認められることから木炭焼成土坑と判断した。時期は不明であるが、遺構の特徴から古代と考えている。

(國 井)



14号土坑 S K14 (図18, 写真18)

本遺構は調査区中央部北向き斜面のE 5 グリッドに位置する。遺構検出面はL III aである。周囲に遺構ではなく、単独で存在している。遺構の西壁は、斜面下側に当たるため失われている。遺存状態から、平面形は長楕円形と推測される。規模は368×178cmを測り、検出面の深さは最大17cmである。周壁は底面からやや緩やかに立ち上がる。底面は北西に向かって低くなるがおむね平坦である。

堆積土は3層に分けられ、I 1・2はレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。底面直上のI 3には10~20cmの炭化材や炭化物粒が多量に認められた。遺物は出土していない。

本遺構は、焼土化した壁面が認められず、地山まで掘り込んで構築していないため、木炭窯とは判断しなかった。底面上で炭化材を多く検出したことから木炭を仮置きしたものと考えている。所属時期は不明である。

(國 井)

15号土坑 S K15 (図18, 写真18)

調査区南側平坦部のF 10 グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。7号土坑の下から確認され、重複関係は本遺構の方が古い。平面形は楕円形を呈し、規模は127×109cmを測る。検出面からの深さは最大80cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は多少の小凹凸があるものの平坦である。

遺構内堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。I 1・2はL III a・bに相当すると考えている。遺物は出土していない。

本遺構は、形状から小型の貯蔵穴と考えられる。時期は、遺物が出土していないため不明であるが、堆積土や遺構の特徴から縄文時代と考えている。

(國 井)

16号土坑 S K16 (図18・25・26, 写真18・32)

調査区南側平坦部のE 8 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV 上面である。遺構の北側には20・38号土坑、東側には37号土坑が隣接する。調査当初、縄文土器の胴部下半が出土し、その周囲に小型のプランが確認されたため、埋蔵と考えたが、遺構や遺物の状態が悪いため土坑と判断して調査した。

平面形は楕円形を呈する。規模は48×35cmを測り、検出面の深さは最大14cmである。周壁は北壁を除いて緩やかに立ち上がり、断面形は掘り鉢状を呈する。堆積土は単層で、黄褐色土塊を含む人為堆積と判断した。土器はほぼ正位の状態で出土した。

遺物は縄文土器8点が出土し、このうち2点を図示した。図25-2は検出時に出土した胴部下半の土器である。外面は無文で内面には炭化した付着物が認められる。図26-5は単節縄文の原体を横と斜めの2方向から施している。本資料は、28号土坑から出土した図27-3の土器と同一

個体である。

本遺構は、土器の出土状況や堆積土から埋甕の可能性も考えられる。時期は出土遺物から縄文時代後期後半と考えられる。

(國 井)

17号土坑 S K17 (図19, 写真15)

調査区南側のH 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。本遺構は、堅穴状の遺構であるが、炉や柱穴が認められないため土坑と判断した。遺構は南向きの緩斜面に構築され、斜面下側に当たる南壁は認められない。遺存状態から、平面形は隅丸長方形と推測される。遺存する規模は331×169cmを測り、検出面の深さは最大42cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの、おおむね平坦である。堆積土は4層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片5点が出土した。いずれも、縄文時代早期末葉のものである。

本遺構は、大型の土坑である。詳細な時期は不明であるが、出土遺物から縄文時代早期末葉と考えている。

(國 井)

18号土坑 S K18 (図19, 写真16)

調査区北側平坦部のG 8 グリッドに位置する。遺構検出面はL III aである。遺構西側には、6号土坑が隣接する。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN71° Eを示す。規模は133×56cmを測り、検出面の深さは最大31cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がる。西壁を除く壁面には焼土化範囲が認められ、その厚さは3cmを測る。底面は平坦である。

堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積からおおむね自然堆積と判断した。底面直上には多量の炭化物粒が認められ、壁際には焼土粒が認められる。

遺物は縄文土器片2点が出土したが、いずれも図示していない。

本遺構は、焼土化した壁面や底面上に炭化物粒が認められることから木炭焼成土坑と判断した。詳細な時期は不明であるが、遺構の特徴から古代と考えている。

(國 井)

19号土坑 S K19 (図19・26, 写真18)

調査区北側のH 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の北側には、貯蔵穴と考えられる26・28~30号土坑が近接する。

平面形は梢円形を呈し、規模は121×104cmを測る。検出面からの深さは最大50cmである。周壁は北側が内傾気味に立ち上がるが、それ以外は直立気味に立ち上がる。底面はおおむね平坦である。遺構内堆積土は5層に細分し、レンズ状の堆積を示すことからおおむね自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片8点が出土している。縄文土器は、いずれも縄文時代早期末葉から前期前葉のものである。このうち1点を図示した。図26-6は外表面に条痕文が施されている。

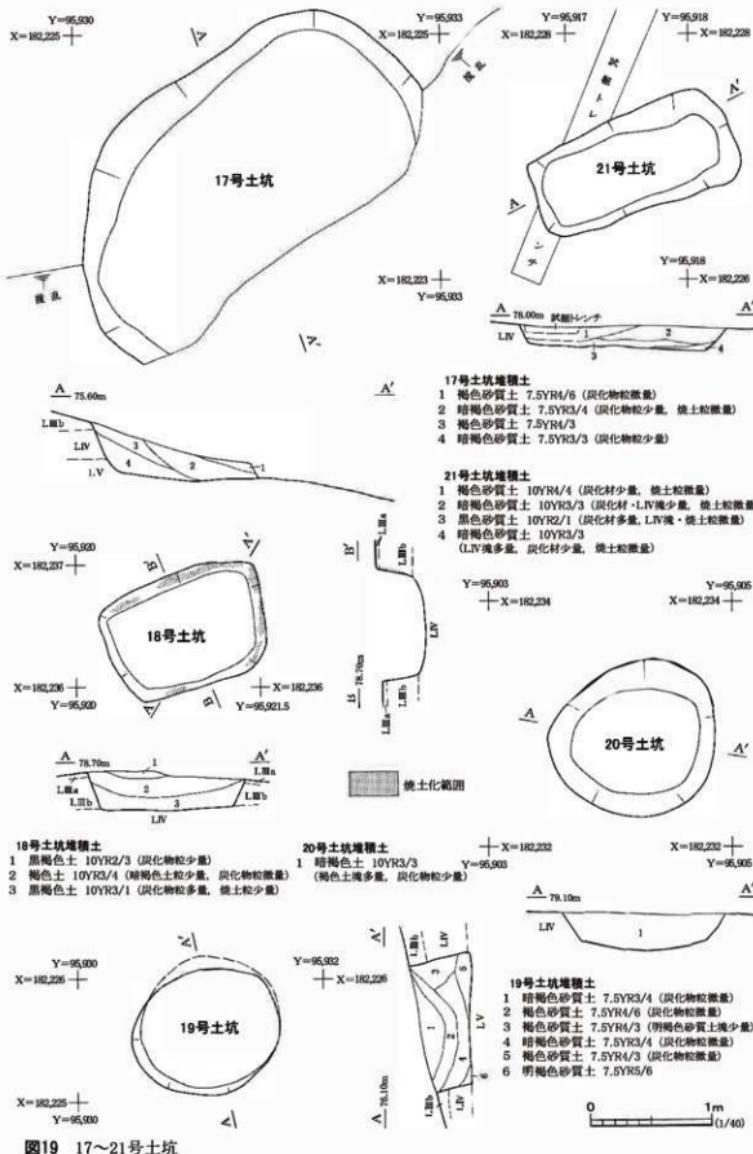


图19 17~21号土坑

本遺構は、形状から貯蔵穴と考えている。所属時期は、出土遺物から縄文時代早期末葉～前期前葉と推定される。

(國 井)

20号土坑 S K20 (図15、写真18)

調査区南側平坦部のE 8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。東側に38号土坑が隣接する。平面形は楕円形であり、規模は136×113cmを測る。検出面からの深さは最大30cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は中心部に向かって少しずつ深みを増していく。

遺構内堆積土は1層である。褐色土塊・炭化物粒を多く含んだ土が単層で擾形を埋没させていることから、人為堆積と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の時期は、遺物の出土がないため不明である。

(今 野)

21号土坑 S K21 (図19・26、写真19・32)

調査区北側平坦部のF 9グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。本遺構は試掘調査で確認された土坑である。そのため、土坑の西側の一部が壊されていた。

平面形は長方形を呈し、主軸方位はN68° Eを示す。規模は170×87cmを測り、検出面の深さは最大20cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は4層部分けられ、①・②は周囲からの流入、④は壁の崩落による自然堆積と考えられる。③は、水平に堆積し、炭化材が多量認められる。

遺物は縄文土器片1点、石器2点が出土し、このうち縄文土器を1点図示した。図26-7は内外面の条痕が施された土器である。

本遺構は、焼土化した壁面が認められなかったが、底面上に炭化材が認められることから木炭焼成土坑と判断した。詳細な時期は不明であるが、遺構の特徴から古代と考えている。

(國 井)

22号土坑 S K22 (図20、写真19)

調査区北側平坦部のF 8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面で検出した。本遺構は6号土坑下から確認され、重複関係は本遺構の方が古い。

平面形は楕円形を呈し、規模は90×78cmを測る。検出面からの深さは最大25cmである。周壁は底面からやや急角度で立ち上がり、底面は中央に向かって低くなる。堆積土は単層で、黒褐色土塊や褐色土塊を多量に含むことから人為堆積と判断した。堆積土に綺まりは認められなかった。遺物は出土していない。

本遺構は、小型の土坑で人為的に埋め戻されていた。時期は重複関係や堆積土に綺まりがないことから古代と考えている。

(國 井)

23号土坑 SK23 (図20, 写真15)

調査区南側平坦部のG 7グリッドに位置する。調査区境の土層断面から本遺構を確認した。このため、遺構の西側半分は表土除去の際に壊してしまった。遺構の西側部分が失われているため全体像は不明であるが、今回調査した範囲から推測すると、平面形は隅丸長方形である。遺存規模は、 $122 \times 100\text{cm}$ を測る。検出面からの深さは最大22cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

遺構内堆積土は4層に分けられる。遺構断面の観察から、L II上面から掘り込まれていた遺構であることが分かった。全体的に堅際の崩落に起因するL II塊を多く含むことから、自然堆積と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の時期については、遺物の出土がないため不明であるが、遺構の形態から古代と考えている。性格については不明である。
(今野)

24号土坑 SK24 (図20・26, 写真19・32)

調査区北側平坦部のF・G 8グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。開口部の平面形は橢円形を呈し、規模は $180 \times 150\text{cm}$ を測る。検出面からの深さは最大89cmである。また、底面の平面形は円形を呈する。周壁は、底面から壁上部にかけて直立あるいはオーバーハングする。底面は平坦でL V上面まで掘り込んでいる。

遺構内堆積土は6層に細分し、レンズ状の堆積を示すことからおおむね自然堆積と判断した。6から8からは縄文時代早期末葉の土器や焼土がまとまって出土したことから、これらの土器や焼土等は自然埋没する段階で一時的に投棄が行われたものと考えられる。

遺物は縄文土器片56点、石器6点が出土している。そのうち、縄文土器6点を図26-8~13に示した。8~10は比較的細い単沈線で山形や矢羽状の文様が施され、10では縦走縄文上に描かれている。8の口縁端部には刺突が施されている。11~13は縄文地文のもので、11・12には0段多条の原体が使用され、12では縦走縄文が施されている。13は単節斜縄文で、内面の口縁上部にも外面と同一原体による縄文が施されている。これらの土器は、いずれも縄文時代早期末葉のものと考えられる。

本遺構は、形状から大型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。
(国井)

25号土坑 SK25 (図20, 写真19)

調査区北側平坦部のG 9グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の北側は、調査の段階で掘りすぎにより壊してしまった。

平面形は橢円形を呈し、規模は $132 \times 117\text{cm}$ を測る。検出面からの深さは最大34cmである。周壁は、

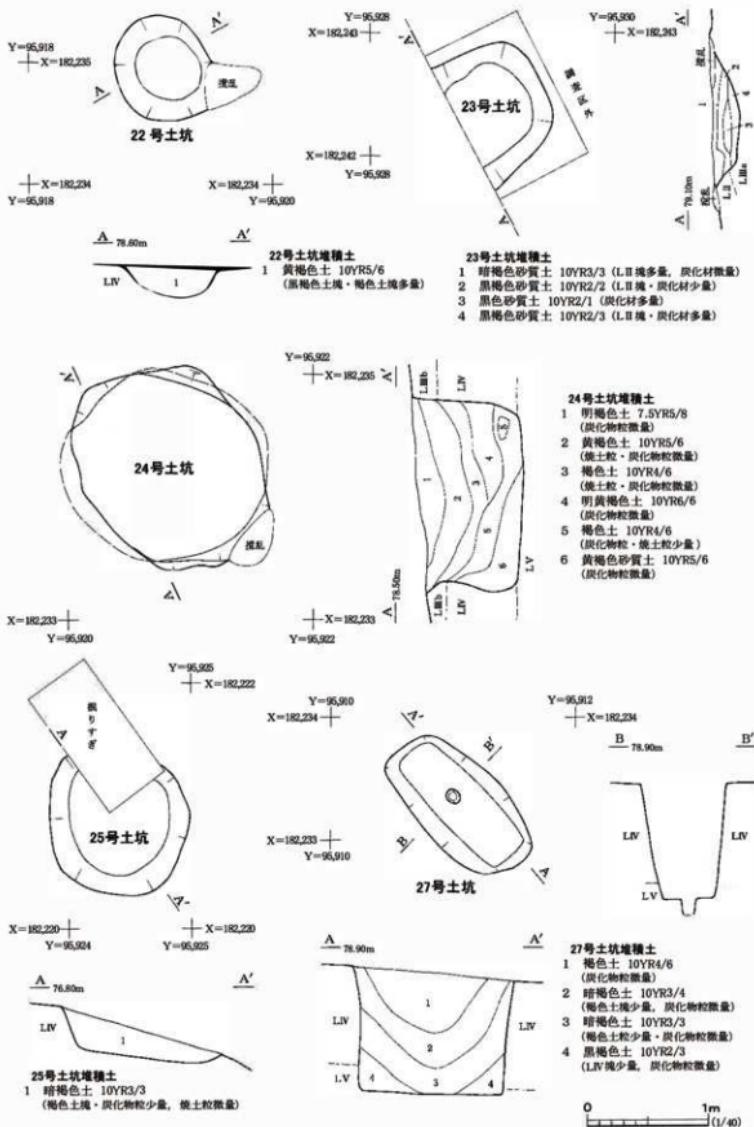


图20 22~25·27号土坑

南壁が緩やかであるが、それ以外は急角度で立ち上がる。底面はおおむね平坦である。

遺構内堆積土は単層で、褐色土塊を不均一に含むことから人為堆積と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物がないため不明である。

(國 井)

26号土坑 S K26 (図21・26・27、写真19・32・34)

調査区南側平坦部のG 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の南側は、調査時に掘りすぎてしまった。遺存状態から平面形は円形と推測され、規模は直径150cmを測る。検出面からの深さは最大77cmである。周壁は、北側でオーバーハングするが、それ以外は直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は5層に細分し、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

遺物は、胎土に植物纖維を混和した縄文土器片74点、石器17点が出土している。石器はすべて剥片である。このうち、縄文土器4点、石器1点を図26-14~16、図27-11に示した。

図26-14・15は内外面に条痕文が施されている。15は波状口縁の破片で、波頂部下には刻み状の刺突が施され、縦方向の隆帯が取り付いている。16は単節の斜縄文が施されている。

図27-11は石鑿である。基部の抉りが非常に浅く、側縁部にのみ簡単な調整が施されている。

本遺構は形状から小型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

27号土坑 S K27 (図20・26・27、写真19・32・34)

調査区南側平坦部のF 8 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。本遺構は3号住居跡、F 8 - P 8 と重複し、3号遺跡より新しく、F 8 - P 8 よりは古い。開口部の平面形は長方形を呈し、主軸方向はN 42° Wである。規模は130×72cmを測り、検出面からの深さは最大102cmである。底面の平面形は長方形を呈し、規模は120×44cmを測る。周壁は底面から直立気味に立ち上がる。底面は平坦で、中央部には直径13cm、底面からの深さ15cmの小穴が認められる。堆積土は4層に細分し、レンズ状の堆積を示す自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片6点、石器6点が出土している。このうち縄文土器4点、石器2点を図示した。

図26-17~20は縄文土器である。17・18は外面に斜縄文が施され、口縁端部に刻み状の刺突が施されている。19は縦走縄文上に単沈線で山形状の文様が描かれている。20は結束羽状縄文が施されている。

図27-9は石鑿である。基部の抉りが浅く、縦長の二等辺三角形を呈する。器面全体に調整剥離が施されている。同図12は小型の打製石斧である。裏面には調整がほとんど加えられていない。

本遺構は、落穴状土坑である。時期は縄文時代前期初頭以降と考えられる。

(國 井)

28号土坑 SK28 (図21・26, 写真19・32)

調査区南側平坦部のG・H 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構北側が26号土坑に掘り込まれているため、本遺構の方が古い。北側には29・30号土坑、南側には19号土坑が近接する。

平面形は円形を呈し、規模は直径24cmを測る。検出面からの深さは最大74cmである。周壁は北壁から東壁にかけてオーバーハングしているが、南壁から西壁にかけては直立気味に立ち上がる。底面は平坦で、L V上部まで掘り込んでいる。

遺構内堆積土は4層に細分した。レンズ状の堆積を示しているが、堆積土内にL IVに相当する黄褐色土塊を含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は縄文土器片131点、石器1点が出土している。縄文土器は内面に条痕が見られないものが多く、外面には竹管凸面を使用した沈線文、撚糸文や非結束羽状縄文が施されている。このうち、縄文土器2点を図26-21・22に示した。21は内外面に条痕が施され、口縁端部には刻み目が見られる。22は外面に縄文、内面には条痕が施される。

本遺構は、形状から大型の貯蔵穴と考えられる。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

29号土坑 SK29 (図21・27, 写真20・34)

調査区南側平坦部のG 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の東側で30号土坑を掘り込んでいるため、本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は5層に細分されている。レンズ状の堆積を示しているが、褐色土塊・黄褐色土塊を含むことから、自然堆積する段階で人為的な投棄が行われたものと考えられる。

平面形は梢円形を呈し、規模は50×50cmを測り、検出面からの深さは最大70cmである。周壁は、東壁で直立気味になる以外、オーバーハングする。底面は平坦である。

遺物は縄文土器片2点、石器1点が出土している。縄文土器は、いずれも外面に縄文、内面に条痕が施されている。図27-10に石器を示した。10は縦長の石鑿である。基部の抉りが浅く、器面全体に調整剥離が施されている。

本遺構は形状から小型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

30号土坑 SK30 (図21・26・27, 写真20・32・34)

調査区北側平坦部のG 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の東側が26号土坑、西側が29号土坑に掘り込まれているため、本遺構はこの両土坑よりも古い。

遺構内堆積土は4層に細分され、褐色土塊や黄褐色土塊を多量に含むことから、人為堆積と判断

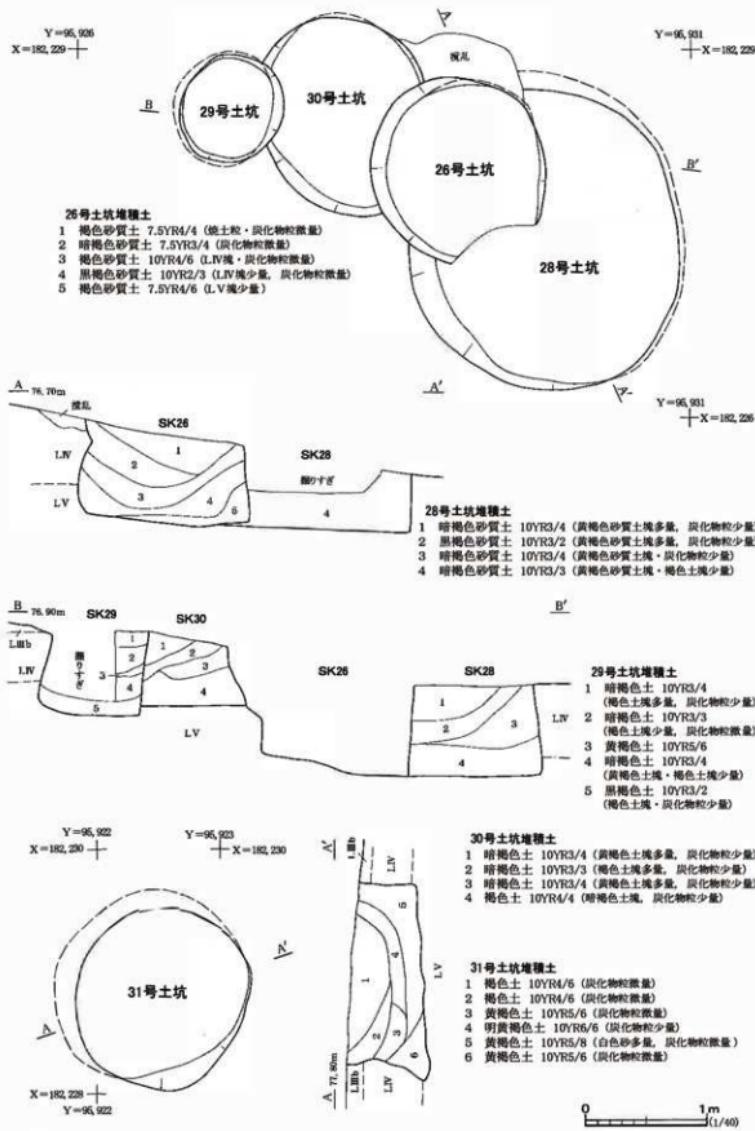


図21 26・28~31号土坑

した。平面形は梢円形を呈し、規模は 168×140 cmを測る。検出面からの深さは最大61cmである。周壁は、北壁でオーバーハングする以外、直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文土器片19点、石器10点が出土している。石器はすべて剥片である。このうち、縄文土器4点、石器1点を図示した。図26-23～26は縄文土器である、23は器壁が厚く、内外面に条痕が施されている。24は器壁が薄く、外面に貝殻文が施されていることから、縄文時代早期中葉の土器と考えられる。25は縄文地文上に横と斜め方向の沈線が施されている。この土器は、図25-1と同一個体と考えられる。26は平行沈線が施されている。図27-13は削器である。素材剥離の比較的直線的な側縁部に刃部を形成している。

本遺構は形状から中型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

31号土坑 S K31 (図21・25・26、写真20・32)

調査区北側平坦部のG 9グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の南側には2号住居跡が近接している。遺構内堆積土は6層に細分され、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は円形を呈し、規模は直径150cmを測る。検出面からの深さは最大65cmである。周壁は、北壁から西壁にかけてオーバーハングする以外、直立気味に立ち上がる。底面は凹凸が見られるがおおむね平坦である。

遺物は縄文土器片26点、石器1点が出土している。縄文土器は、いずれも胎土に植物纖維が混和されている。このうち縄文土器3点を図25-1、図26-27・28に示した。図25-1は47号土坑から出土した土器と接合したもので、縄文地文上に斜め方向の沈線が施されている。図26-27・28は外面に縄文が施され、28の縄文は縱方向に施される。

本遺構は形状から中型の貯蔵穴と考えている。本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代早期末葉と推定される。

(國 井)

32号土坑 S K32 (図22・26・27、写真20・32)

調査区南側平坦部のE 9グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はL III bである。開口部の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN18°Wである。規模は 144×94 cmを測り、検出面からの深さは最大70cmである。底面の平面形は長方形を呈し、規模は 118×47 cmを測る。周壁は底面から直立気味に立ち上がる。底面は平坦で、小穴は認められなかった。堆積土は4層に細分し、レンズ状の堆積を示す自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片3点、石器2点が出土している。このうち縄文土器2点を図示した。図26-29は外面に結束羽状縄文が施され、口縁端部には刺突が施されている。図27-1は外縁に条痕が施された波状口縁の破片である。外面には縦方向の隆帯が2本平行するように貼り付けられ、隆帯の

下に短沈線が施されている。

本遺構は、底面ピットをもたない落し穴状土坑である。時期は縄文時代と考えられる。(國 井)

33号土坑 S K33 (図22、写真20)

調査区北側平坦部のG 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構内堆積土は4層に細分され、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積を判断した。

平面形は楕円形を呈し、規模は162×142cmを測る。検出面からの深さは最大58cmである。周壁は、底面から直立気味に立ち上がるが、上端部にかけては外側に傾く。底面は平坦で、L V上面まで掘り込んでいる。遺物は出土していない。

本遺構は、底面にピットが見られる中型の貯蔵穴と考えられる。本遺構の時期は、出土遺物がないため不明であるが、遺構の特徴から縄文時代と考えられる。

(國 井)

34号土坑 S K34 (図22・27、写真20・32)

調査区南側平坦部のE・F 9 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の上部に6号焼土遺構が認められ、新旧関係は本遺構の方が古い。遺構内堆積土は単層で、褐色土塊を不均一に含むことから埋め戻されたものと考えられる。

平面形は楕円形を呈し、規模は110×100cmを測る。検出面からの深さは最大16cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は平坦である。底面の南西側には、火を使用した痕跡が認められ、その厚さは4cmまで及ぶ。

遺物は縄文土器片3点が出土している。このうち、縄文土器1点を図27-2に示した。2は内外面に条痕が施された口縁部破片である。外面には縦方向の隆帯が貼り付けられ、隆帯上に刺突が施されている。口縁端部には刻み状の刺突が施されている。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、遺物や遺構の状況から縄文時代と考えている。

(國 井)

35号土坑 S K35 (図22・27、写真21・35)

調査区南側平坦部のG 8 グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。本遺構からは、大型の平石が3枚重なった状態で確認された。遺構の南東側は掘りすぎにより壊してしまった。

遺構内堆積土は単層で、褐色土塊や褐色土粒を不均一に含むことから埋め戻されたものと考えられる。遺存状態から平面形は楕円形と推測され、遺存する規模は134×80cmを測る。検出面からの深さは最大23cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は北に向かって低くなるが平坦である。

平石は断面図に示したように、埋め戻された土の上に3枚重なって出土した。この平石を確認したところ、上の石は僅かに敲打痕が認められ(図27-16)，真ん中の石は石皿(図27-15)，下の石には使用痕跡は認められなかった。いずれも、安定して置くことが可能なものであるため、石



图22 32~36·38号土坑

Ⅲ以外は台石として使用された可能性がある。

遺物は石製品2点が出土している。図27-15は石皿である。石皿は周縁を打ち欠いて皿状に成形されており、表面にやや窪むような磨面が認められる。同図16は表面の中央に敲打痕が認められることから台石と考えられる。表面は裏面に比べ、滑らかである。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、遺物や遺構の状況から縄文時代と考えている。(國井)

36号土坑 S K36 (図22、写真21)

調査区北側東向き斜面のB2グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は2層に細分される。L2の黄褐色粘質土は上面が水平で硬く綺りがあることから、構築時に10cm前後の厚さで貼ったものと考えられる。L1は遺構廃絶後に堆積したもので、自然あるいは人為的要因によるものか判断できなかった。

平面形は橢円形を呈し、規模は84×75cmを測る。検出面からの深さは最大32cmである。周壁は全般的に急角度で立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

遺物は土器片1点が出土した。時期は、周囲から確認されている平安時代の住居跡の時期に近いものと考えている。(國井)

37号土坑 S K37 (図23、写真21)

調査区南側平坦面のE8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。1m北に38号土坑がある。遺構内堆積土は単層であり、L1はLIIIbに起因する土であることから、自然堆積と判断した。平面形は隅丸長方形であり、規模は100×90cmを測る。検出面からの深さは最大32cmである。遺構の南側部分が搅乱で壊されているが、遺存部分から周壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦であったと推測される。遺物は出土しなかった。

本遺構の時期については、遺物の出土がなく明確ではないが、縄文時代の遺物包含層であるLIIIbが遺構内に堆積していることから、縄文時代と考えている。(今野)

38号土坑 S K38 (図22・27、写真21)

調査区南側平坦面のE8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。西側に20号土坑が隣接し、1m南には37号土坑がある。遺構内堆積土は単層である。L1はLIIIbに起因する土であることから、自然堆積と判断した。平面形は橢円形であり、規模は162×138cmを測る。検出面からの深さは最大32cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は若干の凹凸があるもののおおむね平坦である。

遺物は、L1から縄文土器片12点が出土した。縄文土器は、胎土に纖維を含まないものである。このうち1点を図27-3に示した。3は、単節縄文の原体を横と斜め回転で施文したものである。この土器は、16号土坑から出土した図26-5と同一個体である。

本遺構の時期は、出土遺物から縄文後期と考えている。

(今 野)

39号土坑 S K39 (図23、写真21)

調査北側東向き斜面のC 2 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構内堆積土は単層で、暗褐色土塊を多量に含むことから人為的に埋め戻されたものと考えている。

平面形は不整橢円形を呈し、規模は131×127cmを測る。検出面からの深さは最大100cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がり、底面は若干の凹凸が見られるがおおむね平坦である。

遺物は縄文土器片1点が出土した。胎土に纖維を含まないものである。

本遺構は、時期・性格とともに不明である。

(國 井)

40号土坑 S K40 (図23、写真21)

調査区北側東向き斜面のB 2 グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はL IV上面である。本遺構は斜面に構築され、斜面下側にあたる南壁は失われていた。遺構の北側には4号住居跡、南側には36号土坑が近接する。遺構内堆積土は単層でL IIが流入したものと考えられる。

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は68×47cmを測る。検出面からの深さは14cmである。周壁は南壁を除いて全体的に急角度で立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

遺物は土師器12点が出土した。土師器は全て筒形土器である。

本土坑の時期は、堆積土にL IIが入ることから、周囲で確認されている平安時代の住居跡の時期に近いものと考えている。

(國 井)

41号土坑 S K41 (図23、写真21)

調査区中央北向き斜面のD 7 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の南西側には13号焼土遺構が近接する。遺構内堆積土は2層に分けられ、斜面上部からL III aが流入したものと考えられる。平面形は橢円形を呈し、規模は113×79cmを測る。検出面からの深さは最大37cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がる。底面は北壁が低くなるがおおむね平坦である。

時期は、堆積土にL III aが入ることから、縄文時代のものと考えている。

(國 井)

42号土坑 S K42 (図23、写真21)

調査区北側東向き斜面のD 2 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構内堆積土は単層で、斜面上部からL IIが流入したものと考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は50×78cmを測る。検出面からの深さは最大18cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がる。底面は小凹凸が見られるがおおむね平坦である。遺物は出土していない。

時期は、堆積土にL IIが入ることから、周囲で確認されている平安時代の住居跡の時期に近いものと考えている。

(國 井)

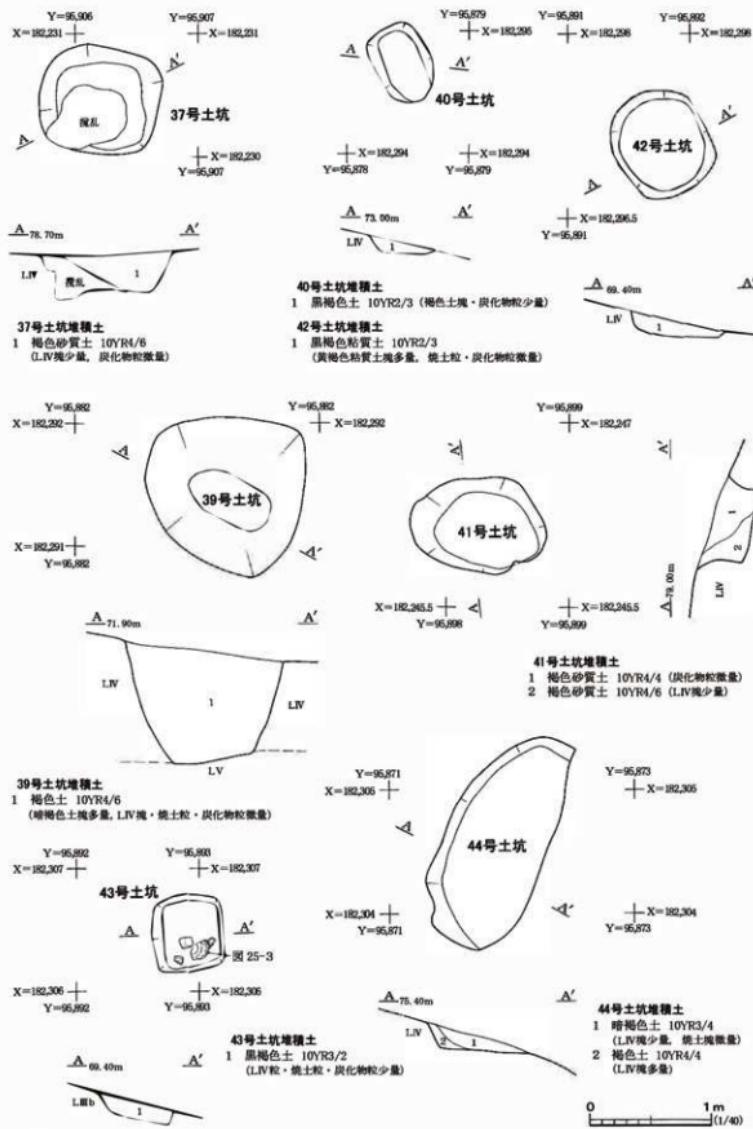


图23 37·39~44号土坑

43号土坑 SK43 (図23・25、写真22・32)

調査区北側東向き斜面のB1グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIaである。遺構の北側には11号焼土遺構が近接する。遺構内堆積土は単層で、LIIに相当する。この中にLIV粒や焼土粒を含むことから人為堆積と判断した。

平面形は正方形を呈し、規模は一辺62cmを測る。検出面からの深さは14cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がる。底面は小凹凸が見られるがおおむね平坦である。遺構の南側の底面付近から土師器杯が伏せられた状態で出土した。

遺物は土師器片15点が出土した。このうち1点を図25-3に示した。3はロクロ成形の土師器高台付杯である。高台が欠損し、約9割が遺存する。杯部は底部が回転糸切り技法によるもので、底部周縁には高台を取り付けた痕跡が認められる。器形は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反する。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施されている。

本遺構の時期は、出土遺物や遺構内にLIIが入ることから、周囲で確認されている平安時代の住居跡の時期に近いものと考えている。

(国井)

44号土坑 SK44 (図23、写真22)

調査区北側斜面部のB1グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。1~2m離れたところに5号住居跡と45号土坑がある。

遺構内堆積土は2層に分けられる。斜面上部から流れ込んだような堆積状況を示すことから、自然堆積と判断した。斜面上に立地するため、東側が大きく崩落しているが、遺存部から平面形は隅丸方形と推測される。遺存規模は187×93cmを測る。検出面からの深さは最大18cmである。周壁は南壁以外が急角度で立ち上がり、底面は平坦であったことが分かる。遺物は出土しなかった。

本遺構の時期については、遺物の出土はないものの、調査区北側では平安時代の遺構が検出されていることから、本遺構も同時期のものと考えている。

(今野)

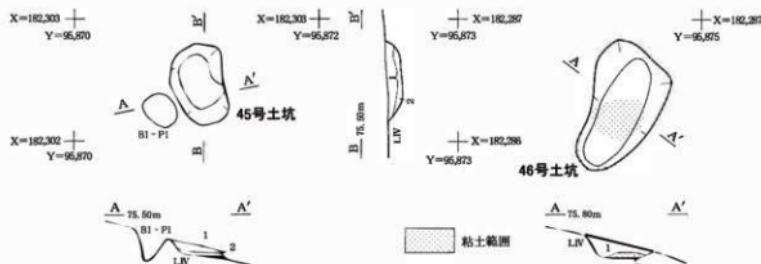
45号土坑 SK45 (図24、写真22)

調査区北側斜面部のB1グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。0.8m北東に44号土坑がある。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。L1は、LIIに起因する土である。

斜面上に立地するため、東側が崩落しているが、遺存部から平面形は隅丸長方形と推測される。遺存規模は67×48cmを測る。検出面からの深さは最大10cmである。遺存部から、周壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦であったことが分かる。

本遺構の時期については、遺物の出土はないが、調査区北側では古代の遺構が検出されていることから、本遺構も同時期のものと考えている。

(今野)

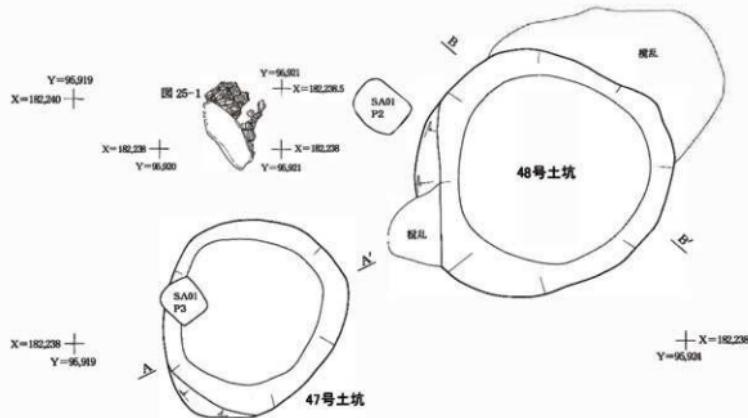


45号土坑填土

- 1 黑褐色土 10VR2/3 (燒土塊、黃褐色土粒少量、炭化物粒微量)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (燒土粒少量、炭化物粒微量)

46号土坑填土

- 1 暗褐色土 10VR2/3 (LIV塊、炭化物粒少量)
- 2 暗褐色質土 7.5YR4/4 (燒土塊微量)



47号土坑填土

- 1 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物粒微量)
- 2 暗褐色砂質土 10YR4/4 (炭化物粒微量)
- 3 暗褐色土 10YR4/4 (炭化物粒微量)
- 4 暗褐色砂質土 10YR4/6 (炭化物粒微量)

- 1 暗褐色砂質土 10YR3/3 (炭化物粒微量)
- 2 黑褐色砂質土 10YR2/3 (炭化物粒微量)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/4 (LIV塊微量)
- 4 黃褐色砂質土 10YR5/6



圖24 45~48號土坑

46号土坑 SK46 (図24・27, 写真22)

調査区北側斜面部のB 3 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。

遺構内堆積土は2層に分けられる。 ℓ 2は焼土塊を多量に含む褐色粘質土で、本遺構底面に貼られたものである。本遺構開口時には ℓ 2上面が使用面になっていたと考えられるが、その範囲は底面中央部にとどまっている。 ℓ 1は、L IIに起因する自然堆積土と判断した。平面形は不整梢円形であり、規模は106×64cmを測る。検出面からの深さは16cmである。周壁は、斜面下に向かって東壁が崩落しているが、本来は西壁のように急角度で立ち上がっていたものと考えられる。開口時の使用面である ℓ 2上面はおおむね平坦であるが、西側ほど ℓ 2の厚さが薄くなるため、若干傾斜している。掘形の底面は平坦である。

遺物は、 ℓ 1から土師器片14点、須恵器片1点、羽口1点が出土した。このうち、須恵器と羽口を図示した。図27-6は須恵器甕で、外面にタタキ目痕が認められる。同図7は先端付近が残る羽口である。先端付近には熱変化による変色が認められるが、鉄滓の付着は認められない。このような特徴から、本資料は鍛冶炉に使用されたものと考えられる。

本遺構は、鍛冶炉に使用されたと考えられる羽口が出土することから、鉄滓が出土した5号住居跡と関連する可能性がある。また、周辺には鍛冶関連の遺構が存在するものと考えられる。時期は、出土遺物から平安時代と考えている。

(今野)

47号土坑 SK47 (図24・25・27, 写真22・32・34)

調査区南側平坦部のF・G 8 グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構の北東側

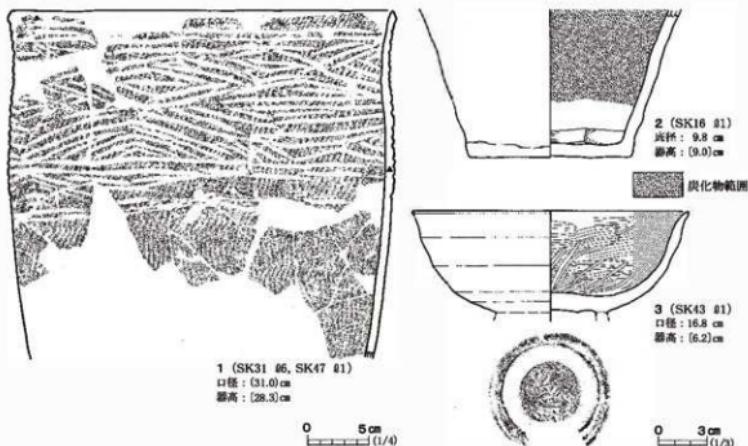


図25 土坑出土遺物 (1)

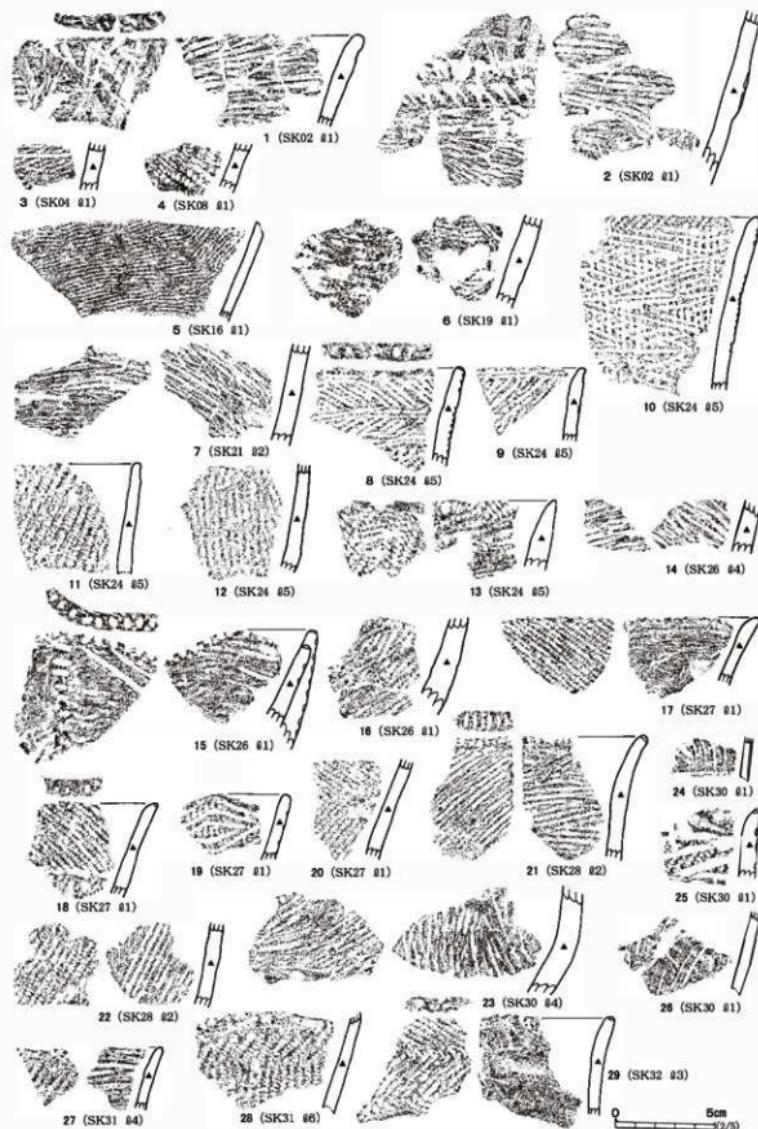


図26 土坑出土遺物(2)

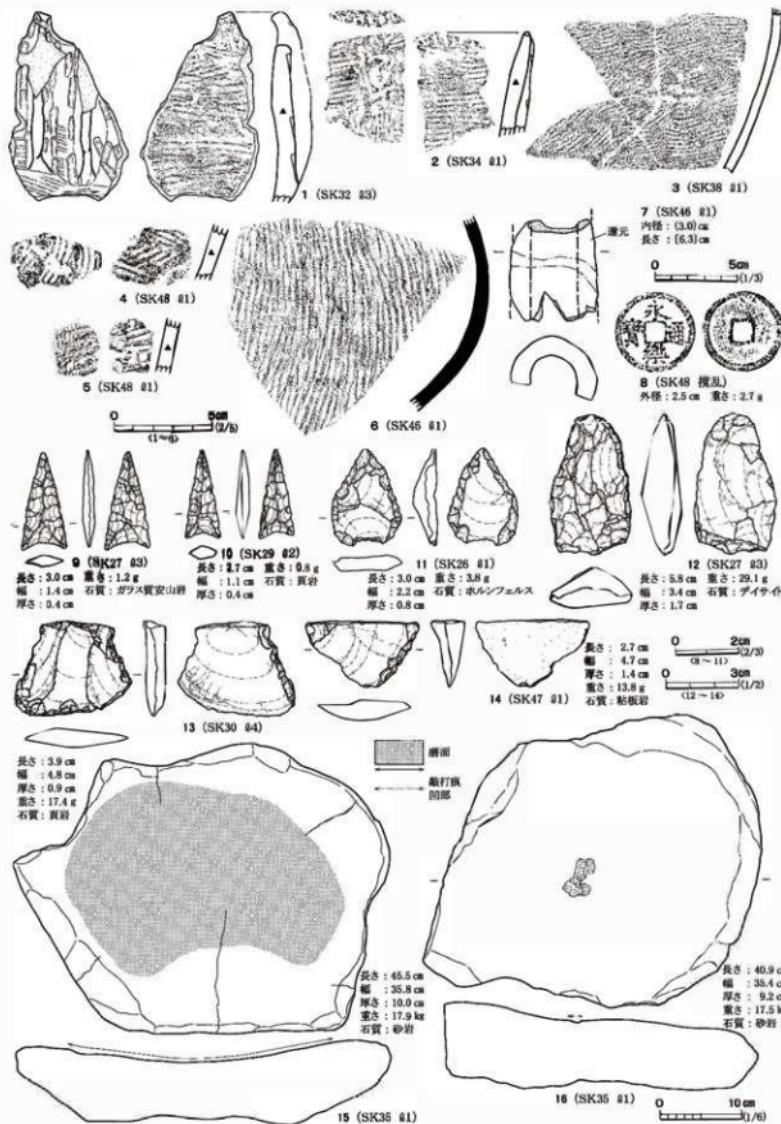


図27 土坑出土遺物 (3)

には48号土坑が近接する。本遺構は長方形状の平石の下から大型の縄文土器片がつぶれた状態で出土したため、その周辺も含めて検出したところ確認された。土器は表面を上向きにして出土し、土器の上には平石が置かれていた。この出土状況は、本遺構が埋没した時期が判断できるため平面図中に示した。

遺構内堆積土は4層に細分され、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は158×146cmを測る。検出面からの深さは最大42cmである。周壁は底面から直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。

遺物はⅠから縄文土器片213点、石器5点が出土した。このうち、縄文土器1点、石器1点を図示した。図25-1は縦走縄文土器に竹管凸面を使用した文様が描かれ、口縁部文様帶と地文の胴部に分けられる。文様は横沈線の間に菱形文や山形文が施されている。口縁端部には地文と同一の縄文が施されている。この土器は31号土坑から出土した土器と接合している。

図27-14は削器である。素材剥片の比較的直線的な側縁部に刃部を形成している。

本遺構は、形状から貯蔵穴と考えられる。また、遺構が埋没する過程で墓として再利用された可能性が高い。時期は、縄文時代早期末葉の日向B式期より古いと考えられる。 (國井)

48号土坑 SK48 (図24・27、写真22・33)

調査区南側平坦部のG7・8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構の西側には47号土坑が近接する。遺構内堆積土は4層に細分され、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は202×192cmを測る。検出面からの深さは最大67cmである。周壁は底面から急角度で立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

遺物はⅠから縄文土器片12点、石器1点、銭貨1枚が出土した。銭貨については攪乱出土の可能性がある。このうち縄文土器2点、銭貨を示した。図27-4は外外面に条痕、5は外面に縄文、内面に条痕が施されている。5の縄文には、0段多条の原体が使用されている。図27-8は「永楽通寶」で、文字が鮮明に記されていることから本銭と考えられる。

本遺構は、形状から中型の貯蔵穴と考えられる。時期は、出土遺物から縄文時代早期末葉と考えられる。 (國井)

第4節 燃土遺構

今回の調査で燃土遺構は13基検出された。燃土遺構は検出当初、住居跡の炉跡の可能性もあると考えて調査を行ったが、周囲から柱穴が確認されなかつたものである。これらは、調査区北側斜面で1基認められた以外は、南側平坦部から確認されている。

1号焼土遺構 SG 01 (図28, 写真23)

調査区南側平坦部のG 8グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の南西側には9号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は不整楕円形を呈し、 $135 \times 92\text{cm}$ にわたって赤褐色に焼けている。その厚さは最大9cmまで達する。表面に焼き綺まりは認められなかった。その周囲には、若干であるが炭化物粒が認められる。本遺構は焼土遺構の中で最も規模が大きいものである。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

2号焼土遺構 SG 02 (図28, 写真23)

調査区南側平坦部のE 8グリッドに位置する。遺構検出面はL III aである。遺構の南東側は搅乱により壊されているため、遺存状態は悪い。遺構の東側には3号住居跡が近接する。焼土化範囲は遺存状態から楕円形と推測され、 $32 \times 15\text{cm}$ にわたって暗赤褐色に焼けている。その厚さは最大7cmまで達する。表面には焼き綺まりがわずかに認められた。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

3号焼土遺構 SG 03 (図28, 写真23)

調査区南側平坦部のE 7グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の西側には1号住居跡が近接する。焼土化範囲は不整楕円形を呈し、 $80 \times 40\text{cm}$ にわたって赤褐色に焼けている。その厚さは最大10cmまで達する。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

4号焼土遺構 SG 04 (図28, 写真23)

調査区南側平坦部のF 7グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。焼土化範囲は楕円形を呈し、 $44 \times 34\text{cm}$ にわたって赤褐色に焼けている。その厚さは3cmを測る。表面には焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

5号焼土遺構 SG 05 (図28, 写真23)

調査区南側平坦部のF 8グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。焼土化範囲は楕円形を呈し、 $102 \times 64\text{cm}$ にわたって赤褐色に焼けている。その厚さは最大9cmまで達する。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

6号焼土遺構 SG 06 (図25, 写真23)

調査区南側平坦部のE 9グリッドに位置する。遺構検出面はL III aである。本遺構の下から34号土坑が確認されたため、新旧関係は本遺構の方が新しい。遺構の南東側は擾乱により壊されている。焼土化範囲は楕円形を呈し、51×34cmにわたって赤褐色に焼けている。その厚さは2cmを測る。表面に焼き綺まりは見られなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

7号焼土遺構 SG 07 (図25, 写真23)

調査区南側平坦部のG 7グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の南西側には45号土坑、南側には8号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は楕円形を呈し、48×37cmにわたって明赤褐色に焼けている。その厚さは4cmを測る。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

8号焼土遺構 SG 08 (図25, 写真23)

調査区南側平坦部のG 8グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の北側は7号焼土遺構、南側には35号土坑が近接する。焼土化範囲は円形を呈し、直径52cmにわたって赤褐色に焼けている。その厚さは最大7cmまで達する。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

9号焼土遺構 SG 09 (図25, 写真24)

調査区南側平坦部のG 8・9グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の北東側には1号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は円形を呈し、直径55cmにわたって赤褐色に焼けている。その厚さは最大8cmまで達する。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

10号焼土遺構 SG 10 (図7, 写真24)

調査区南側平坦部のF 8グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。遺構の北側では、F 8-9に掘り込まれているため、新旧関係は本遺構の方が古い。遺構の西側には3号住居跡が近接する。焼土化範囲は楕円形を呈し、71×41cmにわたって赤褐色に焼けている。その厚さは5cmを測る。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

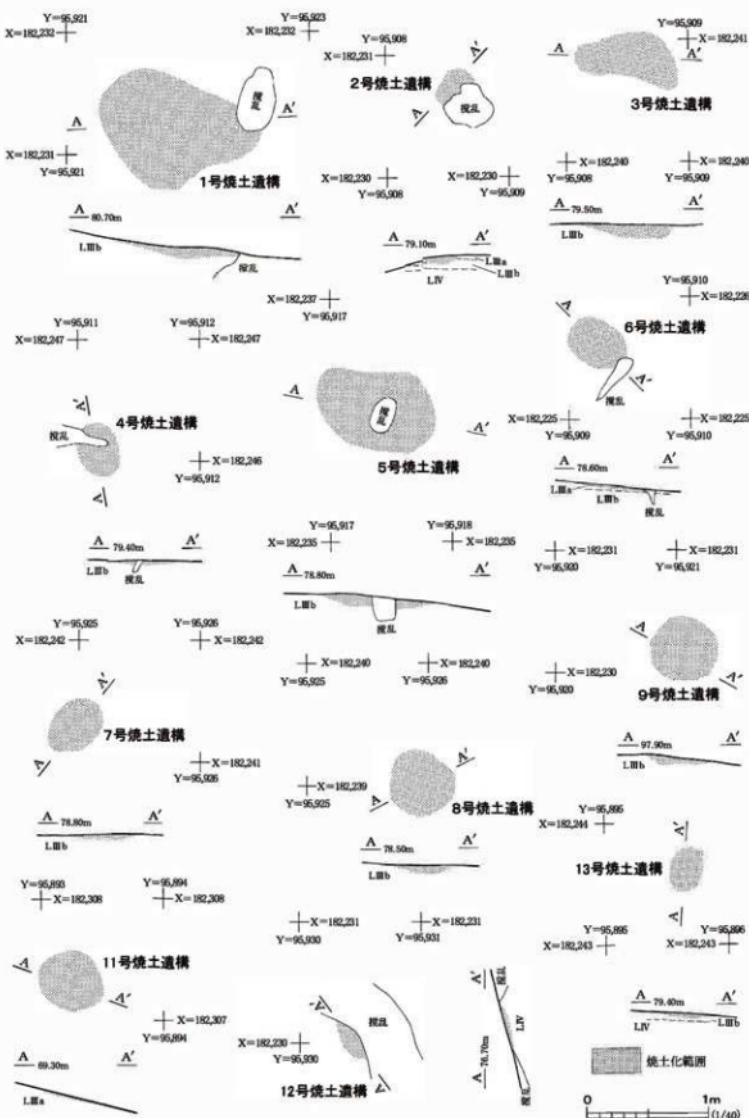


图28 烧土遗構

11号焼土遺構 S G11 (図25, 写真24)

調査区北側東向き斜面のD1グリッドに位置する。遺構検出面はL III aである。焼土化範囲は円形を呈し、直径55cmにわたって暗赤褐色に焼けている。その厚さは2cmを測る。表面に焼き綺まりはなかった。詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

12号焼土遺構 S G12 (図25, 写真24)

調査区南側平坦部のH 8・9グリッドに位置する。遺構検出面はL IVである。遺構の東側は攪乱により壊されているため、遺存状態は悪い。遺構の南西側には26・28・30号土坑が近接する。

焼土化範囲は遺存状態から稍円形と推測され、35×15cmにわたって赤褐色に焼けている。その厚さは4cmを測る。表面に焼き綺まりは認められなかった。本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

13号焼土遺構 S G13 (図25, 写真24)

調査区南側平坦部のD 7グリッドに位置する。遺構検出面はL III bである。焼土化範囲は稍円形を呈し、35×26cmにわたって赤褐色に焼けている。その厚さは4cmを測る。表面に焼き綺まりは認められなかった。

本遺構の詳細な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代の屋外炉と考えている。(國 井)

第5節 壇 穴 遺 構

今回の調査で壇穴遺構は3基検出された。いずれも調査区南側の平坦部で確認されている。これらは、当初、住居跡として調査を進めたが、炉や柱穴等が確認されないため壇穴遺構として扱った。

1号壇穴遺構 S X 01

遺構 (図25, 写真25・26)

本遺構は調査区南側平坦部のE 9・10, G 9・10グリッドに位置する。遺構検出面はL III aである。遺構は南側に向かって傾斜する緩斜面に構築され、このため斜面下側に当たる遺構の南壁は確認されなかった。この位置からは、現在の南相馬市原町区の市街地や太平洋までも見渡すことができる。

平面形は、遺存状態から長方形と推測され、主軸方向はN 50° Eである。遺存規模は長軸726cm、短軸285cmを測り、検出面からの深さは北壁側で42cmを測る。壁の立ち上がりは、北壁が急角度、東壁と西壁が緩やかになる。また、壁際には底面より一段低い溝が巡る。底面は小凹凸が認められるが平坦である。



圖29 1号竖穴遺構

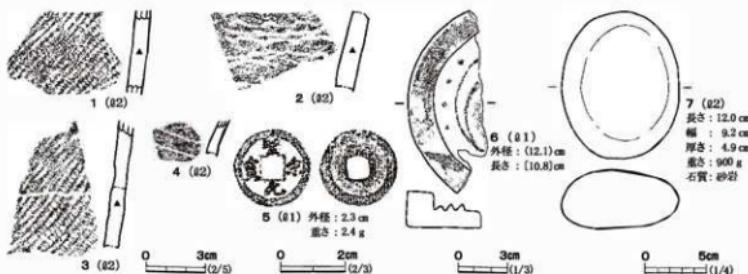


図30 1号竪穴遺構出土遺物

底面からは9基のピットが確認されたが、すべて本遺構に伴うものかは不明である。ピット内堆積土が本遺構内堆積土に近似することから、本遺構に含めた。これらのピットは、いずれも径19~27cmの円形のもので、深さは15~53cmを測る。このうち、P1は東側の上端部が焼土化していた。

この他、北西側に見られる溝は、堆積土が共通することから本遺構に付随するものと判断した。溝の規模は、長さ144cm、幅38cmを測り、深さは10cmである。

堆積土は3層である。レンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と判断した。

遺 物 (図30, 写真33)

遺物は、縄文土器片4点、石器2点、鉄滓1点、瓦1点、銭貨1点が出土した。このうち、縄文土器片4点、瓦、銭貨を図30に示した。1~4は縄文土器片である。1・3には斜縄文、2には多段になる結節回転文、4には平行沈線文が施されている。5は北宋銭「聖宋元寶」である。銭貨の外側が小さく、穴が大きいことから模鋳銭と考えられる。6は巴文軒丸瓦で、三つの巴文の外側に圓線、その外側には連珠が巡る。14世紀前半のものと考えられる。7はわずかに磨痕が認められる河原石である。

ま と め

本遺構は、緩斜面に構築された長方形を呈する大型の竪穴遺構である。時期は、出土した銭貨と瓦から中世と考えている。

(國 井)

2号竪穴遺構 S X02

遺 構 (図31, 写真27)

調査区南側平坦部のF9・10グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIbである。北東側で3号竪穴遺構と重複し、本遺構の方が新しい。遺構は緩斜面に構築されるため、斜面下側に当たる南壁は確認されなかった。また、遺構の西側は試掘トレンチ、南側は搅乱により壊されている。このため遺構の遺存状態は悪い。

平面形は遺存状態から長方形と推測され、主軸方向はN67°Wである。遺存規模は長軸370cm、短軸286cmを測り、検出面からの深さは北壁側で21cmを測る。壁の立ち上がりは、全体的に緩やか



図31 2号坂穴遺構・出土遺物

である。底面は小凹凸が認められるが平坦である。

堆積土は2層で、斜面上方からの流入による自然堆積と判断した。 ℓ 1はL III bに近似する。

遺 物 (図31, 写真33)

遺物は、縄文土器片3点、石器1点が出土した。このうち、縄文土器片3点を図31に示した。1は内外面に条痕文が施され、2は条痕文上に刺突が施されている。3は筋の細かい斜縄文が施されている。

ま と め

本遺構は緩斜面の構築された長方形の坂穴遺構である。時期は、出土遺物や堆積土の特徴から縄文時代と考えている。

(國 井)

3号坂穴遺構 S X 03

遺 構 (図32, 写真28)

本遺構は調査区南側平坦面のF 9 グリッドに位置し、L III b上面で検出した。南西隅で2号坂穴遺構と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は、N53° Wに主軸を向ける梢円形である。規模は、長軸295cm、短軸234cmを測る。検出面から床面までの深さは、最大34cmを測る。周壁は、急傾斜で立ち上がる。底面はL IVに形成され

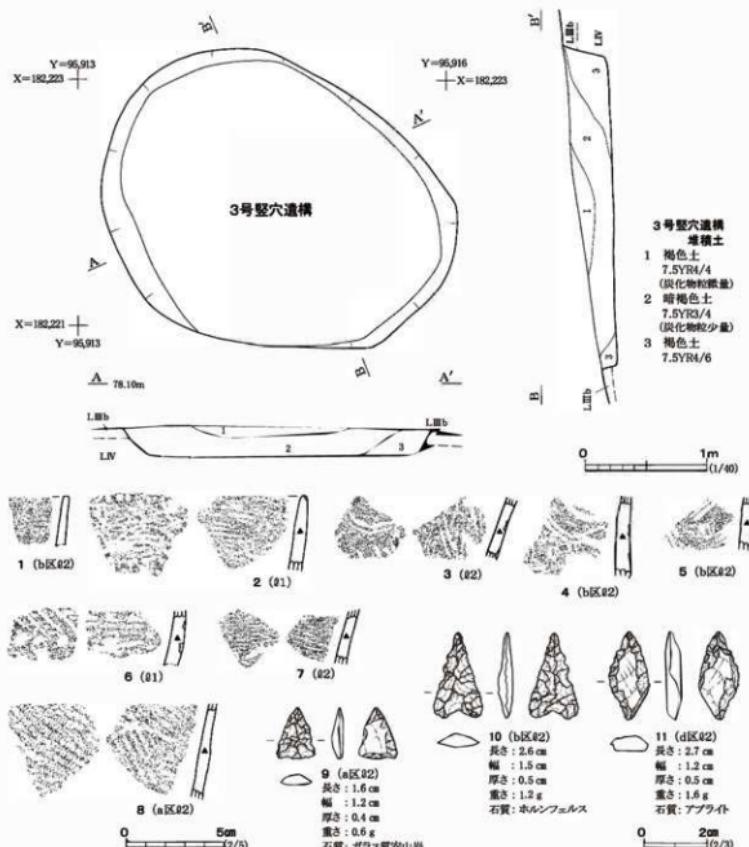


図32 3号竪穴構造・出土遺物

ており、平坦である。ピットは検出されなかった。

堆積土は3層である。レンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と判断した。

遺物 (図32, 写真33・34)

遺物は、 ℓ 1・2から縄文土器片74点、石器8点が出土した。出土遺物のうち、縄文土器8点、石器3点を図32に示した。

1～8は縄文土器である。1は器壁の薄い無文の土器である。2～4・6は竹管凹面を使用した平行沈線で文様が描かれ、2の口縁端部や3・6には刺突が施されている。4は半截竹管をつぶしたような工具により沈線を施している。7は内外面に条痕文が施されている。土器の時期は1が縄

文時代早期中葉、それ以外は縄文時代早期末葉と考えられる。

9～11は石鱗である。9は基部が平らな平基鱗、10は基部に抉りが見られる凹基鱗である。9は表面全体に調整剥離が施されるが、裏面には側縁部に調整が見られる。10は器全体に調整剥離が施され、11では側縁部にのみ簡単な調整が施されている。

まとめ

本遺構は底面を平坦に整えた、楕円形の竪穴遺構である。時期については、出土遺物や遺構の形態から縄文時代早期末葉と考えている。

(今野)

第6節 その他の遺構

本節では、その他の遺構として柱列跡とピット群を併せて報告する。今回の調査では、柱列跡は1列、ピットは総計58基が検出された。ピットは、検出された位置から調査区の北側と南側に大きく分かれているため、それぞれに分けて述べる。ピット番号は、確認したグリッドと番号を合わせて記した。

1号柱列跡 S A 01

遺構(図33、写真29)

調査区南側平坦部のF・G 7とF・G 8に位置する柱列跡である。遺構検出面はLIVである。柱列跡はP 1～P 5の5基のピットが直線的に並ぶものである。周辺には本遺構の深さに近いG 7 P 2・3が隣接する。P 3と9号土坑、P 4と47号土坑が重複し、いずれも本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は、P 1・4・5が暗褐色砂質土、P 2・3が黒褐色砂質土からなる。柱痕は確認できなかった。柱列跡は5基の柱穴からなり、長軸方向はN44°Eである。柱穴の平面形は正方形もしくは長方形を呈する。柱穴の規模は一辺16～28cmを測り、検出面からの深さは60～84cmである。柱列の端にあたるP 1とP 5は他のピットに比べ浅く掘り込まれている。各柱間の距離は、P 1～P 2間が152cm、P 2～P 3間が118cm、P 3～P 4間が95cm、P 4～P 5間が95cmとなり、東側に向かって間隔が広がる。

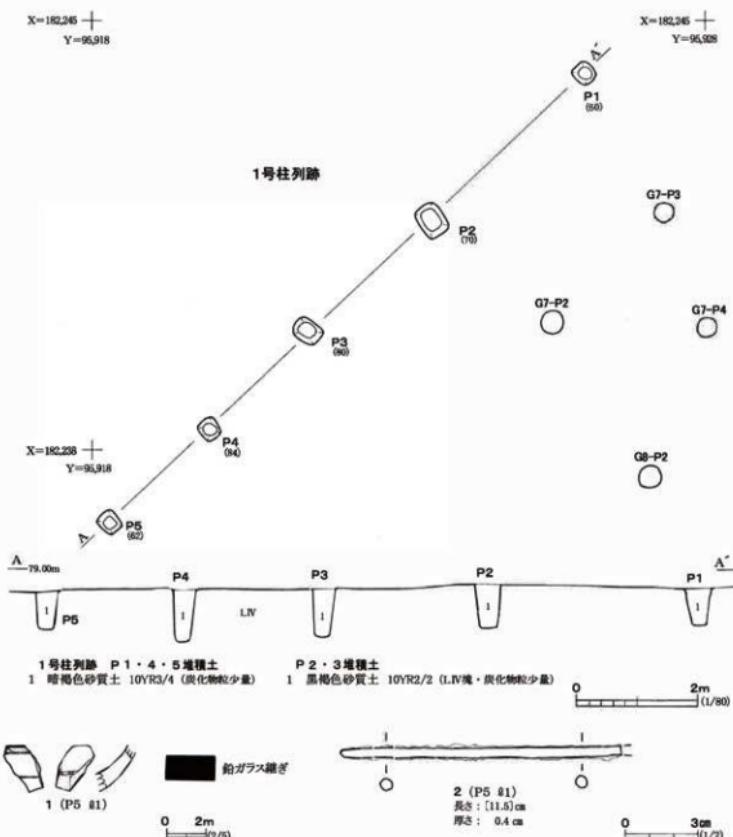
遺物(図33、写真33)

遺物はP 5から縄文土器片2点、陶磁器片1点、石器1点、鉄製品1点が出土した。このうち、陶磁器と鉄製品を図示した。図33-1は肥前染付皿で、上部割れ口には船ガラス焼きの痕跡が認められる。18世紀後半～19世紀初頭のものと考えられる。同図2は棒状鉄製品の欠損品で、先端部はやや丸みを帯びている。火箸の可能性もある。

まとめ

本遺構は、5個の柱穴からなる柱列跡である。遺構の年代は出土遺物から18世紀後半～19世紀初頭のものと考えている。

(国井)



北側グリッドピット(図2)

調査区北側の東側斜面、B 1・2グリッドにおいて8個のピットが検出された。遺構検出面は、いずれもL IV上面である。この周辺には、平安時代の4・5号住居跡や36・40・44・45号土坑が近接する。これらの堆積土は全て黒褐色土である。柱痕は確認されていない。ピットの平面形は円形と長方形からなり、B 1-P 4・5、B 2-P 3以外が円形である。円形のものは直径12~20cmを測り、検出面からの深さは23~30cmを測る。また、長方形のものは一辺13~15cmを測る。遺物は出土していない。

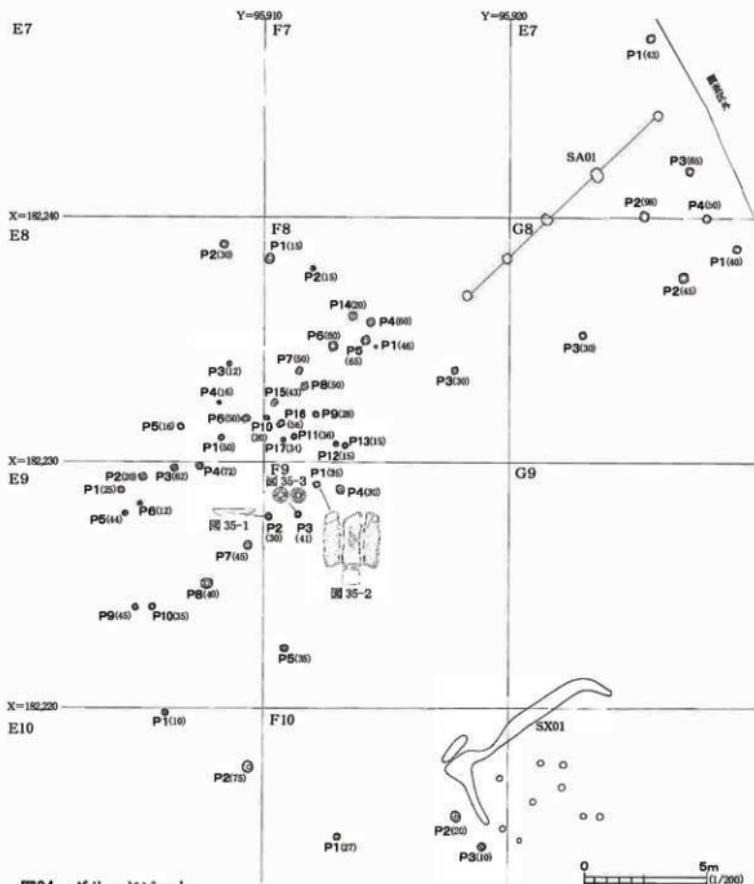


図34 グリッドピット

北側ピットは8基と希薄であるが、周囲で確認されている遺構は平安時代に限定される。このため、遺構の時期は平安時代と考えておきたい。

(國井)

南側グリッドピット(図34、写真30)

調査区南側平坦部のE 8~10, F 8~10, G 7~8グリッドにおいて、50個のピットが検出された。遺構検出面は全てLIV上面である。重複関係にあるものとして、E 8-P 6, F 8-P 7・8・10・16は3号住居跡より新しい。また、F 8-P 8は27号土坑より新しく、E 10-P 2は1号土坑

より新しい。周辺には、東側に近世の1号柱列跡、南側に中世の1号竪穴遺構等が隣接する。

ピット内堆積土は、褐色土・暗褐色土・黒褐色土からなり、その多くは暗褐色土である。E 8・9グリッドでは褐色土がやや多く、黒褐色土のものはわずかに見られるだけである。ピットの平面形は、円形や楕円形のものが多く、F・G 8, E 9グリッドでは長方形や正方形のものも見られる。規模は、円形や楕円形のものが径13~30cm、長方形や正方形のものが16~24cmを測る。検出面の深さは10~98cmである。

特に、調査区南側中央のE・F 8, E・F 9グリッドではピットが集中する。このような状況から建物跡や柱跡を想定したが、ピットを組ませることができず、また堆積土の土質や色調からもピット配列を復元することはできなかった。しかし、ピットの深さからは、30~40cm代のもの、50~60cm代のものにある程度まとまりがみられた。例えば、30~40cm代のものでは、E 9-P 7, E 9-P 3・4の3基が200~240cmの間隔で直線に並ぶように見られる。また、50~60cm代のものでは、F 8-P 4・6・7の3基も170~180cmの間隔で直線に並ぶようである。これらのピットの主軸方向は、いずれもN 54° Eである。この軸方向は、調査区南端付近に位置する1号竪穴遺構の北壁軸方向にほぼ一致する。

遺物(図35、写真33)

遺物は、F 8-P 5から縄文土器片1点、石器2点、F 9-P 1から砥石1点、F 9-P 2からかわらけ片1点、F 9-P 3から銭貨1点が出土した。このうち、F 9-P 1~3から出土したかわらけ・砥石・銭貨を図示した。

図35-1はかわらけである。底部が欠損し、体部下端から口縁部まで遺存している。皿状の器形を呈し、外面にはロクロ目が認められる。時期は14世紀頃のものと考えられる。同図2は砥石である。四角柱状のもので3面に磨面が形成され、1面のみに細い線状の痕跡が何本も見られる。同図3は北宋銭の「祥符通寶」である。文字が不鮮明に記されていることから模鋳銭と考えられる。

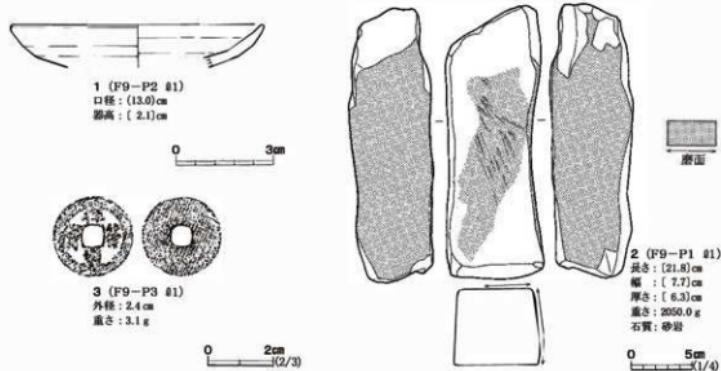


図35 グリッドピット出土遺物

まとめ

南側ピットは、ピットが集中する地区から中世の遺物が出土した。また、ピットの深さに統一性が見られる。年代を決める遺物は少ないが、隣接する1号竪穴遺構や1号柱列跡、周辺から出土した陶器等から中・近世と考えておきたい。

(國井)

第7節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文土器片4,046点、土師器片69点、須恵器片4点、かわらけ片7点、陶器片26点、石器・石製品225点、鉄製品3点、銭貨5点、鉄滓8点が出土している。このうち、最も出土量の多い縄文土器の出土分布については、図36に示した。

土 器 (図36~48、写真30・36~40)

土器の分類は、縄文土器が各時期に分け、それ以外の土器については各時代で群別した。群を細分する類では、できる限り縄文土器の型式に対応させた。

1 群土器 縄文時代早期の土器群である。縄文土器の約7割が本群にあたり、その多くは早期後葉～末葉のものである。

1 類 早期中葉の貝殻沈線文系土器を一括した。出土量は少ない。器壁が薄く、沈線で文様が描かれるものである。

図37-1~12が相当する。1は平行沈線の間に刺突文と貝殻腹縁文、2は貝殻腹縁文のみ、4は貝殻腹縁文と円形刺突文が施されている。3・5は単沈線で描かれるもので、5では波状にも描かれている。

2 類 早期後葉の貝殻条痕文土器で茅山下層式期の土器である。沈線で文様を描き、口縁部や文様帶を刺突列によって区画するものである。この中には、3類に含まれるものもあると思われる。図37-13~22、図38-1~15・17・18、図39、図40-1~13が相当する。

これらの土器は、口縁部文様帶内を隆帯や沈線で縱方向に区画している。文様を描く沈線文の工具には、竹管の凹面と凸面、先がつぶれたものを使用した3種類が見られる。竹管の凹面を使用したものには、図37-13・18等がある。13では格子状の平行沈線が描かれ、その間に円形竹管が施されている。また、図38-12は縱方向の沈線に区画された中を格子状の平行沈線が施されている。竹管の凸面を使用したものには、図37-15・図39-1等があり、単沈線が斜めや格子状に施される。この他、先がつぶれた工具を使用したものは、図39-2・3等に見られ、沈線が斜め方向に施されている。沈線以外では、図38-1・6、図40-1のように刺突列で文様を描くものもみられる。刺突列で区画するものとしては、図39-20~図40-9等のように綫上に施すもの、図40-10~13のように平滑な器面に施すものが見られる。

3 類 早期後葉の縄文・条痕文土器で、茅山上層式・北前式期の土器である。2類土器に比べ、

第2編 石神遺跡

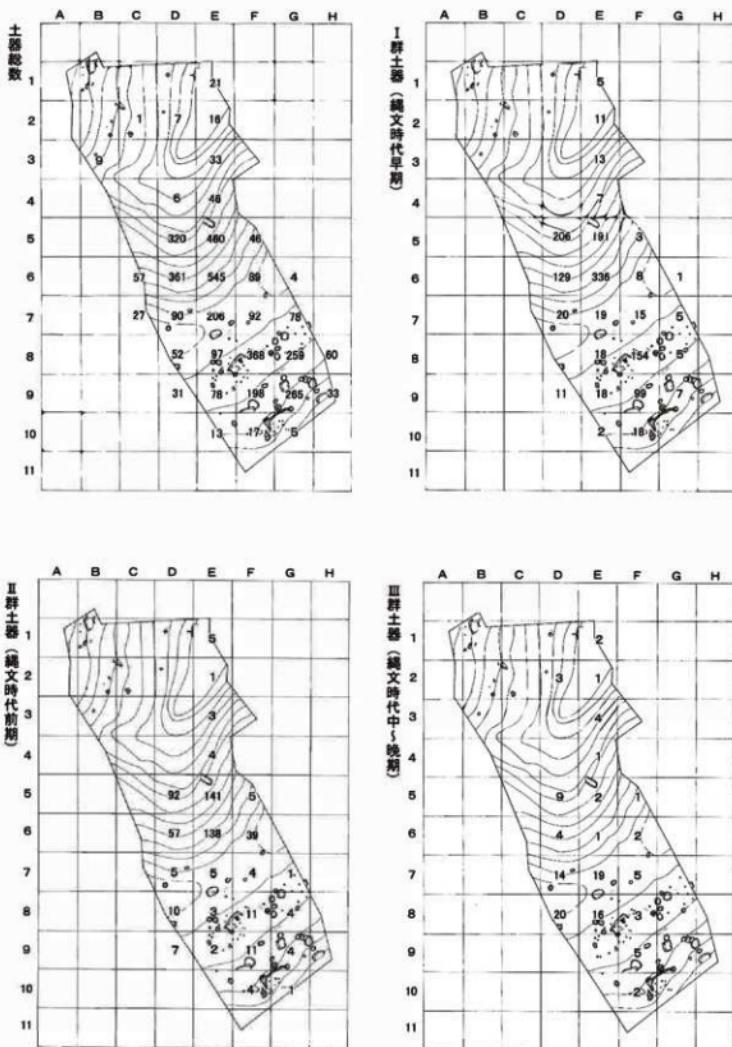


図36 遺構外出土土器分布図

文様が簡素になるが、破片資料が多いため2類との区別が困難である。ここでは、本類に特徴的な縄圧痕文の土器を示した。この段階からは、地文に縄文が使用されるようになる。

図40-14~16が相当する。いずれも、2段の縄圧痕が縱や横方向に施されている。

4類 早期後葉の絡条体条痕文の土器である。常世2式土器である。図40-17のみが認められた。17は絡条体条痕上に横方向の絡条体圧痕文が施されている。

5類 早期末葉の日向前B式の土器である。地文に縦走縄文を施し、その上に直線と弧線の沈線により文様が描かれるものである。図40-18~20が相当する。いずれも、竹管凸面を使用した沈線で施されている。19は、横方向の沈線間に菱形文が施されている。

6類 早期後葉~末葉の条痕文や縄文地文の土器で、2類~5類に該当する胴部・底部資料を一括した。図38-16・19、図40-21~図42-11が相当する。

胴部資料には、墜帯や綾が施されるもの、条痕のみのもの、条痕と縄文のもの、縄文のみのものが認められる。墜帯が施されるものは図38-16・19が該当し、垂下する墜帯が取り付くものである。このうち、同図19の墜帯上には刻みが認められる。綾が認められるものは、図41-1・10・18・19である。器面に条痕文が施されるものは、図40-21~図41-5である。このうち、図40-21~23は口縁部破片で、21・23の口縁端部には刺突が施され、22の口縁は先細りになる。同図26は条痕文の施文方向が一定しない。器面に縄文が施されるものは、図41-6~図42-7である。図41-8~11は内面の口縁上部に外面と同様の縄文が施されている。このうち、8は波状口縁のもので、9の口縁は大きく外反する。この他、同図6・7の外面には縄文以外に条痕文も認められる。同図7・16、図42-1は縦走縄文が施されている。図42-7は撫糸地文の土器で、口縁端部にも同様の撫糸文が施されている。この他、図41-10・18・19は内面に条痕が施され、外面には綾が認められる。

図42-8~11は底部資料である。9は上げ底状のもの、10は外側に張り出すもの、11は小型の底部である。いずれも、平底のため縄文時代早期後葉のものと考えられる。

II群土器 縄文前期の土器群である。縄文土器の約2割が本群にあたり、その多くは前期初頭と同後葉のものからなる。

1類 前期初頭の花積下層式に併行する土器である。図43-2~8が相当する。胎土に含まれる纖維の量は少ない。縄圧痕文と集合沈線や刺突文が施される。2は竹管凹面による平行沈線で矢羽状の文様が描かれ、その下にある綾の上には円形刺突文が施されている。3~5・7・8は1段の縄圧痕が施され、3では渦巻状に、それ以外では撫りの異なる原体を2本あわせて施されている。集合沈線が施される6・7は、竹管凸面による斜め方向の短沈線によるものである。8は縄圧痕に併用され、ループ文が施される。

2類 前期初頭~前葉の地文土器である。図43-1・9~図44-35が相当する。胎土に含まれる纖維の量は少ない。地文には羽状縄文と斜縄文、ループ文、撫糸文が施され、口縁部や文様帶が刺突列によって区画されるものも見られる。地文に羽状縄文を施すものは、図43-1・10~18、

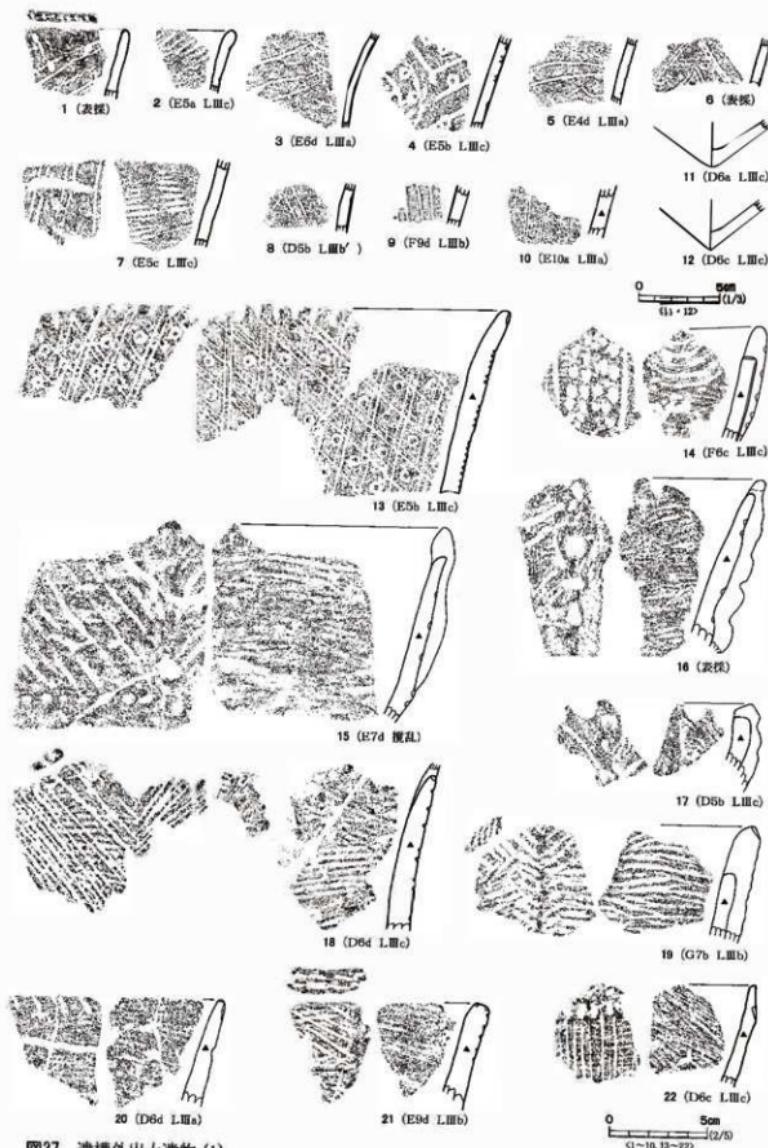


図37 遺構外出土遺物(1)

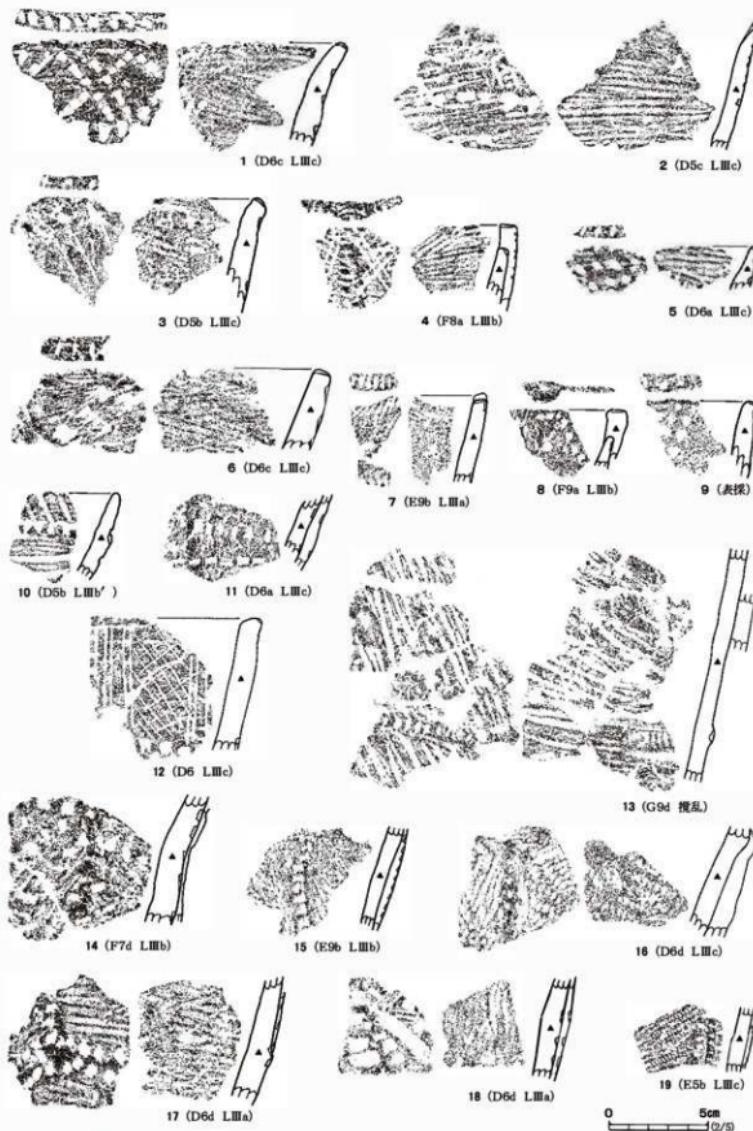


図38 遺構外出土遺物(2)

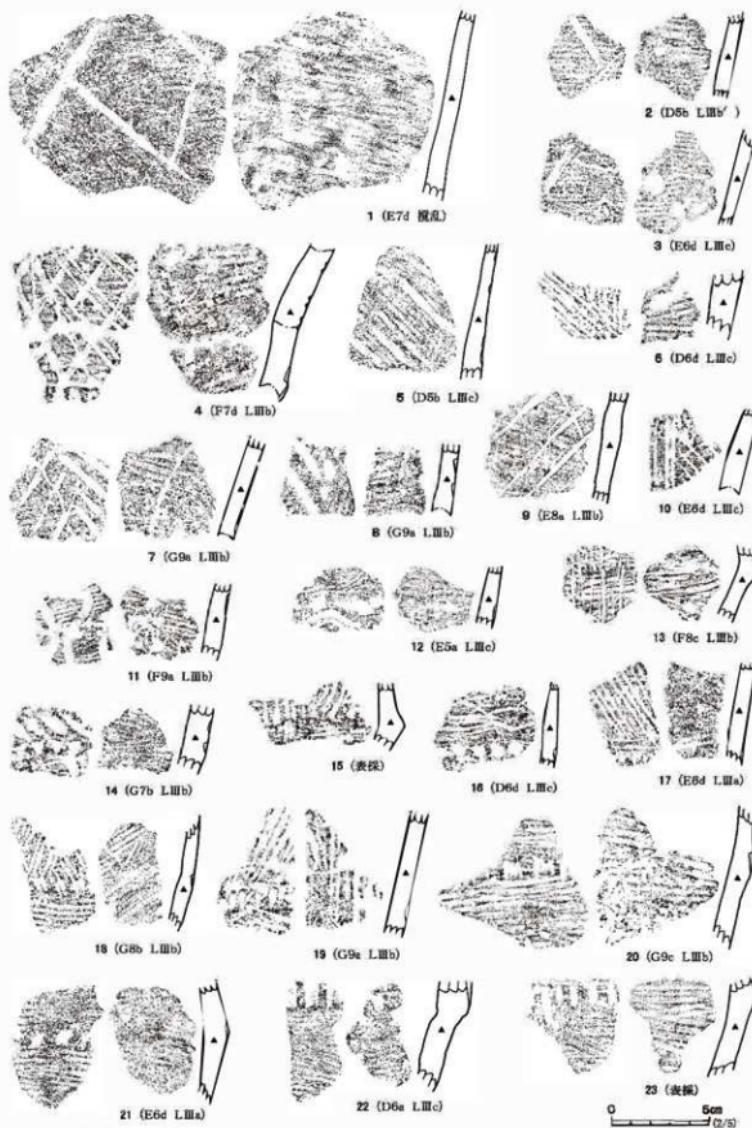


圖39 遺構外出土遺物 (3)

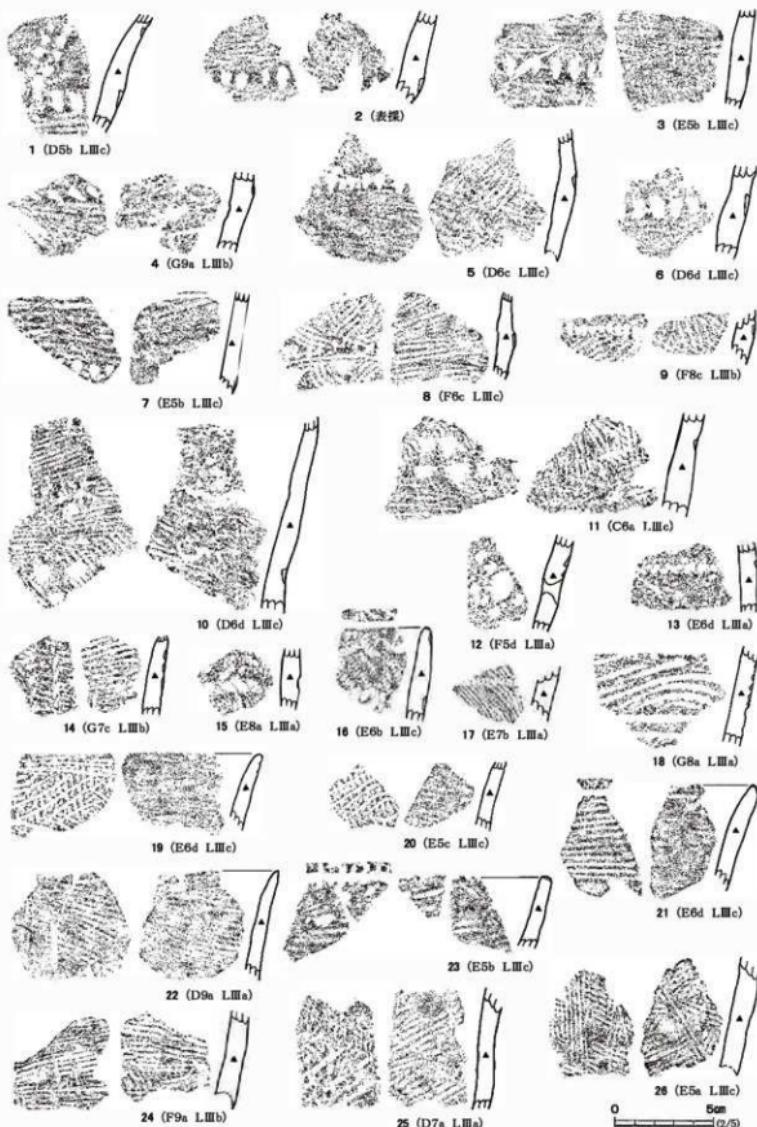


図40 遺構外出土遺物(4)

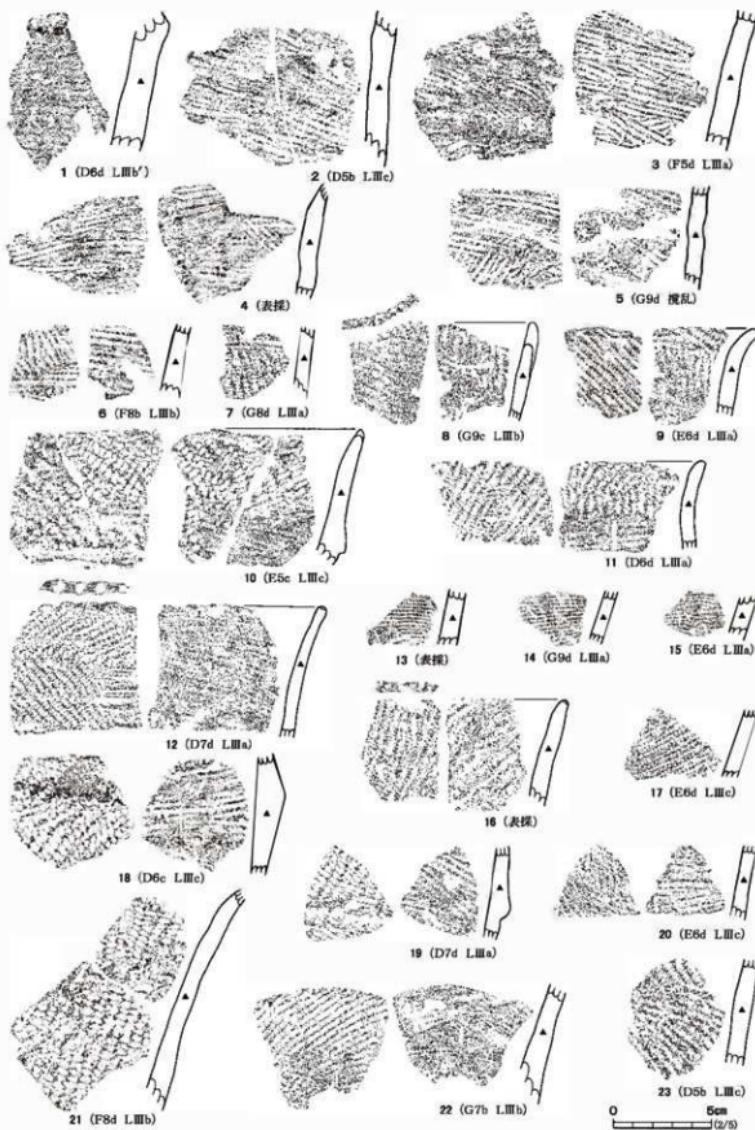


図41 遺構外出土遺物 (5)

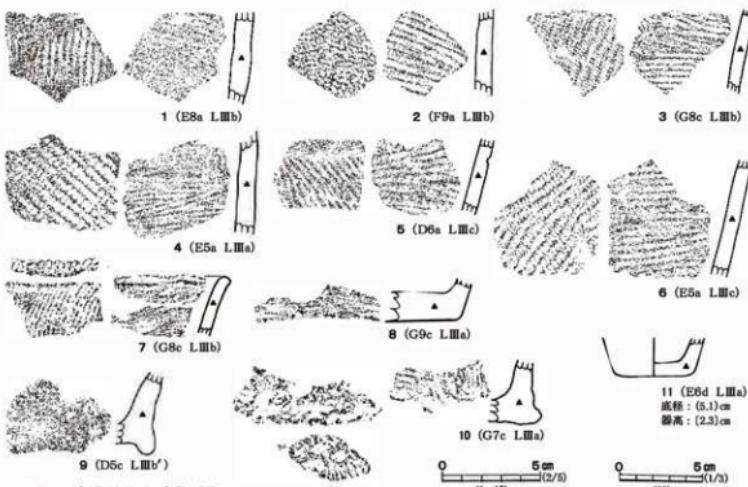


図42 遺構外出土遺物 (6)

図44-1・3~6・8・11・13・15・16・18~20・22~29・38である。このうち、器形の特徴が見られるものとして、図43-1は胸部径と口縁部径が同じもので、頸部が押まって口縁が弱く外反するものである。また、同図10は口縁部が内湾するものも見られる。口縁は同図1・10・14のように平線のもの、同図11~13のように波状のものがある。羽状繩文には結束羽状繩文と非結束羽状繩文が見られるが、図43-1の繩文を観察すると、結束羽状繩文と非結束羽状繩文が交互に施されている。これらの口縁端部あるいはその直下には、図43-10・12・14~19、図44-1~4のように刺突が施されることが多い。刺突列は、図44-10~20のように横方向の隆帶あるいは稜の上に刺突が施されている。また、同図21・22のように、稜が無くても刺突が施されるものも見られる。この他、図44-38は羽状繩文が施された底部である。地文に斜繩文を施すものは、図43-19、図44-2・7・9・10・17・21・30~33であるが、土器が細片のため、本来羽状繩文だったものも含まれているものと考えられる。図44-10・32は0段多条の原体が使用されている。図43-9は多段にループ文を施すものである。図44-34~37は、撫糸文で矢羽状あるいは菱形状に施すものと考えられる。図44-34~37については、繩文時代前期前葉のものと考えられる。

3 類 前期後葉の大木4式土器である。図45-1~37、図46-22~26が相当する。胎土には微量の纖維を含む。本類に特徴的な粘土紐を貼り付けるものは全く確認できなかった。本類には、沈線文を特徴とするもの、刺突文を主体に施すもの、口縁部と胸部の区画文様として結節回転文を施すものが見られる。このうち、沈線文と結節回転文を施すものが主体となり、これらが併用されることも多い。また、本類には図45-1~14のように口縁無文帯となるものが多い。沈線文

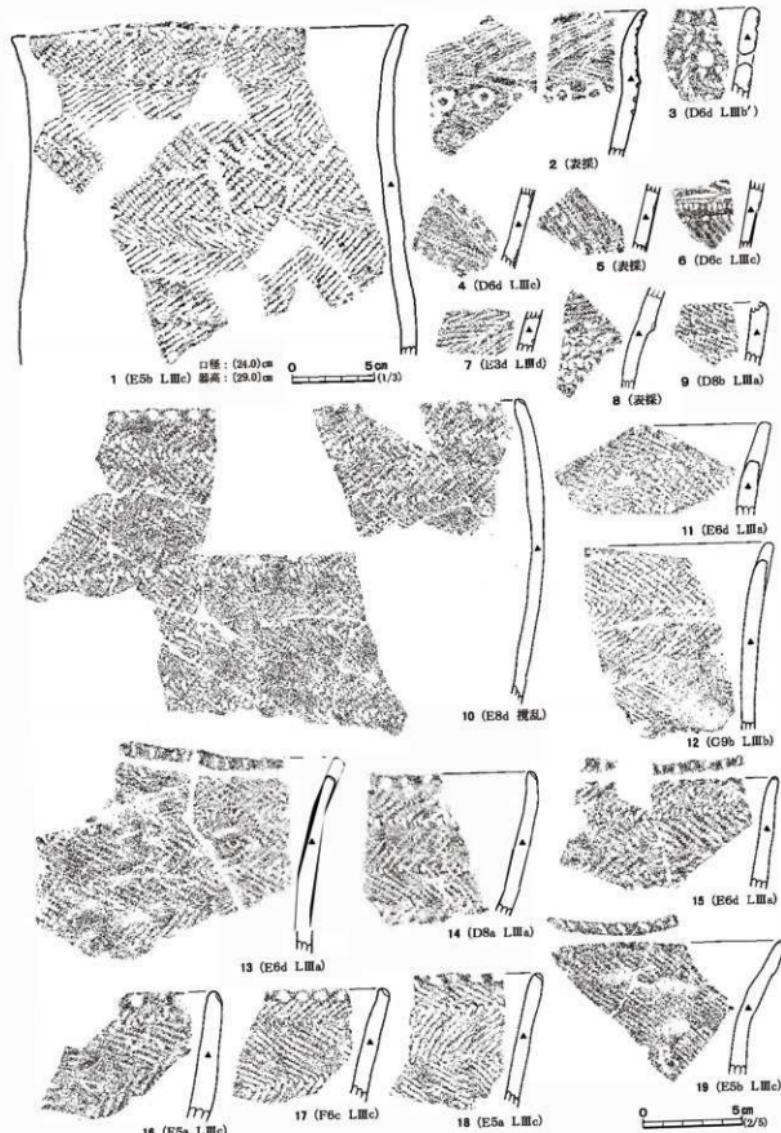


図43 遺構外出土遺物(7)

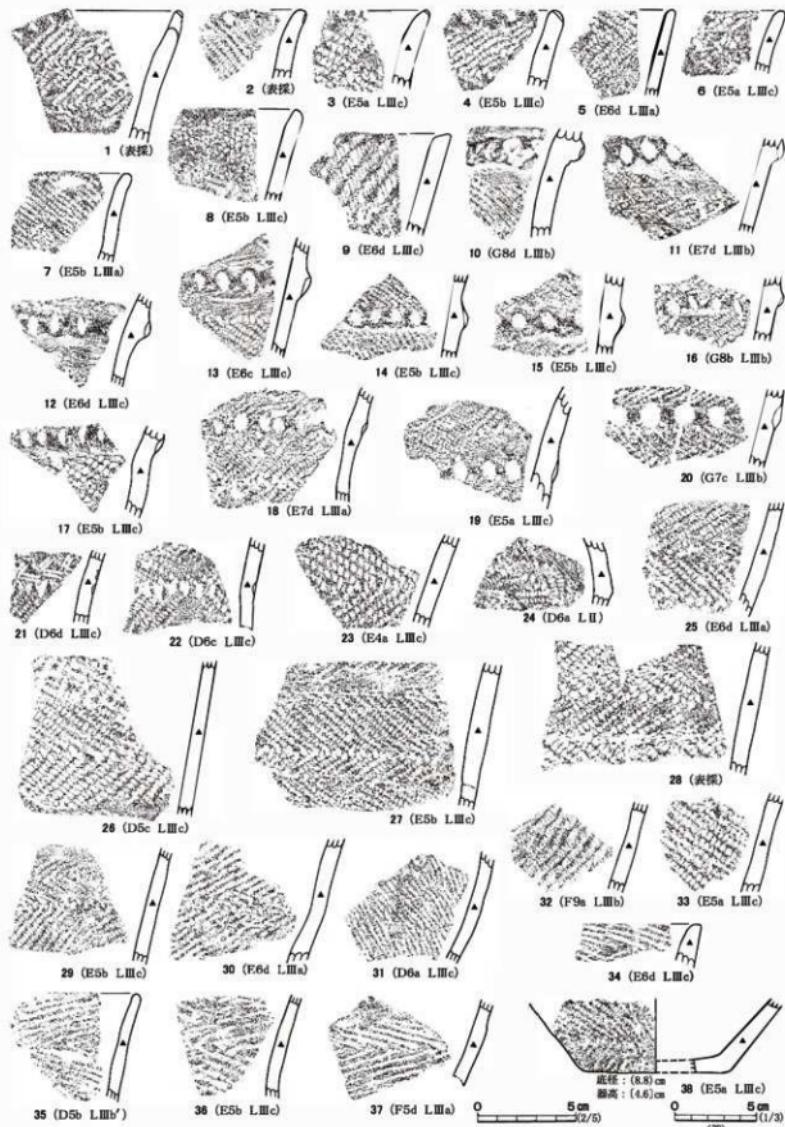
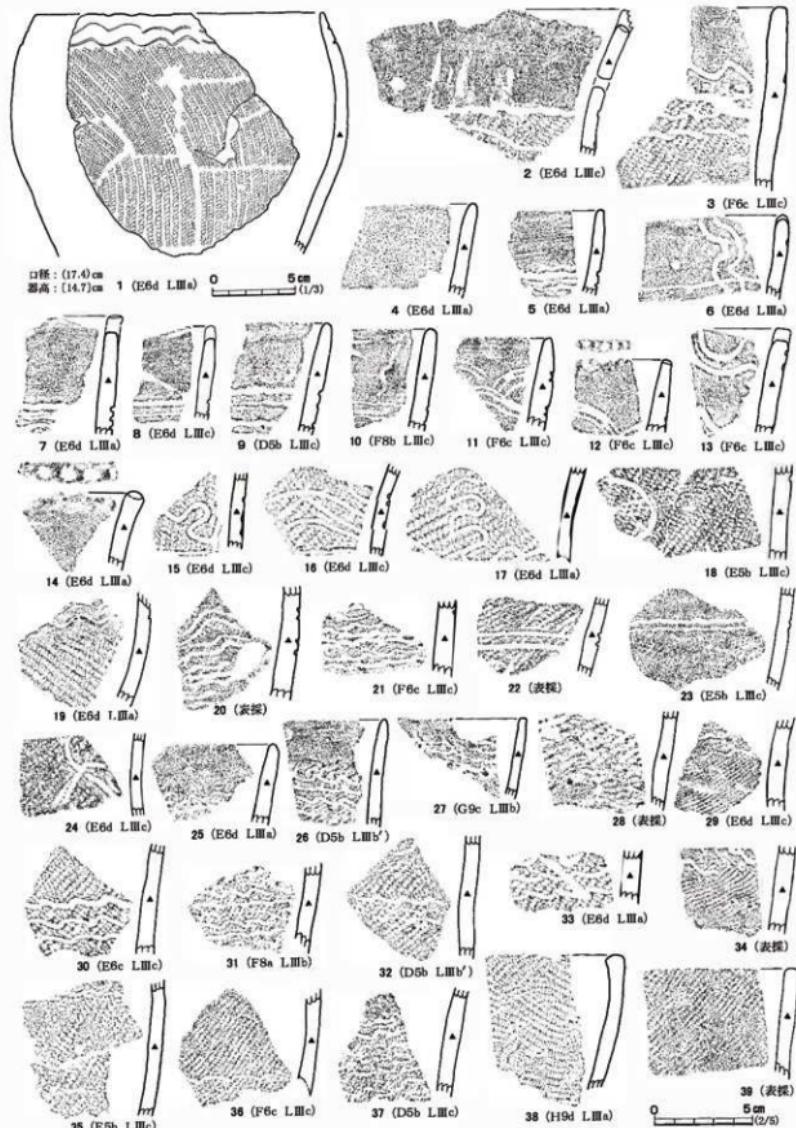


図44 造構外出土遺物(8)



を特徴とするものは、図45-1~24である。器形の特徴がわかるものとして、1は口縁が平縁となるもので、胴部が最大径となり口縁部にかけて内湾する。2は口縁が大きく外反する波状口縁のものである。沈線には竹旨凹面による平行沈線と角状工具による単沈線のものが見られる。平行沈線で描くものには、波状の1・6・19・20、直線状の7~10・22・23、弧状の11~13がある。このうち、6は波状の沈線でロッキング手法によりコンパス文状に施文されたものである。また、7・9・10・23は、沈線を引く早さにアクセントを加えて有筋沈線としたものである。さらに、単沈線で描くものには、波状の2・3、弧状の16・18、蛇行状の15・17が見られる。この他、結節回転文を施す25~37は、口縁無文部や縄文地文上に多段に施されている。図46-22~26は底部である。いずれも、胎土に纖維が微量含まれるため、本類に含めた。23・24の底部には網代痕が認められる。

4 類 前期後葉の浮島II式土器である。図46-11~18が相当する。出土量も極めて少ない。

本類には、沈線文・変形爪形文、貝殻文等が見られる。11・13・14は変形爪形文が施され、13・14には平行沈線文も見られる。12は絡线条体状の圧痕文、15は有筋沈線文が施されている。16~18は貝殻文と擬似貝殻文のものである。16は単沈線で貝殻文状に描いたもので、17・18は貝殻腹縁を立てロッキング手法で施したものである。

5 類 前期後葉の諸磯式土器である。図46-19~21が相当する。出土量は極めて少ない。全て無文の土器で、器面は丁寧なミガキ調整が施されている。このうち、19は焼成以前に穿孔された径6mmの穴が2個確認されている。

6 類 前期後葉の縄文のみの土器である。図45-38・39、図46-1~10が相当する。図45-38以外の胎土には纖維が微量含まれる。これらの土器には、横回転施文されたものが多いが、縦・斜め方向の図45-38や斜め方向の図46-8が見られる。

III群土器 縄文時代中~晚期の土器である。出土量は少ない。図47が相当する。

1 類 中期前葉の大木7b式土器である。図47-1・2に図示した。1は頸部破片で、沈線下に交互刺突文が施されている。2は口縁部の楕円文間に瘤状の貼付文が見られる。

2 類 後期前葉の土器である。図47-3のみが相当する。3は外面に刺突列が多段に施される。

3 類 後期後葉の加曾利B式土器である。幾条の沈線が巡らされるもので図47-4~12が相当する。沈線間には、沈線以前に縄文が施されており、5・6には短沈線や垂下する蛇行沈線が施されている。また、10・11には沈線間に細かい刺突を斜めに施し、6と同様な垂下する沈線が描かれている。12は沈線間に刻み状の刺突が施され、下に羽状縄文が施されている。

4 類 後期末葉の折地式土器である。図47-13~20が相当する。沈線で文様が描かれ、瘤状の貼付文が施されるものである。瘤状の貼付文は、18の文様の基点に、19・20では屈曲部に施されている。

5 類 晩期初頭の大洞B式土器である。図47-21のみが相当する。入組三叉文の鉢形土器である。

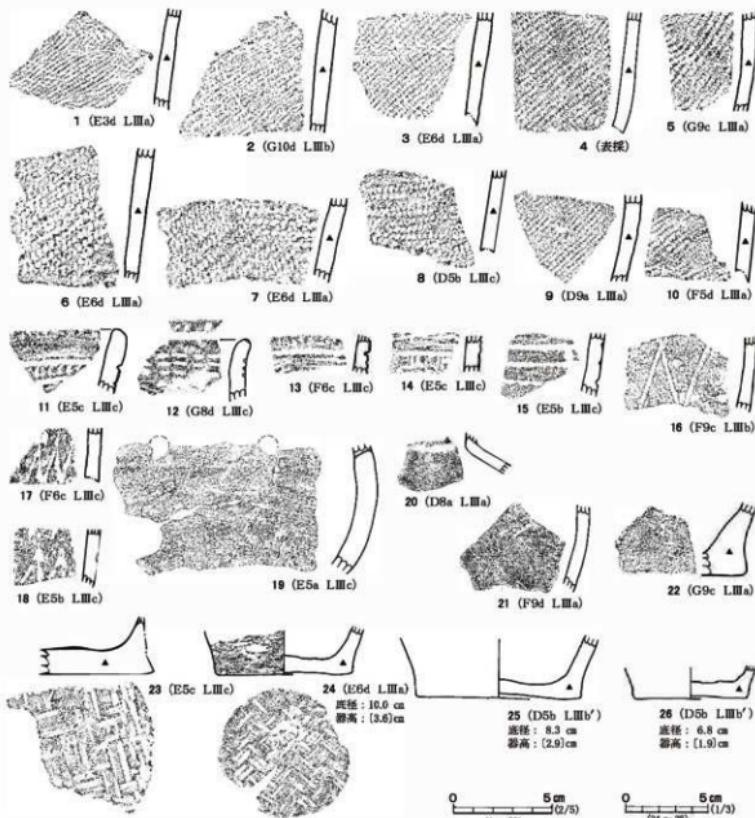


図46 遺構外出土遺物(10)

6類 後期・晩期の粗製あるいは半粗製土器である。図47-22~41が相当する。22~24は櫛目状文、25・26は網目状糸文、27~35は縄文が施され、36~39は無文となる。このうち、縄文が施された32は撲りの異なる原体での羽状縄文、33は施文方向を変えて羽状縄文としている。

この他、無文の36は口縁上部の内面に窪みが見られることから3類に伴うものと考えられる。

IV群土器 平安時代の土器である。土師器・須恵器からなり、出土量は少ない。図47-42、図48-1~4に図示した。

図48-1~4はロクロ成形の土師器である。1・2は杯である。1は底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が直線的に立ち上がる。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施されている。底部は回転糸切りにより切り離されている。3は高台付杯で、高台から杯底部が遺存する。



図47 遺構外出土遺物(11)

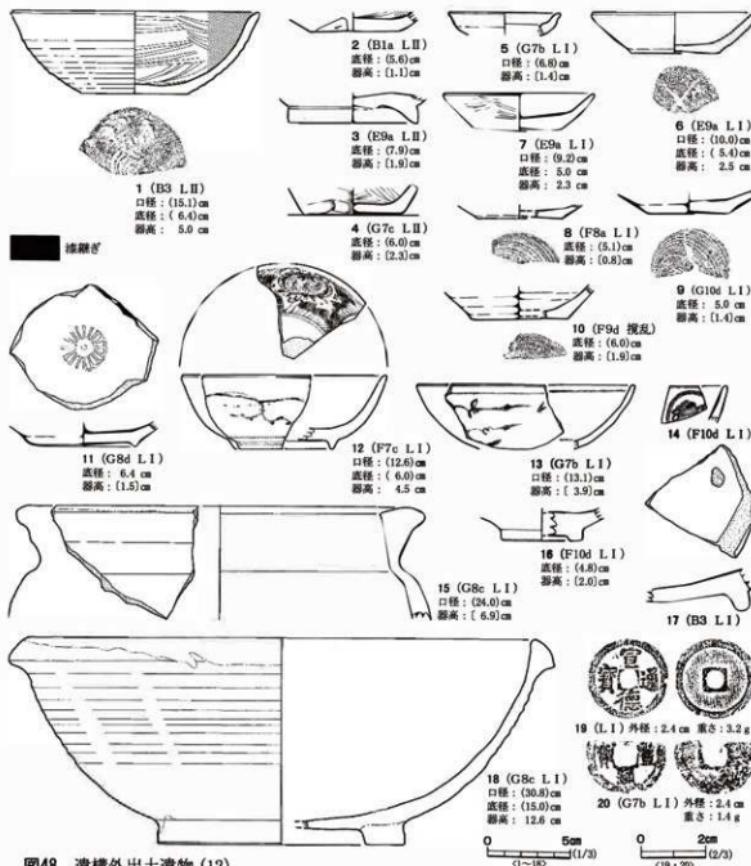


図48 遺構外出土遺物(12)

4は甕の底部である。図47~42は須恵器甕で、外面にタタキ目痕が認められる。

V群土器 中世の土器である。図48~5~11・13~16が相当する。出土量は極端に少ない。本群にはかわらけと磁器がある。5~10はかわらけである。5は他に比べ小型で、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁で大きく外反する。6・7・10は体部が直線的に、9は体部が外反気味に立ち上がる。9は内外面に黒色処理が施されている。底部の切り離しは、8~10が回転糸切り、6・7が再調整のため不明である。6の底部には「×」状の線刻が見られる。11は陶磁、13~16は輸入陶磁器である。11は15世紀後半~16世紀初頭の大窯第1~2期の瀬戸灰釉丸皿で、内底面には菊花見込みが見られ、外面底部には輪トチンの痕跡が認められる。13は16世紀末葉~17世紀初頭の染付椀で、16は

14または15世紀の龍泉窯の青磁壺と考えられる。

VI群土器 近世の陶磁器である。図48-12・14・15・17・18が相当する。出土量は極端に少ない。

12は18世紀の肥前染付壺である。14は17世紀後葉～18世紀前葉の肥前染付壺である。15・17・18は18世紀後半～19世紀初頭の相馬焼で、15が壺、17・18が鉢である。15は外面のナマコ釉の上に外面上端から内面にかけて褐釉が施されている。18は外面の鉄釉の上に外面上端から内面にかけてナマコ釉が施されている。

石 器 (図49～図52-8, 写真30・41～43)

石 錐 図49-1～11に示した。このほとんどが凹基無茎石錐である。

1～8は抉りの浅い凹基の石錐である。中には2のように、基部が平基に近いものも見られる。1・4・5は側縁が弧を描くもので、側縁に簡単な調整を施しただけで主要剥離面が残るものである。6は錐身が長いもの、8は大型のものである。9は凸基有茎石錐である。10は調整の状況から未製品と考えられる。11は、粗い調整が施され、裏面には主要剥離面が残る。

石 锤 図49-12・13に示した。12はつまみ状の基部を持つものである。13は棒状を呈し、調整剥離を両側から丁寧に施している。

石 鍔 図49-14～16に示した。いずれもつまみ部をもつ壠型の石鍔である。素材剥片の鋭利な縁辺を利用して、両側縁部に片側から細かい調整剥離が施されている。14は曲線的な側縁をもつものである。15・16は小型のものである。

石 檜 図49-17・18に示した。いずれも欠損品で、細身長身の柳葉形を呈する。両面全体に側縁部から細かい連続した調整剥離を施している。断面形は凸レンズ状を呈する。

削 器 図49-20・21に示した。素材剥片の形状を利用したもので、剥片の周縁の一部に連続する調整剥離を施して刃部を作り出している。

搔 器 図49-19, 図50-1・2・7に示した。いずれも器体を楕円形に整え、周縁部に刃部を作り出すものである。特に図50-7は表面に入念な調整が施され、弧状になる底辺部を中心に刃部が形成されている。

打製石斧 図50-3～6・8～12に示した。3～5・8・9・12は素材剥片の片側を中心に調整を加えて刃部を作り出したものである。これらは、基部から刃部を意識して整えられており、形状は3が摺形、4・9が木葉形、5・8が短冊形、12が分胴形を呈する。10は大型のもので、周縁部に調整が加えられ、表面の底辺部に細かい調整剥離が施されている。石錐の可能性もある。6・11は、裏面に調整が施されているが、刃部や形状が意識して作り出されていないことから未製品と考えられる。

磨製石斧 図51-1～3に示した。出土量は少ない。1は丁寧な研磨で整形されているが、粗整形時の敲打痕が残っている。2・3は形状が定角式のもので、丁寧な研磨により光沢が見られる。

剥 片 図51-4・5に示した。いずれも側縁部に調整剥離が施されている。

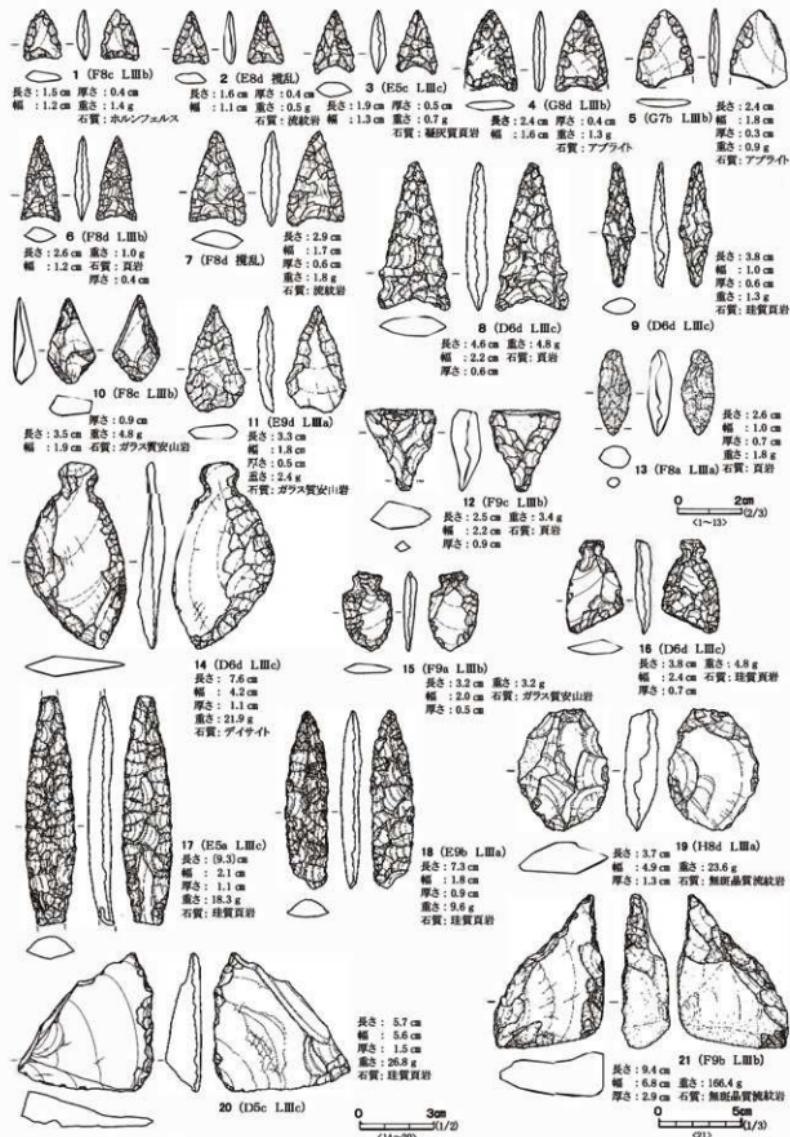


図49 遺構外出土遺物 (13)

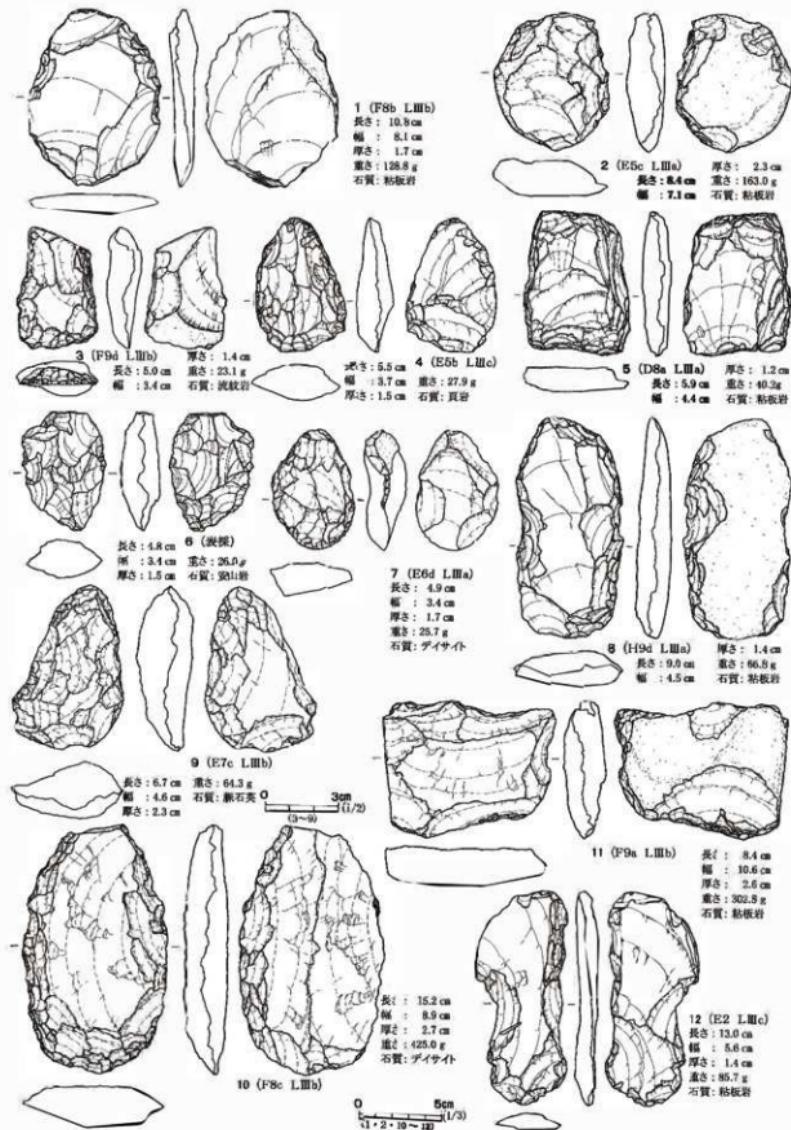


図50 造構外出土遺物 (14)

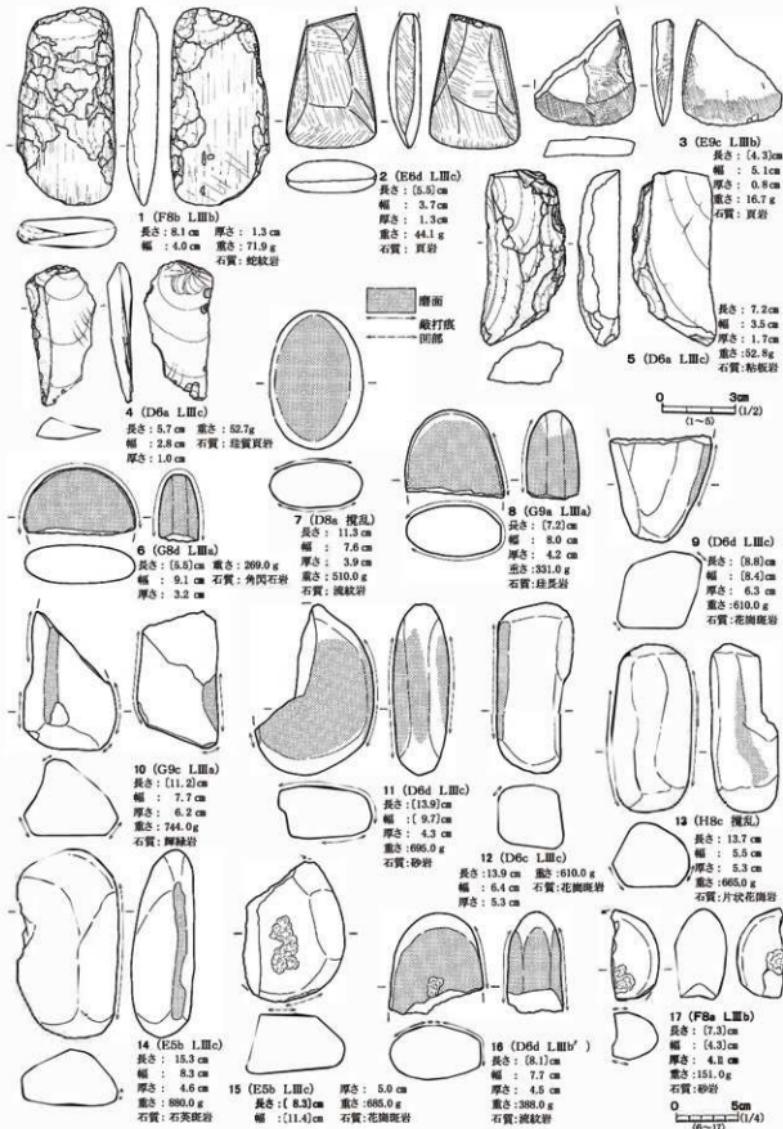


図51 遺構出土遺物 (15)

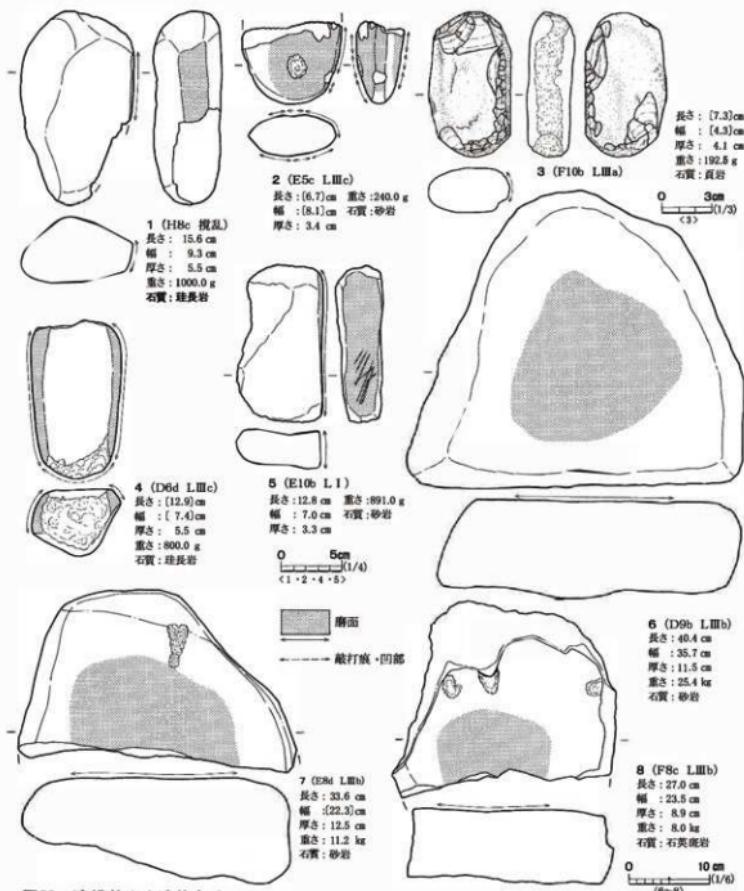


図52 遺構外出土遺物(16)

磨石・凹石・敲石 図51- 6～図52- 4に示した。図51- 6～14は磨石である。このうち、6～8・11は円形もしくは橢円形の川原石を使用したもので、器面の広い範囲に磨面が観察される。また、図51- 9・10・12～14、図52- 1は側面に磨面が観察される。

図51-15・17は片面や両面の中央に浅い凹部が認められる。図51-16、図52- 2は、器面の広い範囲に磨面と中央に浅い凹部が認められる。

図52- 3・4は長楕円形の河原石を使用した敲石である。3は側面や先端に敲打痕、4は先端に敲打痕、側面に磨面が認められる。

砥石 図52-5に示した。板状の自然礫の片面が使用されたものである。使用面の一部には長さ14~30cm、幅0.2cmの溝が認められ、おそらく金属製品等が研がれたものと考えられる。

石皿 図52-6~8に示した。平らな自然礫を使用したもので、表面中央には光沢が見られるほどの磨面が認められる。この部分はわずかであるが僅むようである。

錢貨(図48-19・20、写真40)

19は明銭「宣徳通寶」で、文字が鮮明であることから本銭と考えられる。中央の穴は丸く加工されている。20は「□豊通寶」で、径が小さいことから模範銭と考えられる。

楕形滓(写真43)

本資料は1点のみ出土した。図化していないため、写真のみ掲載した。楕形滓は、長さ14cm、幅6cmのもので、重さは440gを測る。形状は周縁部が丸みを持ち、表面の中央部が窪むため、断面形は皿状を呈する。肉眼観察では全体が鏽に覆われているが、表面中央では赤黒色(10R2/1)を呈し鏽が少ない。この面は他面に比べ凹凸がある。この他、金属探知機でも反応が確認された。

(國井)

第3章 まとめ

今回の調査では、遺跡西側の一部にあたる3,300m²の調査を行い、縄文時代・平安時代・中世・近世の複合遺跡であることが確認された。遺構は住居跡6軒、土坑48基、焼土遺構13基、竪穴遺構3基、柱列跡1列、ピット58基が検出され、遺物は縄文土器、土師器、須恵器、かわらけ、陶器器、瓦、石器・石製品、鐵製品、鐵滓、錢貨が出土した。本遺跡は、縄文時代と平安時代が主体となる。本章では、各時代の遺構・遺物についての特徴を整理し、今回の調査のまとめとする。

縄文時代 遺構は住居跡3軒（S I 01～03）、土坑23基（S K 02・12・15～17・19・24～35・37・38・41・47・48）、焼土遺構13基、特殊遺構2基（S X 02・03）が確認され、遺物は早期～晚期まで出土している。遺物は早期後葉～末葉、前期初頭～後葉から多く出土しているが、遺構は伴出遺物が少ないと時期の判断ができなかったものが多い。ここでは、遺構・遺物が多く確認されたI・II群土器と縄文時代早期末葉と前期初頭の遺構について記す。

I群土器 早期中葉の1類土器は、貝殻沈線文土器で少量確認されている。土器は器壁が薄く底部が尖底となる。この中には胎土に微量の纖維を含むものも確認され、その特徴から田戸上層式に比定されるものと考えられる。次に、早期後葉の2類土器は貝殻条痕文土器である。この中には6類の一類も含まれている。3類土器は、区画内に刺突充填するもの、壇位隆帯に竹管刺突を施すもの等の前段階の特徴が残る茅山下層式に比定されるものである。早期末葉では3～5・7類土器が相当する。3類土器は竹管の先をつぶしたもので施されたものが多く、隆線上に刻み状の刺突を施すものや、竹管凹面で2本同時施文により描かれたものが少ないとから、本類は北前式よりも茅山上層式の特徴を示すものが多いようである。4類土器は絡条体圧痕が施される土器で常世2式に比定され、主に県内でも西部から南西部で確認されることが多いため出土量は極めて少ない。5類土器は日向B式に比定され、文様には直線文の間に弧文を描くもの、鋸齒状を描くものが見られ、沈線にはすべて竹管凸面が使用されている。7類土器には撫糸文の土器がわずかに見られた。口縁部に隆帯を施すものは確認されていない。

II群土器 前期初頭の1・2類土器は、比較的多く出土している。1類土器は縄圧痕と集合沈線・刺突文が施されるもので、花積下層式に比定される。2類土器は1類土器に伴う地文土器で、結束羽状縊文を施すものが多く、口縁部上端には刺突が見られる。さらに、横方向の隆帯や稜には連続刺突文が施される。このような土器は、相馬市山田B遺跡からも確認されており、この時期の特徴と考えられる。3類土器は前期前葉の土器で、出土量はきわめて少なく、矢羽状の撫糸文が施されるものが見られ、大木2b式頃のものと考えられる。4類～7類土器は前期後葉の土器である。大木4式は、胎土に微量の纖維を含むものが多く、貼付文は見られないため、この時期で古い段階のものと考えられる。5・6類時の浮島式・諸磕式は大木4式の出土量に比べて極めて少ない。

遺構は、丘陵南側の平坦部縁辺で確認され、このうち縄文時代早期末葉ではまとまりが見られる。早期末葉は3号住居跡、17・24・26・28～31号土坑、3号竪穴遺構が確認されている。この時期の遺構の特徴を見ると、住居跡は平面形が長方形で壁際に柱が巡るものである。やや大型の遺構としては、楕円形の竪穴遺構や隅丸長方形の土坑（SK17）が見られる。また、土坑はそのほとんどが貯蔵穴で、大小の使い分けがされていたようである。特に17号土坑の北側では繰り返し作られていたことが確認されている。前期初頭では、1・2号住居跡、19号土坑が確認されている。

以上のことから、早期末葉と前期初頭には集落が営まれていたものと考えられる。また、今回確認された以外の時期の集落も、今後確認される可能性が高い。なお、調査区中央の北斜面に早期後葉～前期後葉の土器・石器が多く分布することから、この時期に斜面は、捨て場として機能していたものと考えている。

平安時代 遺構は住居跡3軒（S I 04～06）、土坑7基（SK36・40・42～46）が確認されている。これらの遺構は調査区北側の斜面にまとまって集落を形成している。各遺構をみると、住居跡は明確な柱穴をもたず、カマドはすべて壙されていた。また、一般的な集落の住居跡に比べ、床面やカマドが簡易的に作られている。土坑は住居跡の周囲で確認されており、特徴的なものとして36・46号土坑のように底面に粘土が貼られたものも確認された。さらに、本遺跡で確認されている木炭焼成土坑は、堆積土にL IIが入るものが多いことからこの時期に伴うものと考えている。

遺物は土師器と須恵器からなり、一般的な住居跡から出土する供膳具・煮炊具・貯蔵具が確認されている。土師器を観察すると、杯は底部が回転糸切り無調整のものが多く、5号住居跡では杯の内面に黒色処理を行わないものもみられる。また、43号土坑からは高台付杯が出土している。壺は4号住居跡から非クロ成形のものが出土している。これらの特徴から9世紀末葉と考えている。この他、5号住居跡からは銀製銀冶滓、46号土坑からは羽口が出土している。さらに、本集落から南側に離れたF10グリッドからは楕円形漆が出土している。本遺跡の北側約150mには、古代の製鉄関連遺跡である中山C遺跡がある。このため、本遺跡は、出土遺物から中山C遺跡との関連性がみられ、9世紀末葉頃の製鉄に関連した小規模な集落跡と考えられる。

中・近世 遺構は竪穴遺構1基、柱列跡1列が確認されている。この他、調査区南側で検出されたピットは、堆積土の特徴からその多くがこの時期に含まれるものと考えられる。

中世では竪穴遺構が確認され、瓦や宋錢の模範錢が出土している。また、この周辺からは竪穴遺構の時期に近い14世紀の青磁が出土している。このため、14世紀頃には、周辺に瓦を使用した建物を所有し、青磁等を使用した有力者が存在したものと推測される。この他、錢貨は宋・明錢の5枚が出土したが、そのうちの3枚は模範錢だった。本遺跡の南側に近接する土鳥戸遺跡からも宋・明錢の模範錢が多く出土しているため、この時期に模範錢が多く流通していたものと考えられる。

近世では、柱列跡が確認されている。本遺構から出土した鉛ガラス継ぎされた染付皿や、その周辺から出土した相馬焼は、いずれも18世紀後半から19世紀初頭のものである。この時期のものは、調査区の東端で確認されているため、さらに東側の調査区外に広がる可能性が高い。（國井）